

隨想集

小池辰雄著作集

第六卷

⑥隨想

隨想集

小池辰雄著作集

第六卷

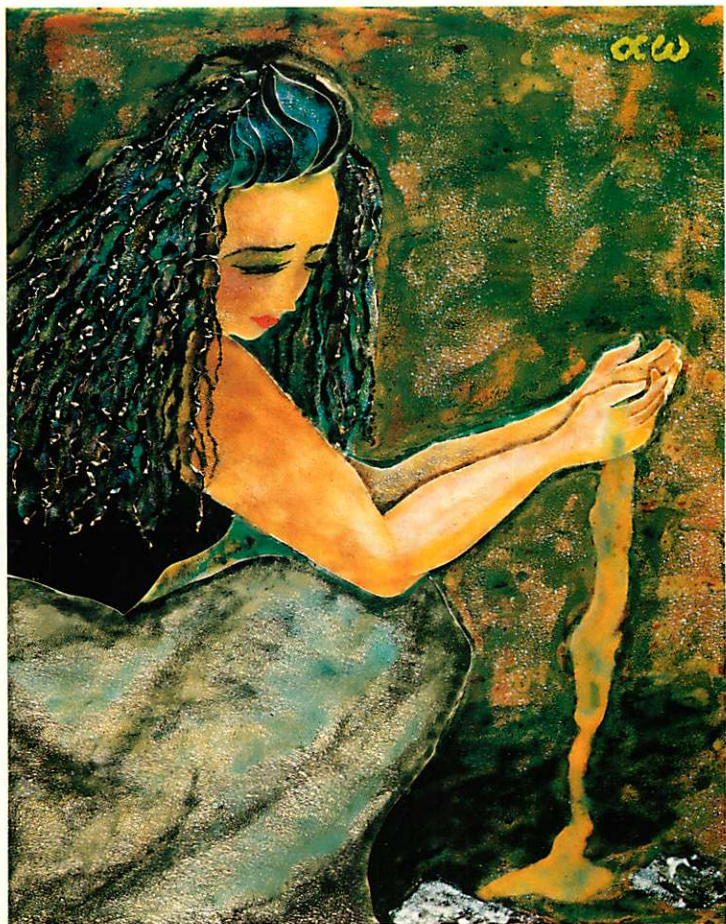
この『随想集』を

父亡きあと単身永年

苦闘して我ら五人の子女を

育てて遂に失明したる

光子母上に捧げる



ナルドの香油 斎藤桂子作 七宝焼絵画(1981年)原寸:タテ28cm×ヨコ23cm

ベタニヤなるあるおん
 な アラバストロンをう
 ちわりて主のこうべ
 にころこめてナル
 ドのこうゆをそそぎけり

1.

ベタニヤなる ある女
アラバストロン
 石膏壺を うち割りて
こうべ
 主の首に 心こめて
 ナルドの香油を 注ぎけり

2.

主の弟子どもは これを見て
 勿体なやと 憤る
 「それを売って 貧者のため
 施しごとを なすべきに」

3.

主は言い給う 「この女
 葬りの為 わがために
 涙ながら 注ぎたるぞ
 我はほどなく 別れ行く

4.

まことに告げん 全世界
 いづこなりとも 福音の
 伝へらるる ところにては
 憶えらるべし この女！」

作詞:小池辰雄、出典:マタイ26-6-13, マルコ14-3-9

原歌: 'Tis the Last Rose of Summer (アイルランド民謡)

訳詞:「ひとり残れる花うばら」堀内敬三

別歌:「庭の千草」里見義作詞



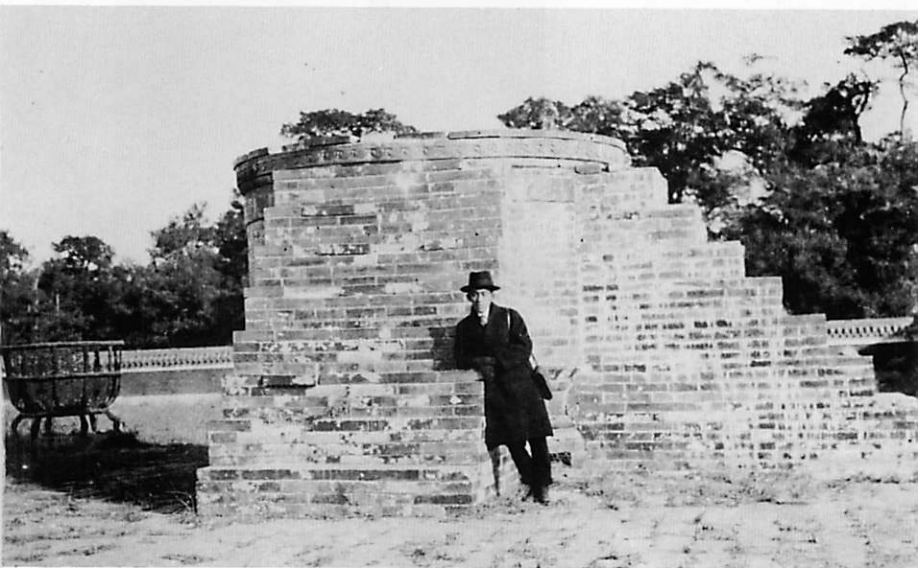
小池光子(1869－1957)
失明前の母(50歳を迎える頃)



米寿の記念に(1956年11月9日)失明の母



小池政美 (1895－1921)
北京日本公使館在勤中, 26歳



小池政美, 天壇の壇辺にて (1920年暮, 26歳)

第一卷『無者キリスト』は福音書のキリストを主題とし、これに応じて第三卷『無の神学』は、キリスト、無即無量なる者を中心とした神学を展開した。第二卷『芸術のたましい』に於ては、最大の芸術家は神なりとの根源から迸る芸術論を自由に告白し、神の光に照してこそ見えるダンテとゲーテを論じた。第四卷『詩篇珠玉集』は、旧約聖書の心臓たる「詩篇」から五十篇を選び、万人の哀しみと歎び、呻きと叫び、感謝と讃美の祈りにして歌なる「詩篇」の翻訳と解説をなした。第五卷『百世の師ヒルティ』に於ては、福音を土台とした健全な人生道を唱道したヒルティの著作集の内容を紹介しながら私の告白を織り込んで、人生の一つの道しるべを提供した。

以上の既刊五卷につづいて、茲に第六卷として『随想集』を編んだ。既発表のものすべてを収録すると七百頁を越えるので、約三分の一を割愛した。この第六卷は三部から成る。

第一部「福音の冥想」は、福音を中心とした随想である。その最初の「晩秋の黙示」は二十三年の時のもので、今から五十五年前の作である。ゲーテが『ウェルテルのなやみ』の五月十日のくだりで、春の野草の中で体感した神と自然と恋人と我との融合の心境を今ふと想いあわせる。ただ私の場合には残念ながら恋人が欠けている。我々の青年時代には大学生の男女共学ということは皆無であった。ともあれ、この「晩秋の黙示」は、第三巻の「祈りの宗教哲学」より五年前のもので、私のたましいの向きが那邊にあったかを見る。

その後二十余年間は随想らしいものを書いていないと見える。しかし日記は書いたり、書かなかったりであった。葉書や手紙は随分書いている。これは地上の生涯が終るまで続くだろう。それらの中に棄て難い随想がこぼれているとは思ふ。

天藉するに時を以てし給わば、『自叙伝』を書くであらう。アウグスティヌスのように告白的な自伝でありたい。私の生涯も内的外的な経験や体験が織り成すドラマであるので。

第二部「偉大な野人」は、地上には亡き師友に関わる随想から集めてみた。この標題も同名の一文から採った。「偉大な野人」とは内村鑑三のことである。「矛盾の偉大さ」もそうである。私にとって特別な恩師はその高弟藤井武であるが、この両雄は歴史的に不滅の存在である。現代のような日本の精神的危機に於て、この二人の預言者の人物が居ないことは大なる損失である。しかし、その不滅な文字が今も叫んでいる。青年諸君は是非とも読まねばならない。

一五、一六、一七の三つは天野貞祐に関わるものである。「道理の感覚」とカントの『純粹理性批判』の翻訳で世に知られた教育哲学者であるが、先生の人生道は、内村鑑三先生の特に「後世への最大遺物」で確立したのであった。

一三、「聖靈の愛」の人とは、私と同じく内村鑑三の「無教会」山脈の中に育った手島郁郎のことであるが、彼は祈りの深い体験から「聖靈の愛」を体感して、これを叫んだ。然り、と共鳴共感したのは私ひとりのようであった。彼と私は聖靈が結び給うた友情に生きた。

私のたましいは預言者や使徒たちの霊界を飛翔する。キリストの聖書の現実は相対即絶対の根源現実である。音波、電波、光波と共に霊波のある現実である。

第三部「母の生涯」も同名の一文から採って標題とした。この第三部は、母光子と長兄政美の二人を恩人とする私自身の信仰と伝道の歴史といった内容である。

米寿を迎えてほどなく召天した母の告別式は私自身が司式したが、その告別の辞から私は録音のスタートを切った。爾来四半世紀、日曜の聖書講筵、その他、地方における講筵等の録音は山積している。その文字化は甚だ少ない。もしこれらを文字化したら、著作集は何十巻となろう。

録音からではなく、書かれた資料だけでも、第十一巻として『随筆集』、第十二巻として『詩歌集』は出版しなければならなかった。しかし、それでうちきらないと、残されたある一つの仕事ができなくなる。それが完成するのに十五年かかるとすれば、私は百寿を迎えることにな

る。そうなるとその仕事は未完成に終るか。「未完成交響楽」か。地上では三日月でも好い。

満月を抱いて浮ぶ三日の月

所詮、私の人生も人間も仕事も三日月といったところである。ただそれは上弦の月と同質だから、天界で満月に円現する御本願の中にある。聖名を讀え奉るのみ。

口絵の「ナルドの香油」は、我々の日本キリスト召団讃歌第四番「ベタニヤなるある女」に感激して斎藤桂子女史が創作した七宝焼絵画の象徴的作品である。本巻のために献じてくれた女史の友情に心から感謝する。

本巻を編むにあたり、資料の整備に力を尽してくれた横山良子姉、並びに校正にいつもながら助力を惜しまぬ喜多村得也君に、衷心より謝意を表する。

一九八二年 十一月九日

天 韻 無 鐘

目次

まえがき

第一部 福音の冥想

- | | | | |
|---|-------------|-------------------|----|
| 一 | 晩秋の黙示 | (一九二七年晩秋) | 15 |
| 二 | 『曠野の愛』誌創刊の言 | (一九五一年一月) | 20 |
| 三 | 無限軌道 | (一九五一年一月) | 26 |
| 四 | アナムネーシス | (一九五一年二月) | 28 |
| 五 | 豊かなる福音 | (一九五一年五月) | 30 |
| 六 | 霊性と理性 | (一九五一年六月) | 34 |
| 七 | 紫外赤外 | (一九五一年七月—一九五二年四月) | |

八 太虚遍照

(一九五四年々頭) 66

九 田毎の月影

(一九五四年二月) 75

一〇 福音の冥想―天鐘―

(一九五六年春) 83

一一 原始福音

(一九五六年秋) 98

一二 天靈地気

(一九五八年春) 101

一三 靈性の回復

(一九五八年五月) 103

一四 岩頭の祈

(一九五八年夏) 110

一五 生への畏敬

(一九五九年二月) 112

一六 天賦神品

(一九五九年夏) 119

一七 七日の靈願

(一九六九年十一月) 123

一八 大慈悲心

(一九七〇年八月) 131

一九 わが義・わが愛

(一九七〇年降誕節) 134

二〇 わが望

(一九七〇年降誕節) 143

二一 聖靈の証者

(一九七一年聖霊降臨節) 149

二二 聖書全卷

(一九七二年八月) 154

二三	野尻湖の今昔	(一九七四年晩秋)	157
二四	わがキリスト	(一九七五年五月)	163
二五	医学と宗教	(一九七五年七月)	171
二六	旅は道連れ世は情け	(一九七六年三月)	176
二七	芸術のたましい	(一九七六年三月)	182
二八	私のゲーテ告白	(一九七七年九月)	189
二九	自然・靈然	(一九七八年)	196
三〇	聖書はドラマである	(一九八〇年六月)	204
三一	本来無一物	(一九八〇年八月)	209
三二	信仰と神学	(一九八〇年秋)	213
三三	聖霊の華	(一九八〇年十二月)	215
三四	歴史をつくるもの	(一九八〇年十二月)	218
三五	終末的追求	(一九八一年年頭)	222
三六	新宗教改革	(一九八一年二月)	227
三七	宗教と文化・文明	(一九八一年三月)	229

第二部 偉大な野人

一 偉大な野人

(一九六〇年四月) 255

二 キリストの心を

(一九六〇年晩夏) 258

三 藤井武先生と私

(一九六〇年晩夏) 260

(其一) 師弟論

(其二) 天職論

四 ブルンナーとグラハム

(一九五六年春) 278

五 「主よみ許に」

(一九五一年五月) 283

六 信頼の勝利

(一九五一年三月) 286

七 川口露野刀自の召天

(一九五二年七月) 288

八 へ愛はすべてに勝つ

(一九五六年夏) 290

九 矛盾の偉大さ

(一九六三年) 297

一〇 藤井武と『旧約と新約』

(一九六八年秋) 303

(其一) 内村鑑三と藤井武

(其二) 夫人の死と『羔の婚姻』

(其三) 両雄の死『旧約と新約』の性格

一一 赤星文子姉 (一九七〇年二月) 326

一二 川口愛子姉 (一九七三年三月) 328

一三 「聖霊の愛」の人 (一九七四年二月) 330

一四 訪問と講演 (一九七四年十二月) 356

一五 至道無難 (一九八〇年三月) 364

一六 天野貞祐先生を想う (一九八〇年四月) 371

一七 勇ましい高尚な生涯 (一九八〇年四月) 374

一八 わが恩師 (一九八一年九月) 378

一九 二神萬里子さん (一九八二年七月) 383

第三部 母の生涯

一 母の生涯 (一九五七年一月) 389

(一) 告別の辞

(二) 母の告別式

二 藤井武先生と小池政美

(一九五一年九月) 416

三 信仰三十年

(一九五二年十二月) 424

四 人生五十年

(一九五四年二月) 428

五 五十路の峠

(一九五四年二月) 432

六 私の信仰史と現在

(一九六〇年一月) 435

七 塵芥伝道二十年

(一九六〇年晩秋) 439

八 曠野四十年

(一九六一年晩秋) 443

九 還暦を迎えて

(一九六四年二月) 446

一〇 二升八升

(一九六四年五月) 449

一一 霊的な一大突破

(一九六六年七月) 451

(一) 内村鑑三と私

(二) 霊的人格の欠乏

(三) 福音の日本的展開

一二 キリスト道

(一九六七年一月) 463

一三	伝道以前	(一九七〇年十月)	472
一四	伝道三十年	(一九七〇年十二月)	478
一五	小池政美召天五十周年	(一九七一年十月)	485
一六	弔合戦	(一九七八年四月)	488
一七	たましいの旅路	(一九八二年五月)	493
一八	萬巻の一書	(一九七六年一月)	497

第一部 福音の冥想

一、 晩秋の黙示

(一九二七年、昭和二年)

晩秋の午後、私は野外に出た。小鳥が野を飛び廻るのが自然である如く、自然に抱かれるのがこの時私にアット・ホームであった。私を駆って原野に呼び出だしたものは自己の気分でもなく、自己の意志でもなきあるものであった。

勾配緩かな草繁き丘陵の上に小軀が一つ横になった。陶然か茫然か、己れを囲む晩秋の景に暫し我を忘れた。本をとりだして読みはじめた。しかし間もなく本は手から落ちた。ポケットには鉛筆と手帳とがあつたので、何ごとか数行書いてみたが、これも草の上に転げられた。秋の天然が親しげに呼びかけるからであつた。

秋！ 武蔵野の秋！ ああ、私の兄も武蔵野を愛した。縫うが如く彼の足跡は武蔵野に印せら

れてあるのだ。そんな耳語が私の胸に反響していた。その余韻は言い難きものであった。草は大方黄褐色に彩られてしまった。が、なおも緑がそこに残っている。草枕近く単調にもしつとりと啼くものは蚯蚓か蟠蟀か、それともまた土なのか、草なのか。新秋の野の合唱に比して何という寂しみであらう。緑菜の下からは武蔵野の地色が黒く光る。その底びかりよ。薄の白い穂波、萱のゆらめき、その柔かさよ。孤なる松、森なす杉、栖、栗、楓、銀杏、紅葉などが、丘陵に低地に並み立っている。更にまた武蔵野の生命なる樺林と落葉を小舟と流す小川のせせらぎも聞えこそせね、眼下に見える。遠くには丹沢の山なみと午さがりの陽を浴びて乳白の影を西空にものやわらかに画する芙蓉の峰！ 何たる夕景であらう。

「崇高き素朴、静けき偉大！」《Edle Einfach, stille Größe!》を如実に感じた。彼らの個々がすべて愛すべき対象であるばかりでない。全体としてのちのちの一体である。私はしかもそのいのちを呼吸していた。彼は私の中に息吹いていたのであった。彼我を画する線がどこにあるうか。万象帰一的な溶けあいである。心から心へがすべてであった。薄綿のような雲を透してさし来る光に樹も草も私も浴していた。間遠に聞えてくる電車の音の外、殆どこの静寂をやぶるものがない。菜圃に農夫の影が見える外、道往く人は稀である。私は独り心ゆくまで草の上に。

春はその潑刺たる復活に歓喜の調べを奏で、夏はその強烈なる光彩に壮美の極致を現わし、冬はその峻厳なる風霜に忍苦の精神を齎すが、ひとり秋にあってはこれらの目ざましき何ものも

有^もたない。ここには寂しみがあ^り、深みがある。純情があ^り悲哀がある。感傷であるには余^りにも底深く、飲^めばんがためには余^りにも矛盾なるもの。寂しくして雄々しかる秋のすがた。その心は純清である。その魂は祈りである。近くは身辺の一草より、遠くは大空の雲影に至るまで、甘美にもまた厳肅に息づいていた。

愛憐^{あわれみ}と眞実^{まこと}と偕に合^あい

義と平和とたがい^{くちづけ}に接吻^{くちづけ}せり

眞実^{まこと}は地より生^なえ、

義は天より見おろせり。

(詩篇第八十五篇)

そのとき聞えて来た神韻であつた。私はいつしか仮眠におちた。我もなく世もなかりしそのまどろみよ！ 目ざめたときには、陽は西に傾いて居り、風が身に泌み初めるのを感じた。さきの詩篇の句が再び私の心の扉に。然り、創造^{つく}られしものは、この秋の野の如くかざりなき純情をもて仰ぎ見るにある。創造主は嚴父の如く、慈母の如く上より恩義を以て視下して居られるからである。この天あつてこの地あり、この陽光あつてこの草原あり。靈的天界あつて、この矛盾の現実界も保たれ得ている。

私はなおも想いつづけた。自分が中心であり、不動であると思つていた地球は却て太陽の周りを廻っているのに気づいて主従の關係の反対なりしを知つたのではなかったか。そこにコペルニ

クスの地動説が叫ばれた。自分が落ちると思っていた林檎は実は自分の産みの母なる大地にひきつけられるのだと知って驚き、且つは安心したのではなかったか。そこにニュートンの万有引力説が唱えられた。対象と認識との関係が逆行して真理への道に大なる光が投ぜられたのではなかったか。そこにカントの偉大な認識論がうち建てられた。

清からんとすればするほど肉のしがらみを感じ、ついにキリストの恩恵に突破口を見出したのは誰であったか。そこにアウグスティヌスの涙の『告白』がつづられた。義の陽輝く山に登らんとして、立ち阻む三獣のため、踵を廻らし「別の路」を地獄へと逆行せしめられた詩人が居たではないか。そこにダンテの天界への遍歴の旅路が拓かれた。神の律法の前に罪なる自己を発見し、修道院の独房に打ち倒れた揚句、人間の自由を十字架につけ、福音の自由を主張して近世の暁鐘を打ち鳴らした預言者ルターを想え。おのが義を主張したバリサイ人サウロは、復活のキリストの靈光に撃たれ、あざやかに逆転して使徒パウロと成り、そこに福音の土台は据えられた。弥陀の本願の劫力にこそ人の救済の道ありと悟りたる親鸞も亦この逆転の理を体したのであった。

「我自らは何ごとをもなし能わず」と確言し得るイエスであつたればこそ、「汝の聖意を成らしめよ！」とひたすら神意を行ずることに徹し貫いたのであった。

草に坐して私は逆転の生き方を念じた。晩秋の野の黙示を胸におさめつつ、帰途についた。



櫻新町の丘のほとりの雑木林（著者撮影）

〔註〕この一文は東大独文科二年生の秋に書いた。櫻新町の南斜面をもった野原を散歩し、そこに身を横たえた。この野原は、藤井武先生が好んで散歩をされたところである。今でもありありとその景観が浮んでくる。（この一九、二〇頁の写真画参照。今は全然変ってしまった）。

この野原から遠望すると丹沢の山波が見え、霊峰富士が西空に聳えているのである。この野原で先生を囲んで、我ら三、四名の青年はダンテを読んだりした。今はこの野原の面影もなく、人家と道路である。うたた今昔の感に堪えない。今に地獄の様相が全く逆転して地球の荒野と化するであらう

二、『曠野の愛』誌創刊の言

(一九五一年一月)

その実存をもて

「小さき群に」

福音を証示^{あかし}して

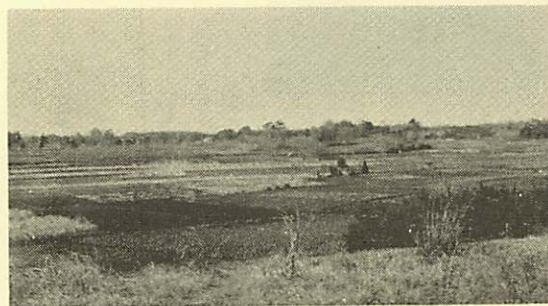
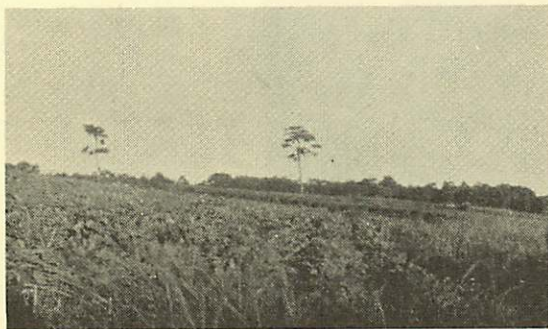
くださった

天の藤井武先生に

この創刊号を

ささぐ

*



櫻新町の丘（著者撮影）藤井武先生の祈り場

二 実存主ヤイウエーかく言い給う

「曠野めくみで恩寵めぐみに出会った、

剣をのがれて遺った民は。

往わたしつて私はあのイスラエルを慰やすませよう。」

三 遠くから実存主ヤイウエーが私に現われて、

「私は窮かぎりなき愛おまえで汝を愛してきた！

それゆえ汝おまえに恩恵めぐみをつづけている。」

(エレミヤ三一・二、三 私訳)

エレミヤに親しく語りかけ給うた実存の神が、この聖句を通して私に「曠野の愛」という言をくださった。それで私は文句なしにこの惨胆たる小誌の名とした。ひとは曠野よりも都会を好む、それは自然である。聖書も神の国に於ける神の都のことを輝かしく予言している。けれどもその素晴らしい希望の実現するまで、この罪の世では曠野が必要なのである。曠野は実に神が自らを現わし給うた啓示の場所であった。曠野はイスラエルにとって救贖への揺籃の地であり、救を求むる人々のたづね往くべき魂の故里である。ホセアもエレミヤもイエスも曠野を慕うた。

人には人の愛憎が渦を巻いている。曠野では神の愛憐が親しく抱く。不信と偽善と悖逆の民に愛想をつかしたエレミヤは嘆いて言った、「嗚呼誰か私に曠野で旅人のやどりを供してくれないものだろうか。私はわが民を棄て、彼らから去りたい」(エレ九・一邦訳九・二)。愛すればこそその反語的な嘆声であった。彼はまた所謂祭司の族にも、所謂予言者の輩にも耐えなかったのである。

我らも亦、真に神と共に歩まんがためには曠野の旅をつづけねばならない。また真に人を愛せんがためには曠野を魂の故里としなければならぬ。その意味に於て曠野はこの危機的な文化世界の基底となっていなければならない。かかる曠野の上に建設されない文化は必ず崩壊し自滅する。かかる曠野の旅路に於てのみ神の都は開示される。

教会がその人間の側に移された教権や制度の伝統に拠つて立ち、無教会がその人間の側に移された直接性的先生中心や理想主義的純粹性や無形式を何ものかとなし、おのが信仰を義とするパリサイ主義や審判的傾向の強い予言者精神に墮するならば、即ち教会があやまれる祭司となり、無教会があやまれる予言者となるならば、その何れもが正しく批判され、正しく執り成されねばならない。教会精神も、無教会主義も、ただつねに新たに福音的たらんことをのみ志して、精神をも主義をも砕くのでなければならぬ。福音によつてつねに新たに砕かれゆくとき、真に教会は教会であり、無教会は無教会であるので、その地上の暫しの存在形態はいかにもあれ、共に神のエクレシヤに参与するわけである。此の如き神の前に砕かれつつ生き生きと生きる不可見の具

体性の動的な全エクレシヤこそ曠野的な幕屋。を以て象徵され、把握され得よう。「神の幕屋」を歴史の終末の神の国に指示している黙示録第七章、第二章に注目せよ。キリストの幕屋を深く示すヘブル書全体を洞察せよ。そして我らの可視的具体性をもった個々の集会こそ聖霊を中心とした聖霊の幕屋と言わるべきものであると思う（拙論『無教会神学論』参照、三一書店刊行。本著作集第三卷『無の神学』三〇〇—三七四頁参照）。

イエスには、神殿もシナゴグ（教会と学校を兼ねたようなもの）も野辺も山辺も浜辺も、制度も祭儀も、すべて教会であると同時に無教会であった。彼は自由そのものの如き男であった、人間であった。真に聖霊が自由に彼の身魂を宮としていたからである。イエスに帰れ！と叫びたい。友らよ！教会・無教会の人々よ、イエスに帰ろうではないか。パウロがこの間の消息を解明していくれるし、ヨハネが端的に断言命題のような言でその真理を指示しているではないか。イエスと共に在るところ、それが都会の街頭であらうとも、牢獄の鉄扉の中であらうとも、そこが曠野の幕屋であり、エレサレムの神殿である。神殿を神聖視したイエスは同時に神殿など碎かれてしまうと云った。自分が幕屋であり神殿であるからであった。かかるイエスの魂をしも曠野魂と言いたい。その家郷に貴ばれなかったイエスは根源的に予言者であった。そしてこの大予言者は最も深き意味に於て大祭司であった。旧約に於ても、予言者に於ける愛の面を見のがしてはならない。予言者ホセア、エレミヤ、第二イザヤに於て根柢をなしていたものはヤーウエー

の愛であつた。またパウロはキリストの愛に在つて活動し、ヨハネはキリストの愛に在つて実存していた。予言者及び使徒は、ヤーウエー及キリストの愛を曠野的実存面に於て深く、熱く、親しく受けた。だから曠野的なる場が魂の故里であつて、限りなく慕わしいのである。上掲のエレミヤへのヤーウエーの愛の言は、我々にとつても何と慰め深きおとづれではないか。これは我々の存在を根柢から支える神の愛の宣言である。

今まで無教会は主として「信仰のみ」を強調して、イザヤ、パウロ、ルッターの信仰の面に重点を置いて来たと思われる。そのこと自体には何ら改変がさるべきではない。併し信仰は人の側から神及キリストへの方向をとっている。これに対して神及キリストからの方向をとっているものが即ち愛である。むしろ信仰の根源であるところの神及キリストの愛こそもっと強調され、それに浸り、そこに生きることが新たにされねばならないであろう。私も一九四〇年秋より小さき幕屋を武蔵野の一角に張つて聖書を学び講ずること十年。つねに強音を置いて来たのは、この神の側からの呼びかけであり、神の愛であり、神の真実であつた。私はこれを死に到るまで貫いて行くであろう。それは私には「私の」と言える信仰も真実も純粹もないと思われる。ただ惨憺たる我れがあるのみであるから。キリストの愛と真実よ、それが私の一切でありたい。

『曠野の愛』はこんな心もちから、やむにやまれずして旅立つ。創刊号が終刊号になつてもやむを得ない。どこで行き倒れとなつてもキリストの愛に縋る。キリストはまた起ちあがらせて下さ

ろう。全心全霊を尽して神を、隣人を愛せよ！（マルコ二・二九—三一）と言われたキリストは御自身の愛の実力を以て裏付けして下さるから「愛せよ！」は単なる命令ではない。神をも人をも愛せざるを得ぬようにいのちづけて下さる。

Amor omnia vincit:「愛はすべてに勝つ！」キリストがその愛で世に勝って下さったからだ。世界が危機を孕んでいる。有史以来の最大の悲劇が来ようとしている。このキリストの愛に人類が生きようとしなからだ。こんなプリントのまじめな「みばえない」月刊誌が出現したとて塵一つ吹きとんでゆくわけでない。また魂が一つ悔いあらためるわけでもなからう。況んやこれが戦争をくいとめるなど夢想も出来ない。併しこの絶対不可能に向って進みゆく基督者は終末的希望を断じて棄ててはならない。『曠野の愛』は私と共に曠野の土と化しても、神はいつかそこをサフランの花咲く楽土として下さるであらう（イザヤ書第三十五章）。

三、無限軌道

(一九五一年一月)

藤井先生の晩年、『旧約と新約』誌の包装のお手伝をしたある夕暮のこと、先生が微笑をたたえながら、「小池君はそのうちに、すばらしい雑誌を出すだろう」と言われたことを想い出す。それから烏兎匆々二十年あまり「素晴らしい」とは異なり、かかる惨めなのが現れた。「弟子はその師に勝らず」。ただ併し私らしいものであれば足れりとしよう。病床にある藤井洋君が、昔の先生によく似て居られる。ある意味で先生以上のところがあるようだ。子は親にまさる乎。洋君の病床が日本への祈りのように感ぜられる。読者よ、彼のために祈って戴きたい。

目下、別表の如く矢内原先生と共同編輯のもとに『藤井武選集』刊行中である。この時局下、岩岡書店の奮斗はなみ大抵のものではない。藤井先生の書かれたものは既に古典的な不朽の価値

をもっている。魂を養わんと欲する青年はこの書に来るべきである。

一昨年の春『預言と福音』という誌名の月刊誌を出そうとしたが、ある已むを得ざる事情のためにペンを投じた。当時塚本先生から種々御懇篤なる御教示を受けたことを今感謝を以て想い起す。昨年の春図らずも同名の月刊誌が関根正雄兄によって三一書店から発刊された。立派な研究誌が出たから、私は自ら用済みになったことを感謝した。ところが晩秋大阿蘇のふところで聖霊のバプテスマにあずかったので、ここにカイロスが満ちたのである。それで一九五〇年のクリスマスの頃、プリント誌を書くように天から迫られた。幕屋の青年たちの動きも反映している。第二イザヤ書を幕屋でたつぷり一年間講じたので、これを主題とし、配するに詩篇及び黙示録を以てせんとした。ところが急に神様から変更命令が降った。つい二、三日前参議院聖書交読会で語った「三位一体の神」を書けというのであった。筆を執って一気呵成、講演とはまた趣きのちがったものにはなったが、これが摂理であったことを感謝する。この小誌「曠野の愛」は恐らく毎回別な様相を呈するであろう。無軌道であることを読者はあらかじめ承知して戴きたい。福音の真理は、いのちであるから、飛行機よりも無軌道であり、戦車よりも無限軌道を往くであろう。

(一九五一年一月十九日 記之)

〔註〕この短文は「曠野の愛」誌創刊号の編輯後記にあたる。

四、アナムネーシス

(一九五一年二月)

創刊号に対して心からのお言葉を感謝いたします。無言の御激励もあったことでしょう。天上でも讃歌があがったようです。ただ聖名をのみ念といたしたし。

書きたいことが大分あったのであるが、聖名の前に雲散霧消したらしい。ただ内村鑑三先生が二つのJと言われた「イエス」と「日本」が私にとってもただならぬ相手となって来た。日本を想うとイエスに縋らざるを得ず、イエスの愛の中に居れば、日本のために祈らざるを得ない。特に小さき人々のために。

幕僚に囲れているスターリンを夢の中で見た。彼が若き日の神学校時代を想い出してもらいたいと思っている中にその夢はどうかなくなってしまった。プラトーンは真の認識をアナムネーシス

(*anagnōskō*) 「想い出し」だと言った。含蓄の深い思想である。人類よ、ルカ伝第十五章と共に、魂の故里を想い出して、父のみ許に還り往こう！ 讃美歌二三九。

さまよう人々　たち帰りて

天なる御国の　父を見よや

罪とがくやめる　こころこそは

父より与うる　たまものなれ

五、豊かなる福音

(一九五一年五月)

無教会の一角に従来と異なる現象が現われたことを以て、我らを直ちに「異なる福音」(ガラ一・六)に墮落したガラテヤ人の如く思う人々が教会・無教会の間にあるようです。事態を真面目に認識し、我らの論説をじっくりお読み下さっての御論説なら、私は謙虚な真面目な心を以て拝聴するに決してやぶさかでありませんが、そうでない様な言説や非難は、相手は我らでなく聖霊ですから御注意いたします。私も亦、ことは聖霊に関しますから、つつしんで言動したく思います。

私も主にある一個の自由人ですから、自己の責任に於てものを言い且つ行動しているつもりです。基督者は安息日に主たる如く、私もこれらのことに於て主たる者です。真理を自主的に把握

しないなら、それは自他をいつわるものであるからであります。そのゆえに、私は聖霊にあって福音を主体的に把握し、聖霊の權威を妨げたり、抗う者には否！と言わざるを得ません。聖霊の事態は厳かでありますから、私はみだりに説明したくなく、況んや宣伝がましきことはいたしません。ただおごそかなる事実の前に謙虚な心を有つ人のみが、我らを理解するに至るでありましょう。「創刊の言」に於て宣言いたしましたように、豊かな福音が教会、無教会を限定し豊かにするのであって、教会・無教会が福音を限定し狭隘にすべきでは断じてありません。

聖霊の智慧と能力と愛のあらわれとしての諸事態——実存、宣教、神学、異言、霊の歌、異象、預言、神癒、奇蹟——を我々は全聖書から自由に学ぶべきであります。その動機と目的とは専ら、主の栄光のため、人への愛のためであります。即ち真に信仰的実存を生きんための賜としてであります。それはすべて聖霊に発し、聖霊によって展開し、聖霊の属たるのみであります。

私は聖書という天来の慕わしき書を毎日開封しては、心躍らして読みます。この天界の靈友たちが燃ゆる血潮を以て書いてくれた手紙を、聖霊のランプの下で繰りひろげる楽しさよ！このランプの油はキリストの血であり、ランプの光はダマスコ途上で閃めいた光と同質のものです。

聖霊はイエスに於て実存面に最も素晴らしく働きました。またその宣教の智慧に於てイエスの言はけたちがいでした。また能力としては奇蹟となり神癒となつて現われました。いづれイエスの全存在から迸り出でた神の愛の発現、根源的生命の発露ならざるはなしでした。

二十世紀の今日、主として理性面の高度のはたらしにより華咲いている文明文化の世界に於て、最も欠けて来たのは靈性の面であります。靈性が、理性、悟性、感性に対して優位を占めないならば、二十世紀文明は破滅を来たすことを預言せざるを得ません。靈性の革新により、福音的実存が今日の文化の底を担うのでなければ禍であります。原始キリスト教時代と今日とは時代の現実面が異なりますから、靈性の現象面はおのづから異って然るべきであります。併し、靈性が靈性たるべきことに變りはなく、これに水を割っては駄目であります。聖靈は我らの現実に、靈性の涸渇せんとしているこの二十世紀の現実、基督教界の革新を求めて居られるのです。

聖靈の諸体験は神聖ですから、みだりに口外したくありません。聖靈の体験が深まり、奥義にわけ入る程（コリ前二・一〇）、聖靈による実存（ガラ五・二二―二五）が深まってゆくでしょう。これは単なる道徳ではないのですから、実に自由にまた豊かに華咲き実るはずでです。

聖靈が如何に豊かな生命であり、愛であり、力であり、智慧であるか、聖書がどんなに豊かな内実を有つか、福音とは何と素晴らしい力で、文化もこれを根源に有たねばいかに虚しき華に過ぎぬか、イエスに於てプレローマ（みなぎり）（コロ二・九、一〇）をなしている神の生命がどんなに素晴らしいか。それらは聖靈を体験せんとする人へのみ開示されてゆくでしょう。言の最も深き意味で聖書は正に聖靈の書であることを知るのです。

私は罪びとに過ぎず、主の十字架の贖いによらねば生くるによしなき者です。ただ「十字架の

言、即ち福音の豊かさに圧倒されて歓喜し涙する者です。聖霊の世界にわけ入らんとする人は、祈りの門をくぐらねばなりません。全力をそそぎいだす祈りの心を聖霊は愛し給う（ルカ二〇・二七、四二）。我らは聖霊の人（ロマ八・九）となつて、現実にみ霊による愛の交りを実現したいのです。み霊による愛の交りが現れないなら、それは未だ真に聖霊による実存（霊の実存）になっていないからであります。

全キリスト教界はもともと聖霊にあつて実存しなければならぬと思ひます。み霊による愛の幕屋を展開し、各々特殊な存在形態はいくらあつてもかまいませんが、それらをつねに内部に各自がつき抜けて、聖霊による偉大なる愛の世界を現じたく切に祈っている者であります。

此の如きをなお「異なる福音」だと言われる人があるとするなら、致し方ありません。そういう方々に棄てられたこの「異なる福音」がいつか、地上でか、天上でか、「隅の首石」となる日を祈り待ちます。私は主イエスと共に棄てられんことを願ひます。

「旅ゆく友よ、かの山の端^はの

栄光^{さかえ}かがやく 星かげ見ずや」（讃、二〇六）

私は曠野に幕屋を張りつつ進む旅人です。

天国の門が閉ぢる最後の瞬間に、殿^{しんがり}の人として入りたいです。

〔一九五一年四月・五月合併号「曠野の愛」誌所載〕

六、靈性と理性

(一九五一年六月、ペンテコステに際して語った東大教養学部に於ける講演要旨)

“Cogito [ergo] sum” 「我れ思う〔故に〕我れ在り」というデカルトの自覚は近世以来、文化世界の自意識である。近代人の意識はこのように主我的である。自意識の原理を大なる体系にうちたてたのは言うまでもなくカントである。カントの哲学体系の根幹は理性の自律的な原理である。カント、フィヒテ、ヘーゲルを以て代表される観念哲学の性格は、人間存在の根幹が理性であり、その頭上に神が頂点の如く置かれ「世界観」というものを大殿堂の如く、或は発展の大絵巻の如く構成し展開はしたが、それは既にギリシヤに於てソクラテス、プラトーン、アリストテレスの三哲人が描き出した世界の近代的またキリスト教的色彩を帯びた再現であり、展開であるといつて宜しかろう。そして、その中心は何かと言うに、人間の理性である。それが哲学であ

る限り、やむを得ぬ限界でもあろう。限界をよく窮めたことに於てカントは正に偉大なる哲人であつた。理性が最高善として崇める神は、結局理念であつて、人を救い得る神ではないのである。啓示宗教の概念を以てすれば、それも一つの偶像に過ぎなくなる。シェリング、シュライエルマッヘルの如き、情意的哲学者、神学者において、哲学と宗教との接触及び宗教本来の世界の独自性は明かにされたとは言え、やはり、人間の側に重点が懸っている点に於て、主我的な意識から脱脚した世界からは遠い。世界の思想の主流の性格が此の如くであつたので、神がいかに立てられていようと、実質は理性的存在としての人間が宇宙と歴史の王者となっている。これが近代意識である。おかしなことには、ヘーゲル左派のフォイエルバッハ、マルクスの流れの唯物史観と雖も、どこまでもそれは理性の史観であつて、中心に理性的人間が立っていることに變りはない。

近代の天才ゲーテはその生涯の告白文学たる『ファウスト』の「夜」の場の冒頭で斯う嘆いている。

「あゝ、これでおれは哲学も、

法学も、医学も、

また要らんことに神学までも、

容易ならぬ苦勞をしてどん底まで研究してみた。

それなのにこの通りだ、可哀さうにおれという阿呆が。……………

実は我々に何も知り得るものでないということが分つてゐる。

(相良守峯氏訳)

ゲーテはファウストの口を藉りて、*„Ich armer Tor!“*「可哀さうにおれという阿呆が」と嘆息した。この告白は、近代人ゲーテの知性的嘆息である。ここでも理性が全人ゲーテの中核にはたらいっている。*„Und sehe, daß ich nichts wissen könne!“*「実は我々に何も知り得るものでないということが分つてゐる」、という告白に至つては正に古昔のソクラテスの知的自覚と軌を同じうするものである。これらの偉大な人間たちの結論は、結局、人間の理性には限界があり、且つ極限にぶつかつてどうにもならないことを示している。理性そのものは貴き能力で、どこまでも尊重すべきではあるが、人生と宇宙は理性的把握の道では何とも仕方のないものであることを暗示している。それにも拘らず、理性的な嘆きのみでは、なお暗に情意的活動を肯定しているものであつて、全存在的な嘆き、即ち人間存在そのものを否定するほどの深刻な契機とはなっていない。ここにも近代人の自己肯定の甘さと主我的なるがゆえの危険性とが横たわっている。ゲーテに於ても、若し神学が真に啓示宗教の神学の本質に於て究められたとするなら、此の如き嘆きとはならず、更に別種の嘆きとなつたはずである。

ファウストの「Ich armer Tor!」の語を読んで想い起すのはヘブル人パウロの「Ich elender Mensch! Wer wird mich erlösen von dem Leibe dieses Todes?」の句である。即ちロマ書七・二四「噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救はん者は誰ぞ」である。即ちパウロは人間存在を「死」にもひとしい惨めなもの、なやみ深きもの、罪そのものとして自覚した。正に終末的な実存的な自覚である。決して単に知的な理性的な嘆きではない。ここにヘブライ的な自意識とギリシヤ的自意識との根本的な相異がある。ゲーテを以て代表して不可なかるべき近代意識は多分にギリシヤ的である。ただキェルケゴールとニーチェのみがヘブライの実存意識を、前者は肯定的に、後者はこれを否定の媒介として反映したに過ぎない。

パウロに於ては、この失われたる存在は、その意欲面に於て、その知性面に於て、その感性面に於て根源的に害われていると自覚される。神の前に於ける全存在的喪失である。かかる人間存在は、あらゆる対象的なもの、それが哲学であろうと、芸術であろうと、快楽であろうと、事業であろうと、その他一切の「もの」を以てはどうにもならない。即ち我ら人格的存在たる人間が、自ら創造し出したる何ものを以てしてもおのれをどうすることも出来ないという深刻な喪失に面しているのである。これがパウロの言う「死の体」たる我の実相なのである。「死の体」、何というヘブライ的な自覚であろう。具体性と現実性はヘブライ的自覚の性格である。パウロその人は当時のギリシヤ的教養も高く、理性的要素も充分具えた人間であった。その書翰を読む

者、誰か彼の頭脳にも驚嘆しないであろうか。にも拘らず、彼は人間を罪びととして自覚し、おのれを全く神の下に置いた。神本主義こそヘブライの独自の自覚である。イスラエルの歴史がこのことを証明している。もと、彼等が神を探り出したのではなく、神に呼ばれ、神につかまえて、ひっぱりまわされた民であったから。かかる啓示の事実によらずして、人間の側から神は絶対にさぐり出されるものではない。人間が主体となって呼ばれている神は、所謂民族神であり、偶像教たるに過ぎない。啓示の神は、あらゆるこれらの範疇を越える。啓示の神は、彼のみが主体であつて、我らがその客体に過ぎぬことを自覚せしめる。

かかる神を拝しながら、パリサイ人サウロ（パウロの前身）はおのが義を神の前に立てていた。律法実践の可能を自信していた。これは、理性の自律を主張すると同じく、人間の意志、実践理性の自己主張であつて、罪をのり越えた直接肯定である。キリストを信じて新たに立つた基督者たちをサウロは迫害してやまなかつた。併しついにダマスコ途上で、復活のキリストがサウロに現われ、彼をひっくりかえした。

サウロはキリストの靈光と靈言に打たれたのである。使徒行伝の第九、第二十二、第二十六章に三たび記されているこの重大な出来ごとをしつかりよんでいただきたい。生ける神ヤハウェ、生けるキリストの啓示の事態には此の如き靈的な具体性、現実性があること、それをもっと全聖書に照して深く実存的に把握しなければならぬ。パウロは十字架の贖罪の信仰を、あたま

で観念的にひねりだしたのではなく、生ける復活のキリストにひっくりかえされて、真におのれの傲慢を知ることによって神の前に降参し、今まで神の前に立ち得ると思っていた「おのが義」をかなぐり棄てて、キリストの義を恩恵としていただくより外なき罪びとであることを翻然として知ったのである。この知はもはや人間の性来の知ではなく、靈知である、キリストの靈にうたれて、全存在的に、あけわたした者のさとりは正に靈による知であって、知というよりも靈によるうけ入れ、然諾である。神に、キリストに、「そうでしたか、わかりました」といって全存在的にうけ入れることである。これヘブライ的な「知」であって旧約時代からの神とイスラエルの關係に於ける「知」がこれである。ここに靈性のみが人間の存在の根底となる消息があるのである。信仰の可能は、人間が此く失われたる靈性をキリストの靈によって新たに生かされることによって生ずるのである。私がここに言う靈性とは、どこまでキリストの靈によって神の靈にたづななる靈性のことを言っているのであって、その他の靈のことを問題としていないことを銘記していただきたい。キリストにぶつつぶされたパウロはおのが罪のため十字架にかかったイエスの恩寵に泣き、自らを彼にあけわたしてキリストの僕となった。キリストの靈が彼を占領して縦横無尽に彼を活動せしめた。この事実に於て、我らは「福音の力」というものが全くこのキリストの靈の力であることを知るのである。人間の側で「信仰」といってとりすましている「信仰」ではなく、この聖なるキリストの靈が宿ることによって生ずる靈的な「信仰」である。こちら側は

「無」である。かかる「無」的信仰の事態はキリストの霊が自由にわがいのちとなつてはたらく事態である。かくて靈性が理性、悟性、感性などに対して絶対に優位に立つて、わが存在の根源性となるのである。「人新たに生れずば」とイエスの言われた事態が正にこの靈に於て生れることである。その靈をこそ、現に生けるキリストが我らに聖靈として降し給うのである。

かかる聖靈が中心となりたる靈の人は祈る。イエスが何よりもその根源に於て祈りの人であつたこともそこに起因する。靈の人は祈りを呼吸とする人である。靈性は祈りに於て生きる。神は祈りを通してのみ人に語りかけ給う。祈りとは神に向つて魂をひらくことであるからである。かくて祈り心の実存こそ貴いのである。

パウロと同じ問題に苦しんで、その「ロマ書」「ガラテヤ書」によつて魂の問題を解決されて、期せずして宗教改革を実現したのがルッターであつた。キリストの十字架のあがないによつて罪から解放され、復活のキリストによつて生命を得、自由を得た。キリストによつてというとも、その事態は、とりもなおさず、キリストの靈にあづかることであり、受けることであり、わがうちに宿すことである。聖靈の共在、交在、内在、自由自在の消息である（創刊号「三位一体の神」参照）。かかるみ靈の自由」（コリント後三・一七）が近世の人間解放であつた。然るに折角ルッターが戦いとつた「み靈」の自由を、近代文化は人間の「自由」に次第に切り替えてしまつた。そこに近代文化の根本的な逸脱、誤謬がある。このことはいかに警鐘を鳴らしても足りない

い。

十字架は啓示の事実として唯一回の出来ごとである。併しその啓示の事実を現実、に生かして「十字架の言」としてうけとらしめるものは聖靈の外にない。而もその聖靈は実に我らの魂の根源の生命としてつねに我らを信仰にあらしむる力である。自由の根源である。愛の根源である。

我らがかかる根源的な最も福音的な意味で聖靈を強調することを、福音の脱線の如く、歪曲の如く見る人々に我らは何を以て応うべきかにくるしむ。我らは全聖書にみなぎる神の靈、ヤハウェーの靈、キリストの靈、聖靈の主体性をぬきにして、いかにして福音を、十字架を、復活を、再臨を説くべきかを知らない。噫！

キリスト・イエスは神の靈によらずして、いかなる一語を発し、いかなる一業を行じ給うたであらうか。ペテロもパウロもヨハネもキリストが昇天し、助主、聖靈が臨んだ後こそ真に使徒たるの実を顕わしたではないか。彼らの信仰の主体はまさに聖靈にこそあったではないか。眼を視開いて使徒行伝を見よ！これは正に「聖靈行伝」とひとも謂う通りではないか。

「われ思う、故にわれ在り」という近代意識。列強が人間の自由を自己拡充の方向に行施して竟に第一次大戦となり、再び第二次大戦となり、「二度あることは三度ある」との俗諺に呪われて第三次大戦に突入するやも測られぬ現状！

今こそサタンの捕虜とりこになつてゐる人間理性を一度、投げ棄て、人間の自由を棄て去り、人類は

もう一度、ルッターの賜りし神の自由、キリストの自由、聖霊の自由をただかねばならない。即ち理性の人に死して靈性の人に新生しなければ救の道はない。かくしてはじめて理性は正しく活動し、一切の文化はそのときはじめて、正しく華咲くのである。然らざる文明文化はあだ花であり、「悪の華」であり、没落への毒花である。

二十世紀の半、この危機的な現実にあつて、今や、神は人間が、人類が、その自主性を棄てて、聖前に立ち帰るべきを要めて居られる。「此の世の君」サタンの捕虜になつていながら自由である。「われ思う」人類の理性的迷夢が天来の光によつてぶち破られねばならない。それはあだかも、我れを「義」としていたサウロの如く。悔改、回心。「われ思う」ではなく、「われあやまり」といつてルカ伝十五章の「子」の如く「父」に帰り往くことである。そのとき「み霊われに臨めり。ゆえに、われ在り、」の靈性の告白とならう。

このことが今の全世界の為政者に於て、また全世界の青年男女に於て新しき告白とならねば、人類は神の大なる審判に遭う。

QUO VADIS MUNDE? 「世界よ、汝は何処へ往く?」

いかなる英雄も悪人も、かつては母の胸に抱かれていた。また乳房を求めて泣いた。いかなる人も、父なる神を離れては永遠の生命にあづかることは出来ない。全世界は神に叛いては滅亡せざるを得ない。

「をさなくて罪を知らず

胸にまくらして

むづかりては手に揺られし

昔忘れしか

春は軒の雨、秋は庭の露

母は涙かわく間なく

祈ると知らずや」

(讃美歌五二五)

終りにイザヤ書第六十三章の九節と十節とを読んていただきたい。そこに人類への深いあわれみと警告が書かれてある。

それは私たちに次の如く響いてくる。

「我は汝らの艱難のとき、共になやみて

わが面前の天使をもて汝らを救い、

わが愛とわが憐憫とによりて汝らをあがない

汝らを抬もたげ今日までつねに汝らを抱きたり。

然るに汝らなおも悖もとりて

わが聖靈を憂いしむならば、
我れ全世界の神は翻りて汝らの敵となりて
自ら汝ら全世界を攻めん。」

——イザヤ六三・九、一〇参照。

〔一九五一年六月、「曠愛の愛」誌所載〕

天なるみ国の 幻の中に
第三イザヤの 見たるは何ぞや
み霊に満ちたる 永遠の乳房
父なるみ神の 恵みの徴ぞ

——召団讃歌 43 第八節
作詞 天鐘

七、紫外赤外

(一九五一・七一—一九五二・四)

〔一〕 紫外線赤外線

およそ此の現象界で最大の神秘は太陽そのものである。スペクトルに分光し切れない豊かな光源体そのものである。それにも遙かに優して驚歎し讃仰し畏敬し愛慕すべきは主イエスが霊と呼び父と呼びて畏れ且つ親しみ給うた全能にして聖愛なる神である。ああ、この恩恵のみなぎりに活き生くるわれらの霊生かな。陽の光なくして我ら地上の生は如何にして可能であろうか。キリストに在って神の光に浴することなくしていかにして我らの魂のいのちは在り得ようか。

地獄の鉄窓から解放され、聖靈の翼に乗って自由の天地を飛翔することをゆるされた、この罪びとの雑感随想を名づけて「紫外赤外」と称う。つたなき者の告白であるに過ぎないが、光源体からの紫外線、赤外線役割を果し得れば幸である。

〔二〕 ものそれ自体の世界

„Ding an sich“ 「ものそれ自体」といつてくれたカントは慕しい哲人だ。「ものそれ自体」は竟に秘境である。我々が「何故に」と問い詰めてゆくときに、かく問うその問いそのものと共にぶつかるところの解き難き対象や事象そのものにぶつかってしまう。感覚の世界に於て既に然り、況んや超感覚の世界に於てをや、而も理性の世界も限界にぶつかり、超理性の世界へ自ら踏み入ることが出来ない。理性感性の世界を超えた靈性の世界から来るものを啓示という。この両界のクロスする点に立っているのがキリストである。

だからイエスは「われは門なり」と言われた。彼は窓であり、眼である。それに於て父なる神の見える窓であり、眼である。彼に於て子なる神を見、人間の救の保証を見、永遠の生命を見る。併し、見るだけではだめだ。正にそこを門として入って往かねばならない。その狭き門をくぐって入って見ると、そこには何というすばらしい、牧場が展開しているではないか。詩篇第二

十三篇はこのキリストの門を通過つてのみわが歌となる世界である！

キリストを真に見つめてゐる眼は、門をくぐることに由つてキリストによつて観る眼とされる。否更に、キリストの眼とされる。ヨハネ的に言えば、我らはキリストの眼なりである。

かかる眼のみが「ものそれ自体」の世界をも看破する眼であろう。イエスのみが「ものそれ自体」を生かす力ある眼をもつて居られた。「ものそれ自体」を愛し、生かす力ある者のみが「ものそれ自体」を知るといふことが出来る。その他の「知」は現象的な知であるが、本体をどん底から生かし、本体をして在らしめる実力を有つ知のみが本体知である。これを靈知と言いたい。キリスト・イエスが「野の百合」を見て発せられたあの有名な言は靈知の言である。神の国に關する彼の一切の言、また病者、死者をあわれんで発せられた言もすべて然りである。かかる靈言のみが「ものそれ自体」に突入している。

けれども性來の我らの限界については、ヨブが深い暗示を興えてくれた。ヨブ記第三十八章を繙いて戴きたい。神の言が大風の中から響き渡ってくるあの素晴らしい詩的な章句を！その中の一句に、「此処までは来るべし、此処を越ゆべからず、汝の高波此処に止まるべし」とある。あだかも人間のあらゆるいとなみと力に対して、神がその限界を自覺すべきを警告し給うが如くである。

存在の限界についてヨブはこう答えている、「嗚呼われは賤しき者なり。何と汝に答えまつら

んや。唯だ手をわが口に当てんのみ」(ヨブ四〇・四)。第四章に於て更に曰く、「我れ知る、汝はすべての事をなすを得たまう。また如何なる意企にても成す能わざるなし。無知をもて道を蔽う者は誰ぞや。斯くわれは自らさとらざる事を言い、自ら知らざる測り難き事を述べたり。請う、聴きたまえ、我れ言うところあらん、我汝に問いまつらん、我に答えたまえ。われ汝の事を耳にて聞きたいしが、今は眼をもて汝を見たまつる。是をもて我みづから恨み、塵灰の中にて悔ゆ」(ヨブ四二・二一六)。

義人ヨブはついに神の前におのが無知、無能を知り、人間の義も言うに足らず、却て罪の大暗礁たるを悟り、「塵灰の中で悔い、」同時に活眼を開かれて神を見た。ところが、こんどは大きな「蹟石」(ロマ九・三三・三三)にぶつかって自ら碎かれ、その「千歳の岩」の上に救いあげられ、この岩が「靈なる岩」(コリ前一〇・四)で、生命の源泉であると絶叫したのがパウロであった。実際パウロはこの「靈なる食物を喰い」、この「靈なる飲物を飲んで」、靈の生命を生きたのであった(コリ前一〇・三、四)。限界にぶつかり転倒するまでは人間はどうにもならない。「ものそれ自体」の秘境に立ち入り之を生かすものはキリストのみである。キリストの門は人生と宇宙と歴史を二分する門である。我らキリストの門をくぐって、本体界に入ったのである。

〔三〕 真理への情熱

哲学はあくまでも真理を求めての真剣な思索のいとなみである。それが真剣なものである限り、いかにその哲学者が不幸に陥つても、その哲学がいかに危険思想と思わるる如き結果を生み出そうとも、これはいたし方ない。もと苦悩^{なやみ}多きこの人生である。問題にみつるこの社会である。不可思議に溢るるこの大自然である。かかる人生、世界、宇宙を思索するとき、その解答が、時と場所と民族と環境と生い立ちの諸々の限定を負う個人に於て、さまざまの結果となることは、むしろ当然である。さりながらプラトーンはカント以前の最大の哲人であつたといつて過言でないであらう。あの崇高なる理念は、人の思索の中の最高のものに属する。またプラトーンはその師ソクラテスに対する敬慕の念は作品の中に美しい。

思索家として、深さと幅と言われぬ余韻を帯びているのはアウグスティヌスである。彼はまたある意味で最大の神学者と謂われる。アウグスティヌスの思索には涙の滴りがある。私は涙なき論理に耐えない。彼の『告白』と『神の都』はかかる涙の思索、祈りの論理から生み出されたものである。

真理のためなら、いかほど苦しむも貴い。たとい氣狂になつてもやむを得ない。ニーチェを嘲

るべきでない。自殺するまでに苦しんでもうなづける。独乙にはその様な悲劇的な詩人、哲人が幾人か居た。悲劇的な独乙よ！ 汝はその真剣のゆえに不死である。

反之、いかに日本人は浅薄なことだろう。喰わず嫌いをしたり、いい加減にあしらったり、皮肉ったり、茶化したり、既成のものに安住して自分で苦しむことをしない。そのようなことが「信仰」の隠れ家に安住する基督者に於て行われるのを見ると、なさけなくなる。わが恩師藤井武先生が「信仰」より「真実」と言われた心ばせはこの間の消息に於てであった。するとこんどは「真実」を金科玉条となしたり、また反対に「信仰のみ」をお題目にしたりする。いづれもパリサイ的なものとなるう。

凡そ哲学的精神は、虚偽を蛇蝎の如く嫌う。その意味でわが国民はもっとも「哲学する」ことをなすべきである。みのりなき哲学はそれ自ら枯れ果ててゆく。併し哲学することが貴いのである。真理はそれ自ら保つと謂う。また何をか憂えん。真理のためには論争すべし。併し真理に、即せんと、の私心なきもののみが真理を愛すると言え。かかる人々のみが真理を論ずるに価する。真理そのものはどこまでも神のものであることを人間はつゆ忘るべからず。神学することについてと同様のことが言える。真理は神のものなればこそ無限に追求するに価する哉！ 真理は終末的性格をそれ自体有っているからである。

神学界にバルトあり、哲学界にヤスペルスあり。前者は啓示の真理につき、後者は実存の真理

につき、その真剣にして重厚なる思索のいとなみをつづけている。国家の興亡が何であるか。民族の生命は真理追求の情熱ライアンシャフトの如何にかかる。

日本は何を以て世界に貢献すべきか。青年男女よ！ 遠大なる抱負に生きよ！

〔四〕 福音は力

ヒルティーがこんなことを言った。「神的な霊が存在することについては、縦い他に何ら実証的な証左がなくとも、次のことは矢張り証左となろう。即ち、我々自身の精神と意志とのあらゆる努力を以てしても、若し神が結合を拒み給うならば、我々は神との結合を致すことは出来ず、また「祈禱アンゲハート礼拝」によって我らの憂いと悲しみを越えておのれを高揚させることも出来ないということこれである。一方また、この霊は屢々全く思いも寄らず、臨み来って、我らの全存在をその霊の活力と歓喜とを以て充たし、我らの一切の重荷を一瞬にして魂から取り去り得るのである。……一体併し力より現実的な何ものが在るか。人間の単なる思想は、決してかかる力ではない。このことは、自ら慰めんと試みて屢々徒勞に終った人の誰でもが知っている。然らば一体この力とは何であるか。単なる心理学では全くどうにもならない。心理学は総じて、それ自体何らの力を有たず、不幸に際してかつて何人をも慰め励ましたことのない一つの学的体系にすぎな

い。」（『眠られぬ夜のために』第一巻、七月五日より）

全くその通りである。所謂「祈禱礼拝」的気分に対しても、神の前に整った「信仰」の論理を展開しているような祈りに対しても、神様は結合をよろこびたまわぬであろう。聖霊の神は、かざらざる、いつわらざる、あらけづりの、あるがままの、投げ身の信頼、祈求に対して応えたものであろう。イエスはその様に祈られたに相違ない。「主の祈り」も「ゲッセマネの祈り」もその片鱗を示す。

かかる霊の實在に関わるおとづれが、即ち啓示の事実というのであって、聖言を「聴きて信じ」且つ体験せしめられるの外はないのである。このような啓示の事実に関わる記録が聖書である。これを信ずる、即ちまこととするはたらく自体が、実は既に上からの霊のはたらきによっている。かかる力の消息に比べて、人間の思想の無力さよ。いかなる哲人もその意味で一人の人の魂をも救い得なかった。パウロが「福音は神の力だ」といったのは正に思想ではないぞという意であり、霊的消息を告げんとしたからである。そして正に「一瞬にして」鱗の如きものが眼より落ちて濶然として霊眼を開かれたのがパウロであった（使徒行伝九・一八）。かく言うとも、私は決して現象面を重視しているのではない。根源的内実の転換を指しているのである。そしてその事是我らの現実^{じつじ}に於て起りつつある。志ある青年は「蹟の石」によって救われる、パウロの如く。併し思想が、かかる実在^{じつじ}の力に発したものであるなら、その思想を通して力ははたらく。それ

は単なる人間の思想ではないからである。かかる力に発動しない神学は本ものの神学ではない。神学といえはすぐ、けなしたり、気ざらいする人々は、靈のバトス（ヤハウエーの熱心）をも靈のロゴス（神の言）をもけなす人で、実は聖靈の事態に対して真剣でない証拠と言わねばなるまい。

カント、フィヒテ、ヘーゲルの哲学は決してかかる根源の力と無関係ではない。さすればこそあれだけの迫力を具えているのである。キエルケゴールの流れの実存哲学がこの力の源泉と深い関係あるは言うまでもない。

〔五〕 聖愛の力

靈的な真理は矛盾の相の中にある。併し、単なる直接矛盾は明かに真理ではない。砕けが漲りであり、死が生であるという靈的消息は直接矛盾ではない。逆説的矛盾である。かかる矛盾轉換には媒介者があるからである。人間そのものはこれに耐えない。「聖靈の愛」を以て生けるキリストが媒介して下さるのである。十字架と復活の死生の轉換の真理を受けしむるものは、即ちあの唯一回の歴史的啓示の恩寵を現実にはたらかしめ、真の現実化を行ずるものはキリストの愛の靈を措いて他に何があるか！ この靈は愛の力、であるから、我らはこれにあづかり得るのであ

る。もしこれが審きの力であつたらどうして我らはこれに耐え得よう。恩寵の有難さよ！ 聖。愛。
の力よ！

〔六〕 地図と磁石

一 外国語を習得するにあたって必要欠くべからざるものは辞典と文法書である。外国語のある本を読破しようとすることは、謂わば未踏の地を踏破しようとするに似ている。その際に辞典はその地図となり、文法書はその磁石の役割をつとめる。その如くまた、我ら人生の旅路を往くにあたり地図となるものは聖書であり、磁石となるものは聖霊である。

〔七〕 詩篇第百五十一篇

旧約聖書の『詩篇』はルッターがいみじくも言った如く、「小聖書」であつて、ある意味で全聖書の心臓をなすものである。神へのあらゆる告白、嘆き、訴え、祈り求め、悔改、感謝、讃美が、個人的に集団的にまた民族的になされている。要之、神と人との魂の信頼関係による広義の祈りであり、讃美である。

あれほどまでに預言者の要素もあり、祭儀的、礼拝的な性格を有しながらも、『詩篇』について唯一つの遺憾の点があるように思う。それは、他人のため、敵のため、積極的に恵福を祈り、またゆるしを祈る愛の祈りの乏しきことである。ここに、或る意味で旧約の弱点が見えるとも言えよう。勿論、祈りに直接あらわれていなくとも、その歴史記事の中に、その申命記法の中に、その預言書の中に神的な愛は強く動いているのではあるが、即ち第二イザヤの「ヤハウエーの僕の歌」の絶頂たるイザヤ書第五十三章の如きは、全く感動すべき愛のおとずれである。にも拘らず、詩篇に於てその反映の乏しきを如何せん。

詩篇第百五十一篇はないものだろうか。昨夏（一九五〇）信州「夢の海」湖畔で、「主の祈り」（マタイ六・九—一三）がそれである、との啓示を受けた。

殉教の息をひきとらんとしたとき、ステパノは「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」（行七・六〇）と祈った。これは十字架上の「主の祈り」を祈りとして、ステパノの此の愛の祈りはパウロの心臓を貫いたと信ずる。パウロ回心への隠れたる助けはこのステパノの真の友情であった！敵を愛せし！！

〔八〕 彼岸と此岸

啓示宗教たる旧約と新約の宗教は、天来のおとずれであるが故に彼岸的である。而して彼岸からの力であるがゆえに、極めて現実的である。こちらから憧憬^{あこが}れるロマンティックな意味に於て彼岸的というのではない。ただ人間の願望であるなら、それは何とはかなき対象であらう。併し、キリスト教は天来の現実力であるがゆえに、このうつりゆく現実よりも確実な現実である。そういう現実をもたらす彼岸、力ある彼岸、根源たる彼岸である。それゆえにこそ、この彼岸、力に接する人は、深い現実の人となる。その意味に於て、神の彼岸力によって現実を生きる人が眞の此岸人である。

旧約の預言者たちは、かかる意味で此岸人であつたし、ヘブライ人はその語源エーベル「彼岸」(イザヤ九・一、原典八・二三)が暗示するようにヨルダンの「彼岸」の人であり、その約束の地方カナンが此岸となつた「地の民」(エゼ一二・一九)である。現実存の神ヤハウエーと取つくんだ「選びの民」「宝の民」「聖き民」(申七・六、七参照)たるイスラエル民族ほど現実的、此岸的な民族はない。それは、実存の神によつて実存せしめられるからである。

而もさきにも言つた如く、この実存の神が、この平板な歴史を越えた彼岸から、この平板な現実とは異なる彼岸からつかみかかつて来た神であるから、彼らはまた必然、彼岸的此岸、此岸的彼岸が彼らの現実である。これを終末論的連関の現実という。聖霊によつて天上の生けるキリストと連なる基督者も正に此の如き者である。

キリストが「まづ神の国と神の義を求めよ。然らば凡てこれらのものは汝らに加えられるべし。この故に明日^{あす}のことを思い煩うな。明日は明日みづから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり」。(マタイ六・三三、三四)と言われるとき、神の国と神の義は彼岸の現実である。この彼岸の現実を追求し、わが有とするとき「これらのものは汝らに加えられるべし」という此岸の現実が現ずるのである。「一日の苦勞は一日にて足りる」終末的現在の現実が行ぜられるのである。即ち彼岸も此岸も、未來的並びに、現在の終末性の両面を以て現実となりつつ転展し行く終末論的構造をもっている。しかも、神の義という事態に於て質的な終末性が語られてあり、神の義が救贖の愛であることはキリスト論的に明確である。

私が神の愛を強調するといつて非難する人もある。併し、それは問題とするに足りない。神の義と愛というものが単なる並立でも対立でも矛盾でもないことは終末論的構造を考へて見れば自明である。神の義は、救贖の愛であり、神の愛は救贖の義である。神の義や愛を観念的に對象的に考へるから、そのようなことを言うのである。私は罪びとである。それ故に、神の恩寵の意志の下に於てのみ、神の義をも愛をも考へ得るのであつて、この呻きの場なしに私は神の義をも神の愛をも考へることが出来ない。神學すること自体が、キリストの恩恵の下でのみ可能である。まことにキリストの恩恵のゆえに、私は「彼岸」とか「此岸」とかいう号をつかつている、正に逆説的同義語である。

〔九〕 恩恵のみ！

「神よ、罪びとなる我を憐みたまえ！」（ルカ一八・一三）という取税人の祈り、穢れし靈に憑かれた子を有っていた父の「われ信ず、信仰なき我を助けたまえ」（マルコ九・二四）という祈り。自分の信仰が問題でない罪びとの砕けた祈りである。

十六世紀の宗教改革時代は「功德」的行為が邪魔をしたから「信仰のみ」をルッターが強調した。二十世紀の「観念的」信仰に対しては、恩恵に重点が置かれねばならない。神の「あわれみ」、イエスの「あがない」、キリストの「生命」、聖霊の「力」が一切である。罪びとはそれによって救われる外はない。ただ恩恵のみによって、我らは復活する。恩恵は絶対に信仰に先立つ。論理的にも、現実にも。恩恵の何たるかを知らしめる主体そのものは聖霊である。その意味に於て聖霊のみと申したい。聖霊はさきの祈りの如き砕けた心を愛し給う。

〔一〇〕 砕けの愛

「十字架」という事態は、奇蹟でもなく、神秘でもない。この一つの歴史的事実に、神の啓示、

神の意志が現われたところにも、凄惨の逆理がある。人類史を貫き二分する一回性がある。神の聖子の磔殺であるからである。それがパウロの言う「十字架の言」というロゴスである。ギリシャ人には「愚」なことであり、ユダヤ人には躓きごとであった。それは絶対に神の直接の愛ではあり得ない。神の直接の愛が現われるためには何も十字架の必要はない。神の直接の愛を受け得ないほど人間が不信であったから、即ち地上のイエスがあれほど直接の愛を、あわれみを現わし給うたのに、それにも躓いてしまったから、神が最後の決定的な非常の唯一つの手段、唯一つの路をとり給うたのが十字架の砕きであった。イエスは十字架に、私たちの罪のために砕かれなされた。これ砕けの愛である。

十字架が単に神の直接の愛と合体するというなら、それは背理である。北森氏が神の愛を指して「痛みに基づく」愛と言われたのは真理である。罪びとに対して神は義と愛の板ばさみになり給うからである。

併し十字架という烈しい現実には、「痛み」を越えた、「砕け」である。行為的、現実的である。キリストの砕けの愛に圧倒されて、我々が砕かれるところに点火される愛は単なる「痛」の愛ではない。それは、痛みをのり越えた砕けの愛である。それはキリストの十字架が痛みをのり越えた、踏み切った砕けであるからである。ゲッセマネの祈りは痛みの愛の絶頂である。痛みを踏み切って砕けへと突入されたイエスの前進、ゴルゴタへの路は砕けの愛の路、勝利の愛の路であつ

た。

神の痛みの愛では、我らは碎かれることがない。否、神の痛みをすら真に知り得ない。神が碎けの愛をキリスト・イエスに於て現わし給うたので、初めて碎けを知り、痛みをも知った。痛みの愛は旧約の神の隠された愛である。旧き約束が実現したとき、その痛みの愛が碎けの愛となった。我らはその愛を点火された者である。その「碎けの愛」をイザヤ書第五十三章が預言してくれたのである。痛みの神は、第二イザヤを通して碎けの愛を約束して居られたのである。

十字架の碎けの愛に圧倒されるという事態は然らば何であるか。それはキリストの碎けの愛が聖霊を通して点火されることである。しからざる人間的なうけとり方ではついに「十字架の言」を観念と主観に浮かしめてしまうことになる。パウロがロマ書第八章であれほどまでに聖霊の事態を本質的に説きたる揚句に、我らを神の愛、キリストの愛から離れしめる何ものもないと絶叫する所以である。

碎けの愛を最先きに身を以て証した者がパウロの先輩ステパノであった。彼は大祭司、長老、学者、群衆を向うに廻して烈々たる演説をなし、最後に「項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う」(行七・五一)と言い放った。聖霊による碎けの愛が彼のうちにみなぎり燃えていたればこそ彼は石で烈しく打たれ、鮮血にまみれながら「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」(同六〇)と呼ばわりつつ仆れたのである。

〔一一〕 靈的現実

「われ汝の事を耳にて聞き居たりしたが、今は目をもて汝を見たてまつる」（ヨブ四二・五）というヨブの実見。そこに神の現実がある。これが靈的現実である。この現実を否定する者は単なる三次元的人間である。絶対次元は宇宙線の如く我らのこの平板な現実に滲透し、世を包摂している。純白の花嫁を見て幽霊と思うか。併しこの世の美しきものとは、けたちがいの素晴らしい現。靈が実在する。それを見るためには、「我自ら恨み、塵灰の中で悔い」ねばならぬ（同二・六）。

十字架上の一人の盜賊は、最後の一瞬に、その悔改の告白をしたがゆえに、この現霊の本体、花嫁（エクレシヤ）の主体、キリスト・イエスと偕に最先きにパラダイス（神の現実界）に跳び込んだのである！ 福音なる哉！ そのパラダイスをキリストの現霊は地上にまで拡張して下さっている。

〔一二〕 「十字架」の力

「十字架」という言前言後なる事態は、徴を求めるユダヤ人には躓きの杭であり、ギリシヤ人に

は愚かな枯木である。併し、誰がユダヤ人でないと自ら言い得るか。誰がギリシヤ人でないと告白し得るか。救のよろこびはこれに躓いて、自分こそ躓きであったことを悟り、これを嘲った自らの愚を知ったときに来たのではないか。そのとき「十字架」が神の力であり、神の智慧であることを告白したではないか。躓きに徹せしめられ、愚に徹せしめられて、初めてパウロの Corinth 前書第一、第二章が読めてくる。

而もパウロが「十字架」の宣教を、「み霊と能力との証明によった」(コリ前二・四)ことを忘れてはならない。それは我らの「信仰」が「神の力に頼らんためである」(同二・五)と力をこめてパウロは言う。

なぜ「十字架」がそのように「神の力」なのか。翻って、ゲッセマネのイエスを思う。彼が「十字架を負わん」と決意されたのは、単なる決意ではなかった。祈りに於て、神の意志に、み霊を以て圧倒されたからである！ 然り、「十字架」の事態には、神の意志——罪びとを救わんとする神の悲願——の霊力がこもっている！ 「汝の意志」を立て、「汝の意志」を「わが意志」として全き従順を以て十字架についたイエスの無力にこもる愛の力、その血にこもる贖罪の力は、全く言前最後の霊的な現実であり力である。そこに神の聖愛の力の貫きがある！ パウロが Roma 書第八章の終りで「我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむ何ものもない」と叫んだ消息も、正に神の愛にそのような力がこもっているからである。

〔一二〕 一つのことを

„Nach Einem trachtend, um Eines sorgend, für Eines duldend, alles hingehend für Eines geht dieser Mann sein ganzes Leben hindurch.“

「一つのことを追い求めつつ、一つのことには心を砕きつつ、一つのことのために耐え忍びつつ、一切を一つのことのために投げ棄てて、この人は生涯を馳せ貫いた。」これはベートーヴェンを指して詩人グリルバルツェルが吐いた言である。

人は誰でも課題をもつ。天来の課題を受けとるはずである。それがどんなに人の眼にはつまらなく見えようと、天来の課題があるはずである。それを追求し、それに心を砕き、そのことのために耐え忍ぶ人は幸である。その人の生き方が終末的な性格を帯びてくるからである。そのわざは、いかに未完成であっても、天上で完成される。神の国のどこかを築く、なくてはならぬ一環となる。そのような生き方を終末的をいう。そのような一日一日が終末的現実なのである。私はそのような気持でないと窒息してしまふ。「一日一生」ということは此のような角度に於て、真の意味を有ってくるのである。

青年男女よ、そのような天的な抱負をもちなさい。これがまた真に文化をも建設してゆく原動

力である。

そしてこの「一つのこと」(EINES)の背後にそれは丁度映画の二重映しのように映って来るものがある。それは「もの」ではなく「者」である。「一つのこと」(EINES)の背後に「一つの者」(EINER)が立っている。それはキリストである。「一つのこと」の追求が、同時に「一つの者」、「唯一者」の追求となる。「一つのこと」が学問であろうと、事業であろうと、芸術であろうと、その他いかなる事柄であろうと、それが究極の意味と角度に於てキリスト追求である、という在り方が、実質あり、実力ある在り方である。例えば芸術追求が根源的に永遠者追求であったような芸術家は、何といっても偉大なる芸術家という名に値した。そしてこのような「一つのこと」に生涯をかけて悔いぬ生き方を真に教えてくれるのが福音であり、靈感と共に創造力を附与して下さる創造の神である。

「一四」 誇るにも羨むにも当らぬ

「智恵ある者がその智恵を誇ってはだめだ。力ある者がその力を誇ってはだめだ。富ある者がその富を誇ってはだめだ」とはエホバの言であった(エレミヤ九・二三、二四)。そのように信仰を誇ったり、道徳的であることを誇ったり、霊的体験を誇ったりはだめ。我々の側のものは誇るべき

何ものでもない。

それゆえにまた、如何なる素晴らしきものも、それ自体は羨むに足りない。学問の前にも、芸術の前にもその他いかなる能力の前にも、富の前にも、権勢の前にも膝を屈するの要はない。一切の真理と能力とは神の属^{もつ}である。神の属としてこれらのものを自覚し、神に栄光を帰しないことは、神に反対する冒瀆であり、掠奪であり、反逆である。文明文化が自己追求的、自己目的であるならば、それはサタンの性格を帯びたものであつて滅びゆくまでである。

キリストのためにすべてのものを失い、「すべてのものを塵芥の如く思う」(ピリピ三・八)に至つたパウロは逆に、「万物を賜はざらんや」(ロマ八・三二)と叫ぶ豊かな魂にされたではないか。けちな誇り、けちな羨みや妬みや、比較などしているけちな心を棄てて、キリストに在つて眞の平安と無限の豊かさの中に生きようではないか。キリストの外に何を求めても、何を得てもそれは空しい。キリストを得ると、彼は私たちに万物を賜り、全宇宙を散歩区域にして下さるという。この小さな地球上で利害打算をやり、揚句の果ては戦争で生命までも御破算となる人類の愚かさ加減は何としたことか。キリストが十字架に懸りたもうたわけである。

八、太虚遍照

(一九五四年、年頭)

万国旗の中でも最も単純なものは日の丸の旗である。これは三歳の童子も描くことが出来る。

白地に赤い丸を大きく一つ描けばよい。この単純の極致なるものに実は無窮の真理が蔵かくされている。日本人は今、左顧右眄することを要しない。日本本来の単純さに立ち帰ることが一番の急務である。それは日の丸の旗を作って門口に立てることではなく、日の丸の旗をおのが胸の中に掲げることである。否、実にわが心臓を太陽とし、わが五体を無色の旗地とすることである。日本人がみんなそんな心がけになったら、どんなにもっとあたたかい人間らしい社会となるだろう。

武器などすべて放擲し、平和々々とかなりたてずに、すべてを地でゆくだろう。政治家はもっと公明大胆な発言を全世界に向ってなし得るであらう。その点インドのネールは魂の澄んだ人物と

思われる。

せめても日本の宗教界が、そのキリスト教界も仏教界も、もっと聖なる靈的次元に突入しなければ、日本人の魂はどうにもならない。日本の青年の魂を見てみると、全く憂うべき現状である。併しこんな青年たちの出来あがった責任はどこにあるのだろうか。現に指導的地位にある人々のかたくなさの方がなお憂うべきであるかも知れぬ。ともかく、もはや問題はひとごとではない。誰れ彼れではなく、各自が、この私がただひたむきとなるということのほかはない。

私はこの頃、まことにおくればせのことながら、つくづく単純なものに驚異している。まず太陽である。万象を遍照している太陽である。あれが原子爆発の本来本元で、莫大なるエネルギーの大塊と聞いて胸が躍る。その熱と光が地球上の一切の生物を生かしている。そのエネルギーの波動たる陽光それ自体は無色透明である。無色の光だが、それがまた黄金色を始めとして多彩に光り得る。一切の植物に動物に千差万様の色彩と形態とを興えている。この熱と光の陽光の神秘はさぐるに由なきものである。

しかもこの陽光を作用せしめる媒介となっているものが、これも無色透明の大气である。大气が息吹けば風となり、風は微風ともなり暴風ともなる。併し大气そのものは見るわけにゆかない。木の葉が動けば風とわかり、煙がなびけばどっち風かがわかる。鳥はこの虚空に羽ばたいて自由無碍な活動をする。而も大气は空々漠々として捕捉すべくもない。而も大气は万象を包摂

し、万象に滲透し、光を伝え、熱を伝え、その酸素、窒素は生命体にとって不可欠である。

さてまた水を見よ。地球の三分の二を占める大洋はこれまた水の世界である。千変万化の雲となり霧となり、雨と降り雪と積り、霞とたばしり、氷山と化す原体は言うまでもなく水である。

小川とせせらぎ、滝と落ち、淵と湛え、湖をなすもの、方円に従って何の屈托あるなく、これを満たし、あふれ流るるもの、無力にして万力を發揮するもの。而も一日としてこの水なくして生物の生命は危殆に瀕する。水を呼吸している魚類に至っては、これなくば直ちに死滅する。而も水そのものは無色透明、淡々として無味ながら一切の味の素である。

陽光も大気も清水も、すべてこれ無色透明の無体である。この無色なるものが一切の有色この無体なるものが一切の有体なるものの根源要素をなす。また無価なるこの三者の価値に何ものが匹敵し得るか。一杯の水、一条の光線、一室の大気は、我らの自然生命にとって、ダイヤモンドの山よりも貴い。誰か陽光を思念して生きるか、陽光は我ら現にこれを浴びて生きる。誰か大気を信じて生くるか、我ら現に大気を四六時中無意識にも呼吸してその中に浸って生きている。誰か水はH₂Oなりと理解して生くる。現に我らは水を飲んで生きている。陽光も大気も清水も我らにとってかくも驚くべき生命の現実でありながら、その存在の何たる自由無碍なることよ。その無色透明の相に一切の秘訣がやどっている。而もこの三者、陽光と大気と清水は一体となって万象をあたため、さわやかならしめ、うるはしている。照らし、抱き、泌み入る。三者一如たる無

色透明！ 光よ、愛よ、生命よ！ light, love, life！ Licht, Liebe, Leben！ 三ハルよ。

私は万巻の書より、この大自然の大智、大愛、大生に圧倒される。而もこの大自然の無色、透明の相も、更に高次なる靈界の相の投影、現実であるに過ぎない。万象創造の神、靈界の太陽を満身に浴びて実存したイエス・キリストを見よ。「我は門なり」と云い、永遠の靈界へはこの「門」をくぐるの要あるを示し、「我は生命のパンなり」と云い、「人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし、わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ」と云って、信仰とはキリストの靈、肉を食い、キリストの靈、血を飲む消息であることを告げ、「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」と云い、靈の生命は一身同体的つらなりであることを宣し、「我に居れ、人もし我に居り、我また彼に居らば、多くの果を結ぶべし、汝らは我をはなるれば、何事をもなし能わず」と云いて実存的行為の可能はただ彼と一体になることにあることを明言し、「父よ、汝の我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らなためなり……是われらの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり……」と云って、父なる神とキリストと我らの驚くべき全、一体的相入の關係の消息を語り給うキリストに全身を投ぜん！

この角度から聖書の語る本体界、靈界への投入を語り出したら、まことには、てしなさをおぼえる。全聖書は実はこの「門」を靈的、且つ行為的にくぐって読まらるべきことを語っているからである。

靈界の陽光であり、大氣であり、清水であるキリストを浴び、吸い、飲むことが信である。その他に信はない。信はまことに現である。信仰の「仰」の字は余計ですらある。パウロの「我れキリストと共に十字架につけられたり」とは何か。このキリストに全身を投げかけるということである。投げかけてみたら実は抱かれていた。抱かれているのに気がついたら、自分というものが空無にされていた、自己が脱落されていた、われという罪の黒い塊が、無色透明体にされていた、というのである。これが十字架というつねに新たな現在完了の恩恵なのである。

古池や蛙飛び込む水の音

静寂なる靈界、古池の如し。蛙は我れである。靈界の池心キリストの中に投身する。静寂を破ってポトンと蛙のすがたは池の中に没する。蛙は池の中を自由に泳ぎまわる。我も亦池心キリストに身を没して、靈界を自由に泳ぎたい。この現実界を直ちに靈界として。相對界にありながら相對界に絶しつゝ、相對界を救いあげる力をたまわつゝ！「信」とはかかる投身の「行」のほかの何ものでもない。古池を眺めていたのではダメである。古池に跳び込むのである。「目」ではなく「足」である。キリストに投身すれば無限の波紋が生ずる。電波以上である。

ヘブル書記者が「手にて造らぬ此の世に属せぬ更に高次なる完全なる幕屋を経て、……己が血をもて唯一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を完了したまえり、……永遠の御霊により瑕なくし

て己を神に獻げ給ひしキリストの血は、汝らの良心を死にたる行為より潔めて、活ける神に事えしめざらんや。」（九章一一―一四）、「我らはイエスの血により、その肉たる幔を裂きて我らに開き給える新しき活ける路より憚らずして至聖所に入ることを得」（同二〇・一九）と申している消息も、キリストの贖罪の血により旧き我は棄てられ、新しき血の我に創造りかえられたがゆえに、憚らずしてキリストに跳び込め、跳び込む原動力が既にキリストによって来ているではないか。キリストに跳びこむことが直ちに神のふところに躍りこんだことになる！

ここに話題を転じて沢庵禪師の言に聞くことにしよう。彼は徳川三代將軍家光の頃、江戸品川東海寺の開祖、臨濟宗の大徳である。その『東海夜話』の一節に次のようなのである。

「只虚無のみ能く万事に應じて、長短方円、あたらずということなし。我胸を虚無にして心を無事に納て居れば、何事なりとも、向ひ来る其事に随てはたらくべし。……向ひ来るよろづの事は、客人の如く也、我胸の内は座敷也。座敷をはらひきつておいて、向ひ来る客人を請じ入れて、如何様なりとも、客人の心次第にもてなすべし。是を虚無の道といふ也。堯舜の政は、如太虚一片雲。というも、虚無の義也。聖人の胸の内太虚の如き也。……胸中の虚無なる処へ、何事なりとも向ひ来たるを、太虚に一片の雲のうかび来るにたとへて云ふた事なり。雲は政也。儒者は虚無を見そこなふて却つてそしるなり。虚無といへば、何もないといふ事也と思ふて、わきまえずして云ふ也。道理から心をさとらずして、紙に書付たばかりで、どうのかうのと云へど

も、見ぬ事なければ一つもあはぬ也。……心に何もおかぬを虚無と云ふ也。又心は万事をなす役也。……目を見る役者、耳は聞く役者、鼻はかぐ役者、舌はあじはふる役者、身は物にふれて知る役者、手は取る役者、足は踏む役者也。一役々々あれども、心はその諸役をはずさず計らふ物なれば、一役に心をばさけば、諸役がかけぬる程に、心をば無役にしておくを、虚無と云ふ也。」

なかなか面白いことを説いている。この頃の私の感じていることが裏書きされていて痛快この上なしである。虚無は即ち虚心のことである。大気の如く空無であれとの義である。大気は即ち太虚であつて、さきにも述べたように、太虚は空々漠々としていて、而も陽光で充滿し、一切を認識せしめ、一切を生かしている。太虚なるものは即ち遍照するものである。沢庵禪師にとつては当時の儒者が正にバリサイであつたと見える。慕しきは沢庵禪師かなである。ここにも次元の相違を見るからである。また西洋流の虚無主義者どもも禪師の前に愧づべし。

我らの魂が絶我し、太虚、無色透明になればなるほど、——而もこの事態はわが修養といったことでは断じてなく、キリストの十字架の恩恵が無色透明への原動力であるから素晴らしいのである。——いよいよキリストの生命の光が遍照してくるのである。これは全く聖霊のパブテスマによる十字架、復活の恩恵の信受、否体受と申したき事態である。

さきに述べた大自然の陽光、大気、泉水の驚くべき生命態は、遙かに驚くべき絶対次元に於て、聖霊の事態に於て、我らに無限に展開を開始する。まことに「人は水と霊によって生れず

ば、神の国に入ることには能はず」である。悔改と受霊をキリストはかく云われたのである。絶我して飄々乎として風の如く、霊に新生する者は、風の如く自由無碍の生命となる。日本の高僧たちは仏の世界でそのことを体現した。今や新たにキリストを、原始福音の根源相に於て受けとらんと、聖霊の子らが、この次元に、霊界の成層圏へ向つて飛翔せんとしつつあるをよろこばすには居られない。

靈陽キリストをわが心臓とし、わが五体を無色透明体となし、絶信し、絶我し、太虚遍照の大愛に浴せん、大愛に生きんと悲願靈願、この他に仔細なし。一切の主義も主張も、わくも立場も無之。私の全身これ天涙である。全身これ靈炎である。全身これ靈風である。一切を包摂し光被するキリストの幕屋の具体的投影体たる聖霊の幕屋の展開あるのみ。キリストの聖名はいまこそ実なり、現なり、生命なり、霊なり。「生命の泉は汝に在り、われら汝の光によって光を見る」(詩三六・九)。「汝、霊をいだしたまえば万象みな造らる。汝地のおもてを一新し給う」(詩一〇四・三〇)。かかる神はキリストのゆえに、「汝らは世の光なり」(マタイ五・一四)と云い、「聖霊の宮」(コリント前書六・一九)であるとなし、「永遠の生命の水。汝らの腹より湧き出でる」と云い給う。聖書には形容詞はない。すべての現実を貫いて神霊の現実が勝ちゆく。その中に没入、身証することを信とはいふ。栄光主の聖名にあれ、アーメン。のこるはただ限りなき祈り心。合掌

〔「曠愛文庫」第五号所載〕



富士の日の出

九、田毎の月影

(一九五四年二月)

水田の満月 新宿の中村屋といえど誰しも知っているお菓子屋であるが、そこに田毎(たごと)という落雁風の乾菓子がある。風流な名の菓子だと思った。その丸い菓子の一つ一つが田毎の月影だこのころである。それを見ているうちに、ふと一ノ関の東方狐禅寺に疎開していた家族を訪ねた帰るさに、畔路を歩きながら、田毎に映る満月の影を見て、「ああ美しいなあ！」と感嘆したことを思い出した。そのときは一抹の哀感を伴った感興にすぎなかったが、こんどはその菓子を見、あの水田の満月を想ってハタと福音の相を観た。

靈光を満身に浴びて 満月すなわち望月(もちづき)である。日月相望むの意である。月は陽を望んで陽光を満面に受け、皓々と光を放つ。太陽はこれをもに見ることが出来ないほど強烈

な発光体である。しかし望月はこれを親しみ眺め得る反射体である。神は預言者イザヤが体験させられるように、聖なる栄光の霊でわれらはこれに耐え得ない。ただ独子イエスのみがこの神と親しみ「父よ！」と呼び、神は「わが愛しむ子」と呼んでイエスを愛した。そのようにイエスは父神・霊神として神に親しみ、父の霊光を満身に浴びていた。ヘルモン山上におけるイエスの変貌は、「父の栄光」の素晴らしい一現象面であった。父の栄光は彼の全生活の言動に、多彩に自由に見われていた。それが四福音書なのである。彼の全実存は実に父の栄光の体現であった。「われを見し者は、父を見しなり」(ヨハネ一四・九)とは、正に神の子でなければ発することの出来ない証言である。

受肉したキリスト・イエスはおのれを空無となし、自分の意志を否定して、神を百パーセントに受けて聖意を現成した実存であった。それは謂わば日輪の光を満面に浴びて照り渡る望月の如くである。われらの贖罪者キリストは、われらが親しく仰ぎ見することをゆるされている月の如き存在である。「我は道なり」、「我は門なり」と言われたイエスは、陽光を、父の栄光を親しく我らに受けさせる月光である。

パウロの「信」 田の清濁はどうでもいい。あるがままの田の中に月影が宿る。我意、自我のままを投げ出した魂、そこにキリストの霊が宿るのである。投げ出された場所は何処なのか。それはキリストの中である。どういうキリストか。十字架されたキリスト！ その中なのである。

この事態を見事に告白してくれたのがパウロさんなのである。「私は神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架された。私は生きているが、もう自分ではない。私の中にはキリストが生きておられるのである。今わたしは肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために自分自身をささげられた神の子を信受してである」(ガラテヤ二・一九・二〇)。即ちパウロは、聖なる神の意志の表現たる律法がとても本当には遵い得ないものであることを自覚して、律法に降参した。律法で生きるはずだったが、逆に律法に対して死者も同然の敗北を喫した。それは何処でかというところ、ありがたいことにキリストの十字架においてであった。即ちキリストは、死に価する彼の罪を、実に彼という罪びとそのものを、十字架で贖罪し、救いとして下さったと彼は体験した。即ち、神の審判を自ら引き受けられた贖罪のキリストの死において、彼は神の義と愛を受けとった。即ち神の義が審判の相をもって現われ、同時に神の愛が恩恵の相をもって現われたのであった。神の義が現われ、同時に愛が現じているキリストの十字架において、彼はキリストの義と愛を受けた。この義、この愛は、霊なるキリストの復活と共に、直ちに生を与うるいのちの義であった。「キリストが私の中で生きておられる」とは、正にこの霊のキリストが聖霊として私の中に生きておられる、ということなのである。キリストの十字架、復活、聖霊の現実相はパウロにとって一貫した玉の緒の消息で、分析的ことがらではなく、霊的有機体的な事態であった。パウロにとって「信仰」とか「信ずる」とかは、根源的に

は、つねに靈的具體的な「受けとり」であり、「つらなり」であり、「の中に在る」といった現実態である。決して観想的觀念的な「信仰」や「信ずる」ではない。ガラテヤ二・二〇の現行訳の「御子を信ずる信仰によって」はいかにも觀念的である。「御子の信仰にあつて」が直訳で、「御子を信受して」と端的に訳すべきである。御子と内住關係にあることであつて、御子を對象化し、おまけにこちら側の信仰というものを何ものかとしているようなことではない。パウロはそんな主觀的な信念のような信仰で生きていたのではない。そんな信仰が使徒たちの信仰では断じてない。いかに「信仰」とか「信ずる」とかいう語が一般に躓きとなつてゐることであらう。それゆゑにむしろ「信ずる」を「受ける」とか「信受する」とか「うつつとする」とか読み、「信仰」を「信交」とか「信受」とか「信行」とか「現實化」とか読み変えた方がはるかに本質的である場合がいかに多いことだらう。信仰とはそのような靈的具體性、現實性、根源性を有つ事態なのである。

ヨハネの「愛」 ヨハネにおいても事態は全く同じである。たとえば、「愛というは我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のためにあがないの供物となしたまいし是れなり。……未だ神を見し者あらず、我らもし互に相愛せば、神われらに在まし、その愛もまたわれらに全うせらる。神、み靈を賜ひしよりて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。……我らに對する神の愛を我らすでに知り、かつ信ず、神は愛なり。愛に居る者は神に居

り、神もまたかれに居給う。かく我らの愛、完全を得て、審判の日におそれなからしむ。我らこの世にあって主の如くなるに因る。愛には恐れなし。全き愛は恐れを除く。……恐るる者は愛いまだ全からず。我らの愛するは、神まづ我らを愛し給うによる」(ヨハネ第一書四・一〇—一九)。

信仰は信交 これを見てもパウロの「信」の現実に対して、ヨハネは「愛」の現実をもって応えている。いづれもキリストを受けて在る消息であつて、パウロはそれを「信」の実存をもって、ヨハネはそれを「愛」の実存をもって証したのである。ヨハネ福音書第十四章より十七章に至るキリストの「訣別遺訓」が正にこの「居る」「留まる」「宿る」「われ父の中に」「父が中に」「我汝の中に」「汝わが中に」という深い靈交の実存の消息を語っている。それゆえ「信交」と申してよいわけである。「信仰」とはこのような現実の他の何ものでもない。

田毎の月影 それで満月を宿す田のすがたにこのような「信」の相を見るのである。七つの田が満月を七分の一にして映してはいない。田毎に満月が映っている、宿っている。霊の世界もそのように、すべてのキリスト者がキリストを満月的に百パーセントに映し宿すのである。ところで水田に宿る月影には光も共に宿って、その月影は光っていることに注目しなければならない。画家が画面に描く月影には月の光そのものがどうしても出て来ない。いわゆる観念的信仰は、描かれた月影を見ているようなものである。なるほどそれは月を思わせるに相違ない芸術品としてはいかほどにも立派なものであり得る。たといそれが世界的名画でも、月の光を如何せんという

うらみがのこる。信仰もまたそのようである。思い込みの信仰は、どんなに立派な厳密な神学的な解説がなされようとも、それは概念であり、観念であり、信念である。けれども無心の田は、無言の田は、自らが画面となつて、月影を光もろともに映している。キリストが「凡そ幼児の如くに神の国を受くる者ならずば、之に入ること能わず」（マルコ一〇・一五）と言いなさつた消息がこれである。キリストはこのとき「信ずる」といわず「受くる」と言つた。全身を以て受けとり、全身を以て没入する世界が霊の世界であつて、あたまの信念や理解の世界は、これと質が異なり、次元が異なる。

霊的信仰 光もろともに月を受けるとは、どのようなことか。聖霊もろともにキリストを受け「信」のことである。聖霊を受けることのない「信」は量的に「わが信仰」を一から九十九まで量っている信仰である。しかし聖霊を受けとる「信」は質的な零即百的な開かれた魂の態勢の信仰であつて、「わが信仰」といったものに絶した信なき信である。このような質的信仰こそ霊的なのである。われらは量的、観念的信仰を棄てて、開魂碎心の質的霊的信仰に就く。これ使徒的信仰（原始福音）の「信」であり、「愛」であり、「生」であるからである。

イエスの譬話 私は勿論芸術家の描くときの心境と、真に描かれた月が、物理的に光をもたなくとも、そこに光を宿し得る芸術味の何であるかを知らぬほど絵心のない人間ではない。譬話的な表現が何を言わんとしているかを洞察することなくして、イエスの神品の如き譬話にも人は蹟

くであろう。譬話、比喩的表現は、神学的論理的分析とは異なる角度からの洞察を必要とするからである。それゆえキリストも「聞く耳ある者は聞くべし」と申されたのである。

みたまを宿す われらの肉体、即ち自然の生は、陽光を浴びて生き、大気を吸って生きている。決して陽光を信じて生きず、空気を思つて生きていない。そのように、われらの魂が神の霊、キリストの霊の存在を信じて生き得ず、思つて生き得ないのである。神の存在を信じこんだり、十字架の贖いという信条を信じて信仰と思つているような信仰を悪いとはいわないが、それではない。つまで経つても、生命の事態とはならない。現実に神の霊、キリストの霊たる聖霊を宿しその中に生くるのが、信仰であることは、福音書のキリストの言動、使徒行伝のペテロ、ステパノ、ピリポ、パウロ、ヨハネの諸々の言動に、また使徒たちの手紙の証言に、瞭かである。

魂の呼吸 霊界の空気を聖霊にあつて呼吸するところに魂の呼吸、祈りがある。「信」とはどのような「現」(うつつ)のほかの事態ではない。「現」とはただちに現象をいうのではない。現象の奥の現実をいうのである。「現前せずといえども、宛然として具足す」といった「現」である。このような「現」を霊得すれば、路傍の一石に宇宙の叫びを聞き、原野の一草に万象の言葉を読み、空飛ぶ孤雁に創造主の意志をつかみ、貧者の一燈に神の愛を感じることが出来る。たましいの祈りなきところには、霊界は開示して来ない。聖書の預言者、使徒たちは、みな魂の深い祈りを有っていた人々である。祈りが気やすめや観念の祈りではなく、真に神のふところに入

っているか。ただおのれを投じた人のみかその質的相違を知る。

使徒的信仰　原始福音の世界、使徒たちが聖霊に在って生きた現実、預言者たちがヤハウェーの霊を受けていた現実。慕しいかな彼らの現実。それが聖書に証されている現実である。それを呼吸しないで何の聖書研究か。彼らが嘆いている。噫、現代キリスト教界よ、研究と論議に拘わりすぎてはいないか。ゲーテが言った通り、理論だおれは灰色で、オレンジの果の成る生命の樹は緑色である。たといすべての現代キリスト教界に棄てられても、私は原始福音の生命の現実、使徒的信仰の実存に生きよう。かく在らざるを得ない。雲が飛べば雲を縫って走る月影、水が波立てば波と碎けて破顔きらめく月影、静かなる夜田毎におのれを残らず投じて光もろともに宿る望月の影。我らは満月を光もろともに宿す実存でありたい。「主は即ち御霊である。主の御霊のあるところには自由がある。我らはみな面帕（かとおおい）なくして、主の栄光を鏡（水田）に映す（宿す）ように見（宿し）ながら、栄光より栄光へと主たるみ霊（を宿すこと）によって主と同じ像（すがた）に化するのである。」（第二コリント三・一七・一八）。

一〇、福音の冥想

——天鐘——

(一九五六年春)

諸行無常

一九五五年の大晦日の夜、除夜の鐘を聞きながら冥想した。少年時代に母や兄や姉と除夜の鐘を炬燵にあたりながら聞いた小石川同心町時代は今いづこ。母は失明生活三十余年の苦杯を味わいながら今年米寿を迎える。その兄も姉も既に地には居ない。

北は北海道、南は九州の鐘の音がゴーン…ガーン…。殷々鏘々たる鐘のひびきである。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おご

れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風前の塵に同じ。」平家物語のこの名句によれば、梵鐘は人間界の「諸行無常」をはかなみ、煩惱より解脱せよと響くが如くである。

同じく「無常」を語る散文詩、有名な方丈記の一節が連想される。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。…朝に死に夕に生くるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知、うまれ死ぬる人いづかたよりきたり、いづかたへか去る。又知らず、かりのやどり誰がためにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、言はばあさがほの露にことならず。」いかにも日本人らしい無常観である。

これらに対比さるべき無常観が聖書の中にもある。「コーヘレス曰く、空の空、空の空なるかな、すべて空なり。日の下に人の勞して作すところの諸々の勞作はその身に何の益かあらん。世は去り、世は来る。…万の言用い尽くされて人なお言い尽くす能はず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つることなし。さきに有りしものはまた後にあるべし。…日の下には新しきもののあらざるなり。…」(伝道の書第一章より)ギリシャの哲人ヘラクレイトスも「パンタ、レイ」(一切は流転す)といった。生きとし生けるものが「死」という現象によって一線を劃されているこの現実を直視せよ。つめたい墓石の前に立って人生を冥想せよ。この「死」を如何にして突

破するか。私は五歳のとき父の亡骸を見た。その後幾度か知人の葬儀に列して同じような相を見た。彼らのたましいの去処如何。

和合同心

ドイツの詩人シラー（一七五九—一八〇五）の冥想詩『鐘の歌』の詞書に、

Vivos voco,
生者をば吾れ呼ばうなり。

Mortuos plango,
亡者をば我れ嘆くなり。

Fulgura frango
電光をば我れ破るなり。

とある。これは元来一四八六年に鑄造され、スイスのシュタフハウゼン市の精舎の鐘楼に吊された巨鐘の銘であった。

この詩の終に近いあたりに次のような節がある。「来たれ、来たれ！ 皆の衆、列につらなれ。我らいざ、この鐘の命名をなさんかな……『和合』の名をばこれに負わしめん。この鐘のもと、衆生集まり、一致団結、睦まじき群と成らんが為に。」

「和合」(Konkordia) — 文字通りの語義は、「一つの心」「共通の心」「同心」である——ドイツの自由の使徒ルッターと同じ月と日（十一月十日）に生れたシラーが同じくそのいくつかの劇詩

を以て自由を謳歌したことは奇しき冥合である。而も前者は自由が愛に展開すべき消息を説き、後者は自由が和合の土台たるべきを謳う。この詩人の預言をよそにしてなおドイツは半世紀間、「和合」を招来し得なかった。偉大なる政治家ビスマルクの出現によりドイツは一九世紀の後半に到って始めて統一ある国家となった。然し世界は今、この「和合」を真に必要として来た。何故この様に分裂するか、対立するか。問題は人間相互の「和合」などでおさまるものではない。そこには終末的角度の深刻な様相がかくれている。神につくか、サタンにつくかの人間実存の相である。

この冥想詩の最終節はかく叫ぶ。「今や引綱に力をこめて、鐘を坑より引揚げよ。響音の国に高く、天空の域に高く昇るまで！ 引けよ、引き揚げよ！ 鐘は動けり浮び揚げられ！ この市の歓喜と響け、その初音、平和と響け！」

歓喜 (Freude) 平和 (Friede) を鳴り響かせるのが鐘の使命であれ、とシラーは叫んでいる。而も「和合」こそは歓喜と平和の源であるという意であらう。ルッターの如く福音的でなかったシラーは、どうしたらその「和合」が得られるかを謳うことをしなかった。

耳を転じて欧州の一角に光榮ある独立を保つ島国から響き来る鐘の音を聴けば、

「響き送れよ、地位と血統の虚しき誇と

市政の醜聞と憎しみを。

響き迎えよ、真と義との愛を。

響き迎えよ善への共通の愛を。

響き送れよ、厭わしの古き病相を。

響き送れよ、狭き守銭根性を、

響き送れよ。古き幾千の戦禍を。

響き迎えよ、平和の幾千年を。

響き迎えよ、雄健にして自由の人を。

更に大度の心と更に柔和の手とを。

響き送れよ、国に遍き暗黒を。

響き迎えよ。後在らんとするキリストを。

これ、有名なテニスン（一八〇九—一八九二）の『イン・メモリアム』第一〇六連中の詩句である。ここに福音の鐘の音を初めて聴くのおもいがする。

シラーが掲げた鐘銘「和合」の由って来るべき源と質とを指しているからである。人間社会、国際間の和合も、源は各個人の魂が何よりもまず絶対者と「和合」するにある。しかしそのことはキリストと同心一体になることによってのみ得られる。「主に結びつく者はこれと一つ霊となるなり」（コリント前書六・一七）信仰がそのようなものであることはルッターが『基督者の自由』

の中で美しく且つ適切に言った。「信仰は魂をキリストと一つにする、あだかも花嫁がその新郎と一つになるように」と。二十世紀後半の此の世界が偉大なるコンコルディア即ち大和を招来せんことを願ひ、政治家も国民もごまかしなく実現せんとするならば、道はこの福音の一途のほかにない。少なくとも、平和の鍵は愛にあることが深く自覚されなければならない。

東方の鐘の音が「諸行無常」の現実よりの「解脱」を告げるものであるならば、西方のそれは現実のただなかで「真と義との愛」を求めて「和合、同心」を得よ、と鳴り響く。

鐘身一如

さてここに我が東洋の子でありながら、西方からの福音を呼吸している者に於て、新たに鳴り出でる響きはどんなものであらうか。除夜の鐘を聞きながら冥想しつつ、私自身はどんなことになったか。除夜の鐘は百八ツの煩惱を消す徴として、百八ツうち鳴らすと幼少の時から聞かされていたが、梵鐘の音を聞くことによつて罪業が打ち消されれば文字通りの福音だが。星を仰げば星となり、花を眺めれば花となり、水を浴びれば水となる心境、即ち鐘を聞きつゝ全身を鐘にした。鐘と身と一如の境地である。煩惱の顧慮は消えてゆく。撞かれる鐘そのものとなつて冥想をつづける。

百八の煩惱を撞く梵鐘を冥想すれば鐘身一如

鐘には足がない。鐘は即ち足場、立場をもたぬ存在である。足場、立場なく、主義、主張なき者といえ、いかにも不定見の如く聞えるが、私は水母の如くふらふらと漂いつつ、主義主張を朝三暮四的に変える亜流であらうとするのではない。また主我的に主義、主張を固執して人を審くバリサイになって、キリストの敵とは毛頭なりたくない。さりとて円転滑脱の巧智者流は御免である。

それでは何か。頭上に鉄索をもつ吊鐘のように、わが頭上にはキリストの不見不断の「愛の綱」(ホセア一・四)がおろされている事態である。鐘に足場があつたら、鐘は鳴り響かないのである。若し私が福音の事態を自己の信仰、自己の神学、自己の主義、自己の実存、といったように私したら、福音は小主観の限定を受けて、その偉大さを発現してくれないのである。無私、無色、無立場、無主義。絶信の信、絶学の学、「無義の義」(親鸞の言葉)、無愛の愛とつねづね申す所以である。おのれの側の主観も主義も力味りきみもはずれてゆくのである。それは地球が太陽の驚くべきエネルギーで引き廻されているという自覚、他覚である。地球それ自体は何たる無力者ぞ。かくてこそ自転も公転も妙なる天則を以て行われている。地上の生きとし生けるもの皆太陽の光熱に依存している。此の如く我らがキリストに依存する事態を主体的実存という。

天鐘 一体

而も見よ！ 東洋の鐘の腹の中を。そこには何も無い。西洋のその如くガラン、ガランと鳴るベルがない。東洋のは唯だ是れがらんど（胴）である。併しこの「無」は虚無の無ではない。空無である。鐘の空洞は無限の天空を宿しているのである。鐘は天空に抱擁され、天空は鐘の中に宿る。鐘が撞木で衝かれるとき鳴るものは何か。実に空無の如き鐘の腹の中の天空が鳴るのである。それはまた天空を宿したる鐘の音でもある。鐘と天とはここに一体である。天と鐘とはかく一如である。

天空を腹に宿せる鐘の如み霊の君を宿しまつらん

夫々の鐘の大小、鐘の鋼質、鐘の形状、鐘の厚み等に應じて天空が種々の音質を以って鳴るのである。何たる秘義ぞ。

私という鐘が、原始福音体たるキリストに、愛の靈綱を以て吊され、無私、無立場、無主観とされ、聖霊に包摂され、聖霊を宿して、神の聖旨に打たれて、天韻を発する。然かあらしめ給え！ 栄光み名にあれ！

まことに私は十字架のキリストの贖罪により「私」という旧きアダムから解放されて無「私」

とされた。これ恩寵の現実、信仰の現実である。このなまの現実の私自身は併し相変らずの罪びとに過ぎないにも拘らずキリストは十字架の事実を以て私に無私、無罪を宣して下さっている。それ故に、いよいよ現実に無私となれ、否無私の人にしてやる、罪なき者に完成してやる、とて実力を以て推進させて下さる。その実力とは何か。罪に勝ち、死に勝ち、陰府を踏まえ、サタンに勝ち給うた神の義そのものなるキリストの生命、復活のあの聖なる靈生、聖なる生命である、キリストのみ霊である。禪宗的な悟入の「無」ではなく恩寵の実存的な「無」であるが故にこそ、み霊に於ける「無限」の生命である。これ私が「無即無限」という所以である。かかるキリストの恩恵の現実を誰に否み得んや。この惨めな私が、惨めさの奥に「至聖所」を賜っている（ヘブル一〇・一九）。我らは「聖霊の宮」（コリント前六・一九）「神の宮」（コリント前三・一六）である。かかる事態は私の私すべき信仰ではない。賜わりたる信仰である。それ故にかかる信仰を告白することは主の恩恵を讃えること、栄光を主の十字架と復活と聖霊に帰することの外の何ものでもない。だから無私なりというのであって、私が何か偉さうに自分を無私の人間であるなどと揚言しているのでは絶対でない！ 無私も大死も砕けも、私にとっては全くキリストの恩恵を、恩恵の実力により全身全霊を以て受けて限りなかるべき一貫せる事態であって、その質は無限に深められるべきものであって、地上にて完了など思いもよらぬところである。さればこそみ霊の生命の充満も無限に進展してゆくはずのものである。否、実にみ霊の実力こそが旧き私を排除し

て限りなく新生展開せしめ給うのである。この死生の展開はパウロが申した如くである、即ち、「罪につきて死にたる我らはいかで尚その中に生きんや。汝ら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは（キリストとの靈的合一）、この死に合うバプテスマを受けしを（キリストと偕に十字架されしこと）」（ロマ書六・二三）。

正にこの贖われたる罪びとそのものが、かかる恩寵によりキリストと一つにされる事態を受けとることを信という。神の「言」たるキリストが罪「人」たる私に一体となって下さる事態を人偏に言という「信」が表現しているではないか。かくの如く神の「言」たるキリストが私に成ることをこそ「誠」とはいう。この外に誠は私にない。私にとっては根源的な意味に於ける靈的とは、キリストがわがうちに受肉して下さるこの恩恵の事態を意味する。その他の靈的な諸現象（カリスマタ＝賜）と明らかに区別する。

十字架のキリストによって「無」罪とされ、旧き我に「死」に、旧き我が「碎かれ」、復活のキリストのゆえに深き全我を投じての祈りを絶えずすることにより、み霊がわが「有」となり、新しき我に「生」き、碎かれた瓦が新たに「玉成」の道を辿る。この私という鐘自体は「土の器」に過ぎない。けれどもキリストのみ霊を呼吸しているうちに、即ち天空を空胴に宿しているうちに、次第に金銀も及ばぬ天鐘にされてゆく。かくて天空即ちみ霊のキリストが、鐘即ち私に一体一如となって下さる。この恩恵のゆえに、天鐘とはいうのである。しかもそれはキリストと

いう原始福音体により天に足場を、否、頭場をもつから、いよいよもって天鐘なのである。そしてすべての基督者はこの意味に於て天鐘ではないか。少なくとも使徒たちの信仰の現実はかかる質のものであったと信ずる。私はとるに足らぬ基督者であるが、その信仰の質は使徒たちの信仰の質と同質たらん事を願う。原始福音という語もキリストこそ福音の原始であり、使徒たちの伝えた福音がこれに正しく直結しているから申すのである。原始の生ける福音は歴史的にも限りなく展開してゆく、しかしその展開にあたつて福音の奥義からずれを來たすような事態に対しては、どこまでも原始の質がとりもどされねばならない。根源のキリストのみ霊は無限の内実を以て展開し給う。これに投我し、即源せんと願う。これ、真に神の歴史に参与する所以である。

かくて鐘身一如の冥想は、即ち天鐘一体と化したのである。東洋の鐘の相は素晴らしい無即無限の相を呈している。福音はこの東洋的な「無」を新たな「無」となし「無限」たらしむる内容である。相対的な「無」(教会)でもなく「有」(教会)でもない。「あれかこれか」でなく「一切か無か」でもない。無即無限、無即有、無即全、無即一切の消息である。しかしこの「即」は安易な「即」ではない。単なる冥想が生んだ「即」ではない。この「即」の鍵は十字架、復活、聖霊のキリストである。この「即」を体得、体現することが人生の目的といつて過言でない。この「即」を追求せんとあらば、この三相一貫の恩恵のキリストに全霊、全身、全力を以て投身するの「信」を要す。「信」はまたこの罪人がキリスト、即ち神の言を受けてついに栄化して言た

るキリストと一体となり「キリストの像に化する」事態をも意味する。さきのが還相ならばこれは往相である。かくて「信」とは今の一般の基督教界の信仰の如く觀念的なものではなく正にそれ自体烈しき内的な「行」である。深い祈りのないところにこの「行」の消息は体得できない。

而もこの「信」の原動力はキリストにある。さればこそひたすら投身投我が出来るのである。我らの呼吸が自然である如く祈りが魂の呼吸となつて始めて、み霊の内住は身についてくる。有難きかな、生けるキリストの聖愛の力よ。パウロがロマ書八章の終りで絶叫している所以である。

かくて東西融合を急じていたゲーテの悲願も正に福音によらずんば満たされない。而も福音の世界は東西をも南北をも超絶したる天界であり、その天界は東西南北何処にも遍在するものであるがゆえに、東西南北を打って一丸となし得るのである。大和への道、キリストの体としてのエクレシヤの実存共同体への道はここに在る。

「諸行無常」も未だ相對觀にとらわれているからのなしである。無常を貫いて無常ならざるものが現成して行くのである。天鐘体的実存となればどんな小さな言も行も空しくないことを知るのである。「わが名のためにかくの如き一人の幼児を受くる者は我を受くるなり」(マタイ一八・五)キリストを受けた者には、もはや死は既に死ではない(ヨハネ一〇・二五、二六)本質的に打ち勝たれている。「若しキリスト甦えり給わざりしならば我らの信仰は空しく我らなお罪に居らん」(コリント前一五・一七)。キリストはその聖なる靈生を以て罪と死に打ち勝ったことをその復

活によって実証し給うたからである。十字架は全く我らの贖罪のための死であつてキリストは実は死を経ずして直ちに天界に昇り得る神の人であつた。キリストが復活することにも優して当然なことは実は天上天下にない。これが当然でなかったら、聖とは何か、霊とは何か！

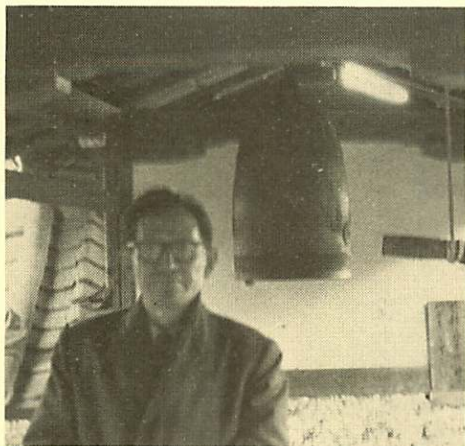
戦争が罪惡であることは明白であるのに、原子兵器を製造する二十世紀の人間は火山を掘つているようなものである。世界をいつ爆発させようというのだろう。福音的平和は、原子兵器全廃、否、軍備全廃、即ち零にして、キリストの愛を百パーセントに受くるの道是れである。全世界の平和はこの角度から志さねばだめである。キリスト・イエスの十字架はこの零＝無を与へんためであり、復活の靈生はこの百＝全を与へんためであつた！ 聞く耳ある者は聞くべしである。日本のためこれからさき十年の悲願成るか成らざるか！

天鐘！ み靈わが内に来たり臨み給う。この終末的現實に於て、いよいよ、キリストの御靈宿り給うて（ロマ八・九）、汝が聖意をこの土器に現成せしめ給え。天鐘一体の消息を静かに冥想し深く祈らしめ給え。新たに原始福音の天韻、この鐘に鳴り出で、これを聞く旅人の心をなぐさめ、その人々を天的歡喜に入らしめ給え。武蔵野の一角、吉祥寺に鳴るこの天鐘を主はいかに用い給うかを知らず。ただ限りなく誠の天鐘と成らんことのみがこの小さき者の悲願靈願。十字架は聖意貫く義の縦線と聖生遍き愛の横線である。そしてまた何を新たに語らんとするか。天地を貫く縦木は東方的な静の相、靈生合一の祈りの境地、静中に強き力ある神意神愛の降下する相。

東西を連ねる横木は西方的な動の相、実存共同体展開の面、動中にあつき生命ある隣人愛発現の相である。福音は東方的なるものと西方的なるものをその十字架に於て象徴し包摂している。み霊の祈に於て深く、愛の実存に於て強き福音こそ今後のキリスト教界の課題である。

パウロの言に従って、私たちも告白したい。即ち私たちはキリストの霊によるさまざまな知恵と理解力をもって、神意の体認（エビグノーシス）で満たされ、主のみ旨にふさわしく歩んで主に主の歓喜となり、何でも善き業をして果を結ばしめられ、いよいよキリストの体認へと生長させていただくことである。また神の栄光の勢いによるすべての力でこんな私たちを強化し、何ごとも欣んで忍び且つ荷う力を与え、光の中にある聖徒たちの嗣業にあづかるに足る者としつつあり給う父に感謝せざるを得ない。父は私たちを、暗黒の權威から救い出して、その愛し給う聖子キリストの支配下に移し入れて下さった。私たちは聖子に在って贖罪即ち罪の赦しを得、罪から本質的に解放され、キリストという義を宿している。キリストは見るべくもない神の像（エイコーン）で、万物の先に生れたまうた者である。天上天下の万象は彼に由って創られ、彼のために造られている。また一切は彼に於て保たれ得るのである。神は神性の充満（プレーローマ）を彼の中に宿して居られる。私たちはこのキリストに宿っていただくことを無限に求めてゆくのである（コロサイ・九一一九参照）。

願わしくは日本国中の梵鐘に代って、今こそかの偉大なりし仏門のあとを受けて、基督者の天



天龍寺の梵鐘と著者 1961.3.27

鐘山間に農村に都市に漁村に、新らしき信仰の終末的実存を以て鳴り出で、教会といわず、無教会といわずいづれの集会に於ても、原始福音の誠の響きを伝え、この社会の諸々の問題に対して真の解決への道を開き、光を投じ、真理を示し、力を現わし、愛を以て一切を荷いあげ救済しゆかんことを。かくてキリストの栄光を身証せんことを！「視よ、我は世の終末まで常に汝らと偕に在るなり」(マタイ二八・二〇)と主は宣たまう。

一一、 原始福音

(一九五六年秋)

旧新約全書はキリストに関わる而もキリストのみ霊による証言の書である(ヨハネ伝五・三九、黙示録五・五)。受肉のキリスト・イエスの実存を伝えている四福音書は何といつても全聖書の中心である。キリスト・イエスに於ける聖霊の充滿と聖意現成の聖言と聖業の一如一貫の事態、その究極の十字架と復活と昇天の事実、これが私の告白する原始福音(Urevangelium)の中核である。誰かがこのような語をもちいていないかと思つていたら、A・ダイスマンが『使徒パウロの世界』なるパウロの伝道地図に於て、イエスが身親しく伝道された地点を指して Urevangelium Jesu「イエスの原始福音」の述べ伝えられた所としてゐるのを発見して空谷の跫音の想いであった。

更に使徒行伝、使徒らの手紙、黙示録を加えた全新約聖書そのものが広義の原始福音である。更に大胆に言うなら、モーセの十言もその根源の質と相に於ては、神のイスラエルに対する信愛の断言命法として福音なので、所謂「律法」の奥義こそは原始の福音であった。これを受けとめたのがイエスで、彼の「山上の垂訓」は律法の奥義の把握であり、告白であった。かくて実は全聖書の根底は、アブラハムより先に在りしキリスト即ち原始福音体のみ霊を以て貫かれた原始福音を源泉源流としていのである。「原始に言葉あり」(ヨハネ一・一)とは、このようなキリストなる霊言ありということである。

一般に「福音」といわれているものを、私は何故、時にのぞんで特に原始福音というか。それは千九百年のキリスト教史を経るにつれて所謂「福音」なるものがほかのもろもろの文化的諸要素によって混成状態、逸脱状態、不純化、無力化などさまざまな変質変貌を招来しているから、つねに源泉に生命の水をのむ(ヨハネ四章)という意味に於て、「原始」なる語をつけざるを得ないのである。ランケが「すべての時代は神に直結する」と語ったが、すべてのキリスト者はキリストの福音をその原始の質と相に於て、直接に体受しなければならぬ。根源的永遠的なものを有たなければ、歴史的現実を真に生き且つ荷うことも出来ないからである。二十世紀のこの危機はこの原始福音からの離脱が甚だしいからである。換言するなら、福音が一般に真に原始の力をもたなくなったからである。福音の還元且つ前進の途は、み霊による新生を以て始まる。所

謂、信仰、信条、教派、神学、主義、主張を超克して、ひたすら全キリストを体受することあるのみ。使徒たちと同質のみ霊の事態に入るまでは、原始が何を意味するかはつかめない。つかむといつても決してそれは我を主体にした把握ではない。それ故に、私は自ら原始福音をつかんだとは断じて言わない。私は限りなく投身しゆくまでである。而も主の十字架復活の恩寵がみ霊にあつて原動力となつて下さるから、私はキリストの賜う平安と歓喜と光と生命と愛に生かしめられる。私の側は罪びとであり、砕けた瓦、塵芥にすぎない。けれども主はゆるし、きよめ、呼び、つかみ、語り、用い給う。

以上の如き事態のために、私は教会や無教会の人々から事実既にここ数年一線をひかれてゐる。併しやむを得ない。「ナザレ人の異端の首」(行伝二四・四)とパウロはテルトロに告訴された。ペテロもヨハネも、大祭司や長老や学者らに対して言明して、「我らは見しこと、聴きしことを語らざるを得ず」(行伝四・一九)。私もこの福音のためには誰に棄てられてもやむを得ない。「汝らも去らんとするか」(ヨハネ六・六七)と呻きたまいし主の福音である。もともと、「言い逆らいを受ける徴」たる主の福音である。けれどもこれが万人を救ひ抱き得る天上天下唯一つなる福音である。耳ある者はこの罪びとのこの告白に和して聖名を讀えと信じている。

一一、 天靈地氣

(一九五八年春)

二月二六日子の刻に、日本画壇の第一人者、横山大観が他界した。私もかつて、画伯の画の雄渾な気宇に撃たれて去るに忍び難きを覚えたことを憶えている。

どの新聞記事であったか、大観がある後輩に、「天靈地氣」の文字を書きおくたくだりを読んだとき、大観という人物が、この四字に告白されているのを直観した。大観は美岳を幾たびとなく描いたと聞くが、富士は大観にとって天靈の化身の如く仰がれたのであろう。また小さな花鳥を描くにしてもそこに宇宙を描け、と言った由。実に天靈を宿す態の気魄であったことを、この一言にも感知する。また大地は生命の母体である。画面に漂うあの地気を観ると面伯がいかに天地とその生気を共にして居たかを知る。水田に生きる稲の粹たる精酒を米飯より好み、酒で天

寿九十歳を享けたその氣生も大觀の場合はずける。この大觀の真似をしたい人はおのが器を考えてからやるが可い。

ともあれ、天靈地氣を呼吸するたましいとなっていたからこそ、天地を映して「氣韻生動」する画がその靈筆から迸ったわけである。最後まで死してなお已まぬ氣慨を有っていた彼は、たしかにロダンの「到る所で偉大な芸術家は自分の心靈に答える心靈の声を聞きます。君は何処にこれ以上宗教的な人間を発見しますか」。(高村光太郎訳)という言葉を書きする人物であった。

哲人西田幾太郎とか、画伯横山大觀とか、独立伝道者内村鑑三とかいう人物に於て共通なものは、たましいの自由無碍なすがたである。何か宇宙天地の深奥に触れねばやまぬ氣魄である。

さて「天靈地氣」の醇乎たる化身は実にイエスであった。神を父神として呼び、親しく神意を体現し、神を靈神として仰ぎ、深く神氣(聖靈)を宿していたイエスは、今やみ靈のキリストとして、我らの天靈地氣そのものであり給う。宇宙万象の粹はすべてこのキリストに宿っている。神意神氣が旺溢して在り給うこのキリスト(コロサイ二・九)を宿して天靈地氣の実相を身証せずや。

一二、 靈性の回復

(一九五八年五月五日)

「我れ思う故に我れ在り」というデカルトの自覚は、近世以来、文化世界の自意識である。自意識の原理を大なる体系にうちたてたのは言うまでもなくカントである。カントの哲学体系の根幹は理性の自律的な原理である。併し理性が最高善として崇める神は、結局理念であつて、人を救い得る神ではない。シェリング、シュライエルマッヘルの如き、情意主義の哲学者、神学者に於て、哲学と宗教との接触及び宗教本来の世界の独自性は明かにされたとは言え、やはり人間の側に重点が懸っている点に於て、主我的な意識から脱脚した世界からは遠い。世界の思想の主流の性格が理性的存在としての人間にかかつている限り、それが左傾してマルクス主義的であろうとも、中心はやはり理性の限界内における人間中心主義である。

近代の天才ゲーテはその生涯の告白文学たる『ファウスト』の冒頭でファウストの口を藉りて、*„Ich armer Tor!“*「可哀やうにおれという阿呆が」(相良訳)と嘆息した。この告白は、近代人ゲーテの知性的嘆息である。更に語をつづけて、*„Und sehe, daß ich nichts wissen könne!“*「実は我々に何も知り得るものでないということが分っている」という告白に至っては正に古昔のソクラテスの知的自覚と軌を同じうするものである。要之、ギリシャ文化の流れをくむ理性人の限界的な嘆きは無知に極まる。理性も人生と宇宙の本質や根源に対しては、その神秘的な深奥にぶつかって、自らの知力の無力さに嘆くわけである。

ファウストのこの *„Ich armer Tor!“* に対して想いあたるのは、ヘブライ人パウロの *„Ich elender Mensch! Wer wird mich erlösen von dem Leibe dieses Todes?“* (Luther 訳聖書) の句である。即ちロマ書七・二四「噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ」である。即ちパウロは人間存在を「死」にもひとしい惨めなもの、なやみ深きもの、罪そのものとして自覚した。正に終末的な実存的な自覚である。決して単なる知的な理性的な嘆きではない。ここにヘブライ的な自意識とギリシャ的自意識との根本的相違がある。ゲーテを以て代表して不可なかるべき近代意識は多分にギリシャ的である。ただキェルケゴール又はニーチェの流れの実存主義的哲学者神学者にはヘブライ的な実存意識が働き、前者はこれに対して肯定的に、後者はこれを否定の媒介として展開した。

パウロに於ては、この失われたる存在は、その意志面に於て、その知性面に於て、その感性面に於て根源的には害われていると自覺される。それは神の前にいかにおのれが自己主張者であり、いかに自己に拘われているかの自覺よりくる全存在的喪失である。自由を私することが実は最も不自由であること、生に執することが実は死にからまれていること、おのれを義として驕ぶことが実は罪の最たるものであること、そういう深刻な罪認識に彼はダマスコ途上に於て復活のキリストに電撃されて、はじめて到達したのであった。そのことは是非、学生諸君が自ら新約聖書の使徒行伝の第九章、第二十二章、第二十六章のあたりを繙いて、自らの眼でよんで知ってもらいたい。聖書は教えの書ではない、偉大なるドラマの書であるから、ドラマの中への投身の態勢で読まないと本当の把握はできないことを忠告しておく。パウロの靈的開眼はこの出来ごとを通して成った。「わが目より鱗の如きもの落ちたり」と彼は告白している。

人には誰にも靈性がある。たましいのない人はない。いかなる唯物論者にもたましいはある。現代人の最も由々しき問題は、この靈性の枯渇にある。併しこの靈性の正しいめざめのために、必要な角度は、自己主張的な我を無私的な方向に転回させることである。それが実は不可能事であることに気がつくとき、はじめて高次な宗教の世界の門扉に近づいたわけである。

「叩けよ、さらば開かれん」とはこのことで、「全身を以て体あたりしてごらん、そしたら開かれるよ！」キリストという門がそう言われる。「我は門なり」と彼は言った。言うまでもなく、

眞の現実界への門である。叩くとはどういうことか。手でノックする位の叩き方では門は開かない。全霊、全心、全力を尽しての体あたりである。全我を以てこれにぶつかることである。自分が門前にぶつたおれるほどの叩き方である。

あの崇山の小林寺に面壁九年の大修行をしていた達磨大師に道を求めていった青年神光のことを想う。彼は十二月の寒い夕、達磨をたづねた。達磨は一向にふり向いてもくれない。今の大方の青年だったら、むかつ腹でも立てて立ち去るところであらうか、神光の求法心はそんな驕慢なものではない。夜もすがら雪中を立ち尽して待っていた。暁に及んで達磨はやつと口を開いた。おまえは雪の中に立って何を求めているかと。神光は応えて、大師の慈悲、願わくは甘露門を開いて群品を度したまえと。大師は言う、諸仏無上の妙道は簡単に得られるものではない。小徳小智、輕心慢心のよく得るところでない。そこで神光は懷中の刀を抜いて左臂を断つて、之を達磨に捧げた。雪舟の有名な「慧可断臂」がこれである。達磨は彼の求法の心堅きを見て問答を更にゆるした。慧可は問した、諸仏の法印得て聴くべきや。大師曰く、諸仏の法印人に従つて得るにあらずと。慧可不安になり、師よ請う此の心を安んぜよ。そこで大師は、「心を將（も）ち来れ、我汝のために安んぜん」と言った。慧可は言った、「心はもとめてついに得べからざるなり。」大師は更に言い放った。「我汝のために安心し終った」と。対象化して觀察したり、研究したりすることの出来ない現実を把握するのが「心をつかむ」意である。心魂の主體的な世界をつかむ

とはこの角度のことである。ましてや神仏の絶対界の把握に於いてをや。禅宗の第二祖慧可はこのようなして達磨に心の世界、無心の心の世界の頓悟の鍵をつかまされた。棄身の求法心を以て体あたりして。

キリストが幼児の心をもたねば天国に入れないといったのもそのことで、分裂なきひたむきの求めである。信とは実に最も裂しき内的行為である。全身的傾注である。これが門を叩くということである。投身し全托する態勢である。しかもそれはあるがままの我の全托であるから、何も自ら分裂か統一かを顧みて思念することを要しない。誰も自らの力でこの絶対界の門をひらくことは出来ない。不可開の門にぶつかって倒れてみたら、実は門の方で自ら開いてくれるのである。倒れるとは自我の実存的な自己否定である。その否定を可能ならしめる力は門の側にある。

ここに啓示宗教の実力がある。しかもこの自己否定を恩恵として与えてくれるのがキリストの十字架である。否定された自己とは、エゴイズムを根底から粉碎された無我である。この無我を与えてくれたのがキリストの十字架の贖罪の大愛である。その無我に注入されてくるものは、天来の靈生、永遠の生命、別な角度から言えば天国である。ここにはじめて、性来の我々の存在の深奥に眠っていた靈が、神靈に目覚され、靈性を呼吸する現実に入る。この現実界の呼吸は祈りである。人間の知情意の活動の根源の現実が祈りの世界にある。靈性の活現こそ現代日本人の最も求むべき事態である。すべての文化現象の奥に、この根源の現実が生きて来ない限り、真の健全

な展開を見ることは難い。

一般に二十世紀の宗教界そのものが低下している。単なる観念的把握へとずれを来したり、一方では御利益的宗教が栄えたりしている。この原子力時代に最も大切なものは真の原始力をたましいの中に与える宗教の回復である。その意味に於て、Ur = Evangelium 原始福音の提唱を私はせざるを得ない。プロテスタントもカトリックも真に聖書の根源の相に還るべきである。日本人は新たに福音に直面してみるべきである。二十世紀後半は危機的現実の中にある。QUOVADIS MUNDE? 「世界よ、汝は何処へ往く?」である。

「をさなくて罪を知らず

胸にまくらして

むづかりては手に揺られし

昔忘れしか

春は軒の雨、秋は庭の露

母は涙かわく間なく

祈ると知らずや」

童心を死にいたるまで失わぬことである。そこに靈性があり、聖霊がやどるからである。「母の日」に近い。併し真にアウグスティヌスの母モニカの如く、サムエルの母ハンナの如く、祈り

の母も少なくなつて来た。

霊界の神をいつまでも無視し、傍若無神のふるまいを人類がつづけるならば、預言者イザヤを通しての神の警告がいつ爆発しないとも限らない。もし人類が原子力を戦争に用うる日あらんか、その奥に神の怒あることを憶えよ。

「我は汝らの艱難のとき、共になやみて

わが面前の天使をもて汝らを救い、

わが愛とわが憐憫とによりて汝らを贖い、

汝らを抬げ今日までつねに汝らを抱きたり。

然るに汝らなおも悖りて、

わが聖霊を憂いしむるならば、

我れ全世界の神は翻りて汝らの敵となりて

自ら汝ら全世界を攻めん。」

——イザヤ書六三章九節十節参照

まことに霊性をもつ愛こそが世界に平和を来らせる唯一つの実力である。

〔文科一類 (32-LI-8B) クラス雑誌に寄稿〕

一四、岩頭の祈

(一九五八年夏)

天地万有の創造者、全歴史の主宰者、わが大能の神様！ 潮風が吹きすさぶこの岸边、朝潮が激するこの岩頭！ 神様、この雄大な太平洋のように日本人を偉大な民にして下さい！ もし日本人があなたを有たないなら亡びます。大洋の上にあなたは大空を幕屋の如く張って居られます。(イザヤ四〇・二三、詩一〇四・二)。どうかキリストの原始福音を慕う我ら幕屋の子らが、聖名の故に、天界の幕屋(ヘブル八・二、黙示録二・三)をこの身に投影し、地界に幕屋を日に月に展開することが出来ますように。

今、白い鷗が逆巻く波間をかすめて勇敢に飛んでいます。私たちも聖霊の翼の力で人生の風波を雄々しく突破させて下さい。清新な潮風が胸一杯にみなぎって血潮を潔めるように、主のみ霊

はわれらの魂を生かしました聖めたまいます。お父様、ちとせの岩なるキリストは私たちの立場です。今この岩頭に立って、その昔パウロが「この岩は即ちキリストなりき」（コリント前書一〇・四）と叫んだのを想い、霊岩キリストに苔とむし、磐石の平安を体感いたします。魂の底から感謝し、聖名を讃えます。

ここ、那珂湊にはドイツから提身、伝道に來ているベック牧師あり、かしこ横浜にはアメリカから渡米、宣教に従事しているヘステキンド牧師あり。神様、この兩國の伝道者の主にある熱き愛の伝道を祝福したまえ！ 日本の東西南北、志ある教会や集会にみ霊の火を点じ、まことの救いの愛と力をあらわしたまえ！ 特に若き人々の間に「祈りの霊」（ゼカリヤ二・一〇）を注ぎ、日本のキリスト教界改革の烽火を挙げしめたまえ。今や、青年男女が原始福音を以て立つべきのカイロスは満ちて居ります。霊なる父よ、志ある魂に、パウロ的回心を起さしめ、み霊のバプテスマを以て原始福音の真相を現じ、使徒的信仰の土台をこの国土に据えたまえ！ 贖主の聖名によって切願いたします。アーメン。

〔「曠野の愛」第三〇号、昭和三三年〕

一五、「生への畏敬」

(一九五九年二月五日)

シュヴァイツァー(「博士」尊称をこの場合つけないのが却て真の尊敬と思うので省く)の存在は二十世紀文化の危機への最大の抵抗といって過言でないと思われる。彼自らが提唱する「文化哲学」は象牙の塔にとじこもって考えられた思弁の哲学では断じてなく、彼自らも意識せずして、既にその幼少年時代からそのたましいの根柢において問題となっていたことがらが、彼の生長と生活の中で根本問題として自覚され、形成されて遂に逞しい論説となり、警世の予言となったものである。

しかし、彼の「文化哲学」がいかに傾聴に価するものであるとしても、もし彼の生活そのものが、これを裏づけていないとしたら、その価値は大いに減ずることであろう。私がここに「最

大の抵抗」と敢ていわざるを得ないわけは、ほかでもない、彼のアフリカにおける生活そのものが、彼の「文化哲学」の最も有力な告白であるからである。

彼はその「わが生活と思想より」(„Aus meinem Leben und Denken“)の第九章「原始林に医者となる決心」の冒頭でこう書いている。「一九〇五年十月十三日、金曜日、私はバリのアヴニユ・ド・ラ・グランド・アルメの郵便箱に数通の手紙を投げ込んだ。これは、後年医者になってアフリカ地方に赴くため、冬の学期のはじめから、医科の学生になる決心である旨を、両親およびもつとも近い知人に報ぜんとしてである。……事の起りは学生時代にさかのぼる。自己の周囲に多くの人間が苦悩苦難と闘っているのを見ながら自分のみ幸福な生活を送るを得る、ということは、私には考え得ないことであつた。すなわち学生時代同級生の傷ましい家庭の有様を見、……深く心を打たれたのであつた。大学にいる時も、研究によって科学および芸術にいささかの貢献をなしうる幸福をわが身につけながら、物質的条件また健康状態のためにこの幸福を拒否されたものをつねに忘れることはできなかった。ある光輝かしき夏の朝——一八九六年であつたが——聖霊降臨祭の朝、ギュンスバッハで目醒めたとき、……私は静かに沈思して、起床までにつぎの一点に到達した。すなわち、——自分は三十歳になるまでは学問と芸術のために生きるべく許されたと考えよう。そうしてそれから後は直接人間への奉仕に一身を献げよう、と。」

思索も、感想も、決意も実行に展開せず、実存に体现されないならば、世を動かし、世を荷う

ことはできない。よき意味におけるゲルマン魂、ドイツ魂の力は、彼らの地味な、底力ある責任感の強靱な実践力にある。シュヴァイツァーはその点からもエヒト・ドイッチュである。神学に、哲学に音楽芸術にと、彼の研究と思索と修練とは、どの分野においても、独創的な、卓抜非凡な成果をみのらせつつあった。けれども彼のたましいは、自己の幸福や自己の名声や、単なる自己の才能の完成といったことに安んずるようなものでは断じてなく、また単に社会的な意識というのではなく、実に人類的な人間意識に基づく苦悩の解決を荷わんとするものであった。彼が学者として、また芸術家として第一流の人たるべき将来を棄てて、（併し彼は学問も芸術も蛮地で見事貫き、おのづから第一流の地歩を得たことは、驚くべき事実である）フランス領コンゴ、赤道アフリカの黒人救済を天職と感じて決意したのは日露戦争勃発の一九〇四年、（私の誕生の年）彼の第三十回の誕生日であった。外側から見れば、急角度の方向転換である。親戚知友の反対や誤解や嘲笑の的となったが、恵まれざる環境や多忙によく耐え、医学と取っ組んで六年間、国家試験をパスしたのが一九一一年十二月のことであった。彼の学位論文は「精神病学より観たるイエス」というので、イエスを精神病患者と断じた従来の幾つかの論説に対する学的駁論であった。

一九一二年は、熱帯医学の研究や赤道アフリカへの旅の諸般の準備に明け暮れた。また夏には、ヘレーネ・ブレスラウというユダヤ婦人と結婚した。このひとは、彼の著述の際、その浄書や校正をしたりしてくれた助手であった。こんどは彼の行動のよき理解者として、看護学を身に

つけ、アフリカで医療の大切な助手をつとめた。

一九一三年春の受難日に、この夫妻はギンズバツハに別れを告げて遠くアフリカの地に向い、ランバレーネに着いたのであった。しかし、我々はここに彼の偉業の跡づけをしようとするのではない。彼は直接には黒人の医療に従事しているのではあるが、彼のたましいはつねに、人類の問題に取組んでいるのである。苦悩している人類同胞、人々に顧みられず、知られざる黒人たちへの愛の治療を実施することが、彼にとっては同時に今世紀文化の没落への病状に対する治療法である。

それは彼の強靱な思索の面に展開して、予言的な言葉として世界に言論の火を吐くのである。而もその性格は、彼の医療の手と同じく熱き愛の息吹である。

人類は、かの聖書のカインとアベルの物語が示すごとく、殺人の罪で血なまぐさい歴史を編んでいる。戦争、戦乱の絶えたどの世紀もなかった。否実には殺人が行われないどの一日も、この地上には存しない。殺人は何といっても質のケタちがいな罪悪である。人類は今や二十世紀の後半に入って最終的大殺戮をなして自滅するかその愚を棄てるかの関頭にさまよっている。インドの哲人政治家ネルもインドの無血独立の道を開いたガンジーの精神を継いでこの危機を叫んでいる。我らのこのシュヴァイツァーは、いつこの人類の悲惨に対して新らしい「生」の畏敬へのインスピレーションに触れたか。

一九一五年九月のことである彼はこう書いている。「舟はくるしきうに砂丘の間を分けながら、ゆるゆるとオゴエ河をさかのぼって行つた。……私は 舟の甲板の上に茫然と坐っていた。心中には、いかなる哲学の中にも書いてない根本的な普遍的な倫理性の概念を考えて、苦心惨恒しながら、紙に一枚一枚と連絡のない文章を書き記していた。それはただこの問題について集中しておらんがためであつた。三日目の晩、日没の頃、河馬の群のあいだを舟が進んで行つたとき、突如、今まで予感もしなければ求めたこともない「生への畏敬」„Ehrfurcht vor dem Leben“ という言葉が心中にひらめいたのであつた。

―鉄扉は開けた！ 密林の路は見えてきた。

ついに私は、世界人生肯定と倫理とがともに包含される場所に到達したのである！ 今こそ、倫理的の世界人生肯定の世界観が文化理念とともに、思考の中に基礎づけられることが、明白となつたのである！」

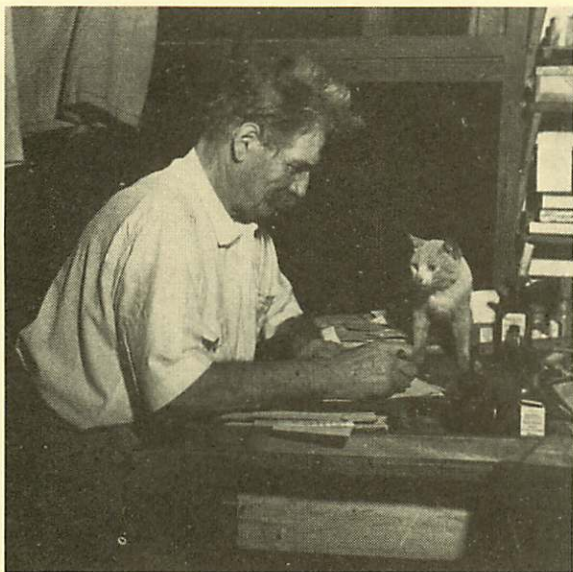
彼はデカルトの「われ思う、故にわれ在り」(“Cogito ergo sum”)を無内容の抽象として斥けた。実に近代意識、近代精神に大きな流れと影響力をあたえてきたこの言葉のもつ魔力を看破したというべきである。彼は叫ぶ、„Ich bin Leben, das Leben will, inmitten vom Leben, das Leben will“「われは、生きんとする生命にとりかこまれた、生きんとする生命である」と。生きとし生けるものは、その意識のどん底において「生への意志」Wille zum Lebenをもつてい

る。それゆえに、どのようなむしけらの「生への意志」をもみとめ、これに畏敬の念をもつべきであるとは彼の悲願である。彼はその「文化と倫理」なる『文化哲学』第二部の終りに近いあたりでこう述べている、即ち、「生への畏敬の倫理は、どこまでそれが満足すべき世界観へと考えを貫きうるか、ということに依存しない。それは、生を維持し促進し向上させることをめざす倫理人間の活動が、世界生起の経過全体のなかで何を意味しうるか、という問に答えるを要しない。その努力するところの生の維持と完成も、膨大な、時々刻々自然力によって行われている生命の破壊にくらべれば、物の数ではないという考慮も、この倫理をまどわすことはできない。

活動することを願いながら、しかもそれは、その活動の成果いかんを問うこと一切を捨てて顧みない。この世にとって意義深いのは、倫理的となった人間において、生への畏敬と生への献身によって充たされた生への意志が、この世に登場するという事実それ自体である。」宇宙、世界の現実はいくつの矛盾に満ちている。創造と破壊の矛盾の意志のただなかで「生への畏敬を抱いて生きゆくことは私にとってはいつまでも苦痛にみちた神秘である」と呻いている。

彼の「生への畏敬」の文化哲学はその根底にやはりパウロ的な終末論的信仰をもっているのである。『使徒パウロの神秘主義』なる重厚な神学的著作ある所以である。

私はこのシュヴァイツァーの「生への畏敬」の短かい紹介を次の句を掲げて結ぼうと思う、「人間が倫理的たるはただ、彼にとって植物も動物も人間も、すべて生命が生命として神聖であ



「生への畏敬」のシュヴァイツァー

り、いやしくも苦しむ生あらばこれに扶助せんと献身するときのみである。」これが彼の血脈に流れたぎっている宇宙的倫理である。愛の倫理である。そしてそれは正にイエスの原始福音に源を発するものであった。「三つ児のたましい百まで」で、愛の深い彼の幼なたましいは、自ら

「つけたしのお祈り」を「主の祈り」に加えて祈っていたという、「愛する神様！ すべての氣息あるものを護りめぐんで下さい。彼らをすべての悪からふせぎ、安らかに眠らせてやって下さい」と。然り、「生への畏敬」は、彼の幼年時代に実は発していたのである。

註 拙文中のシュヴァイツァーの言の引用はすべて白水社版『シュヴァイツァー著作集』全十四巻によった。

(キリスト召団月報「天旅」第六号)

一六、天賦神品

(一九五九年夏)

夏の高原には、純白の山百合、うすくれないの撫子、こがねの紛のような女郎花、月の光で染められたような月見草、紫の星のような桔梗、強い夏の陽に炎えるようなおいらん草など色香もすがたも草々の草花がおもいおもいの場所に、多くの雑草に織り交っていかにも自由に自然にのびのびと咲いている。そこに造化の妙、天然の理がある。

人の世を見るに、そこにも多くの人種と民族と国家の刃が世界というものを形成しているが、そこには自然界のような美しさがとかく欠如している。人間界を美しくする法則は何であるか。それは信愛という心の法則である。人間界には権利義務という法則もある、しかしそれだけでは人間相互間に真の平和も歓喜も湧かない。権利義務の法則よりも大切なのは信愛の結びである。

キリストが旧約的律法の極致を「愛」の一言で道破したのもそのころである。

さてキリスト教界を見るにここにこそ信愛が貫いて然かるべきであるのに現実は何。そこには知らぬ間にパリサイ精神が巣喰って、おのれの教会や集会や信条や主義や神学や註解を義としようとしてはいないか。自分の賜っている賜物を天賦として自覚せず、独尊的となり他集会や他の個人に賜っている夫々の本質や使命を尊重せず、自己の特色をもつて一色にぬりつぶしてゆこうとする傾向ありとせば、それはカトリックといわず、プロテスタントのどの宗派、教団といわず、無教会といわず、幕屋といわず、まことにつつしむべきことである。「み霊は同じだが霊の賜は種々である。各自が御霊の賜を賜っているのは、全体の益となるためである。もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである」とはパウロのエクレシヤ觀を貫く精神である。

私は、故三谷隆正先生の書き遺された珠玉の文章の中でも、「汝自身たれ」という一文を特愛している。その中にこんな句がある。

「日本人は余りに自分自身でなさ過ぎる。余りに周囲に和し過ぎる。

宗教に関してさえさうである。何故もつと大胆に自分自身であらうとし、自分自身の考えを考えようとしなないか。此事を想うて私は時々なさけなくなる。私は固く信じている。私が私として此大宇宙に貢献し得る最大の業績は、私が私自身である事であると。……私は私のみの全うし得

る独一無二の天職を持つておる。良かれ悪しかれ、私は私として天下一品である。何を好んで他人の物真似をしようぞ。……神様こそは純の純なる芸術家でいまし給ふ。神の造り給ふものは、一草一石と雖も醇手として個性味溢るる神品である。況や人間一匹に於てをや。」

いうところの個性と個体の自覚は、勿論、主我的な自己主張であってはならない。有機体的宇宙、世界、国家、社会、またエクレンシャ（教会）における、個体の存在の不可欠性と尊厳と使命に即しての自覚である。特殊はいよいよ特殊性を発揮することによって全体に対する不可欠の役割を果たすことである。一集会における各個人がそのような存在である。また一集会（教会、無教会、幕屋を問わず）がキリスト教界全体に対する関係も同然である。特殊性と類似性と同一性との三様態の織り成しにおいて有機体というものは生命体としてのびてゆく。同一性の鍵は聖霊にある。聖霊の静かな深い消息にふれないところには大きな一体ということはない。類似性というものはいろいろな複雑な因子をふくむから限界はつけ難い、可動的なものである。特殊性は全く人格的なものであって、人間が極限において人格的存在であるかぎり、即ちたましいの極限存在である限り、一人一人は全世界の何ものをもつてしても置き換えられない天賦神品である。

真の個の自覚は「無」に徹することによって（本号「福音的完全性」及二十五号「霊の貧者」参照）来る。教会も無教会も幕屋も夫々の特殊性を以て大いに伸び伸びと展開すべきである！ つねに新たに自己自身を超越しながら！ どんなに蝕れていても陽を浴び雨を吸う野の草であ

れ。神、キリストの生命を生命とする集会であれ。人工的な造花であるな、人間的な縄や框で縛られるな。私も武蔵野幕屋も、天賦神品的な個また集会の一つであらんと念願しつつ、のびのびと進む。強制的な宗教が世にのさばっているようだが、それはサタンの角度である。パウロが賜ったキリストの愛による自由と生命を私も賜って、全体主義的、劃一主義的な事態には戦いつつ、キリストの愛の証人になりたいばかりである。イエスは一個の存在を愛惜なさった。福音に生きんとする全世界のエクレシヤの夫々の在り方から、真の華が千紫万紅と花咲き、神の栄光を現せんことを！そこに大讃美、大調和がある！夏の陽は輝かしく万象に遍照している。

「曠野の愛」第三一号、一九五九（昭和三四）年夏季号

一七、七日の靈願

(一九六九年十一月)

日曜 義の日

万軍の主言ひ給う、

視よ、炉の如く焼くる日来らん。驕^{たか}ぶる者と惡を行う者は藁のごとくにならん。その来らんとする日、彼らを焼きつくして、根も枝ものこらざらしめん。

されど我名を畏るる汝らには義の日いでて昇らん。その翼には医す靈能あり。汝らは牢よりいでし犢の如く躍らん！

これは旧約聖書最後のマラキ書のおわりに掲げられている聖言である。この予言の如く、人類は、神を無みする驕慢者と神を畏れる霊貧者とに二分される日を迎えるであろう。

われらにとって「義の日」はキリストである。ヨハネはバトモス島での黙示に、聖顔は照々たる太陽の如きキリストを観た(黙示録一・一六)。太陽は地球をひきまわし、そこに住む一切のものを生かしめている。

「ものとしてその和光を蒙らざるはなし」(詩一九・六)である。その如くわれらは日々、キリストにひきまわされ、彼の霊生で生かしめられている。

われらが霊極たる主様!

あなたの霊性をみ霊を宿して賜わるところ、平安これにまさるものはありません。安息日は正にあなたの聖能にあづかる日です。墓を蹴やぶって復活し給いし主様! あなたはわれらのいのちそのものです。あなたは言って下さいました。「そのとき義人は父の御国にて日の如く輝かん」(マタイ一三・四三)と。主様、あなたの義を賜り、烈々たる聖霊の光を浴びて日々を生かして下さい。み名にあって!

月曜 十字架の靈木

「河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を医すなり」(黙示二二・二)

これはまた新約聖書の最終の章に出ている聖句である。

神の都、天のエルサレムに関わる黙示は、そのまま地上においても実現しているのである。一年十二ヶ月、梅、桃、桜、びわ、莓、いちじく、葡萄、栗、くるみ、りんご、梨、みかん。その他数えつくされない多種多様の樹々がそれぞれの気候風土に応じて生えている。木喰上人は、木の葉木の実を喰べて諸国を行脚した。自然の恵沢に浴して自在であった彼の歩み方を想う。

人類はついに月世界に脚を踏み入れた。その科学力は驚異すべきものではある。しかし月そのものは死の天体であった。人間に心情がある限り月は詩の世界で生きている。

「月見れば千々にものこそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」と詠った大江千里の情感は月と共にいつ迄も消えない。

地球とは何とふしぎなめぐみあふるる天体ではないか。これを闘争と悲惨と破滅の現実に化し去らんとする人間の飽くなき罪業の根は何か。万人の心に単喰っている我執という癌である。た

だキリストの十字架のみがこの癌を医す霊木である。

火曜 聖霊の火

モーセがホレブの山で神霊の声を聞いたのは霊火燃ゆる柴のひとりであった。エリヤがバアルの予言者どもとあらそったとき、エホバの神は火を降してエリヤにこたえ給うた。イザヤが召命を受けたとき、神は火をもってイザヤの唇に触れてこれを聖別なさった。エレミヤは神の霊言が火のように心の中に燃えているといった。洗礼のヨハネはイエスを指して「彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマせん」(マタイ三・一一)といった。

その通りイエスは宣言した。「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」(ルカ一二・四九)。「此の火」がすなわち聖霊の火である。彼自身が実に聖霊の火の常燃している人であった。「汝らは世の光なり」と言い給うとき、われは聖霊の火を汝らの魂に点す、それゆえ汝らは世の光なり、という意である。

神の霊、神の言、これはわかつことができない。イエス自身が神霊であり神言であることが最も端的にこのことを示している。そしてそれは火の如く烈々たるものである。この火は人を生かす熱い愛である。聖霊の愛に優る熱い愛はいづこにもない。人間を霊生に浄化する深いあつい愛

である。

主様！ この身このまま汝の中に投げ入れます。どうぞ、汝の聖霊の白熱の愛をもって白光の愛の人に化して下さい！ その聖霊の愛の火を隣人の胸に点す灯火として私達をお遣わして下さい。

水曜 聖霊の水

聖霊がまた水にたとえられているさまは、ヨハネ福音書第四章におけるイエスとサマリヤの女との井泉のほとりでの会話にあざやかである。「すべて此の（ヤコブの泉の）水を飲む者はまた渴かん。されどわが与うる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水はその人の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出づべし」（ヨハネ四・一三、一四）。

のどのかわいたときの真清水ほどおいしいものはない。「ああ神よ、鹿の谷水を慕い喘ぐが如く、わが魂も汝を慕い喘ぐなり」（詩四二・一）。「水なきかわきたる地にある如く、わが魂は渴きて汝を待ち望み、わが肉体は汝を恋慕うなり」（詩六三・一）。この「汝」は私たちにとってイエスである。キリストはわがいのちの源泉であるからである。彼は聖霊の水をそいで下さる。この霊水をもつ者は、人生の曠野に泉水を湧き出でしめ、歴史の沙漠に河を流し、湖を湛えさせ

る。

水と火でパプテスマするといえ、矛盾したようであるが、いのちの真理の消息はこのような極性をもつ渾然たるところにある。水火、火は男性的、水は女性的なすがたである。静動、陰陽、東西、南北、天地、男女の両極性を真にもつ者は、絶対次元に突入した魂である。この絶対次元は聖霊が与えてくれる次元である。その土台は十字架による無の世界である。

木曜 葡萄樹

「われは真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。われは葡萄の樹汝らは枝なり。∴汝ら我を離るれば、何事をもなし能わず。汝ら我に居らば、何にても望に随いて求めよ。然らば成らん。汝ら多くの果を結まば、わが父は栄光を受け給うべし。しかして汝らわが弟子と成らん。父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」(ヨハネ一五・一―九)。

キリスト召団が本当にこのようにキリストという葡萄樹の枝葉花果となって聖名の栄光の身証する実をあげたい。団員の一人一人が真に献身の魂となって献身の生き方をする事。それには唯だ主のふところに生きるといふ一事のみ。それにはみたまにある祈りが呼吸となつていふことのみ。

金曜 金星

カーライルの言、「雄辨は銀なり、沈黙は金なり」あまりにも有名である。沈黙とは絶言の境地である。「語らず、言わず、その声聞えざるに、その響きは全地に普く、その言は地の極にまで及ぶ」(詩一九・三、四)。此のような神の言の響きを聞く魂となるには、祈の人となるを要す。宵の明星、曙の明星として輝く金星は、ギリシャ神話にはヴィーナス、美女の典型であるが、聖書によればキリストが譬えられている(黙示二二・一六)。

前者を文化の象徴とすれば、後者は福音の権化である。前者はエロースを表わし、後者はアガペーを表わす。イエスはエロースを変質変貌させつつこれをうちに消化していたアガペー的愛の実存者であった。具体的人間が天国的な人となるか、単なる地的な人間となるかは、アガペーが主動であるか、エロースが主動であるかに由る。

土曜 土の器

「われらこの宝を土の器に有てり、これ優れて大なる霊能のわれらより出でずして神より出ずる

ことのあらわれん為なり」(コリント後書四・七)。第一の آدم から受けついでいる土の器に第二の Adam たるキリストのみ霊が宿り、われらは第三の人とされた。

今に東西古今の霊的な人たちが地を嗣ぐ日が来るであらう。「幸なるかな柔和なる者、その人は地を嗣がん」とイエスは言い給うた。

大地は生きとし生けるものゝ母である。一切の清濁をうけ入れてこれを変質変貌させて生命の素をつくる土の力の偉大さよ。それは一切の清濁をあわせ吞んで浄化する大洋の塩水と相応ずる現象である。

火、水、土、の浄化作用、生命的生産力よ！ 日は不思議の大愛の光、いづれの相にもキリストが言い給うた「父の全きが如く全かれ！」があらわれている。地には緑の木あり天には月輪が巡り、金星が微笑む。これ芸術を象徴する美の姿である。友らよ！ 七曜の真理妙なる哉、日夜、霊想、冥想してみ霊の実存に生きん哉！

十八、大慈悲心

第十七回 夏期福音特別集会

於鹿沢紅葉館 (一九七〇年八月)

この夏を迎える前から、福音書のよみかえしをなし、キリスト伝に関わる諸書をよんでいた。否、もう十余年も前から、始ど福音書が研究の主題であつて、福音書は私への特別な親書となっている。それでこの夏の集会でヤコブ書をやるつもりであつたのをやめさせていただき、キリストを告白することに決めた。

「神の徴」たるイエス。「天国」(神の国)の本義たる聖意志の支配を身に体现し給うたイエス。「聖霊のバプテスマ」を世の終末にいたるまで人類に施したもうキリスト。それは十字架を以つて贖い、復活を実証し、永遠の生命を与うべく、み霊を以て降臨して救いたもう事態。そして彼の全実存と福音の真髄はただ「愛」の一言をもつてあらわさるべきキリスト・イエス。

これが今夏の鹿沢において四回に亘って私のなきしめられた全身の告白であった。その際私は終始、十字架の主様の下に平伏しの心根であった。「幸なるかな！ 汝わが十字架によって根底から贖われたる無者よ！ 天国即ち聖意体现の我れ汝の中にあり！」これが私にとって福音の関門であることはいよいよ確かとされた。

そしてこんどの大集会の主題として掲げた「汝らの父の慈悲なる如く、汝らも慈悲なれ」（ルカ六・三六）が最後の集会で全的に、私にとって未曾有のひびきを以て、恩寵の聖書として臨んできた。腸の中に血となり肉となった。「愛」という言よりもむしろ「慈悲」という言の方が私にびったりしてきた。「慈悲」は「あわれみ深い」（オイクティルモン）という語である。天の父の大慈悲心をそのまま体现された主様の慈悲にあづかったので、「汝の中に私という大慈悲心が住みこんだぞ！ 汝の腸はそういうものになったぞ！」とのありがたい言となった。マタイ五・三による十字架のあがないによる無者即無量者と、ルカ六・三六による大慈悲心の賜りと。これが私にとって福音の始と終りとなった。何かしら私はどん底の人に化せられつつある。パウロの言った「世の塵芥」の心境が涵みこんできた。この大慈悲心を賜りつつ、私は限りなく救われつつ、人々を主様の慈悲の中に包み入れてあげたいばかりである。（ルカ六・二七―三八）。



第17回夏期福音特別集会（1970.8.21-23）信州旧鹿沢紅葉館に於て

一九、わが義・わが愛（要旨）

（一九七〇年降誕節　日本聖書神学校に於て）

わが義

聖書は創世記から黙示録まで義を根本とし支柱として貫いている宗教である。布でいえば縦糸、地球でいえば経線、建物でいえば大黒柱であり、人間でいえば脊椎である。

詩篇の祈りに「わが義を守護したもう神よ！」（詩四・一）とあるように、旧約には「わが義」といって、人間の実存面における義の主張が相当ある。ヨブ記のヨブの如きは友人たちとの問答の中で、「われは堅くわが義を保ちて捨てじ」（ヨブ二七・六）と言い張って、おのが誠実善意を告

白してやまない。「見よ、今もなおわが証人は天に在り。……わが友らはわれを嘲ける。わが目は神に向いて涙を注ぐ。ねがはくは、彼れ、人のために神と弁論し、人とその友らとの間を審かんことを」(ヨブ一六・一九・二二)といって、仲保者が、証人が自分のために執り成してくるよう祈りもとめている。

そしてついに、「われ知る、われを贖う者は生く。後の日に彼必ず地の上に立たん」(ヨブ一九・二五)と叫んでいる。まことにキリストの出現を預言している叫びである。古往今来、洋の東西を問わず、人間の歴史には、いかにこのような血の叫び、沈黙の叫びが数かぎりなく虚空に消えてきたであろう。たしかに、そのような「わが義」がある。決して主観的自己主張ではなく、善意の、無私の「わが義」が踏みにじられ、誤解され中傷されていることがある。

また「悪人がどうして栄えるのか」とエレミヤも訴えている(エレミヤ二・一)。何びとも全的に義人ではない。しかし義の面をもたぬとするなら、それは人格的存在ではない。そのような意味からして「わが義」を無私の心境から告白し得なければならぬ。ヨブ記における義の問題をここに全面的にとりあつかうとまはないが、以上をもって「わが義」の道義的な一面を終ることにする。

次に角度をかえて詩篇をみると、詩篇には以上の如き「わが義」のほかに「汝の義」というのがたくさんでくる。たとえば「汝の義をもてわれを助け給え！」(詩三一・一)とか、「汝の義に

したがって我を審き給え」(詩三五・二四)とかいつている。このような「われを審き」という言は、「わがために審き」という意味あいである。すなわち、「汝の義」は、その奥に「めぐみ」「あわれみ」「すくい」の意を深く藏しているのである。このようなひびきをもっていることに注目しなければならない。果然、「その救の神から義を受ける」(詩二四・五)という言葉はギリシャ語聖書によると、この「ツェダーカー」(義)は「エレエーモシュネー」(あわれみ)という語をもってあらわされているのをみても義と慈悲とが同義的になっている。それが第二イザヤになると実に歴然とあらわれている。例えば、

「わが義はすみやかに近づき

わが救いは出でたり。」

(イザヤ五一・五)

「雲は義を降らせよ、

地は開けて救を生えしめよ」

(イザヤ四五・八)

このように神の「わが義」がすなわち救済であり、慈悲である消息は全く新約の福音に通ずるものである。

イエスが「まづ神の国と神の義を求めよ」(マタイ六・三三)といわれた「神の義」はパウロが

言っているように、「福音のうちにあらわれた」(ローマ・一七)。すなわち、全キリストが「神の義」の証者であり、キリストが福音の主体であった。それはイエスが神の聖意を体現したことが義で、キリストという福音体において神の義があらわれたからである。

イエスは神を「わが義」として、神意に自分を全托し給うた。「汝のみ旨を成させたまえ」と祈る心は汝の聖意こそ義である。汝こそ「わが義」であり給うとなして、神を義として、そしてその神の義をめぐみとして「汝はわが義なり」として歩きぬかれた。「汝はわが義なり」という表現は見つからないが、イエスの心はそうであった。自己義認をしないイエスは正に「神の義」の体現者即ち義人であった。

私たちにおいてはキリストが「わが義」である。アブラハムの信はそのような信であったから、エホバはこれを彼の義となし給うた(創一五・六)。然り、この義をそのまま賜るのが、めぐみなのである。何たるよろこびであるか、これが福音である。十字架上の一方の盗人は人生の最後の瞬間にそのように義とされ、めぐまれて、イエスと一緒にパラダイスに躍りこんだ。彼はその瞬間別人に新生した。このキリストの義に圧倒されて、パウロは自分の義を塵芥の如くにすてた。義の自己主張はパリサイの巢であることを知ったからである。「義人なし、一人だになし」とはこの福音の体験から叫ばれたパウロの告白である。

われらの主キリストは神を「わが義」となして生きた。われらはキリストを「わが義」と告白

して生きるの外に道はない。かかる現実を、たましいの現実とするとともに、衷なる「わが義」がある。それがキリストのめぐみの義である。そのありがたさよ！ ルターが「キリスト者は罪人にして義人なり」といったのはこのことである。これが信仰の現実である。ロマ書三章二一節から二六節が、正に「神の義」キリストを「わが義」と告白する恩恵と信仰の消息の根拠とも言うべきところであり、パウロの信仰の骨髄であり、パウロ神学の土台である。

わが愛

イスラエルの宗教で、義が経線であるように、愛は緯線である。縦糸に対する横糸である。神の義は必然神の愛と不可離である。本質的に義の中に愛がかくれてあり、愛の中に義がかくれている。その意味では義即愛、愛即義といわざるを得ない一如の関係である。

人間の罪が神の義から神の怒りを、審判をひき出した。また人間の罪が神の心を痛ましめ、どうにもならぬ罪の処分のため、神の独子の十字架の砕けの愛を要するに至った。それゆえ神の審きと赦しが十字架にこもっているのである。キリストの贖罪愛はイスラエルの宗教の帰結であった。すでにイスラエルの宗教史において動物による犠牲にあらわれている「あがない」の祭儀が歴然とあり、その究極のあらわれとしてイエスが自らを十字架に屠ったのに、そしてあのイザヤ

書五十三章の如き偉大にして深刻なる予言の文字があるのに、どうしてユダヤ人は、このキリストの贖罪を信受しないのか。パリサイ人の典型であつたパウロが、あの百八十度の転回をもってキリストの十字架の贖罪を告白し、そのめぐみを、身を以て証しているのに、これをよそごとの如くしているのか。我々としては、これほど不可解なことがないと思われるほどである。

それはそうとして、エホバのイスラエルに対する直接愛は申命記七章の六一—一〇節の宣言によつてもうかがわれる。即ち、イスラエルはエホバの選民、宝の民、特愛の民、契約の民、律法の民であつて、律法を遵るかぎり、神の愛と契約は不滅であるというのである。これはイスラエル人の血の中に流れている観念であるらしい。

であるから、申命記六章四—九節で有名な「聴け、イスラエルよ！ われらの神エホバは唯一のエホバなり。汝心を尽し、精神を尽し、力を尽して汝の神エホバを愛せよ。……」の一節を今でも金科玉条としているユダヤ人である。であるからこの神はイスラエルに対して、「われは妬みの神である。焼き尽す火である」と宣言する神であることがうなずかれる（申四・二四）

それはモーセの十誡（十言）の第一言にもあらわれている。「汝（イスラエル）にとつてはわが顔の前に他の神々はあるまじきことなり」との原意は、他民族の他神は、エホバとイスラエルの人格的一対一の関係に関わりなし。それゆえエホバは夫、イスラエルは妻で、夫妻関係になぞらえる。

そのことを預言者ホゼアは自分の結婚体験を通して示された。不貞の妻の如き、宗教的姦淫にも拘らず、エホバはイスラエルを棄てない、どこまでもあがない愛し抜くという神の愛が示された。それがキリストとエクレシヤ（教会）との関係に展開し、極まってはキリストと救わるべき人類との関係となる。現実には教会であらうと人類であらうと単なる夫妻であらうと、そこには雅歌書的な面もホゼア書的な面もあって、十字架の愛のみが一切を贖ってゆくのである。

愛には夫妻関係以外のものが勿論ある。そのことを極めてよく語っているイエスの言をルカ伝第六章第二七節から第三八節までの一連に見よう。

「汝らの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、汝らをのろう者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ。汝の頬を打つ者には他の頬をも向けよ。汝の上衣を取る者には下衣を拒むな。……汝らの父の慈悲なる如く、汝らも慈悲なれ。人を審く……人を罪に定むな、……人を赦せ、……人に与えよ……」。

さてイエスをみると、彼がヨルダンでバプテスマのヨハネから受洗したとき、天が開け、神の御霊鳩の如く彼の上に降り、天来の声が「これはわが愛しむ子、わが悦ぶ者なり」と語った、とある。イエスは即ち、神の「わが愛」であった。それはイエスが全くみ前に平伏したたましいであったからである。自分を何ものともしない、無私の提身の相に対して神は「わが愛」と呼び給う。かかる神に対して全身全霊を捧げていた。それが神から「わが愛」と呼ばれる所以であっ

た。それゆえにまたイエスは神こそ「わが愛」であるとなした。この「わが愛」はこちらが神を愛する「わが愛」ではない。

「わが愛」とは、愛しぬき得ない人間のみじめな愛のことではなく、ひたすらキリストが私を顧みて離さない、という恩恵の愛であって、主よキリストよ汝は「わが愛」であると告白する愛である。汝を信愛するところ、そこに汝なるキリストが降って、すて身の愛で愛して下さる。そのようなキリストの愛から何も自分を離すことができない。それはロマ書八章三三から三九節に亘ってパウロが絶叫しているあの愛であって、キリストが我を愛して棄てたまわぬ十字架の愛、「わが愛」なのである。

そして聖霊は愛の霊であるから、み霊のバプテスマを受けたときから、正直、キリストの愛が、内住して下さって愛の力がうちに宿るのを感じる。このみ霊は聖書の現実に投身するところにはたらく。そこで旧き我がうち勝たれてゆく。人間だからときに矛盾の渦も巻くが、それゆえにうそであるなどいうものではない。本ものは我の如何にかかわらず本ものなのである。これはみたまを体受したことのない人にも、いわゆるキリスト者にもわからない。

このようなキリストのみたまという「わが愛」がわがうちに生き動きあるところ、われは真に生くということができるのである。みたまなる内なる「わが愛」キリスト！これに優るうれしさはない！

無数の人がいるのに、都会は何たる曠野だろう。何と現代は人の心が索漠として荒れすさんで来たのだろう。人を荷い、人を包み、人を思いやり、人をゆるし、人のために自分を犠牲にするような愛、それが私の心の故里である「曠野の愛」(エレミヤ三一・一二—一三)、キリストの愛、「わが愛」なのである。

そして実にイエス自身が父なる神のふところを、たましいの故里として、住家として、幕屋としておられた。神のふところがイエスの愛の巣であった。「枕するところがなかった」イエスは父のふところを枕とした。天の父はイエスの「わが愛」であった。ヨハネ福音書十五章の葡萄樹の譬話にあるような愛である。「父の我を愛し給いし如く我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」(ヨハネ一五・九)、もうこの一言に尽きる。そしてこの愛は十字架の贖罪愛に極まり、復活の永遠の生命に花咲き、聖霊の降臨によって内住の実を結ぶ。ハレルヤ、わが愛なる主よ。

〔「ハレルヤ」第一五号、一九七二年一月〕

二一〇、わが望（要旨）

（一九七〇年降誕節武蔵野幕屋にて）

天地を創造したもうた神は、その完成への目的をもち給う。目的のあるところに希望がある。キリスト教は神の国の到来、成就への目的があるゆえに希望をもつ宗教である。失われた楽園回復以上の天国到来の望をもっている。希望は成就への必然をもち、願望は成就への可能しかない。福音における望は天来のものであつて、その主体はキリストであるから、キリストこそ「わが望」である。それゆえに照々たる希望、歓喜あふるる望である。だから福音なのである。「わが望」、なるみたまの主を衷に抱いているからである！ 寺小屋伝道三十年をこの秋で終え、今日はこの降誕節を「小さき群」なる君たちと迎えて私は感無量である。いつものようなクリスマス祝会のはなしは今日はやめさせてもらう。

我らは未来に生きよう。そして実に未来を現在として生きよう。私などはそうでなかったらやり切れぬ人間である。ロマンティックな願いではなく、希望を現実として生きるのである。過去を救いあげ、未来をひきよせて、現在を永遠として生きる人間が、最も烈しく希望を生き且つ生かしている人間なのである。

旧約聖書で希望の聖句ですぐ心に浮んでくるのは詩篇一三〇篇の詩句である。

我エホバを待ち望む、

わが魂は待ちのぞむ！

我はその聖言によりて

のぞみを抱く。

わがたましいは衛士が

晨を待つにまさり、

まことに衛士が晨を

待つにまさりて主を待つ。

イスラエルよ、

エホバによりて望みを抱け。

そはエホバにあわれみあり、

エホバはイスラエルを

その邪曲より贖い給う。

(詩篇一三〇篇五、八)

この詩句でも明らかなる如く、希望の根拠は天来の聖言にある。旧約における「あがない」の悲願はキリストにおいて成就され、あふるるまでに満たされた！

私においても救贖は既にたまわり、かつ終局的救済にあづかる約束と希望を信受している。皆さんも今までの生涯のさまざまな失敗や悲嘆から救われ、あがなわれて未来への希望を確実に受けとっておられると思う。

希望は力である。現実^{じじつ}に力である。またまなる主を迎え入れるところに希望の実力がくるのである。クリスマスは主の降誕を祝うなどいうのんきなお祭りではない。クリスマスは主の馬槽^{ばそう}と我ら自身^{われら}がなつて、一人一人がこの破れ器の中に主の御誕生を、またまの主としてお迎えすることである。「主は来ませり、わがうちに！」。どん底^{どんぞ}的なぼろ器の中にこそ主は来り給う！ 何たる恵みか！ 何たる歓喜か！ このように主に顧みられる恩寵に感泣している。このあふるる現実の現在のゆえに、過去は実^{じつ}にあがないとられ、未来が光の波となっておしよせてくるではないか！

旧約においても「待ち望む」というヘブライ語はいくつもあるが、「信頼する」と同義である。

「穩かにして信頼すれば
汝ら力を得ん」

(イザヤ三〇・一五)

「エホバを待ち望む者は
新たなる力を得ん」

またヨブ記一三・一五の

(イザヤ四〇・三一)

「たとい彼我を殺すとも

我は彼に依り頼まん」

に至っては信頼の極致である。

このような信頼は正に親鸞の

「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふろふ」と相呼応する信頼である。

アブラハムのイサク献供もこれに類するもので、パウロが「彼は望むべくもあらぬときになお望みて信じたり」といっている望である(ロマ書四・一八)

「それ信仰は望むところの実体にして、見ぬものの確証である」(ヘブル一・一)も信望不離の消息である。そしてパウロが愛を讃えて

「愛はすべてを荷いぬき、

すべてを信じぬき、

すべてを望みぬき、

すべてを耐えぬく。」（私訳）

と喝破しているとき、信・望・愛が渾然一如同質の関係にあることを告げているわけだ。

終末的希望は、かの「沙漠はサフランの如く」のイザヤ書三十五章、「その芳香はレバノンの如く」のホセア書十四章の詩文はもとより、冬空の星群の如く預言書の中に燦然と輝いている。

また新約聖書は神の国到来の迫りの、希望の磁場の中で書かれた文字であるから、全巻これ希望の書というも過言でない。審判の深淵にかかる吊橋を渡って夜明けを待つのであるから、待望者は聖霊の燈火を掲げて往かねばならない。

福音の奥義は、われらの中に来り給う聖霊のキリストで、栄光の望がここにある（コロサイ・二七）。みたまの主こそ「わが望」の確証であり、実体である。

「わが飲び、わが望

わがいのちの主よ！

ひる讃え 夜歌いて

なおたらぬをおもう」

と讃美歌にあるとおりである。

春秋に富む青年諸君！

男性は遠大なる希望を抱いて天職に向って前進せよ！ 女性には愛に生きて「永遠の女性」となり、未来の霊的な母となれよ！

召団の人々よ、瞬間的現実主義と、利己的マイ・ホーム族の跋扈の現代を超越して、「汝の車を星につなげ！」永遠をもち、天を相手とするものにこそ希望はある。

ベートーヴェンは音楽に生きた。ロダンは彫刻に生きた。ダンテは詩に生きた。むさし野の弦月は神の根源語に生きてゆく。

愛する兄弟姉妹よ！ 泣く者、悲しむ者、なやむ人、罪にくるしむ人の道伴れとなろう！ かくてこそ聖国への終末的希望に生きる者となる。

『ハレルヤ』第十六号、一九七二年二月』

二一、聖靈の証者

——講述要旨（録音による）——

（一九七一年聖靈降臨節）

今日は、さきほど大規君も言われましたが、特に歴史的な意味をもった聖靈降臨節であると私はハッキリ自覚しております。

で、日本の国は精神的な滅びにむかっています。今こそ神の霊の人が真に身を呈して生きるの
でなければ日本は崩壊してしまふ。教育にしても、ほんとうに天を相手にしているような魂の教
育者が少ないのが現状です。私はいつも申しているのですが、天賦の自覚あるところにはかな
らず天職があるのです。生まれつき賜っているその人の才能、性格それが正しい意味において大
いにのばされてゆく。それを本当に天のもの、神の有として鍛えあげ、それをもって人生のあか
しをする。人間は一生をかけて本当の意味では一つのことしか、少くも一つの事を中心とした事

しかできないのです。私たちはいづこにおいても賜りたる真理の証人として、はっきりものをいう人間でありたいものです。それは聖霊が私達にかくなさしめる力を与えるのです。

で、「人」という字がありますが霊がとどまる「霊止」と書いて「ひと」と読みます。霊止（ひと）、神の霊がとどまっている者を「ひと」と言う。神の霊がとどっていない者は「人」ではないと言う訳です。受霊と言うのは、「うけひ」と読みますね。聖霊をうけひして内に止る。それはペテロ前書四・一四にも書いてあります。即ち同四章一二節から「……もし汝等キリストの名のために譏られなば幸福なり。栄光の御霊、即ち神の御霊汝等の上にとどまり給えばなり」キリストの霊（ひ）のとどまり。またこの霊は火に通じます。キリストが「この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」と言つた火は勿論聖霊のことであります。どんな冷やかな所でもこの聖霊の火は消えることはありません。

今、如何にみたまの人物が欠けているか、みたまの人の飢饉であります。あなた方一人一人はかけがえないみたまの人として、聖霊の証者として生涯を貫く！そこにはどんな事があつても必ず勝利があります。必ず本当の歓喜があります。他のものと較べることでできない喜や力や光は、その御霊のあるところにあります。人間小池がどんな人間であらうとも、このみたまを、私の内にあるこのみたまを、他の何ものともかえることができないのです。私は泥にすぎないかもしれない。けれどもこの泥の中に宿っているこのみたまの生命は、どんな蓮の花、バラの花よ

りもすばらしい花を咲かせるのです。

それで、皆さん、このみたまという言葉が決して陳腐な事になってはいけません。太陽は常に新たに驚異でなければならぬ。ゲーテなどという人はそういう人でした。みたまと言えばその裏に聖言あり。みことばと言えばその裏にみたまあり、これは離すことができません。私は音楽のことはよく知りませんが、しかし日本語の歌であろうと英語の歌であろうと要することばの奥のことばの響きを、そのことばを通じて発するような歌い方、またその響きを本当に聴こうとするような聴き方、それでなければ音楽の世界は本物ではない——と私は先日音楽の専門家に言ったのです。聖書の言葉も神の根源語を聖書の文字の奥につかむ読み方、聞き方が大切なのです。何事も本質に迫るには、みたまの力と知恵によるにかぎります。

今日はどのように話していいのか訳がわかりません。聖霊のせまりで論理的なつじつまが合わないのです。それは「ハレルヤ」一九号に載せたように、ブルンナーがロゴスの神学では、聖霊のことは語れない。今までの神学は聖霊を継子扱いしてきた。それは神学の欠陥であると申しました様に、これからは聖霊の中から告白するロゴスの神学が展開されて然るべきなのです。ブルンナーの『ドグマティーク』第三巻はその意味で重要な書物です。第一流の霊的人物、パルト、ブルンナー、ティリッヒ、ブーバー、ヤスパースといった世界の最高の精神的指導者がここ数年で倒れてしまった。何か世界の大切な燈火が消えたような気がします。けれども、小さな名

もなき存在に、彼等に決して負けないところのともし火がとる―それはあなた方です。使徒的信仰に肉迫し、使徒らと同質の世界でなければ、と言って進んでゆく！　そういう人たちに、次の時代が立つか立たないかの課題が負わされています。私が歴史の意味と、冒頭に申したのはこのことです。どうかここをしっかりと受取って下さい。恐れなくみたま・みことばの証者として実存して下さい。祈り心をもって聖書を読んで、そこに生きる。私たちは聖書が呻き叫んでいるところの、また大讃歌をあげているその現実の響きを文字の奥に聴き、み霊み言が化体する態勢で進んでゆきます。

それでは使徒行伝を読んでゆくことにします。で、二章前半に書かれてある事件は、ほんとうに極めて例外的現象です。それはキリスト教会の歴史がはじまる第一歩ですから、このようなものすごいことが起きたわけです。三節に「火の如き」とありますが、霊火現象です。まさに霊（ひ）がおのおのの上にとどまった。ここではじめて本当に人がひと（霊止）となった！　キリストはまさに霊と火とをもって、即ち火の如き現象が起ころころの霊（ひ）をもってバプテスマしたもうのです。

で、この聖霊の事態はまぎれもなき新しき現実であります。この聖霊という賜物を受けなさい（三八節）聖霊は賜物中の賜物で、人を霊止に化す救の霊ですから、み霊の人は世の救いのどん底のひとつとなる。御霊の力は荷いの愛の力でいかなるものよりも力強いです。世界が爆発しようと

も、聖霊の人を亡ぼす訳にはいかない。私達の肉体は粉みじんになろうとも、どっこい聖霊の生命、霊体はちゃんとござる——旺なるかなこの信！ あつきかなこの愛！ こんな白熱のみ霊の現実を身魂に本当に受けていなかったら、なんの福音か、と言う事であります。喜びの訪れというのは、いかなることがあっても絶対に屈しない事実を現実にとだいていっているということであります。みたまをじかじかに、みことばをじかじかに「われを喰え、飲め、」と言いなさるキリストをじかじかに、体受して生きることです。私たちは聖書の本当の中道をしっかりと把握して、パウロの如き重厚な信、ヨハネの如き深淵の愛、ペテロの如き高峰の望を抱いて進めばなんでもござれ、宇宙的なものがこの小さなからだに宿っている。受霊（うけひ）の世界というのは、桁の違う世界だと言うことを自覚して下さい。そしてなんでも虚心担懷に、それらの限界と善さをちゃんと見ることが出来る。ひとつも恐れる事がない。なんと不思議な知恵と力をもつ世界かなと思うのです。実に聖霊は一切を救うところの驚くべき霊でありますから「聖霊の最初の名は愛である」と、アクィナスが言ったとおりの愛の限らない世界なのでもあります。

（文責 S・F）『ハレルヤ』第二〇号、一九七一年六月

一二一、 聖書全卷

(一九七二年八月)

一九四〇年九月から七二年七月まで、三十二年間で、疎密いろいろではあったが、ともかくも聖書全卷を講じ終えた。

その内容を整理して全部文字にしていたら、今頃は幾巻の書物となっていたであろうか。元来、非生産的な私であるので、あまり文字にしていない。不立文字といって自ら慰めるよりほかあるまい。

聖書講筵のメモや筆記もかなりのこっており、録音テープも、山ほどたまっているから、時期が来たら、整理してその主なものを文字にするであらう。

しかし私という破れ道具が、み霊に満たされて、聖書の解説をなし、み霊のひびきを伝える告

白をなしたと言えるなら、そしてこれを生まで、または録音で聴いた人人がたましいを揺り動かされ、救の現実を身にうけた事実があったと言えるなら、たとえ文字としてのこらなくとも、私は平伏して聖名を讃える。

このほど新宿の三越で忍者の道具の展示会があったが、道具とは、本来道を具現する尊きもので、今一般に用いられている「道具」という言は、昔は「調度」といわれていた由。なるほどと思った。神様は我々一人一人を、その欠陥の如何に拘らず、この男をこのことに、その女をそのことに用いようとなさるときは、人々の判断を越えて御自分の道具となさる。神の道具の尊さは、神様の側にあって、こちら側にはないから、破れのまま、どうぞお使い下さいといって、提身すればよい。むしろ猷身、破れの投げ出しが全的でないことを虞れるだけである。

忍者といえば、因みにいうが、忍という字が「刃の下的心」で、死を覚悟の心、いつでも道のために死して消えてゆくんだ、といった解説があった。日本においては、いろいろな学業、武芸、芸術、職場がすべて身を修める道と相即していたことを泌み泌みと思う。日本人は本来宗教の奥義と通ずる心境を求めている。福音の奥義にも、むしろ日本人はよく達し得るはずである。

若き人々が天職を自覚し、自分の天賦をもってキリスト道を体現する生きた道具となっていただきたい。

はなしをもとにもどせば、既往三十余年間のうち、大体ははじめの十年間は、旧約聖書の内容を

啓示史的に跡づけながら、その歴史と律法と預言を大方学んだ。なかほどの十年間は、大方四福音書に集注した。のこりの十余年を、旧約では詩篇の大部分、ヨブ記、伝道の書、雅歌、箴言とところどころ。新約では福音書以外の全部。そのうち最近の一年半では聖書の最終卷黙示録を講じた。その最終集会が七月二日であった。終った瞬間の私の心境は……。言い知れぬ胸の中の涙を主は知り給う。最初からの全期間参加者は妻の順子唯一人であった。

ともあれ、召団の壮年、青年の諸君がやがて夫々幕屋を開いて幕屋的展開をしてくれよう。キリストのみ霊の灯火を提げて、曠野を、山間を、市井を歩き廻り、道を求める人々に福音を伝えてくれると信ずる。

伝道は、自己が突き抜けられて、召命を受け、やむにやまれずしてなさねばならない。聖霊の力を身に受けている限り、何もおそれることはない。祈り心、破れ心、砕け心、ひとの罪過を黙ってゆるし、愛をもって一切を荷い且つ包む心、このような心は、み霊の宿るところにある。このような聖霊に捕えられて、私も道を伝えることがやめられないだけである。道とは何か。無者キリストという無限無量の宇宙道である。聖書全巻にみなぎる万人救済の道である。ハレルヤ、栄光聖名にあれ。

二三、 野尻湖の今昔

(一九七四年晩秋)

私が初めて野尻湖を知ったのは、今から半世紀前の夏のことでありました。ながわづらいをして旧制高校の第一学年をダブッタときのことです。高師附属中学の大先輩、斉藤力さんの御好意により赤倉温泉の貸宿で一夏を暮したわけでありました。余談になりますが、この斉藤さんという人は、非常に義侠心の強い人物で、弱者のためには身を挺してかばう人でありました。例えば、電車に乗ってお年寄りが立っていて、その前に若者が平気で腰かけているのを見ると、「君、この方のために席をゆずってあげなさい！」とハッキリ言う人でした。万一その若者が文句を言おうものなら、論議で説き伏せるか、実力で立たせるかして、その名の如く正義のためには厳しい力をふるう人でした。漱石の愛読者であり、英語の非常に堪能な人でした。私はこの斉藤さん

と暮した一夏を、感恩の念をもって生涯忘れることができません。

多少病弱であった私を、暑い東京からひっぱりだして、涼しい赤倉高原で保養させて下さったのでした。その頃は自動車がないではなかったのですが、馬車が羊腸たる坂道を時折登り降りした程度で、大方は赤倉の駅との間を歩いたものです。柏原（今の黒姫）駅から野尻湖までも歩きました。ほこりっぱい道であったことが妙に印象に残っています。

外人村から湖面をかすめて妙高を眺めたあの景色もいまだに髣髴として浮んできます。ヨットがいかにものどかに絵画的に浮んでいました。日曜であつたので、外人宣教師が天幕を張って野外礼拝をやっているのを見ました。湖はあくまでも澄明で、泳いではすまないような感じでした。ボートを浮かべ、ゆっくり漕ぎまわりましたが、中学校時代に学んだ英語の歌を口吟んだりしたのもおぼえています。

“Lightly row, lightly row,

O'er the glassy waves we go ;

Smoothly glide, smoothly glide

On the silent tide.

Let the winds and waters be

Mingled with our melody,

Sing and float, sing and float

In our little boat."

歌詞は多分こうでしたが、これは「蝶々蝶々、菜の葉にとまれ」のあの調べと同じ歌で、まさにこの歌の通りの感興でした。弁天島を一周して帰りました。

「赤倉の夏」と自分で呼んでいる、この夏の生活の中で、もうひとつ、いつまでも忘れられないのは、ある夕、雨あがりのあとに現われた虹のことです。野尻湖の方角にあたって大きな半円形の虹、まさに天橋と申したい見事な二重の虹が実にあざやかに現われたことです。それがなんと小一時間消えなかったのです。こんな見事な虹はその後、半世紀見たことがありませんし、おそらく私の生涯で再びあれほどの虹は見ることはないでしょう。

ワーズワースの有名な詩「虹」もまた私の心です。

"My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky:

So was it when my life began,

So is it now I am a man,

So be it when I shall grow old,

Or let me die!

The child is father of the Man :

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural Piety."

「自然と人生」、蘆花ではないが、自然と心が融合する境地は日本人において本来最も体感されて来たところのものでありましょう。シラーが「神は最大の芸術家である」という事を、彼の思想詩「芸術家たち」(Die Künstler)の中で謳っています。大自然そのものが神の傑作であるならば、我々が天然の中に生命的共感を覚え、これと融合するとき、おのずから神のふところに没入するという宗教的境地も湧いて来るわけでありましょう。そのような体感をもって、神・自然・我との融合の中に生きていたのは、シラーの無比の詩友であった大詩人ゲーテでした。

„Ihm ziemt's, die Welt im Innern zu bewegen,

Natur in Sich, Sich in Natur zu hegen,

So daß, was in Ihm lebt und webt und ist,

Nie Seine Kraft, wie Seinen Geist vermißt“.

「神らしきは、宇宙をみふところの中に動かし、

自然をおのが内に愛護すること。

されば、神の中に生き、動き、在るものは、

神の力、神の靈を失うこと絶えてなし」。(私訳)

これは実にゲーテの本質を告白している句だと思いますが、私も共感措く能わざるものを感じています。

ともあれ、赤倉と野尻、妙高と野尻湖というものは私にとって今から五十年前に忘れ難きものとなったのですが、それがついこの数年前から、野尻高原大学村の一員となることによって、

——それは打田峻一兄のおすすぬめによったのですが——現実に第二の故里として迎えられ、復活して来たとは、夢か現か、実に夢にして現となったわけです。この十一月初めのセミナー・ハウスでの会合で、ご参集の皆様と自己紹介を交わすことによってなおさらのお親しみをいただいたわけですが、私はどうもお顔とお名前をアイデンティファイすることの下手な人間ですので、失礼もあると思いますが今後ともよろしくおねがいいたします。

大学村といっても、私のところなどは、おばあちゃんと呼ばれる荆妻が孫どもと一夏をくらすという情景も出たりするわけであります。大学教授やその他の方々にしても、ドイツの大学教授のように三ヶ月も休暇をもらって著述や研究に没頭するといった恵まれた境遇の方は稀にしかなかろうと思われれます。

「歳月もうつりかわり、世代も飛び去ってゆく」、„Monde wechseln, Geschlechter fliehen.“とシラーがうたったようなわけですが、温たかい人間味というものだけは、どうかこの大学



著者（野尻湖上にて）

村では不変でありたいものです。これはお互いさま身をもって伝えてゆきましょう。

『「のじり大学村だより」第二〇号、昭和五〇年一月号』

二四、わがキリスト

(一九七五年五月四日、京都会場にて)

奥田昌道京大教授は到れり尽せりの準備をこの講演会のためにして下さいました。東京から来た者として、福音の同僚としてまず感謝の意を表します。十余年前から春秋一回京都に伝道応援にうかがっていますが、奥田・市川・私市の三君はパウロが幕屋を製造しながら伝道していたように、既に夫々の持味で地道な伝道集会をしておられるのをたのしく存じています。

この京都会場ではなしをするのは今日が始めてだと思いますが、「わがキリスト」と題して講演をするのも、始めてであります。支那料理のワン・コースは幾皿も品品でてきますが、奥田君がそのように完璧なおはなしをされたので、御馳走のあとですから、私は質を変えてお茶漬けといきましょう。それでお客様のあなた方聴講の方方のお腹もおさまるといいうものでしょうか

ら。

さてところで聖書は一般に教訓の書だと思っているのではありませんか。今日私のはなしをはじめてお聴きになる方もありますので申しあげておきますが、聖書は実はキリストが主人公の大きな劇であります。シェイクスピアは世界最大の劇詩人ですけれども、これともまたけたちがいの劇詩人は神御自身です。ですから聖書はザ・ドラマと私は申します。西欧文学の諸々の劇中の劇こそ聖書であります。否実に全世界のザ・ドラマなのです。そしてこのドラマは見世物ではなく、読者自身が劇中の人物となつて身体で読むことを要求しているドラマです。ですから、真剣勝負のドラマであります。ですから、そのドラマのおはなしをする私も、皆様がいい加減なお気もちで聴かれるのではおはなしする気になれませんので、本気で聴こうとなさらぬ方がもしおありでしたら、即刻この会場から出ていって下さい！

一体今の日本人の心の在り方は何ですか。民主主義というお題目に身勝手な安住をして、精神的には道徳的バック・ボーンがへなへなになり、物質文明と享楽ムードが渦を巻いている混沌文明ではないのですが、禍なる哉民主主義、と申したいくらいです。これは衆愚主義とでもいいたいものです。

日本は過去に偉大な精神文化をもっています。儒教、仏教に花咲き果を結んだ貴い精神文化を弊履の如く棄てて顧みない一般の風潮は全くなさけないはなしです。

キリスト教も、ザヴィエルが天文十八年（一五四九年）八月十五日鹿児島に渡来して日本伝道の第一步を印して以来、既に四二六年、すなわちカトリック教が伝わってから四百余年、プロテスタント教が伝わってから百余年経っているのですが、さて真に使徒的な信仰をもってする福音が今までにどれほど伝えられていたでありましょうか。それらを歴史的にあとづけることも大切なことでありますが、我々もその一端を担って新しき自覚をもってこれにあたるべき責任と使命を感じております。

私は無教会の流れの元祖内村鑑三先生の集会に列席した過去をもっていますが、世界的な内村鑑三先生と雖も、キリストの弟子たち、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロらの信仰の次元からはずれを来たしております。私の如きは内村先生とは比較にならぬ小さき者ですが、信仰の次元のこととなると、使徒的信仰の次元を志している者として、キリスト直結を念としている者として、何か知らぬが烈々たるものがうちに湧いて来ます。そういうわけで、私はいわゆるプロテスタントでも、カトリックでも、無教会でもありません。聖霊を賜ってから超教派的となりました。今やキリスト教は第二の宗教改革に突入すべき期が来ています。否既にそれは始まっているのです。聖霊のバプテスマを受けた個々のキリスト者を通して。

宗教の事態は本来一対一なのです。モーセの十戒の第一言、「汝わが顔の前に何ものをも神とすべからず」原語を直訳すると「汝にとつては、わが顔の前では他の神々はあるまじきものぞ」

というので、他の民族神の存在を肯定しているのです。ただ汝イスラエルの民にとってはヤーウエーというこの神だけが神だというので、拝一神の一対一の関係であります。それはイスラエル民族に対すると同時にその個々人に対しても同じであります。

イスラエルにとってヤーウエーとして自現した神はやがてイエスとして自現しました。それでイエスは、「われを見し者は父を見しなり」と言われました。イエスも父なる神と一対一でありました。「わが神わが神何ぞ我を棄て給いし」の十字架上の叫びを、「わが神」といって一対一であります。「汝と我」のこの関係はマルティン・ルーバーの言を俟つまでもなく宗教体験の土台であります。信仰の事態は三人称では成り立ちません。聖書に三人称的に叙しているところはいくらでもあります。それを二人称的に受けとってゆかないとダメです。

パウロのキリスト体験は全く一対一でした。ダマスコ途上のパウロに、「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」と霊界のキリストがパウロに呼びかかり、彼を霊撃しました。旧約の預言者たちがみな一対一で呼び出された人物です。モーセ、エリヤ、エリシヤ、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ等はその著しい例です。

しかし我々は一対一で神に直結するわけにはいきません。我々には執り成しの人が要ります。いうまでもなく、キリストであります。そうでないと行き詰ります。「行き詰り」といえば思い出すことがあります。あのプラトーンの『メノーン』という対話篇です。あそこでメノーンがソ

クラテスと対話しているうちに、ギリシャ語で「アポリヤ」という語がでてきますが、このアポリヤは「行き詰り」を意味する語で、「どうにもならない」事態を告白しているわけです。かれ、メノーンはソクラテスにこう申しました。「あなたは自分が行き詰って、そして他の人々をも行き詰らせることしかない。私をすっかり行き詰らせました。あなたはまるで、しびれエイに似ています」。海の中にエイという大分グロテスクな怪魚がいますね。その中のしびれエイというのがあの多島海にいと見えてこんなことをメノーンが申したわけでしょう。しびれエイに近づくと彼から発する電波のようなものでしびれさせられるという現象のように、ソクラテスは、「自分は何も知らないということがわかった」という知の世界の根底の自覚に、彼と同じように追いつめる哲人でありましたから、メノーンがソクラテスのことをしびれエイと申したのはまことに面白い比喩であります。同じような無知のなげきをゲーテもその『ファウスト』の「夜」の独白の中でやっています。

「我々はなんにも知り得ないということがわかった」(三六四行) という句がそれです。知の世界の行き詰りもさることながら、行の世界はなおさらのことです。それはパウロがローマ書七章で告白している通り、「ああわれなやめる人なるかな、この死の体より我を救わん者は誰ぞ」がそれです。

パウロはこの道徳的行き詰りをキリストの救いで突破しました。それで「われらの主イエス・

キリストに頼りて神に感謝す」といっています。パウロはこの場合「われらの」といっています。が、その根底の自覚は、告白は、「わが主イエス・キリスト」であるに相違ありません。宗教の根本的な自覚の場は、絶対者との一对一の関係であるからであります。

私が今日「わがキリスト」と題したのもそういう信仰的自覚の場に立つてのことです。わがキリストは、端的に申して四福音書のキリストであります。ということは到底限定など出来る事態ではないキリストを意味しているのです。わがキリストはかくかくのキリストであるなどと言えるはなしではありません。

即ち、わがキリストは無限定、無限無量の方ですから「無者」と申すのです。この無者キリストに帰入することが私の人生の縦の目的です。浄土真宗でいう「南無阿弥陀仏」は無量寿・無量光（アミダ）なる覚者（仏）に帰入（南無）する、という意味ですから、この表現はそのままキリストにあてはまります。キリストこそ無量寿・無量光の覚者で在り給うからです。

このような覚者キリストにどうしたら帰入できるか。それは十字架という門を通して帰入するのです。これは絶対恩寵の事実として開かれた門ですから、感謝の一念でひれ伏してこの門の中に入るのです。それがキリストへの帰入です。「来たれ！」との本願を以てまねき給うそのおまねきは無条件で受け奉るのであります。そうすると無量寿・無量光の聖霊が臨み、私を包み、私を貫き、私に充滿して下さるのです。これがみたまのバプテスマであります。パウロがガラテヤ

二・二〇で告白している信仰がこれであります。パウロのキリスト神秘とはこのことです。

キリストと一つにされている絶対恩寵の救の現実、自らを「罪びとのかしら」と告白しているパウロがこのような不動の現実におかれている。というところに人間の思想とは次元のちがった消息があるのです。相対的人間小池はどうであらうとも、私もパウロと共に絶対次元の中に置かれています。それはいつも申す通り、十字架の贖罪にあづかり、永遠の生命を聖霊のバプテスマを通して賜り、み霊を宿しまつるありがたき現実にあるからです。

さて私の存在はどのようなわけで、キリストなしにはあり得ないのです。キリストはわが絶体です。文字通り相対を絶した存在です。

キリストという天極は何かほかに地極があつて、それに対立する天極というわけではありません。キリストという天極は一極絶対なのであります。白穩が隻手の音ということを言いましたが、拍手は両手を用いて拍ったときの音ですが、隻手の音とは、それでは何でしょう。如來の手と相拍つ音なのでしょう。キリストという天極は対極たる地極がないので絶対なのです。そして絶対なるものは自由自在であるので、いたるところを対極とすることができなのです。それで私のような罪びとの中に自ら対極をつくるのです。ということは聖霊のキリストとしてわがうちに内在し給うのです。これをも地極といってよいなら地極です。そしてこのような地極は無限にあるのです。勿論あなた方一人一人がそのような地極となるのです。

キリストが「右の手のすることを左の手に知らせるな」と言いました。これは良き行為の一種絶対の相です。左を知らぬ右であれよ、ということです。意識界を絶せよ、ということです。天国はそのような反省や比較の意識を超えた現実です。マルタがマリヤを意識して自分の行為をしたところにマルタのよさがだめになりました。マリヤはマルタを意識しないでキリストに聴き入りました。あのときマリヤは一種絶対的なすがたであつたのです。

キリストがマタイ伝第二十五章に書いてあるように、天国人と地獄人をわかつとき、何を規準とされたかという、無意識的に善行をしていた人たちを天国人としました。あれも一種絶対的なすがたです。キリストという一極は相対界に多極的に存在しているから、「これらのいと小さき者の一人になしたるは即ち我になしたるなり」と言いなされたのです。

私が「わがキリスト」と申すとき、キリストが無限無量者であるのに、この小さな私がそんなことが言えるかというわけでしょう。ところが恩恵の世界は、有限が無限を抱くありがたい世界です。罪びとが義人と握手のできる世界です。遊女がキリストの御足に接吻した世界です。それは、「至高者、至聖者が、心碎けた者と共に住み、謙虚な者の霊を活かし、碎けた者の心を活かす」（イザヤ五七・一五）、本願のどん底の愛の世界だからです。「わがキリスト」と呼び得るのは、「わが小池！」といって顧み、ゆるし、抱き、担い、はげまし、きたえ給うみ声を聞くからです。

二五、医学と宗教

(一九七五年七月二三日、於東条会館)

——第一六〇回国際治療談話会における「感想」——

初めて皆さんにお目にかかります。石橋長英先生からお頼まれしまして、戸惑ったんですが、先生のお言葉ですから無条件に従って参上いたしました。私は全く畑違いの者で医学のことは存じませんが、宗教と医学といった問題の或る点について、ざっくばらんに所感を申し述べさせていただきます。

御承知の通り医学は Heilkunde で heilen は魂の heilen とそれから体の heilen と両方にかかっていると思います。それで宗教と医学とはその意味において非常に密接な関係があるということを思わざるを得ないのです。

ヒポクラテスが御承知の通り人間の心身を全体として考えて、人間が本来具有している力と自

然環境の力で健康になるとなし、医師と薬剤は補助をするに過ぎないと言っていることを私はどこかで読んだのですが、そのことはソクラテスが、哲学者は、ひとがものを考え出すことの産婆役をするものだと言ったに類似しています。同様に教育(Erziehung)も人間の中にある才能を「引き出して達成させること」であります。

さてところで今の世の中は魂の世界が留守守になっているようです。特に日本においてはその精神的な危機が甚だしいということを私は感じております。そんなことで魂の世界を大いに掘り下げねばなりません。ティッリヒ(Tillich)という世界的宗教哲学者も現代は深みの欠けた時代であるといつて嘆いています、わが国は特にそうではありませんか。一つの樹に譬えれば、根っ子の世界が宗教で、幹が道念、枝と葉と花と果が文化文明の諸々の現象界といつてよいでしょう。それで宗教は実は文化現象の一つではなくて一番根源になるところのものであります。人間存在の中心が魂である限り、万人はこれ宗教人なりと申しております。『大言海』を開きますと「ひと」の項に「靈止」とあります。これは神靈のとどまっている存在が靈止(ひと)であるということ。ほんとうに昔の人はすばらしい直感力、洞察力を持っていたと思います。絶対者を梵と言おうが、如来と言おうが、あるいは神と言おうが、とにかくそういった宇宙根源の霊的実在と同質なものを人間は本来賜っているわけです。しかも身体は大自然の諸要素を受けているわけでしょう。それで神と自然を人間の心身は縮図のように賜っています。謂わば大宇宙の縮

図が人間でありましょう。だから人間を Mikrokosmos というのは本質に即した表現であると思います。

ですから heilen (救う、癒す) とはそのような神と自然の根源に帰入することでもあります。

仏教の南無阿弥陀仏というのはすばらしい言葉だと思います。「南無」は帰入すること、「阿弥陀」とは無量寿、無量光、すなわち永遠の生命と無量の光ですね。それから「仏」は覚者、悟っている者。すなわち「無量寿、無量光の覚者に帰入する」で、無量寿、無量光の覚者とは仏陀とキリスト。ですからこの南無阿弥陀仏という言葉はキリスト教にもそのまま当てはまるのです。キリストという人はまさに無量寿、無量光の体现者でありました。そこでクリスチャンで南無阿弥陀仏とか南無キリストなんて言う人はおそらく私だけでも知れませんが私は本気です。

このような霊的な実在との新しい結びつきが、肉体的にも大きな働きをするのは当然であります。神に直結していたキリストが諸々の病をいやしたのもそこから来ています。自然界に対しても自由であった彼はガリラヤ湖を素足で渡りました。これは本当のことです。これは物理法則を越えた靈法の現実であります。「山川草木ことごとく仏性あり」とか、「衆生ことごとく仏性あり」と道元が言いましたし、そのようにまた、「神の似姿 (Ebenbild Gottes) に人は創造されている」と旧約聖書の創世記にあります。人間はまさに神と同質的に (homo-ousios) 創造されています。このことをもっとはっきりと現代人は自覚すべきであると思います。私は教育

の方に携っています。が、教育の面でもそこから始まらなければ、始まらぬと思って、そういう角度、根っ子の世界からものを言っております。

人間が深層意識で求めているものは永遠の生命でしょう。亡びる肉体の奥に魂を裸ではおかない霊体が備えられつつあることを聖書は語っていますが、これは素晴らしい消息だと思えます。インドのヨガの聖者には歴史的にそういうことを実証している者があることをある本で読みました。原子に対して霊子といったものがあるのではないかと私は思っています。或はむしろ霊的作用によって霊子といったものに変質する現象があるといったらいでしょう。ともかく人間の霊性にもっと目ざめねばならないでしょう。

人間界では癌は何といっても深刻な病気で、これはビルスか何か存じませんが、癌の征服が世界的な問題であることは周知の通りです。人間の世界には肉体の癌の外に心に癌があるんですね。これが心の中に単を喰っている「罪」とか「煩惱」とかいう心癌で、「我執」という奴です。ある意味においては肉体の癌の一つの原因になっている場合もあると思われます。

ひるがえって思うに、心身の健康は宇宙の高次な霊的実在と一如になる事態にあることはまちがいないところでしょう。その点で東洋人は一如的に内観し内住することが比較的出来易い性質を持っていると思うのです。These, Antithese, Synthese というヨーロッパの思维方法を三角形で表わすとすれば、東洋のはその三角形の三点を必ず通るところの円であると言ってよいでしょう。

う。東洋人の思惟の仕方はむしろ直観的、神秘的、非論理的等々で、神秘の最後の表現は円だと思ひます。宮本武蔵が道に窮し、道を求めて路上に平伏したとき、彼のまわりに円を描いてあの和尚さんは立ち去りました。首をあげて武蔵はその円にうたれて、武道の奥義を得たということです。These, Antithese, Synthese 的な理論や合理性を身につけることは日本人にとってたしかに大切なことです。日本人は正直もつと合理的な生活をなすべきです。その上更に宇宙の理法、靈法を本当に身につけて、謂わば西欧的三角形とその三点を通る東洋的円の両面を渾然と身につけること、これが実はこれからの本当の課題ではありませんか。医学も医療も東西両洋を包摂する宇宙的靈法靈性を根源にもつ質となり、心身の *heilen* をいよいよ追求すべき期が来ていると思われ、日本の医学界に心から期待申上げる次第であります。

〔診断と治療〕第六四卷第二号所載、昭和五年二月

二六、旅は道連れ世は情け

(一九七六年三月)

世界の歴史は神の旅路である。神はひとりである。それでは神はひとり旅をしておられるのか。そうではない、独子キリストと旅をしておられる。神の道伴れたる同伴者はキリストである。しかし神は人類を創造してたくさんのお伴者をキリストのため作りなされた。たくさんのお伴者は羊の群のようにキリストに伴れられて歩いている。そういった羊の群が神の民である。それは詩篇第二十三に詠われている通りである。新約的に言えばそれはエクレシヤ(召団・教会)である。全聖書的に言えば幕屋である。

ヤハウェー神はアブラハムを召命して出ウルをさせて幕屋の旅をなさった。またモーゼを召命して出エジプトを敢行させ、約束の地カナン目指して曠野の旅をいとなまれた。

ヤハウェー神とイスラエル民族との関係は、牧者と羊群の如く、主従の関係であるから、使命関係ともいふべきものである。そしてまた神は父と呼ばれ、イスラエル民族は子らとして自覚していたから、父子の関係でもあった。これは本質関係といったらよいと思う。イザヤ書六三・一六に「汝は我らの父なり」と明言している。

しかしまたヤハウェー神とイスラエルの関係にもう一つ大切なものがある。それは預言者ホセアを通して啓示されたもので、それは夫妻関係である。

「われ汝をめとりて永遠にいたらん。公義と公平と寵愛と憐憫とをもて汝を娶り、変ることなき信実をもて汝を娶るべし」(ホセア二・一九・二〇)。

これは一体関係といったらよい。この一体はいつたい何によつて一体であるのか。愛である。

キリストは父なる神の独子として聖霊のゆえに全く同質であられる。キリスト・イエスは神の僕として神意に維れ従つて聖意体现、以て使命を全うされた無者であつた。それゆえその内実は無限無量なものであつた。

キリストは彼を信愛する個体及召団に対して、コリント前書一二・一二―三一のパウロの言を藉りれば、首と体の関係にある。これは有機体的生命的一体関係である。そしてまた同じくパウロの言の如く、キリストとエクレシヤの関係は、夫と妻との関係たる夫婦一体という霊的人格の一体関係である。そのことはエペソ書五・二二―二三に語られている如くである。

旅は道連れ。今年（一九七六年）は当方の幕屋関係者に数組の結婚がある。夫々人生の道伴れを与えられて、新しい人生の旅路につくわけである。

夫妻の人生の旅は道伴れである。どこをどう歩こうと、道に迷うときも、風雨に襲われるときも、道にゆきづまるときも、峻路をよじのぼるときも、谷間へ降りてゆくときも、危険な橋を渡るときも、往き暮れて幕屋を張って野宿するときも、どのような状況においても、夫妻の旅は道伴れそのものである。独乙語でも *Lebensgefährte, =gefährtin* と、いう。

人生の旅路で、夫は仕事である。妻は内助である。このことは夫婦道の原則である。内助とは何か。マルタ的な内助の奥にマリヤ的な愛の力が夫にとって最も大切な内助の要素である。夫の仕事を助ける力は、この愛である。夫の仕事の具体的な秘書であり得る妻というものは、そうあるものではない。ヒルティの奥さんはそういう女性であったが、必要なのは、さまざまなかたちであらわされる具体的な愛のわざである。愛の心根である。献身的な愛の実存である。

男女同権は社会的な存在としての一面のはなしである。夫婦の道では夫は全責任を負い、妻は全身的爱を献げることである。従順だとか信頼だとかいうことはこの献身的な愛の中に融けていると言いたい。献身的な愛は時には夫に体あたりするかも知れない。夫が何かのことで右せんか左せんかと道に迷っているとき、妻の献身的な愛の言が、決然たる勇気を与えるであろう。全責

任を負う夫の担いの男らしい心根は妻に平安と歓喜を与え、更に愛をそそるであらう。旅は道伴れとは夫妻の場合に最も深い内容となる。どこをどう歩くとも、何処へ往くとも、このような心意気の道伴れの旅はそのまま天国的である。苦しみを共にし、なやみを共にし、歓びを共にし、希望を共にする。

しかしその道伴れの旅が真に可能なためには第三の旅人がいなければならない。それは丁度エマオへの二人の道伴れに第三の旅人が同道していたように。それが即ちキリストである。道伴れの各々の心に宿るみ霊なるキリストである。滑っても転んでも、谷底に落ちててもキリストは助けて下さる。キリストを見えざる第三の旅人として道連れにもつ夫妻は力強い旅を天のエルサレムに向ってつづける。どこをどう歩いてもそこが天国だ。そういうのが本当の「旅は道伴れ」の旅だ。

ところで「世は情け」とはどういうことか。以上のような「旅は道伴れ」の旅をする夫妻が、疲れた旅人をも宿し入れていたわってやる。そういうのが世は情けの実践者である。夫妻の内なる愛が外なる愛に流れるのでなければ、そのような夫妻はどんなに幸福そうでも本当の幸福ではない。幸福は他の旅人を慰め、いたわり、はげますところにこそあるものである。いわゆる「マイ・ホーム」主義には幸はない。愛の泉が湧き流れ、愛の灯火が旅人をおのずから呼び寄せるのでなければ、本当の歓喜はない。およそバリサイ根性の巢食しているところに愛はない。

「旅は道連れ、世は情け」とはすばらしい俚諺である。それはみ霊の愛の人でさえあれば、結婚をしようが、すまいが本当に身証できる。そういう愛は孤ならず、道連れを自由に有つ。情けを自由にほどこす。使徒たちは皆そういうみ霊の愛の人物であった。キリストはその最たる霊人である。キリストは地の果てまで、いついずこにも現われて、寂しき人、泣いている乙女、病める人、身体障害者などの連伴れとなってくださること、原始の福音時代、地上でなさったと同じである。そして世の末まで救の旅、情けの旅を、道伴れとなつてつづけ給う。いかなる人に対しても第三の旅人としてキリストは現われ給う。「旅は道連れ、世は情け」の本願的实体はキリストである。

日本キリスト召団讃歌 第一番

(讃美歌五二七の調べにて) 作詞 天鐘 (一九七六・二・二二)

一 わが道連れ わが情け、

わが旅路の主よ、

なやみにも苦しみにも

わが力の主よ！

二 わが道連れ わが情け、

わが天路の友、

山を越え谷を渡り

偕に進みたもう！

三

わが道連れ わが情け、

世の救いの主よ、

わが身をもわが魂をも

捧げつつ進まん！

〔「ハレルヤ」第四二号、一九七六（昭和五一）年三月号〕

二七、 芸術のたましい

(一九七六年三月十日)

春になると土の中から地表を押し破って芽がふき出てくる。春暖に誘われて、やむにやまれぬ生命の衝動が発芽という現象となる。

小庭のサフランが正にそのようにして発芽し早くも花咲いているではないか。サフランが群れて咲くを見ると「砂漠はサフランの如く花咲き」というイザヤ書第三十五章の詩句がおのずから浮んでくる。

造化の妙というが、創造の神の聖手のわざは何と生命に満ちたものだろう。生命をつくることは神のほかには出来ない。神様は最大の芸術家である。神の芸術品には生命がある。生命のないものを神様はつくり給わない。地水火風の四大は生命の素である。生きとし生ける被造物は地水火

風で生きている。太陽光線と地球とは地球上の一切を生かしている。これはすべての神の創造力の現象態である。そしてその被造物中の傑作は人間である。それは創世記（一・二七）に記されている通りである。

「神この似姿に人を創造し給えり。」

これを男と女に創造し給えり。」

神と同形に、同質に我々は創造されている。同形とは内的な形のことである。同質とは内的本質のことである。創世記第二章の神話によれば、男の心臓部のあばら骨から女がつくられた。

一人の人間が二人の人間になった。その二人が男と女である。男女はだから引き合うのである。結婚は恋いし合う二人が一つに結ばれることである。恋愛が本当なら結婚にゴール・インするのが自然である。

やむにやまれない男女の情愛がそのように結ばれるように神様が男女を創造されたといっている。神様は男女の心情の世界でも、男女の肉体の世界でも、実に素晴らしい芸術家であり給う。

その消息を大胆に詠っているのが旧約聖書の雅歌書である。雅歌書は原詩ではシール・ハッシリムとあって、「歌の中の歌」と訳されるべき表現である。絶唱とでも言いたい言葉である。

今私はここで結婚論を書こうとしているのではない。芸術のたましいは何だろうと、その根源

をさぐろうとしているのだ。否既に劈頭からそれを直視しつつ掘りさげつつあるのだ。

神様の創造の衝動は愛に相違ない。やむにやまれぬ愛のわざである。被造物の傑作が人間で、その傑作中の傑作は女性であろう。絵画、彫刻、文学の飽くことなき対象は女性であるところを見てもおのずからわかる。音楽でもやはり女性の声に限りない魅力がある。

自然界の花、人間界の女性、これがなかったら、世界は荒寥、索莫、歛びも笑いもない世界となろう。神の芸術品たる花と女は美の象徴である。芸術は別名、美術といわれるわけである。

神の心の、そして神の生命のやむにやまれぬ創造のわざが神品を生む芸術であるならば、人間もまた、神の似すがたにつくられている以上、神霊を本来宿している霊止（ひと）である以上、全存在的な衝動をもって、やむにやまれずして何かを作り出す。そういううち込みのわざが芸術の本領であるにちがいない。

雲煙集於不得已。

風雨漏於不得已。

雷霆震於不得已。

斯可以觀至誠之作用。

雲も霞もやむを得ずして集り、風も雨もやむを得ずして漏れ、雷もやむを得ずして震うのである。だからそういう現象に於て至誠のうごきやはたらきを觀るわけである。という前掲の詩句は

佐藤一斉の『言志録』に出てくる詩句で、西郷南洲の特愛の句でもあった。

人間のいとなみにおいて、こうしようか、ああしようか。こうすべきであるか、ああすべきであるか。とった具合に撰択を云云している在り方は、相対的な世界であるが、こうしないではない、即ちかくせざるを得ず、やむにやまれない、というのは文字通り相対を突き抜けた絶体の世界である。

福音はパウロもこう言つて伝道していた。「われ福音を宣べ伝うとも誇るべきところなし。己むを得ざるなり。もし福音を宣べ伝えずば、我は禍害なるかな」(コリント前書九・一六)。この「やむを得ざるなり」は、直訳すると「アナンケー(必然)が私に課せられてある」という言い方である。即ち「必然が負わされている」ということで、「神様からどうあつても担わされている」との意である。天的必然で他にやりようがない。上からの圧力に動かされざるを得ない。他力の劫圧に動かされるのだ。これが「やむにやまれない」真意で、これは自分の自由意志ではない。奴隸意志だ。だからこれが本当の自由だということになる。「主のみ霊のあるところに自由あり」(コリント後書三・一七)というのも、キリストの霊が内住してはたらくから、自分はどうにもならぬ、それが本当の自由なのだ。自分にとらわれないからだ。ということなのである。

芸術のたましいも、これと同様である。さきにも見たように、神様が最大の芸術家で、神的必然で神様は生ける作品を創造し給う。然らば、芸術家も、この絶大なる芸術家神様にならつて、

やむにやまれぬ天的衝動によって創作するのが本当であるから、芸術のたましいは正に、この「やむを得ざる」のたましいであるはずだ。

そのことを偉大な芸術家はみな身をもって証している。ここに身近かな例を一つ挙げることにしよう。

棟方志功があるとき、「私は自分の仕事には責任を持っていません」と言ったそうである。さすがに志功である。彼はデーモニッシュな男であった。あの『板極道』一卷に溢れている火のような、怒濤のような言葉がそのことを証して余りある。ソクラテスがダイモニオンに導かれていた哲人であったように、志功も亦、神仏の靈に圧倒されて仕事をした。だから、仕事を自分がしているなどという自意識などはない。何か知らぬが、彼は絶対な力に、——それが外から迫ってくる力の場合もあろうし内から迸流する力に推し出される場合もあろう——とにかく、そういうやむにやまれぬ力に動かされてやっている。だから、自分は責任などもてない。というのである。小乗的責任観念などではなく、いわゆる無責任では勿論ないが、超責任の仕事をしているのである。これが天的責任なのである。天的自由であり、天的必然なのである。そのような超責任のやむにやまれぬ衝動で創作するところに芸術のたましいがある。志功は禅宗のこころをつかみ、また浄土真宗のこころにも触れた。彼にとって宗教は観念ではなく、実力として彼を動かしていた。神仏の力に動かされ、感激しつつ、圧倒的な力の下で創作した。わきで見ていたらきつ

と憑かれた人のようであつたろう。本願力に動かされてなすところに芸術の真骨頂がある。バッハ然り、ベートーヴェン然り、ロダン然り、ダヴィンチ然り、レンブラント然り、ダンテ然り、シェクスピア然り、ブラウニング然り、ゲーテ然り、芭蕉然り、漱石然り。

要するにこちらが無者とされて無限無量なる何ものかに動かされてなすところに芸術のたましがある。ある芸術家はそれを大自然というかも知れぬ。またある者はわがうちなる何ものかというかも知れぬ。とにかくそれは相対的に対象化することのできない何ものである。

芸術家がそこに生きる何ものかの霊的な次元と霊的な質の相異によって、芸術的作品の質がさまざまとなる。繊細、優美、素朴、枯淡、偉大、莊嚴、深刻、幽玄、わび、さび、さまざまなるう。

志功も『碧巖録』は結局、無を語っていると知った。こういつている、「河井先生の毎日語っていられるものは、無限の無である。そして無限の世界なのです。」

志功はミケランジェロの『最後の審判』に圧倒されてこう叫んでいる。

「壁画の存在というものを、神のように、仏のように示しているところにあのシステインの世界があると思います。まあキリスト自体が仏さま、神さまでしようけれども、システインの壁画自体も、やはり仏、神とのつながり、なおさらに、それ以上といっていいくらいに、大きい一つの厳肅な存在、絶体になされた美のりっぱさというものの奏樂が、耳にはいつてきます。いわゆ

る美の一ツのあり方を交響楽にたとえたならば、わたくしなら、あそこに立ちまして、ベートーヴェンの第九シンフォニーの指揮棒を執っているようなコンコロもちよい気持です。」

志功の言葉はまだいろいろ引用したいが、次の言葉だけはここに掲げておこう。

「私はからだの中に宗教の世界がひそんでいることを、なんか知らず識らずのうちに感じとって来たような気がしました。そして美と宗教、いいかえれば板画と宗教とは同律の道にあるということがわかってきたような気がしました。」

これが板画に生命を賭けた志功の告白であった。

芸術の道にかぎらない。宮本武蔵の武道も、生命賭けでその奥義を求めたのであった。吉川英治が伝えているように、愚堂和尚が大地に平伏している武蔵のまわりに棒切れで円を描いて黙示したとき、これをじっとみて武蔵はハタと大悟した。天地人円現の相を！ 心劔一如の相を！ 二刀即一刀の秘訣を！ 否、二・一・無刃の極意を！ 「無一物！」と一喝した愚堂の真意も、無者に帰するのではないか。

芸道、武道、画道、書道、弓道、柔道、合気道、茶道、華道、医道、学道、商業道、実業道、およそ人のいとなみは何であらうと帰するところは一つ！ 無道である。宗教の奥義が無道であるからである。

二八、私のゲーテ告白

(一九七七年九月二〇日)

今を去る半世紀あまりの昔のこと、あのなつかしい白線二条の帽子をかぶり手拭を腰にぶらさげて歩いていた水戸高校時代、私は文乙のクラスであったので、ドイツ語を第一外国語として学ぶ学生であった。小牧先生のゲーテ、実吉先生のハイネ、相良先生のグリルバルツァー、W. Gundert 先生のドイツ語などが、夫々印象深く私の胸中に遺っている。そして今も髭髯としてその雰囲気は漂ってくる。

小牧健夫先生の《WERTHER》、これが私にとってゲーテとの最初の出遭いであった。ほぼ同年輩の天才ゲーテのあの悲恋小説のもつ情熱とゆたかな教養に魅せられたあの頃の感興と感激が、小牧先生のお人柄と共に、また同僚たちの „schwankende Gestalten“ もちらつきながら、

この年輩（73才）になってもなお眼前に揺蕩うのである。

『ウェルテル』の中で私の全身に泌みわたった最も印象的なところは、あの五月十日のくだりである。

「谷がいとおしくも僕のまわりに爛り、なかぞらの太陽がひるなお暗く見通しもきかない僕の森の上に憩い、わづかの光線がチラホラと森の神聖なところにしのび入っている。……茎の間の小さな世界のうごめきを、長虫や羽虫の無数の究め難いすがたを身心間近に感じ、そして我々をその似姿に創造された全能者の現在を感じ、我々を永遠の歓喜の中に漂わせつつ荷い且つ保つておられる一切を愛する者の息吹を感じる。友よ！ さてそこで僕の眼の囲りが黄昏れて、周囲の世界も天空も全く僕のたましいの中に、あたかも恋人の姿のように安ろう。そんなときに僕はしばしば憧憬の念にかられて思う、《ああ、これを再現できればいいなあ、紙面に息吹き込めればなあ、かくもゆたかに、かくもあつく自分の中に生きているものを！ 自分の魂が無限の神の鏡であるように、それが自分の魂の鏡となるように再現できたらなあ！》——友よ、——だが僕はそのため没落する。僕はこれらの現象の素晴らしさに圧倒されて、まいってしまふ」。

若きゲーテのこの感動的、全存在的告白の中に、あの多種多様な全ゲーテの最も本質的なものが秘められていると言つて過言でないであらう。

彼は地上の生涯の終りを旬日の眼近かにしていた頃、エッカーマンに何と語ったか。「私は太

陽の中に見る神の光と創造力とに拝跪する。我々はこれによってのみ生き、動き、また在る、植物も動物もすべて我らと共に」(一八三二、三、一一)。

また彼の „Gott und Welt“ 詩集の Proemion 「序詩」の詩句、

「神らしきは宇宙をみふところの中に動かし、

自然をおのが内に、おのれを自然の内に愛護すること。

されば、神の中に生き、動き、在るものは、

神の力、神の霊を失うこと絶えてなし」

これらの著しい言葉の中に出ている「生き、動き、また在る」(„Wir leben, weben und sind.“) という言葉は、実はパウロがアレオパゴスの丘でアテナイの人々に語った演説の中に出てくる言葉、「我らは神の中に生き、動き、また在るのだ」(使徒行伝一七、二八)に由来するもので、聖書を生涯愛読していたゲーテの特愛の句の一つであつたに相違ない。それは彼が事実そのような生き方をしていたからに外ならない。それはどうして可能であつたか。彼の次の言葉はその鍵の一つを示している。

「原野の新鮮な大気は我々にうつてつけの本来の場所なのである。そこではあたかも神の霊が人間に直かに吹きかかり、神の力がその影響力を及ぼすが如くである」(一八二八・三・一一)。

ゲーテの実存は、あきらかに神と自然と女性と我の相関相入の有機体的生命的な相をもつてい

る。その生命的な要素は何であるか。Geist（霊）と Liebe（愛）である。それは如上の諸句をみても、霊と大気と息吹も相関的なものであることがわかる。彼の生命の生命たる所以のものは正に Geist と Liebe が渾然として存するところにある。あの „West = Östlicher Divan“ 中の „Denn das Leben ist die Liebe, Und des Lebens Leben Geist.“ の一句の如きは、これが Marianne の原作であるにしても Goethe の実存告白としてまちがいないものである。また

„Sei das Wort die Braut genannt, Bräutigam der Geist.“ の如き句をみてもゲーテにおいては本質的には Wort と Geist が一如的なものであった。実は聖書の言ひこそ Wort と Geist が一如で、ゲーテの文学に無量の力があるのは何といつても、神—霊—太陽—大気—自熱—女性—愛—我といった諸要素が文学の題材の中にさまざまなメタモルフォーゼをなして有機体的に相関相入しつづはたらいているからである。

愛！「神がもし鳥のたましいにその雛鳥に対する全能的本能を与えておらず、また同じ本能が全自然の生きとし生けるものに与えられていないとするなら、この世界は存続し得ないであろう！けれども神の力はあまねくゆきわたっており、永遠の愛はいたるところに作用している」（一八三二・五・二九）という彼の言葉を見ても、いかにゲーテが神の愛を体感しているかがわかる。愛をアガペーとエロースに分解分析するような理解の仕方は、彼には関わりなき抽象であった。ゲーテにとって愛は愛である。それが恋愛であらうと、母性愛、夫婦愛であらうと、親子

愛、兄弟愛、友情であろうと、弱者への愛憐であろうと、義侠的、献身的、犠牲的な愛であろうと、愛は愛であった。神―自然―人生を貫く千態万様の愛のメタモルフォーゼにすぎない。人間は、世界は、歴史は劇的な愛の舞台である。神的な霊的な愛が allumfassen, allerhalten する。そのような愛を体感する事態を彼は、「Gefühl ist alles。」(体感が一切である)と喝破した。

「天の父は悪者の上にも、善人の上にも、その太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせる。だからおまえたちの天の父の全きが如く、おまえたちも全かれよ」というキリストの精神にゲーテのたましいこそ近かった。Gott, Natur, das Ewig = Weibliche を体感したが故に、一切を包摂するようなたましいに彼は絶えず生長してゆくのであった。

そのような Gefühl は必然 Tat, Wohltat へと展開する。それがさきほどの Leben = Weben = Sein の、特に Weben の事態であろう。詩人としての彼の Weben は Dichten であった。

鳥詩がましくも告白させていたくだらば、二十余年前、私も深山幽谷で霊なるキリストの中に祈入し、聖霊の体験をした。仏教的に表現するなら、本願の中に南無することである。だから私は南無キリストという祈り方をする。キリストの祈りは正に南無神であったからである。

ゲーテの実存は正に Gott = Natur を Geist = Liebe をもって体感していたわけである。ゲーテは自分の Geist が der Sonne ähnlich だといつた(一八二四・五・二)。それは太陽と gleicher Natur (Qualität) zu sein と解して可いだろう。生涯を貫いて太陽を熱愛する (anbeten) こと

Geliebte の如くであったゲーテであるから、“Faust” の結句

das Ewig = Weibliche

Zieht uns hinan. に

Mit Lieb und Wonne

Zur heiligen Sonne. (= Gott)

という二行をゲーテに私は捧げた。

霊！ 神性 (Gottheit) の内住を体感していたゲーテなればこそ、〈Ehrturcht vor sich selbst〉自分自身に対する畏敬が最後のなものであると喝破できた。わが衷なる Ebenbild Gottes に対する畏敬、それは梵我一如の境地と相通する。真の宗教の究極的境地である。それをやきの《Werther》のくだりが既に暗示している。大自然にみなぎる神的な愛に「圧倒されて没落し、まいってしまつた」相対我の奥に与えられる絶対我である。無我即絶対我。おのれに絶するところに豁然として開示され、啓示され、与えられる絶対境である。おのれが無者とされるところに現する無限無量者である。超在の神霊が遍在し、貫在し、内在する相関相入の事態である。パウロが「キリストわが内に、我れキリストの内に」といった *ineinander* の事態、ペテロが「我を見よ！」といった「我」は「我が内なる霊なるキリスト」という一如の相である。いわゆるキリスト教的なもののアウトサイダーであった。ゲーテはキリストには無条件に *anbeten*

していた（一八三二・三・一一）。それゆえ実は神キリストの本願に應ずる真如のインサイダーであったというべきである。

Chorus mysticus

Alles Vergänglich
Ist nur ein Gleichnis,
Das Unzulängliche,
Hier wirds Ereignis;
Das Unbeschreibliche,
Hier ist es getan.
Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan.

Chorus mysticus.
Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis;
Das Unzulängliche,
Hier wirds Ereignis;
Das Unbeschreibliche,
Hier ist es getan;
Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan.

ゲーテの大作『ファウスト』最後の一句の筆跡
（本著作集第2巻『芸術のたましい』第316—321頁参照）

「日本ゲーテ協会「ベリひて」誌、第18号」

二九、自然・靈然

(一九七八年)

岩礁に飛沫を揚げて砕け散る潮の音に、懸崖の松が枝が松籟を奏でて相應えている天然の交響
楽！ 自然の風景は好いなあ、と誰しも讃嘆を惜しまないのである。

幼少年時代に聞きなれた「美しき天然」の歌曲は何歳になっても新鮮味を失わずに私の心を若
返えらせる。

「空にさへづる鳥の声

峰より落つる滝の音

大波小波靉々と

響き絶えせぬ海の音

聞けや人々面白き

此の天然の音楽を

調べ自在に弾き給う 神の御手の尊しや」

(武島羽衣作詞、田中穂積作曲)

人工の美が天然の美にかなわぬことを突いた名言がある。

「然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その装い此花の一つにも及^しかざりき」(マタイ六・二九)

言うまでもなくイエスの言である。天然の美は何もたくまない。天然の形態や色彩に不調和はないという。それはどういうことか。そこには不思議な法則がはたらいているからである。それを称して物理法則という。風の方向と強弱によって一葉の木の葉も微妙な変化を以て揺れる。それがまた人の眼に何とも美しいのである。法則といえば、「法」の字は水が低きに流れ去る相を見て作られた文字ではないか。漢民族の漢字の味とその考え方のすばらしさを想う。「法」とは極めて自然のすがたを表わした文字であった。森羅万象を支配しているのはこの法則であった。そしてこの法に即している相が天然であり自然であるのだ。

しかも日本は天然の風景が春夏秋冬の移り変りによってまことに美しい。そして四季には夫々季節にふさわしい野菜や果物が産出される。その季節季節のものこそ人間の味覚に最も快く感ぜられ、美味しいし、身体のためにもよい。植物界、動物界、人間界はそういう自然の奇しき法則

の中で健康であり、調和がとれており、生命の流転がいとなまれている。ギリシャの哲人ヘラクレイトスの「パンタ・レイ」（万象は流転する）は、そういう妙法を暗示するものと解したい。

現代人はこの調和や秩序を破って、時ならぬ時に季節はずれのを食べて喜んでいようだ。本当は美味しくもないし、健康にもよろしくない。見かけだおしの文明のゆきすぎはさまざまな不自然現象を起こし、いろいろな変質的なものが生じている。化学工業の発達、技術技能の進展と共に、多種多様な公害現象も起きている。今や真に健全な野菜や穀物や果物が稀有となってきた。これ皆自然の法則を破ったことに起因している。

人間界の法則は道德律である。これがまた似而非なる「民主主義」なるイデオロギーに毒されて、人道は地に墜ちた。古典的なものを弊履の如く「古い」という判断のもとに棄てて顧みない。孟子の四端は民主主義社会には不要なのか。

「惻隱の心なきは人に非ざる也。

惻隱の心は仁の端なり。

羞惡の心なきは人に非ざる也。

羞惡の心は義の端なり。

辭讓の心なきは人に非ざる也。

辭讓の心は礼の端なり。

是非の心なきは人に非ざる也。

是非の心は智の端なり。」

即ち思いやりは仁のはじめであり、恥らいは義のはじめであり、へりくだりは礼のはじめであり、わきまえは智のはじめであるというのである。現代の若者にいかに思いやりが欠けているかは、国電のシルバー・シートに若い男も女も腰掛けて、老人や子供を抱いている婦人などが前に立っていても譲ろうともしない場合が甚だ多い。私はやむを得ず世話をやいたりする。こういう現象が民主主義というもののなか。身勝手も甚だしい主義である。テレビに横行しているコマースャリズムの公害。末梢神経的な漫画雑誌や俗悪な週刊誌、怪物や架空的な形相の玩具類の跋扈が、幼年、少年、青年の各層の精神を蝕み、公害現象を起こしている。これらは幼年、少年、青年が必ずしも悪いのではない。むしろ家庭に、学校に、社会に責任がある。何といっても小学校から大学に至るまで、教育者自身に最も大きな責めがあろう。

「これを慮^{おも}うこといよいよしばしばにしてまた持続的であればあるほど、つねに新たにして増大する驚嘆と畏敬とをもって心情を満たす二つのものがある。それは

わが上なる星辰の天と

わが内なる道徳の律^{のり}」

カントのこのおごそかな言葉、自然界の法則と人間界の法則に対する厳肅な意識は現代にはもう「古い」のか。そうではない。人間が人間である限り、この自覚を失ったら、もう人間ではなくなる。孟子の「人に非ざるなり」である。

しかし残念ながら道德律の意識があっても、これを実践する力が微弱であるか、或は力があると思えば、あにはからんや、それが別な意識に毒されている。パウロが一応「律法の義については責むべきところなし」とまで自覚していたところ、実はとんでもない偽善であったことを知った。それはあのダマスコ途上で復活のキリストに靈撃をくらって「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」といって回心してはじめて知ったことであった。東西古今の真乎の宗教家は皆この「自我心」「我執」「罪」「煩惱」という心の癌と戦って、夫々の道でこれに打ち勝ったのであった。心癌がすがたをとった親玉はサタンであり、悪魔である。

イエスは神を「父」と呼んで、父神の意志におのれを全托して歩いた。だから彼は「父よ、汝の聖意を成させ給え」と祈った。それは傍観的ではなく、提身して「どうぞ私を用い給え」という意であった。だから彼は我意に死し、聖意に生きて歩いたわけである。彼はその意味で旧約聖書の特に第二イザヤ書に預言されている「エホバの僕」たるの自覚をもっていた。ルターが宗教改革に当って、かの人文主義者エラスムスの『自由意志論』(De libero arbitrio)に対して『奴隸意志論』(De servo arbitrio)を唱えたのは、この「エホバの僕」の真理の弁明であった。キリストは常に神の聖意を体现した。おのれを何ものともしなかった無私の実存者であった。それで私はキリストを「無者キリスト」と呼んでいる。この無者にこそ無限無量の、天衣無縫の自由が生きている。

南洲が、「道は天地自然の道なるゆえ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。己れに克つの極功は、『意なく、必なく、固なく、我なし』（論語）といえり。総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ」と喝破したのもこの精神である。

碧巖録の第一則に、「挙す。梁の武帝、達磨大師に問う。

『如何なるか是れ聖諦第一義』磨云く、『廓然無聖』帝曰く、『朕に對する者は誰なるぞ、』磨云く、『不識』……』と、いうくだりがあるが、仏道の極意（聖諦第一義）を武帝が問うたとき、達磨は「廓然無聖」と答えた。さすがは達磨さんである。仏道は広大無辺で聖という意識も越えたものという意で「無聖」と喝破した。もし聖と言いたければ「無聖の聖」である。聖俗相对概念の聖ではない。親鸞も「聖に非ず、俗に非ず」といったのは、そういう相対的な差別をも區別をも絶した境地である。そういう真諦は無漏法、無為法である。

キリストはある青年が「善き先生！」と呼びかけたら、

「何ぞ我を善しとするか。神の外に善き者なし」と道破した。キリストこそ無善者、無為者、無言者であった。神と一如となって無善の善、無為の為、無言の言が行ぜられたから、あのマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書に、展開してやまぬ絶対次元の驚くべき言行があふれているのである。おのれの自由意志に死んだ者にこそ、神的絶対自由、天衣無縫的な法がある。これ

を靈法と言いたい。

孔子が老子のことを次のように言つたそうである。

「鳥は吾れその能く飛ぶを知り、魚は吾れその能く遊ぶを知り、獸は吾れその能く走るを知る。

……龍に至つては吾れ知る能はず。其れ風雲に乗じて、而して天に上る也。今老子を見るに其れ猶ほ龍の如き乎。」「無為の爲」を道破した老子であるから、そんな生きざまであつたのであらう。

真に第一流の人物は、何らかの意味で相對界を突き抜けている。それは宗教家は言うまでもなく、詩人、哲人、芸術家、芸能人、実業家、政治家、教育者、医者、学者、仕事師等々。職業の何たるを問わない。そういう突き抜けた世界を靈法界と言いたい。神仏の法（ダルマ）がはたらく世界である。

キリストの一番弟子パウロは「生命の御靈の法」といった。彼にとつては聖靈の法である。キリストの十字架で贖罪された者にはたらくキリストの靈を聖靈と呼んでいるが、この聖靈の人とパウロは成つたので、あの使徒行伝に記されてあるような驚くべき靈的なはたらきを彼は行じた。

要するに広く言つて、この大宇宙には、たましいの世界の靈法、こころの世界の道德法、自然界の物理法（自然法）、といった三法がはたらいっている。人間はもと靈止と書いた（『大言海』

参照)。神靈の止まっているのが人（靈止）なのである。現代人はこの靈止に還るを要する。それは靈然たる世界である。

物理的な肉体的存在としての人間は、自然の法則に従って衣食住を営むべきである。余りにも作為的な複雑な文化文明のために人間は自縄自縛になっている。人間社会の夫々の問題は夫々の学問的な解決を相対的には必要とする。しかし、大きな深い盲点がある。それは一切の営みの中心、焦点には人間のたましいの世界、こころの世界、靈、魂、心、情の世界があるということである。そこに立ち帰って靈法に即し、靈法の靈然たるものを身につけよう。最も貴いものは万人が無条件に身につけることのできるものである。その唯一つの道は、全身を神仏の中に投げ入れる祈りである。南無（帰入、祈入）せん、である。我々のたましいが靈然たる相に、からだが自然の姿になってゆくことを念願しつつ筆を擱く。

〔独協大学学報〕第六号所載（昭和五三年度）

三〇、聖書はドラマである

(一九八〇年六月八日、京大会館にて)

キリスト教の經典が聖書であるという点、聖書は教えの書だと思いがちですが、聖書はイスラエル民族を中心とした歴史的な書物であります。御承知の通り、旧約と新約の両聖書から成り立っています。旧約がユダヤ人の經典で、彼らはしかし旧約とはいわないで、トーラー(律法)・ネビイーム(預言者)・ウー(及び)・ケスビーム(諸書)といっています。これらは具体的に歴史の中で啓示され、書かれたものです。新約はまぎれもなくキリスト・イエスが歴史の中心人物で、彼の直接の言動と使徒たちの歴史的な伝道と手紙と黙示の劇的な結集です。

全聖書の著者は、隠れたる神で、旧約においてキリストは隠れた主人公、新約では現わな主人公であります。旧約の広義の預言者たちは、その言動で知らぬ間にキリストを預言しているし、

新約では使徒たちがキリストの証者となっています。要するに預言者たちと使徒たちがキリストの証者ですから、イエス自ら、「聖書は私を証^{あか}しているのだ」といっておられるわけです。

ですから、聖書は神の史劇なのです。文学的形式としての劇作ではありませんが、聖書の内実からいって正に神が啓示した一大ドラマであります。それは万物創造のあかつきから、歴史の終末に大審判が来て、新天新地が出現するまでの大史劇であります。天界の絶対次元から地界の相對次元に、創造と審判と救済を多次的に展開している神劇であります。

大劇作家シェクスピアの全作品も、聖書一卷の内実には到底かきません。ダンテもゲーテもドストイェフスキも聖書なしにはあり得ないのです。

欧米文学の源泉が聖書であることはあきらかです（小池辰雄著作集第二卷『芸術のたましい』一三四頁参照）。

また歴史という言葉をもたないイスラエル民族が、本当の歴史を地で往ったのです。なぜでしょう。神が絶対界にあられる限り、あるはただ永遠ですが、神が創造のわざと共に自らを相對界に現じ給うと同時にそこに歴史が始まったからです。そしてそれが特にイスラエル民族にエホバの神として自らを啓示したことによって神の歴史、啓示史が展開しました。神が語るとそれが成る、事が生じてゆく。それが出来事であり、歴史であるのです。おもしろいことに、「言」というヘブライ語は「ダーバール」と言いますが、神が「語る」のは「ディッベル」と言い、起つ

た「出来事」も「ダーバールと言います。即ち「ことば」が「こと」と成るわけです。キリストが「わが言は過ぎゆかない」と言われましたが、神言は空しく消えず、神の言は成るから誠で、それが本当の神の歴史ですが、ただ人間の罪のためにその歴史がドラマとなりました。

創世紀の中には神話がいくつもありますが、しかし神話の形をもって、歴史的真理が、具体的真相があらわされています。アダムとエバの「樂園喪失」は正に神話ですが、人間の墮罪たざいの原始的真相がいみじくも示されているのです。所謂有史以前の原歴史ともいふべきものです。だから失明詩人ミルトンが畢生ひっせいの大作『パラダイス、ロスト』を書いたわけです。

ノアの洪水、バベルの塔、アブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）、ヨセフ等の始祖時代。モーセの出エジプト。シナイ山のモーセへの神の「十言」、約束の地カナンへのヨシヤの侵入。士師時代。サウル、ダビデ、ソロモンの単立王朝時代。北イスラエル王国、南ユダ王国の南北王朝時代。イスラエル王国の滅亡、ユダ王国の滅亡。両王国滅亡前後に輩出した文書預言者たち。バビロニア捕囚期。ペルシア王キロスによるエルサレム帰還。その頃現われた偉大な無名の預言者（第二イザヤ）の大文字——旧約聖書の最高峰——神殿再建後の祭司宗教、誠律宗教。紀元前のマカビ王朝時代。これが旧約時代の歴史の経過でありました（黒板に貼った四枚の年代表を指しながら説明した）。

エジプト、アッシリヤ、バビロニア、ペルシア、ギリシャの永い時代の諸背景のあとをうけて

ローマ時代となり、しかも世界帝国ローマの 아우グスト帝の時、ナザレの一角に人と成ったイエス。地上の第一人者の前に天来の唯一者が馬槽まぶねの中に生れ出でたとは。ふしぎな大コントラスト。正に劇的な出現。イエスの地上の生涯そのものが、絶対次元の人間が相対次元の中で言動するのですから、それ自体が普通のドラマでは見られない明暗の強いコントラストの驚くべきドラマです。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書くらいものすごいドラマはありません。聖書のドラマの中心は何といってもこの四福音書なのです。これをキリストの教などといって、何のかのと解釈上の議論などしていたのでは全くそれは射た矢が的まとどころかとんでもない土手の草むらに落ちてゆくといったものです。四福音書を開いたら、その劇中に自分を投げ入れる気合でこれにあたって下さい。そしてキリストの言動に体あたりして下さい。そして、いかに彼の言葉が、行為がケタはずれのものか身を感じるでしょう。そして、文句を言わず、頭をひねらず、正直に「参りました」と降参しなさい。聖書は降参するとその扉が本当に開かれます。降参するまでは、「七つの封印」をされた本ですよ。無条件降伏！ 平れ伏し。そうすると聖書の現実が見えてきて、光を浴びるようになります。ヴェールがとれて来ます。キリストのあついいのちの力、愛が迫って来ます。その決定的な焦点があります。

それは十字架です。十字架上のキリストです。我々一人一人の我執がしゅうという罪を全部ひき受けて

下さったキリストの十字架です。聖意体現を以て義を現じ、贖罪愛を体現している十字架のキリストに圧倒されます。主様！沈黙の雄叫びか、号泣か！そこに聖霊が臨んで来ます。全身がしびれるかも知れません。

復活の主がパウロに現われなさったように、義にして愛なる主は我々を圧倒して抱き給う。

使徒行伝のペテロもパウロもそのようにキリストに圧倒されて回心、新生しました。使徒行伝も、聖霊が著しくはたらいっている使徒たちのドラマです。だから私は聖書は教えではない、ドラマだ。ドラマの中に投身しなければ救われないのだと叫ぶのです。（人類救済の啓示史の特別な図表を指しながら語った）。

使徒らの昔を慕いて我は

聖書に読み入り祈りてあれば

聖霊のわが主はわが身を抱き

十字架に耐え得る力を賜う。

（召団讃歌第七番第一節、讃美歌三五九番「夕陽はかくれて」の曲で）

「エン・クリスト」創刊号、一九八〇年夏季号」

三二、 本来無一物

(一九八〇年八月二〇日)

禪宗の第五祖弘忍禪師の門下は七百名の大叢林をなしていたという。師はそろそろ衣鉢を嗣がせようと弟子たちに一偈を作つて呈すべく求めた。弟子たちは首席の神秀にはかなわないと思つて誰も作ろうとはしなかった。神秀は即ち一偈を案じて廊下に掲げた。

身^ハ是^レ菩提樹。心^ハ如^ニ明鏡臺^ノ。

時^メ時勤拭^{セヨ}拭。勿^カ使^{ムル}惹^カ塵埃^ヅ。

五祖はこれが神秀の作であることを直覚した。門人たちもこの偈を誦して大いに称賛した。ところが一兩日にしてその傍に次のように書いた者がある。

菩提本無^シ樹。明鏡亦非^ズ臺^ニ。

本来無一物。何處^{ニカ}惹^{カシ}塵埃^ツ。

弟子どもはこれを見て驚きあやしんだ。五祖も之を発見して驚異した。門弟たちがこの筆者を知ったら作者が害されることを虞れて五祖は鞋で擦り消し、「こんなものは何でもないと皆のものに言い放った。しかし禪師は日頃米搗小屋で碓^{いし}を踏んでいる農家出身の廬能が非凡な魂であることを認めていたので、ひそかに碓房^{たいぼう}を訪ねた。禪師は碓を打つこと三下^げして去った。廬能は師の意を会して夜三更に師を訪ねると仏衣^{ぶつえ}衣鉢を嗣がしめられて一躍第六祖に選ばれた。後の慧能禪師これである。

弘忍禪師は、衣鉢が公認の一番弟子神秀にわたらぬとなると、一大騒動が巻き起ることを察知して未明に廬能を伴れて九江駅に至り着き、自ら鑪を把って彼岸に渡してやり、別れに臨み、三年もしたら私は世を去るだろう。汝は南進して期が熟すまでは説法を控えよ、と訣別の言を告げた。廬能は師のこの恩義に感泣して別れた。一ヶ月余も経って大瘦嶺^{たいせうりやう}に辿りついた。果せる哉、この事態を知った門弟どもが大挙して追跡して来た。その首領は慧明^{えいめい}という男で粗暴な壮士である。遂に廬能の居処を探しあてた。能は明の欲するところを察して、衣鉢の法衣を無雑作に石の上に投げた。「此衣表信^{ハハスツ}可力^{ケンモチ}争^フ耶、任^ス君^ノ将^ル去^ニ」^ニと言い放った。そこで明はこれを取り挙げようとしたが「如山不動^{ニカ}」であった。何もその法衣が物理的に重かったのではない。実は廬能の霊言の響きと法衣にかかっている法威^{ほうい}のために強力^{ごうりき}の慧明の心も腕も霊縛^{れいばく}されて

動かなかったのである！これに参った慧明は廬能の前に身心を投じて法を求め、俄然大悟したのである。

以上はかの『無門関』に記されてある有名な廬能鉢嗣承の一齣のあらましである。

本来無一物。まことに然り。我々は存在そのものが、父母から、民族、社会、国家から、大自然、創造神から賜ったもので、霊界及自然界のたまものである。我々の住む地球もそれ自体は太陽からのたまものであり、地球とその上の万象は太陽の引力と光熱によって在らしめられている。地球が太陽に絶対依存の存在であるように、魂を中心とした人間存在は神的絶対者に絶対依存している。現代人はこのことにあらためて気がつかねばならない。人間は本来宗教人なのである。「汝の中に安ろうまでは平安を得ぬように汝は我らを創造した」とアウグスティヌスが告白している通りなのである。

我々は霊肉共に「本来無一物」的所与である。自分は何ものでもない。神一切である。となして神の中に投身し、即神して生きていた唯一人の例外者があつた。それはナザレのイエスであつた。

「恵福なる哉、霊の貧者は。天国はその人の有である」(マタイ五・三、私訳)。これは「山上の垂訓」の第一声であつた。私はこれを垂訓というよりむしろ「山上の大告白」と申している。キリストはいかなる一言も全存在的体験から告白しているからである。彼自身、おのれを何ものとも

しなかった。これが靈の貧者ということである。だから私はキリストを「無者」と申し立てる。彼にとつて天国とは神そのものであった。だから神と自分とは一如だということであった。無者となつたら、即無限無量者となつたということである。だからキリストは「我を見し者は父（神）を見しなり」とか、「我と父は一つなり」とか言えた。何とすばらしい在り方だろう！「無的実存」と私は申している。信仰の奥着は実はこの境地に在る。我々が如何にして質的にいささかなりともそのような境地につらなり得るかについては別な機会に語らせていただこうか。

民主とか自由とか自主とかいうけれども、実は神仏の前に無条件降伏しない限り本ものとはならない。南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華經、南無キリストである。南無とは帰依、帰入、祈入である。そのとき初めて靈止（神靈の止まりたる存在、大言海参照）となる。東西の政治家たちが豁然とこのことに目醒めて、イデオロギーはイデオロギーでよいから、超イデオロギーの世界に躍り込んで本當の靈止となり、人間愛を以て握手しない限り、この世紀末は本當に危い。

政治家と言わず、あらゆる社会層の人々が、特に教育者がこのことに醒めて、精神革命を起せよ、青年よ、東西の大宗教家を学んで立ち上れ！と申したい。

三三、 信仰と神学

(一九八〇年秋)

ルターは哲学探究者としては人道主義者^{フーマニスト}であつたが、その限界を知つて、天来の真理を探究する神学に突き進んだ。キリストの福音に神の義を発見するに及び(ロマ書一・一七)、啓示の真理に魂が力を得るを覚え、彼は神学を魂の学問として尊重した。彼がゆくりなくも発見した無名の神学書が、スコラ神学とはちがい、正に魂の神学、神秘的な深みのある書であつたので、彼は非常に欣び、これを『ドイツ神学』(THEOLOGIA GERMANICA)と命名した。

私はかつて無教会陣営に育つた者であるが、無教会は神学を信仰の阻害者の如く見なして、これを疎外した。ただわが恩師藤井武先生は神学にも関心を有ち、「歴史的に跡づけた聖書神学」なる講義を新町学廬と名づけた夜学で開講したが、惜しくも未完のまま世を去つた。

その後私は佐藤繁彦先生の『ルッターの根本思想』という神学書（博士論文）を読んで非常な感銘を受け、神学はかくも魂の学問であり得るのだ、ということに目醒め、無教会が神学を軽視する非を思い、バルト、ブルナーなども読み始めた。そして内村・藤井両先生の召天二十周年（一九五〇年）記念論説として「無教会神学論」を書いた。それからまた三十年経った今日、「無の神学」という狼火を挙げることになった。

信仰と神学。これはどういう関係のものか。譬えてみるなら、帆船が海を渡ってゆく。天つ風はキリストの福音である。風を孕む白帆は即ち信仰である。では神学は何だろう。羅針盤ではないか。帆の角度だけでも方向は大体定められ得る。だから帆たる信仰に羅針盤たる神学は不可欠ではない。しかし、魂の神学は信仰に深い自覚を与え得る。

人間が知情意の三要素をもつ全人である限り、魂の世界での意（エトス）的信仰、知（ロゴス）的神学、情（パトス）的音楽の三面を自由に各人の個性にふさわしく有つことは望ましいことである。宗教改革者ルターは正にその典型的人物として、信仰と神学と音楽を渾然不可離の關係に於て有っていた。そして使徒パウロこそ、その驚くべき原型であった。それを可能ならしめたものは聖霊の力であった。

三三、「聖靈の華」

(一九八〇年二月二五日)

今から三十年前、一九五〇年の晩秋、紅葉の錦織りなす大阿蘇のふとところで、今は天界の手島郁郎氏と聖会をもった。その日を「幕屋」のペンテコステとして記念する「原始福音」の大集団にこの間招かれて参加し、二度ほど私の信仰告白をなし、一同と全身全霊を以て聖名を讃えた。

大阿蘇のふところは、そのとき私にとっても正にペンテコステの場となった。十字架のキリストを瞑想した全身的祈入において、天から直接、聖霊のバプテスマにあずかり、おのずから異言が迸った。それは瀧見荘という小さな宿であったが——今も昔ながらのすがたをとどめていたのを感じ無量であった——、そのペンテコステの帰路、車中で聖書を繙いたら、聖書のヴェールがとれていた。というのは聖言が躍動して身に迫り、聖書は正に聖霊の次元の書であることがハッキリ

リしたからである。

如上の聖霊体験以来、私の信仰は次元的飛躍をなし、観念的な信仰の域を脱した。使徒たちの次元が慕わしくなり、天界の使徒たちと共にキリスト直結の信仰に生きるほか願いはなくなつた。その翌年十二月二十五日のクリスマスのことである。ある会員が、「先生のお宅に近づいたら、屋根に天から銀の柱が降りて来たので、今晩は大変なクリスマスになると予感しました」とあとで語つた。俄然、不思議な異象が起きた。

ある人を按手していると、その人が靈歌をおのずから歌い出した。全身み靈のバプテスマを受け、杖について来会していたこの人は帰りにはその杖が無用となつた。

またある人は肋骨カリエスを患っていたが、私が按手して祈ると、その人は地上では見たことのない大輪の白百合が靈幻の中に咲き出すのを見た。そのうちに白き衣を着た姿が現われ、「我れはそれなり」とのみ声。それは正にキリストの靈姿であつたという。この按手の祈りと共にその病は治つてしまつた。

またある人は、祈禱会の中で輝く一つの星を靈視した。そのうちに銀河の如き流れの中から大合唱が聞こえて来た。やがてみ空に黄金色の指揮棒が現われた。そのタクトの動きに伴われて歌われる大合唱の天的なひびきはベートーヴェン、バッハを凌ぐと思われる大カンタータ（交声曲）である！ そのうちにそのタクト・シュトックは白き衣の人の手にあることがわかつて来た。

「我、汝と共に在り、雄々しかれ！」とのみ声が聞こえて来た。その御姿が消えると、さきの星が一つ、み空に輝いていた、という。

その他、集会員の誰も彼もふしぎな聖霊の体験をしたことを証言した。各会員の背後に白き翼の天使が二人づつ立っているのを見た会員がある。私を七人の天使が半円形に囲んでいたという。私は今もただ平伏すのみである。

この聖誕節の贈物は正に聖霊そのものであった。聖霊の華ともいいうべき異象の事態続出であった。聖霊は今日に至るまで、随時随所で私を通して力を現し給う。

しかし大切な一事は現象の奥の聖霊の根源現実たる「エン・クリスト」(クリストの中)に生きてゆくことである。そして聖霊の土台は十字架であることを夢忘れてはならない。

「『キリスト新聞』第一七二号、一九八〇年十二月二十五日クリスマス号」

三四、歴史をつくるもの

(一九八〇年十二月)

『独協学園百年史』(本史)の傍系書としての『独協百年』もここに第四号を出版することになりました。関理事長の独協学園に対する献身的な御愛のゆえに、この仕事も支障なく進められ得るのを、我々編纂に関っている者一同は心から感謝しております。そしてまた主任斎藤博教授の超人的な編纂の力量を私は委員長として常々有難く思っています。

『独協百年』第二号、第三号に「独協教育の源泉から」という項目があり、その第一回として「大村仁太郎先生著作選」というのがありますが、これには、いかに家庭教育が大切であるか、色々な角度から縷縷と述べられており、当今の親たる者も大いに傾聴すべき文字が多々あります。

私は大村仁太郎先生の『桃園漫筆』なる書を読みました、その中に「ナポレオン一世の母」という項目があります。それによると、「彼の両親が性格上天淵の差を有して居ました為め、一に母の教育によつて、稀世の英雄となつたのであります。」と書いてあるように、大ナポレオンを成した源泉はやはり母親にありました。私はかなり偉人の伝記を中学時代に読みましたが、殆ど例外なく偉人の母親は心根のよい、そして大方神仏に対する畏敬の念のあつた女性たちでありました。

ナポレオンの父は奔放な性格の人でありましたので、遂に不治の病にかかり、傍若無神の生活の非に目覺め、晩年に敬虔の念を起したのも、一切のマイナスを自ら荷い、夫を忍び、子らを育てた健闘の母、愛情深い母、信仰の熱い母の実存の力によつたことがわかります。母レチチアの言に、

「子供の教育には、深く之れを愛する時と、厳しく之れを躾ける時との區別を立てて置かねばならぬ事と信じますから、妾は常に此方針を誤らないように心掛けたのであります。妾の子供等は、真実此の御庇で、親を尊敬し、よく其命令に服従するやうになつたのであらうと思います。」とあります。

大英雄ナポレオンはセント・ヘレン島で次のように述懐するのです。

「余の少年時代には、喧嘩口論の絶間なく、実に人一倍粗暴な男兒であつた。母は余の悪行を毫

も恕する事なく、厳格に懲罰したが、愛には偏頗なく、偶々美事を為せる時には口を極めて賞賛したのである。嗚呼余に与へし母の感化は、実に偉大である。余の有する総べての嗜好と総べての長所は本来悉く母の賜物である。」

そしてこのナポレオンも父の晩年の如く、この孤島で、福音書を繙き、次のように告白しました。

「福音書には不思議な力がある。……福音書の内容にふかく思いをひそめると、まるで天空でもながめているときのような気持になる。福音書は書物ではない、行動能力をそなえた生きものである。そしてその布教に反対するすべてのものを引きさらってゆく力さえ持っている……」

キリストは語る。かくしてもろもろの世代は、血のきずなよりもさらに緊密な、さらに深く心こまやかな絆によって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たせる。これによって、何よりも強力な利己、自愛は打ち砕かれる。我々は彼の意志のこうした奇蹟から、どうしてこの世を創造してゆく言葉を認めないでおられようか。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなくこうした慈愛（カリタス）の国である。

あらゆる時間的な限定を打ち破って、人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊の絆を創ることのできたのは、ひとりキリストのみである。なぜなら……こうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間悟性を以てしては如何ともしがたい現象であ

るこうした不思議な愛を感じるからである。それは、この新しいプロメテウス〔勿論キリストのこと〕によって地上にもたらされた聖なる火〔聖霊の愛のこと―筆者註〕であって、偉大な破壊者である〔時〕でさえも、これを消すことはできない。……全世界で愛され、畏敬され、伝道されているこのキリストの永遠に活ける国と、この私のひどいみじめさは、本当に何というちがいであろうか。」

〔註〕以上のナボレオンの言葉はヒルティの「病める魂」という論説の中に引用されているもの。

さすがはナボレオンです。福音書の本質をずばりと語ってくれました。これもしかし、ナボレオンが母の信仰心から潜在的に受けていたものが、火山のように爆発したわけでしょう。

アメリカの詩人にして奔放な社会評論家でもあったワルト・ホイットマンがいみじくも喝破しました。「人の母たることは最大の事業なり」と。

実は歴史をつくる隠れた力は母親にあるといって過言ではありません。このことは何も偉人の母に限りません。中学・高校のPTAのお母様方がこれを他山の石として下されば幸いです。

今の独協学園には草加の独協大学と壬生の独協医科大学に女性諸君がおられますが、自覚を新たにしてもらいたいものであります。母たる女性の使命と栄光が那邊にあるかに想いをいたして下さい。

三五、終末的追求

(一九八一年、年頭講筵要旨)

新年を迎えて二十世紀の終末期にいよいよ突入した感があります。元旦、私はまず国旗を門頭に高々と掲げました。日本の日の丸の国旗は世界八十数ヶ国の中で独一なものではありませんか。なぜ日本人は国旗に誇りをもたないのですか。ギリシャ芸術は „Stille Größe, edle Einfalt“ 「静かな偉大さと崇高な単純さ」をもつ、とヴィンケルマンが評しましたが、日本の国旗は正にそれです。国旗を尊重することを以て軍国主義だとか国粹だとか思う偏見を棄て、世界に真に貢献すべき日本という自覚において愛国精神を高揚すべく、国旗は尊重さるべきであります。

元日の晩は「バス停」とかいふマリリン・モンロー主演の映画を見ました。その美の魅力と天性の無邪気さが、その妙技に於て彼女を「永遠の女優」にしたことを感じました。彼女の悲劇的

な終焉が却てその永遠性の質を裏つけたとさえいえるでしょう。

二日の正午からまる半日、こんどは「それからの宮本武蔵」に観入りました。主役は万屋錦之介。武道を文字通り生命を賭けて追求し、死の瞬間まで夢にも剣を棄てなかった彼のつらだましい。見るもの聞くものに於て師を見て精進するその魂胆。戦えば敗れることを知らぬ気魄と神技。霊的靈感のひらめく武道。もし評し得べくば、もう少し八方破れの余裕と禅味が。ともあれ前篇後篇の全武蔵をあのようになで演じた錦之介は大したもの。武蔵そのものは「永遠の剣聖」。モンローは女優としてのいのちを燃やした、武蔵は両刀即無刀に戦い抜いた。大切なのは「一以貫^チ之^ッ」の精神。万人の生き甲斐はそこにあります。

そこで今日（一月四日）の年頭集会にあたり、私はピリピ書第三章を選び、使徒パウロの信仰のすがたにおいて、終末的^テ追求^クというものを見、我々の在り方としたいわけであります。今端的に第三章十二節から十四節を私訳しますと、

「私はすでにキリストを受けとったというのでもなく、またすでに全うされたというのでもなく、私がキリスト・イエスに捉えられたと正に同様に私もどうしても捉えようと追求している。兄弟たちよ、私自身はまだ捉えてしまったとは見なさず、ただ一つのことをのみ！（即ち）一方では後方のことどもを忘れ、他方では前方のことどもに向って励み、目標のゆえに、キリスト・イエスに在っての神の召命なる天上の戦賞を追求している。」

即ちパウロはローマの獄中に在りながらなお屈せず、キリストの聖靈に満たされて歓喜と希望の中に、ピリピ教会の人たちに、烈々たる気魄を以ってこのように告白しています。彼は殉教の死を覚悟の上、既に死を突破してキリスト追求の一念に燃えていました。しかもこの追求は、「キリストに捉えられている」という裏づけのもとであることを見あやまつてはなりません。キリストに捉えられているということは、み霊の内在、即ち「我キリストの内に」「キリスト我が内に」という「エン・クリスト」の現実に在ることです。であるが故にいよいよキリストを追求してやまないのです。このことは聖霊の体験がないとわかりません。それは而も、つねにみ霊の力に推し出されての追求で、いわゆる努力精進とはちがうのです。運命や環境の如何に拘らず、否、逆境に落ちれば逆に、中傷や迫害や、四面楚歌の声であればあるほど逆に、キリスト追求は強化され、靈的次元は高次になってゆきます。私自身キリスト数界のある群からそのようにとりあつかわれています。しかしありがたいことに私はキリストに深く顧みられております。パウロが同じ三章の二〇、二一節で、

「我らの国籍は天に在る。彼処からの救主イエス・キリストの再来をひたすら待っている。彼は我らの卑しき体を変貌させて、彼の栄光の体に同化させ給う。それは万物をおのれに従わせ得る能力によってである。」

といっているように、この光榮を思うとき、パウロと共に我々もキリストを追求してやまない

のです。これを終末的追求と私は表現せざるを得ません。ドイツ語でいうなら、Eschatologischer Drang です。聖霊によってキリストのみすがたの中核を与えられつつ、完成を願う追求です。そしてひとりびとりは天下一品のにされるのであって、決して類型的ではありません。万人は眼が二つ、口が一つですが、万人は顔がちがいます。これが神の芸術作品には同じものなし、というわけで、それでこそ百花繚乱であり、大交響曲であるのです。

グリルバルツェルがベートーヴェン記念碑の除幕式で述べた名演説の中の一句に、

„Nach einem trachtend,

um eines sorgend,

für eines duldend,

alles hingebend für eines,

so ging dieser Mann durch das Leben.“

「一つのことを追求しながら、一つのことに心を用いながら、一つのこのために忍びながら、すべてを一つのこのためにうち棄てながら、この人は生涯を貫いた」。それは彼にとって音楽でした。我らも各自、み霊の力で一つのことをやり遂げよう。そのことが即ち福音の証者となることです。

〔「エン・クリスト」第三号、一九八一年二月〕

キリストの福音誌(季刊)

エン・クリスト

EN XPISTO

主筆 小池辰雄

1982年8月 夏季号

——第10号——

召団讃歌 52 「イエスカペナウムに」

一九八二年春期京都特別集会報告

奥田昌道

春期京都特別集会を終えて 森 満夫

証言 (36) 人類史の核心 斎藤 博

(37) 聖書愛読運動 岸 千年

無の神学の焦点 小池辰雄

(38) 一大告白 芳賀 檀

(39) エペソ、ヒリビ、コロサイ 喜多村得也

(40) 世界は一つ、愛は一つ 安積得也

(41) アルキメデスの一点 大木文雄

埼玉召団創立五周年特集報告 針谷康正

札幌召団創立特別集会報告 水谷元信

三六、新宗教改革

七七路の峠にて（一九八一年二月七日）

ルターはヴィッテンベルク城教会の門扉に九十五ヶ条の提題を掲げてローマ教皇の免罪符に対する神学的反論の火蓋を切った。そのことが期せずして宗教改革の導火線となった。

その歴史的提題の第一条は、「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせよ』』と言ひ給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを欲し給うた、というのである。この一言は、この全提題の根本命題である。イエスの伝道の第一言は、「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」（マタイ四・一七）であつた。「汝ら悔改めよ」はヘブライ語では「シェーブー」であり、ギリシャ語では「メタノエイテ」であり、ラテン語では「トランスメンタミニ」であつて、「立ち帰れ」であり、「心を翻えせよ」であり、「心を回らせ」である。即ち自己中心の心を転回

して神中心になれ、ということである。これは謂わばたましいの世界のコペルニカスの転向をなせ、ということである。而も全生涯を貫いて新たに神キリストに転向しつつ進め、というのがキリストの聖意である。このことは単に個人の生涯に於て福音的真理であるばかりでなく、各時代に妥当する真理である。ルター、ツヴィングリ、カルヴィンの宗教改革のあと、プロテスタント教会史はしばしば革進の運動を見た。プロテスタンティズムは自己自身にプロテスタントすることがその本質である。諸宗派が生ずるのはやむを得ない。問題はその特殊性、相対性の中に絶対的なもの、聖霊があるかの一事である。聖霊があれば多即一、一即多の真理が実証される。パウロのコリント前書十二章、十四章がそれだ。

日本では内村鑑三によって無教会という現象が起きた。ルター的な「信仰のみ」を徹底させようという精神である。私もその流れに育ったものだが、一九五〇年の晩秋、大阿蘇のふところにある滝見荘で手島郁郎氏と集会を共にした際、この集会に聖霊のペンテコステ的降臨が起きた。ここに彼と私とは無教会の陣営を出て、福音の原始に、使徒的次元の信仰に立ち帰ることを期せずして夫々宣言することとなった。十字架・復活・聖霊不可分のキリストへの直接的帰入であり、祈入である。今や全キリスト教界は天からこのことを新たに要められている。我ら日本キリスト召団もその一環を承ってカイノス的（新）改革を営む。

三七、宗教と文化・文明

(一九八一年三月)

(1) 総説

私はこれから十四回に亘ってメモ的な文章を「である」態で簡潔に書きますが、読者の皆さんは私の心からの手紙と思ってお読みねがいます。

二十世紀はあと二十年。大きな曲がり角にさしかかっている。しかも馬手^{めて}には伸し掛かる絶壁、弓手^{ゆんで}には千仞の断崖、正面には煙を吐いている火山、といった山路。二十一世紀の峠までの峻路をどう辿りゆくか、実に世紀末の様相の現実。ダンテもこんなブルガトリオ（淨罪山）を予

知できなかった。

私はある時、窓への木立を見てハタと想い当たった。宗教と文化・文明の關係は、根と幹や枝葉に喩えられるなあと。根は宗教、幹は道徳、枝葉花果は文化・文明といった關係ではないか。人間は誰しも魂がある。たましいは人間存在の中核である。そして魂は宗教界のもの、然らば万人は本来宗教人である。大言海の「ひと」という項目に「靈止」と記されてある。「ひと」は本来、神靈の止まっている存在という意。受靈うけいという語もあるわけ。古代人はそういう自覚をもっていた。イスラエルの神話にも、「神、土塵を似て人を造り、生氣をその鼻に吹き入れ給へり、人即ち生靈（ネフェシュ・ハヤー）となりぬ」（創世紀二・七）とあるが、これは人が地的な要素（肉）と天的な要素（靈）から成っていることを語る神話的表現である。

種子が地中で破れて先ず生ずるのは根っ子、それから芽が出て地表を割る。その如く人間の魂が宗教たる絶対界の靈氣を吸うことが根底になれば、道徳、文化・文明に本当の生命が流れない。根と幹枝葉花果は方向が反対に伸びる。しかも相連っている。宗教を文化現象の一つと見るのは誤りで、宗教は文化・文明と次元がちがう。根底には深い宗教心をもたない道徳は硬化したり偽善となったりする。永遠の生命を根として有（も）つ幹なる道徳に連なる枝葉花果としての文化・文明は健全な展開をしてゆく。一本の木が私にこように無言の中に語ってくれた。

見えない絶対次元の宗教。根が極めて大切。二十世紀という木の根が枯れてきた！

(2) 教師

私は二十五歳で教職に就き、七十五歳で退職したから、教職生活五十年間であつた。私の専門はゲルマニステイーク（ドイツ学）で、中学、高校、専門学校、主として大学の各種の学校で文科系の学生にも理科系の学生にも接した。

ところで教師という言い方は第三者のひびきであるが、先生という言い方は第二人称的なひびきを持っている。「先生」といって尊敬され親しまれるに価する先生であることが、教職者の実際の資格であらう。

学校教育で一番大切なのは、教師たる者の内実如何の問題であつて、教育制度や教育施設の問題は第二、第三義的なことである。

それでは教職者はどのようにして信頼するに足りる（先生）となり得るか。それは教職者自身の修養と研鑽に俟つよりほかに本質的な道はない。

日本の各社会相の文化的諸事象、文明的諸現象の良否は、それを営む人々の人間と実力に因る。それを煮つめてみれば、その人々の受けた教育に因る。そしてその焦点は教職者自身の問題に帰着する。小学校から大学に至るまで、教職者の責任は実に重大である。

私も小学校六年間、旧制中学五年間、旧制高等学校三年間、旧制大学三年間という教育を受けて来たが、心にいつまでも遺り、感謝の念を以て思い出す先生方は、当該科目を全人格的な熱意を以て教えて下さった先生方、生徒の個性と能力を愛を以て願ひ且つねんごろに導いて下さった担任の先生方である。徳育、知育などと言うが、自ら人格的な修養を積み、自ら研究を深めてやまない先生が熱意を以て教えるとき、それがおのづから徳育であり、知育である。ここには教育の方法論など語る違はない。

私は某中学・高校の校長を十年間勤めたこともあるが、全国高校校長会議の席上で、三度、校長たる者、まず山に籠って瞑想してから教育をしようではないか、などと叫んだ。教育の源泉こそ実は深い宗教心にあると思うからである。

(3) 両親

少年・青年の教育の任に当る者が、学校の先生と家庭の両親に在ること論を俟(ま)たない。子は親の血を頒った存在である以上、実は教育の人間形成の面で重責を負っているのは両親である。父親は外で活動する面が多いから、直接には何といっても母親が家庭教育で最も責任がある。「人の母たることは最大の事業なり」とアメリカの詩人にして奔放なる社会評論家であった

ワルト・ホイットマンが言った由。全く然りと思う。その意味でも歴史を作る隠れた力は女性である。

私は明治の人間であるが、昔の母親と今の母親の印象を比べてみると、現代のお母さんは概して甘い。昔は親の言いつけは「ハイ!」とはっきり返事をして実行するように躰(しつ)けられた。起床、就寝、登校、帰宅のときの挨拶も礼儀正しい姿勢でするように躰けられていた。孝道という心の道は、民主主義と何ら矛盾するものではない。両親も教職者もこの点の自覚を新たにしていたきたい。

母親は、愛を以て自由の心を伸ばし、義を以て命令や法則に服従する精神を身につけさせるべきである。それは日本刀を作るとき、軟らかい心鉄と硬い鋼鉄性の外皮とを組み合わせ鍛え上げるように。自由によって責任が自覚され、服従において克己心が養われる。母親の躰が子供にとって如何に大切であるかを痛感する。

しかしそのために母親も父親も、どういう心根で育てるべきか。教育は技術ではなく道である。日本人は本来道の民ではないか。茶道、華道、書道、画道、弓道、剣道、柔道、土道、人道、天道、というのは、夫々の奥義が道であり、それを身につけようと追求する態度もまた道であるところに日本古来の道の精神がある。

道は魂の問題にかかわっているから、結局宗教心を身につけていないと根本的な子供の教育も

できない。偉大な人たちの伝記を読むと、殆ど例外なく母親が宗教心のあつい人たちであった。世の母たる人々の、神仏に対する畏敬の念を以て自ら生活することが、家庭教育の源泉たることを銘記されたい。

(4) 生徒

人間には誰しも天賦の才能資質がある。小学校時代には特に親が先生と協力のもと、これに注目してその芽を正しく育ててやる必要がある。中学時代には担任の先生がそれをよく認識して楽しく強く伸ばしてやることが肝要である。高校生になったら、自らおのが天賦を自覚して、自彊すべきである。

各自天賦のあるところにその生徒の生涯の天職と使命がある。それゆえに大学進学コースはおのずら定まる。高校生はこの自覚のもと、旺盛なる気魄と熱意を以て、猛然と勉強すべきである。否、せざるを得ぬ。そこに勉強の醍醐味がある。

ところがこのような勉強本然の相が、わが国では受験々々の障害のために、いかに害われているか。所謂受験勉強のために、天賦の才能資質を充実、伸長させることが非常に防げられている現況ではないか。またそのために体力も消耗しがちであり、肉体の鍛練が欠如している。こうい

う歪んだ受験勉強のために、点数で生徒の価値が計られるかの如き偏差値によるランクづけの如き現象がおきている。これでは教育の本道いづこに在りやである。「落ちこぼれ」といった人格を侮辱する言葉が平気で用いられるとは何ごとか、と思う。

教育制度上の欠陥やその他の種々の因子——両親の不和、漫画、映画、テレビのコマーシャルズ等々の悪い面——も加わって、非行少年の数は増し、質は悪化してゆく。一方では予備校や受験熟の乱立。あるドイツ人が「ガンツ・シュレックリヒ！」（全くおそろしい）と嘆いていた。同じ敗戦国ながら、ドイツでは「ウンデンクパール」（考えられない）といっていた。日本の教育現状は、大改革を要する国家の精神的大損失ではないか。気の毒なのは青少年である。

さもあらばあれ、如何なる環境、運命にも屈せず、青年はおのが「無碍の一道」を貫くべし。兼好法師の『徒然草』第一八八段の左の名言を銘記されたし。

「一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず、人の嘲りをも恥ずべからず、万事に代へずしては、一の大事成るべからず。」

(5) 学校制度の精神

ここに学校制度の精神が那邊にあるべきかを考えて見ようと思う。教育の対象は生徒である。

生徒は各個人天賦の資質才能を賜っている。それゆえそこに天職が約束されている。然らば、それに出来るだけ応ずべき有機体的な制度があるべきである。学校という人格協同体における個人をよく顧みるには、昔の儒者たちや、幕末の象山、松陰の如き塾的精神が貴ばれるべきで、それには制度の主体たる教育者自身が、その自覚で弾力性を以て制度を運営すべきである。

「三つ児の魂百まで」と謂われているように、まず保育園や幼稚園における温かい明るい指導のもと、園児は規律に楽しく順うようになること。所謂「聞かん坊」は時に厳しさを味わされること。こういった精神が生きた無法の制度というもの。幼児の魂の純真さを貴び、そこに天使のすがたを見たいものである。

ヒルティが「人生の諸段階」という論説の中で、「人生のあらゆる時期に、夫々独特の所産を堆積して、それを人間の中に止めておかねばならない。子供の頃には子供らしさを……」といっているように、小学校では基礎科目習得の傍ら、世界的名著の小学生版を必ず読むように指導すべきである。テレビや漫画のコマーシャルズムにひきまわされている現況は寒心に堪えない。

中学及高校の英語教材も英米の歴史的に著名な人物に触れるようなもの、名詩などを織り込むべし。漢文も古典的名篇をもっと味わせること。漢字は世界最高の文字である。

高校から、文理科系を分けて科目の選択を自由となし、天職へのコースの自覚を持たせること。入試制度こそこの観点から大改革を要する。公・私立全国各大学各学部は夫々特色を発揮し、

然るべき僅少の受験科目を以て受験生の意欲を高めるべし。各種実業専門学校も存在の意義は大きい。全く同じ精神で入試を。社会に於ては各個人の人格と専門的実力のみが価値あり。学閥的判断は雲散霧消さるべきである。

(6) 民主主義

日本は第二次大戦敗戦後、民主主義を国是とする国になった。民主主義は周知の如き、ギリシヤの政治思想に発したもので、原語のデーモクラティアは、デーモス（国民、人民）・クラティア（統治、権力）という合成語で、日本語化しているデモクラシーは即ち民権政体、民主制であり、従って「民主主義」の事でもあり、国民の在り方一般の社会性を意味する事になっている。わが国では歴史的に長期に亘り封建主義が根を張り庶民は塗炭の苦しみを嘗めながら、権勢の下、精神的に半奴隸的生活に甘んじてきた。明治維新を迎えて封建制度は崩壊したが、封建的精神は社会の中に尾を曳いていた。文明開花、国力増進と共に軍国主義的になり、日清、日露、第一大戦と戦勝を誇って来た日本は、限度を越えて日支事変となり、ついに第二次大戦で全面的な国の崩壊を招来した。

日本はここに明治維新とは異った昭和維新を真剣になすべきであった。一億総懺悔は空念仏に

終り、主権在民の民主主義が思想的な研究と自覚の乏しきままに急速に謳歌され、無制限な自由、無秩序な平等が知らぬ間に横行跋扈し、終戦後三十五年を経た今日、青少年から社会人に至るまで、民主主義は身勝手主義の別名であるが如き現状ではないか。例えば、国電のシルバースートに若い男女が平気で腰かけていて、老人が来ても席を譲ろうともしない社会相がそれを象徴している。「惻隱の心（思いやり）なきは人に非ざるなり」と孟子が言ったではないか。孝道、師道、社会道徳が無視されるくらいなら、そんな民主主義はやめたがよい。

今や日本の民主主義はいかにあるべきか。端的に言うなら、人本的民主主義は、絶対者（神仏）を忘れた傍若無神になつてはいないか。リンカーンがあつたゲティスバーグの演説で「神の下において、自由の新誕生をもつべきで、国民の、国民による、国民のための政治は地上から滅び去つてはならない」と言っている。この自由には責任があり、この国民平等には社会秩序がある。そして靈法、道德法、自然法という普通の法に則するところに自由があり、平安がある。しかも人間相互にはあたたかい信愛の法があるはずだ。これが失せたらどんな主義もだめである。

(7) 釈迦

世界の二大宗教というならば、何といつてもキリスト教と仏教であり、全世界精神界の源流と

底流をなすものである。仏教の開祖釈迦は、実にシャークヤという種族名で、カピラ城主スッドーダナ（浄飯王）の長子、シッダールタ（悉達多）が本名で姓はゴータマという。仏陀（ブッダ）は固有名詞ではなく覺者（悟道の人）の意である。釈迦牟尼（ムニ）とは「釈迦族の聖者」という意である。

母マーヤ（摩耶）はシッダールタを産むに当り、雪白の巨象が天空から降りて来て、右脇に入ったという神秘的な靈夢を見た。生後七日で母は他界してしまった。

釈迦は十六歳で結婚させられたが、相手はヤソーダラ（耶輸陀羅）という白蓮の如き絶世の美人であつたという。彼は十三年間、金殿玉楼、地上樂園の生活を営みはしたが、彼は既に幼少年時代から、思索型のたましいで人生苦、世界苦といったものを身を感じ始めていた。母の乳房を吸わなかつた悲運の児にとつてそれは宿命的なことであつたろう。しかも偶々城外散步に於て、老人を見ては心を痛め、病身の惨めな様子を見ては苦しみ、葬列に出遭つては死者を悲しみ、人生の老、病、死の三苦をどうしたらいいかという大問題に直面し、これが解決のため、二十九歳を以て、妻子を棄て、王城を脱け出して世棄て人となつた。

難行苦行六星霜！遂に力は尽き果て、さながら骸骨が皮を衣たような相となつた。今やその苦行も棄てて山林を出て、川に身を浸し、やっと這い上つたときに通りかかりの少女が彼をあわれんで乳粥（かゆ）を供養してくれた。川のはとりの菩提樹の下で再び瞑想し、悪魔との戦いに

もう勝ち揚句、ついに悟道成道し、涅槃（ねはん）の境地に入り、仏陀となった！

それから四十五年間、寂滅するまで、深遠鴻大なる仏道を展開しつつ説法八万四千。無量、無辺、無碍、無対、炎上、清浄、歡喜、智慧、不断、難思、無称の真理を究め衆生済度の慈光を遍照させる態の実存を身証したのであった。

やがて仏道は印度から支那へ、支那から朝鮮や日本へと伝えられ、日本仏教の華を多彩に咲かせた。現代日本人は聖徳太子を始めとする歴代歴世の偉大な仏道諸宗の眞髓を新たに体現すべきである。

(8) 基督

大ローマ帝国のカイザル・アウグスト、地上の第一、人者の治下に、地界の唯一者イエス（「神は救なり」の意）が天界から降誕した。というのは彼は処女マリヤに聖霊が降臨して生まれたからである。しかも彼は貧しき乙女の胎内から、寒村ベツレヘムのとある馬小屋の馬槽（まぶね）の中に生まれた。王家に生まれた釈迦とは大なるコントラストである。

不思議な巨星の徴が天に現われ、天の万軍が「いと高き処には榮光神に（顕われたり）、地には平安主の悦び給う人に（臨めり）」（ルカ二・一四私訳）と讃美した。訪ねて来た預言者シメオン

がこの嬰兒を抱いて、この児は「言い逆らいを受ける徴」であると預言した。そして「劍があなたの心魂をも刺し貫くでしょう」とマリアに告げた。それは十字架に懸かるイエスを既に予見していたのであった。

ヨルダン川で洗礼のヨハネから浸礼を受けて水から立ちあがるとき、聖霊が鳩の如く彼に臨んで、「これはわが子、わが愛する者ぞ、この者を私は悦んでいる」と天来の声があった。彼はその後、曠野に出て祈った。その断食の祈りにおいてサタンとの一騎打をしてこれに打ち勝った。イエスはキリスト（油へ聖霊）をそそがれた者の意）たるの実を身証した。

伝道の第一声は「時は満ちた。神の国は近づいた。おまえたち回心して福音を信ぜよ」であった。彼自身が天国体であるからこう叫んだのである。「山上の垂訓」の第一声は「幸なる哉、霊の貧しき者。天国はその人のものぞ」であった。垂訓というけれどもキリストの言はどれも彼の全存在からは迸り出た告白である。彼自身、自分を何者ともしない霊の貧者である。だから私はキリストを無者と謂う。無者即無限無量者であった。だから彼は「我を見し者は父（神）を見しなり」と言った。「父と我とは一つなり」と言いきることができた。

罪なきキリストは、我執者即ち我々罪びとを贖うために十字架の贖罪死を果たし、この贖罪を信受して祈入する（南無する）者に聖霊を降した。ペテロもヨハネもパウロも、即ち使徒たちは、十字架を信受し、聖霊を体受して、はじめて救が何であるかを全身で知った。これが使徒た

ちが「使徒行法」で身証している原始力ともいふべき聖靈の事態である。キリストのこの本願から現代のキリスト教は大方何と退いてしまっていることか。

(9) 宗教復興

今や世界は智能の科学界における驚くべき発展により、原子力時代となり、これが軍事力のけたちがいの強大をもたらししている。もし第三次大戦が勃発したら世界は自滅する。今はそういう危機的現実となっている。

実におそろしいのは科学兵器そのものではなく、このようなものを造り、互いに他を倒そうとする人間の心である。心とは何という不可解なものか。こころの中には天国と地獄が混在している。神と悪魔が共在している。否、魔性が神性を圧している。良心の力が極めて乏しい。暴力沙汰が小学生にまで及ぶとは。男の児は昔から武器まがいのもので遊ぶのが好きだ。昔は無邪気だったが、現今は薄れて悪質になってきた。ここに由々しい問題性がひそんでいる。

男は「あらそい」という悪性、女「ねたみ」という陰性に生まれつき毒されている。いずれも人間の我執という罪性から来ている。だから万人は救済を要する。たましいのある限り、万人は宗教を要する宗教人なのである。それを否定するならば、その人のたましいは地上の生涯のあ

と、「何処へ行く？」である。

平和々と、政治家も庶民も口には言う。軍備縮小とか、核兵器禁止とか、非戦論とかが唱えられる。しかしもっと積極的に、善隣友好が唱道されないのか。単なる論や、唱道ではダメだ。善隣友好の実践のほかに道はない。それも、まず、平安を我々自身が魂にもたねば始まらない。平安は神仏との一如の境地に在る。

キリスト教は今や第二の宗教改革を要する。仏教も鎌倉仏教の質的再現を要するのではないか。

要之、偉大な宗教の復興を要する。キリストや釈迦の開示した原始宗教の次元、その霊的な質の再把握。単なる宗教研究ではなく、經典の身読、靈的体験、体現を要する。絶対次元の聖靈を受霊するとそこに原始力が臨む。それは愛の力である。そしてこれは万人が無条件に受け得るのである。この危機的現実で火急的に要するものはこれのみである。その道は祈り入るという一事である。南無であり、祈入である。

(10) 学問

「男子志を立てて郷関を出づ。学苦し成らずんば死すとも還らじ」と。

人間の知情意のはたらきは渾然としてゐるけれども、対象が学問となれば、知性の能力が主動であることは言うまでもない。小・中・高校での勉強は学問への土台として重要で、如何に学ぶか、如何に考えるか、の心の態度が極めて大切である。今私は「心の態度」といった。これは即ち、学ぶことへの意志と情熱である。

そして「いかに学ぶか」で一番大切なことは、反復熟練して身につけること。ドイツの諺に „Übung macht den Meister.“

「熟練は達人を成す」といつているように。そして「如何に考えるか」によって、ものの本質をつかむ洞察力や、ものを作り出す創造力が養われてゆく。孔子が「学びて思はざれば則ち罔（くら）し。思ひて学ばざれば則ち殆（あやふ）し」といったのもこの間の消息を語るものである。学問的精神とは要するに如上の心根である。

このようにして学問への堅実な基礎が出来ると自分の天賦の資質才能に即した学問への志が立ち、それに向つて邁進してゆく。それが「郷関を出づ」である。大学はそのための学的修練の場である。大学で修めた学を以て社会で活動するにせよ、純然たる学者として貫くにせよ、大学における学究は、真剣な、そして学問の醍醐味を味わう楽しさをもったものでなければならぬ。そこにおのづから人間もできてくる。

然るに日本の大学生の何パーセントがそのような在り方をもつて大学生活を営んでいるのだら

うか。また学生の所謂「政治運動」というものが、いかに学問を乱しているか。あの赤字で校門のあたりにデカデカと掲げている看板は学問の府におよそ相応しからぬものである。況んやかつてのヘルメット、鉄棒等に於いては言語道断である。学問の自由の尊厳を却って害うものである。言論の自由というなら、学問の府にふさわしい在り方がある。

最後に一言したいことがある。学問も単なる知性だけでは次元的躍進は難い。靈性による感動、靈感がしばしば学問上の飛躍を成さしめることは、偉大な学者の実証しているところである。彼らは祈り深いたましいであった。

(11) 芸術

「芸術」という語は熟した言葉だから仕方がないが、本当は「術」ではなく「道」である。

「人間は、宗教的であるときにおいてのみ、詩と芸術において生産的です」とゲーテがある手紙の中でいっている。第一流の芸術家は、靈的素質をもっている、といってよいだろう。文化現象の中で最も密接な関係を宗教に対してもっているものは芸術であるといってよいだろう。

神仙、自然界、人間界、我というものが、熱く生命的に、深く情熱的に、高く靈光的に交流し、浸透し、迸出しているようなたましいで偉大な芸術家たちはあった。文豪ダンテ、シェーク

スピア、ブラウニング、ゲーテ、ユーゴ、ドストエフスキー、トルストイ、楽聖バッハ、モーツアルト、ベートーヴェン、ヘンデル、彫刻家フェイディアス、ミケランジェロ、ロダン、画家ラファエロ、レオナルド、レンブラント等々。

だがここに一例を挙げることにしよう。棟方志功である。彼の自伝的告白の名著『坂極道』の中で彼は次のような言辞を吐露している。

「こころの中に美が祭られているのだ。それを描くのだ。……命がけのものをつかまねば、私の仕業にならない。……そのとき、一つの天啓というか、火の玉というのでしょうか、からだ全体をもやす焰がひらめいたのです。……よし板画でそれを表現しよう。自分の全部をそのことに展開させよう、これこそ現代の世界画壇に贈る日本画壇の一本の太い道だ」これが昭和三年、二十六歳の頃であった。そして彼はさらにこう語っている。「その頃から私はからだの中に宗教の世界がひそんでいる、ということ……そして美と宗教、板画と宗教とは同律の道にあるというのが……」「板画がひとりでに板画をなしていく。私がした仕事ではなく」「板画のことになると、鬼にもなり、蛇にもなり、仏にもなり、神にもなって」等々、彼は神仏と一如の白熱的境地で創作をした。禅宗的な「無」とか、真宗的な「本願」が彼の中で劇的にはたらいっていた。それゆえ、天真であり、自由無碍であった。だから芸道であって術ではない。

芭蕉、一茶の俳句、人麿、赤人、曙覧、実朝の和歌。紫式部、漱石の文学。木喰、円空の彫

刻。その源泉はみな神仏と大自然にある。茶道、剣道、弓道、書道等、みな然らざるなしである。

(12) 政治

人間が人間である限り、良心をもっている。良心は道德法則に生まれながらの直感を具えている。このことを哲学的に究めたのはカントであった。自然界にも法則がある。ニュートンの万有引力、アインシュタインの相対性理論等がそのことを究めた。また霊界にも法則がある。靈法を身に体して人類救済の道を開いたのが釈迦であり、キリストであった。

ところで国家にも国法があつて六法などと謂われている。その国法乃至国際法を規準として国を治める者が政治家である。さてその政治家たちの足跡は、努力にも拘らず、何と血なまぐさいものであつたか。勿論彼らだけに責任があつたわけではないが、十九世紀の大政治家グラッドストーン（一八〇九—一九八）が「政治史は人類の歴史の最も不道德なものの一つである」と言つた由。問題の所在の主な点が政治家と財界・実業界との関係にあることは周知の事実である。

政党には夫々の真理性がある。それゆゑ政党政治を以て議論を戦わせながら、現実問題よりより、良く対処し、より、良く創造、展開、改善を努めるところに政治的良心というものがあろう。結

局、運営する主体は当局を担当する政党の政治家たちであるから、当該政治家の良心と識見と正當なる判断と実行に待つより外なく、わけても国民を代表する最高責任者たる首相の人物如何に關わりと極めて大である。

十七世紀のフリードリヒ大王、クロムウェル、十八世紀のワシントン、十九世紀のグラッドストーン、リンカーン、ビスマルク、二十世紀のウイルソン、チャーチルの如きは偉大な政治家であつたが、彼らに大方共通した点は何であつたか。敬虔なる魂であつたこと、正義感が強固であつたこと、深い人間愛の角度から国民の為に尽した力量等であつた。

今や世界は恐るべき核兵器時代である。現代ほど政治家の在り方が、人類の運命を左右するとはかつてなかつた。ビスマルクは「我々ドイツ人は神を畏れる。その他、世界に畏れるものはない」と言つたが、全世界の為政者が、現実に神を畏れなくなつたら、何が起るか。イデオロギーを超えて、人間として本當に握手ができなくなつたら何が起るか。

(13) 經濟

キリストがヨルダン川で水のバプテスマ（浸礼）を受けたとき、同時に天來の聖靈のバプテスマを受けた。キリストはその聖靈に導かれて荒野に出た。すると果せるかなサタンがキリストを

試みようとしてやって来た。イエスは四十日、四十夜断食して、ついに飢えた。サタンはその虚に乗じてイエスにこう語りかけた、「汝もし神の子ならば、命じてこれらの石をパンとならしめよ」と。するとイエスは「人の生くるパンのみに由るに非ず、神の口より出づる凡ての言に由る」と（申命記第三章）にあるに非ずや」と応えた。

これはキリストがまず第一にサタンに試みられたのが、食糧問題、延いては経済問題であったことを意味する。

「神の言に由る」とは、神の霊言を基とせよ、ということ、人間が健全なる肉体をもって生活するには、天来の健全なる精神を以て生きよ、ということである。

さて経済問題は要するに生活問題であるが、産業の発展と共に文明が高度のものとなり、生活水準が高まる。一方労資の利益関係のアンバランスがひどくなってくると、自由主義と社会主義の対立が烈しくなり、このイデオロギーの問題が経済問題を軸として世界は国内でも国際的にも自由主義と社会主義の体制的対立となっている。現実には産業運営の動力源として最も重要であるオイルの問題がオイル・ショックとしてもちあがり、世界経済は今やかなりの危機を孕んだ渦の中にある。国内ではこれがため経済問題が物価高騰という現象を起こし、そのため賃銀闘争が年中行事の如く行なわれている。日本の工業力は経済大国を成しながら、国民の生活は不安定であるとは。

これらの現象の因つて来たるところは、実は見えない要素にある。「戦争は何処よりか、紛争は何処よりか、汝らの肢体のうちに戦う慾より来たるにあらずや」(ヤコブ書四・二)。限度を知らぬ慾心、自己主張、我執。これに豁然と労資共に、否、実は国民各自が気づき、信愛を以てする人格共同体という意識が、社会の各方面に湧き起つてくることを要する。そのような見えない大切な根底が出来てくれば、経済問題は具体的方策と共に良きに展開してゆくであろう。

(14) 世界と日本

明治開国から百余年で日本は文化文明において世界一級国の水準に達している。大和民族はたしかに秀れた天賦の資質才能を賜っている。にも拘らず、何と現代日本は不安定な、問題に満ちた、危機的な様相を呈していることか。

問題の中核は結局、敗戦後の精神的展開に健全なる道德哲學的、宗教的精神が一般に欠如していることに在る。無自覚な民主主義に乗じて勝手気儘なまちがった自由が横行跋扈して、家庭も学校も社会も浅薄な民主主義というお題目的似而非宗教の混濁の波に浮沈しつつ今日を迎えているといつて過言でもなからう。

社会の各層、各方面、各分野における、結局は個々人が、何も人に俟つことなく自ら本当に自

覺して、天道、人道に即して一步一步実践しつつ、本当の民主主義とは何かをあたまたの答案ではなく、足跡を以て印して往くよりほかに道はない。

その足の燈火となるものは、実は東西古今の古典の中にある。情報社会などといって現象を追っている限り、足は右に揺れ、左に傾き、蹉跎として迷宮を往くが如くなるであらう。

非行少年の問題が教育界の大問題になっている。その他、各界でさまざまな問題が渦を巻いている。しかし、憂うる勿れ、道は近きに在りと喝破したくなる。正しい考え、健全な意識の人士も少なくない。それらの人々が勇気を以て体当りすることを要する、自分の置かれた環境において。その体当りの心は何か。義に基づいた棄身の愛である。それがキリスト道か仏道に根ざしていたら底力をもつ。

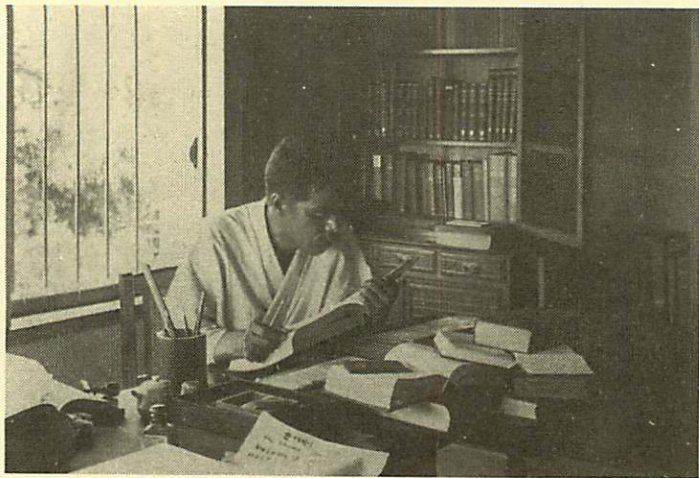
百科事典の万国の人種差別的な顔を見ると日本人の顔は最も温和に見える。概して温暖な氣候風土にも由るのだらう。大和民族というのなら、その大和の実を、聖徳太子の憲法第一条の精神の如く、世界に広めたいものである。その善隣友好の精神を發揮するためには、高次元の宗教を要する。しかもそれは万人がもち得る。そのような愛は最大の力である。火山国・日本人のたましいに白熱の愛が燃え、各方面に、各事態において誠意を尽くすところに、日本が世界に貢献すべき奥義があらう。

内村鑑三の I for Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God.

「私は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、すべては神のため」と喝破した一言を最後に記して、ここに全項目の筆を擱く、読者の御健闘を祈りつつ。 合掌。

〔エン・クリスト〕第四号、一九八一年三月臨時特輯号〕

第二部 偉大な野人



柏木の書斎に於ける内村鑑三先生

一、偉大な野人

——内村鑑三先生召天三十周年——

(一九六〇年四月一日)

まだ二十歳の青年であったとき、たまたま胃腸を害して休学、在京中のこと、亡兄政美の書架から内村先生の著書を取り出して読んだのが、入信へのきっかけとなった。

ある日曜の朝、おそろおそろの大手町の大日本衛生会館へ行ってみた。数百名の参会者には圧倒されるおもいであった。「幸なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなればなり」以下一句が壇上に大きく掲げられてあったのが印象的で、今も眼に映るようである。先生が何を語られたかは皆目忘れているが、この第一言がここ数年私の信仰の土台となったとは何たる冥合ぞや。

第一回目から私は感激の涙であった。日曜日が楽しくてたまらなかった。当時の日記を繙いてみると三十五年が昨日のようである。私がどのような信仰経歴を辿ったかは第三十二号「曠野の

「愛」の巻頭言の如くであるが、ここ十年間で私はついに無教会陣営から追放されたかたちである。私自身としても「陣営より出でて主のみもとに往かん」（ヘブル書十三、十三）のみである。

ところがおかしいことに、この頃ほど内村先生の言が近く感ぜられることはなかった。内村先生は所謂無教会ではないと言いたい。実にはばのひろい、逞しい、弾力性豊かなるたましいである。またあついハートの人であられる。先生は次のようなことを書いておられる。

「クリスチャンとは誰ぞ？ 彼は心のむなしき者なり、彼のものと称すべき何一つをもたざる者なり、能なく、智なく、徳なく、信なき者なり、神に恵まれんと欲する心のほかに何物をもたざる者なり、而してこの心あるが故にすべての物をもたせらるる者なり、「何ももたざるに似たれどもすべてのものをもてり」とあるはこのことをいうなり（コリント後書六・一〇）。」

無一物にして無尽蔵なる者である。また無能、無智、無徳、無信とは痛快な言である。つねづね私が唱えて来たところと全く符合する気合である。今の無教会一般はえらすぎる。りこうすぎるととのいすぎている。私はととのった造花よりも、無雑作な野草や野花が好きだ。虫もくっついていれば、泥もついている草花がいい。およそパリサイ的なとのはごめんである。陽光を一杯にあびてふくいくたる芳香を放つ野花のような人間でありたい。キリストの光がどこから漂い、キリストの香りがどこからにじみ出て、人をあたたため、包み、平安と歓喜を与えるような人間、パリサイに対してはキリストと共に火山の如く怒ることも出来るたましいでありたい。

内村先生ほかざりのない偉大な野人も少ないであろう。何と活き活きした文章であろう。文は人なりというが、内村先生の文は正にそうである。キリストの幕屋の兄弟姉妹たちが、内村先生の活文字によく親しまれんことをのぞむ。またまの信仰者にこそ先生の文章は最もよく読めるはずである。実は無教会精神を真に進展させる者は無教会から除外されている我らであることを知るべしである。原始福音こそは内村先生自らが志向しておられたところであつたと信ずる。

〔キリストの幕屋〕誌『よるだん』第四号)



内村鑑三先生 石河光哉筆

二、キリストの心を！

ピリピ書 二・五―八

（一九六九年晩夏）

一九三〇年元旦のことである。曙の翼が富士にさしかかるとそれは薔薇色に溶けた。やがて富士は純白の崇高な偉容を呈した。しばらくこの霊峰に見入っていた。屋根から書斎に降りてきて、〈ナハムー、ナハムー、アムミ―〉（「慰めよ、汝ら慰めよ、わが民を！」）をもって始まるイザヤ書第四十章を原語で朗読する。

新町「世田谷区駒沢の」を指して出かけた。元旦早々、洋君たち「藤井武先生の長男、今は天界にあり」につかまって百人一首の読手をさせられる。階上には先生が御病臥である。やがて呼ばれたのでのぼってゆく。病床から破顔「おめでとう！」との御挨拶。少々面くらった。御病気の先生に「おめでとうございます」は言いにくい気持だったからである。仕方がないからそう申

し上げたら笑っておられた。「先生はしばしば病臥されたが、自分の病氣のことをとやかく決して口にされなかった。いわば闘病者でなく超病者であった。」

談話の中でこんなことを言われた。預言者について書こうとして準備ができて、いざ筆をとろうとしたらすっかり神様にひっくりかえされてしまった。それから二、三日何もしないでじっとしていたら、全く別のことを書かされた。それがこんどの『友情物語』『旧約と新約』第一一五号」です、と。それから談話はパウロのことになり、パウロ晩年の手紙、エペソ、ピリピ、コロサイの大きさ、深さを強調しておられた。先生の心が何か大きなものを呼吸しておられるようであった。先生は、どうもクリスチャンが批評がましくコセコセしていると慨歎された。

雄大な構想の大詩篇『羔の婚姻』の詩人たる先生がいかに大きな氣宇をもっておられるかを感じて元旦の富士とイザヤ書と共に私の心も何かゆったりした。「これが、先生と迎えた最後の元日であった。」「私の心を与えるから、安心して受けなさい！」とキリストは胸を開き両腕を十字に伸ばして迎えたもう。

〔曠野の愛〕第三四号、一九六〇（昭和三五）年晩夏号所載——当時の日記から〕

三、藤井武先生と私

(一九六〇年晩夏)

はしがき

ここに載せる文章は今を去る二十七年前、一九三三年（昭和八年）七月及び八月に、「羔」誌第九号と第十号に書いた旧稿そのままである。ただ仮名づかいだけを変え、紙面の関係上、適宜カットしたところあるだけである。「」内はこのたびの補足。『羔』誌というのは全く私的なもので、原稿用紙に書いたままのもので、誰に見せるというものでもなかったから、未発表のものである。研究、論説、詩歌、随筆といったものを一九三二年十一月から毎月書いて翌年十一月

でひとまず筆を擱いた私個人としては、極めてなつかしい思い出のものである。

この度、藤井先生三十周年を、去る七月十四日にただ独りで迎え、その半日を『羔の婚姻』で読み暮らした。七月末日、久しぶりでごったがえしの書斎の整理をしていたら、箱の中から右の『羔』誌が十三冊出てきた。表紙の目次を次々と見たら、『藤井先生三周年記念号』（『羔』第九号）というのが目についたので、開いて読んでみると、三周年の所感も、三十周年を迎えた今日この頃の私も全く同じであるのに驚き且つ喜んだ次第である。このまま三十周年記念号として発表しようと直ぐ思いあたり、奇しき天来のまちびきに感謝した。今から見れば勿論当時の考え方には不備の点もある。私の信仰内容は進展して、死に至るまでやまないであろう。しかしこれを読んで、本質的にいかに同質的なものが貫いているかを見てあやしむばかりである。何を書いたかを全く忘れていたが、かくも今昔一貫しているとは。

『羔』九号所載のものは、藤井先生を特にたましいの世界での恩師としてもつ私が、いわば無教会における師弟関係というものは、どのようなものであるか、またあるべきかの問題を念として筆を進めているような「師弟論」といってよいもの。そこで、これを標題とした。今の私としてなお補筆すべきものがあるが、旧稿をなるべくそのままにしたい気もちから、補足はわずかにとどめた。

『羔』第十号所載のものは、師弟の具体的個人的な思い出の記の一端である。主として職業のこ

とに關するので、「天職論」と名づける。「」内はすべて今回第三四号のための補筆。

〔註〕してみると今（一九八二年）から殆ど半世紀前のものである。

（其一）師 弟 論

〔一九三三年七月二十一日夜 作〕

すべてにおいて偶然「を主」と見るか、すべてにおいて生ける必然「を主」と見るかは、もの見方の大きな岐れ目である。それは単に見方といつてすましてしまふには余りに大きな問題である。人生觀の「あれか、これか」である。

神を信ずる者には、偶然「を主」と視ることはできぬ。盲目的運命「を主」と見ることは彼の採らざるところである。一羽の雀が飛び立つのも、一ひらの木の葉が舞い落ちるのも、彼には「單なる」偶然ではない。そしてこの人生觀に徹しきつて生きた者は言うまでもなく神の子キリスト・イエスであつた。

一つ一つに何か意識的に神を証明するような意義を附加せんとする如き人間的細工は要らない。そんな味つけの人生觀が神を信ずる者の本当の觀方ではない。多くのことをただあるがまま、起るがままに觀ればそれがよい。ただしし現実主義、自然主義と異なるところは、そのあ

るがまま、起るがままの事実を直ちに、意味内容の如何は別として、神の側において、神を本として観るところにある。意味内容はそのとき解るも解らぬもよい。後に解らぬともよい。人生におけるどの一つの出来ごとをとるも、その全内容をあらゆる角度から視てそれを把むことは、人間のなし得るわざでもなければ、その必要をもみとめない。ただそれが測るべからざる偉大な意志から発したことであり、そうである限り、偉大なる摂理と目的の何らかの一片鱗をなしているものであることを信^{かなめ}じ得るかが要の点である。

藤井武先生がどうして私を弟子の一人に有たれたか、私がどうして先生を特別の意味における唯一人の師としていただくことになったか。「偶然と見える契機の奥にかくされた」その生ける必然をつらつら考えるとき、私はいよいよ神の導きを実感せざる得ない。神の道の奇しさを感じせざるを得ない。

神様は、惜しみなく与えたもう方であるのをつくづく知らしめられる。それが一つの魂を救わんがためには！ 天の救命法は合理的打算的なこの世の周到なる救助法と全然趣きを異にする。そのことはキリストが既に言われた著しき言にも明らかである。迷える小羊や放蕩息子のお話をかく解して思い半に過ぎるものがある。然り、キリスト御自身が正にそれであった。彼の死は神がその義なる「無限」をもって人間の罪なる「無」と交換なさったのだとも言い得る。「無限」と「無」との交換、義と罪との与奪、これ以上に非打算的な取りひきが存在し得るだろうか。「無」

なる人間を「有」にせんがために神は「無限」なるキリストを人間に与えたもうたのである。神が無から有を創造されるのは、無そのものを魔術的に有とすることではなくして、無にそれを与えたもうことである。神の自己分割によって無は有となる。無はいかに加算するとも無である如く、無価値なる人間がいかに無価値なる功績をつんでも同じく無価値なるわれがあるのみか、ここに別な法則がはたらいて却てマイナスとなるのである。しかも神御自身は無限でありたもう故に、その分割によって神は永遠でありたもう。否、義なる神の自己分割は愛のわざであり、愛は分たれることによって、いよいよその真価を発揮し、愛の本質を深くしてゆく。然り分たれていよいよ増してゆくものはひとり神の愛のみである。

神の愛の対象の最たるものは人類である。神の聖子及び聖霊に対する関係が愛によって成立っていることは、被造物たる人類に対する愛が発せられる源をなす神の本質のあらわれであって、キリストが神の対象であるということと人類が神の対象であるというのとは意味が異なる。人類が各個人に対する関係は有機体的である。故に神の愛の対象の極点は個人であり、すなわちその魂である。

神はひとつの魂を救い給うや、必ずその魂をして他の魂を救わんがための手段に用いたもう。しかしながらここにあやまってならぬことは、神は手段として用いたもう、その魂を断じて非人格的にはとりあつかわぬことである。何となれば、神に救われたということは、神の愛——キリ

ストの十字架の愛を受けたということである。そのことは、その救われた魂が十字架の愛をもつ器となったことであって、神の人格それ自身がその人に宿ったことを意味するからである。さればその本質に神の人格——聖霊——を受けた者が手段であるはずがないからである。ただその人を用いたもう神の方法が手段に見えるまでであって、本来はどこまでも神に用いられることそのことは、「神の」愛のあらわれとして生きて、いること自体であって、その外の何ものでもない。生きていることは愛することである。「そこに福音的な身証があり、伝道がある。」

私という視角から見れば、先生はかく私のために用いられた。あたかもキリストが人を使わんためでなく、人につかえんために来りたまうところに重大な意義があるように「勿論キリストと我々罪びととの関係は、師と弟子の關係に直ちに類比してはならない。キリストが、弟子の脚を洗ったのは、特に贖罪の秘義をあらわすものであったが、人間の師弟關係にこれをあてはめるわけにはゆかないこと勿論である。」私のためというが、決して私自身が目的であるためではない。それは私の魂を救はんことは神の愛の測り知れぬわざの一つであり、神が神にてあらんための一つのあらわれ、大目的への一指の動きであるがためである。

さてしかしここにまた重大なる注意を要するは、人は断じて人を救うことができぬという一事である。卒直に言うならば、私は先生によって救われたのではなく、先生は神にあって生き、そして死なれた。その先生の生きざま——たといそこに積極的伝道がなされようとも——が神の意

志からは手段となり、神の本質からはどこまで愛のあらわれとして私にはたらきかけたのである。かのパウロの言をもって言えは、先生は植えまた水をそいでくださった。神様が聖霊によって私を育ててくださった。この聖霊が神から降されることなくして、どんなに先生が水をそがれようともそはいたづらである。

先生にかくして水そそがれし五年間「一九二五年—三〇年」は貴き恩恵の年月であった〔藤井武全集、及び選集別巻『藤井武の面影』所載の拙稿「恩寵の跡」参照〕。しかし先生の「神信頼の生活そのものと集会への」愛は遂に死を得るまでに至った。死の外的事実的原因「に」は「いろいろの因子があるが、それは」ここに問うところではない。死が何であるかが問題である。「集会の一人一人がキリストに直結した信仰生活をするように執成しの役割を果す意味において、師として聖書を講ずる人が、無教会の「先生」であり「師」であるが、その師の生きざまが福音的であればあるほど、そのような師の死は弟子にとっていよいよ重い意味と深い人格関係をもたらし、キリストにあって永遠的な質をもつものである。勿論、師弟関係も人間関係の一つである限り、それ自体として絶対的なものではあり得ない。神——キリスト——聖霊——私の関係を措いてはかに絶対的關係というものはない。我々は生涯を通していろいろな師をもつ。人格関係は比較してはならないことをここに一言しておく。しかし人生の至深の問題であるたましいの死生の問題において、特に指導を受けた師は、魂の恩師である。』

「人その友のためにおのが生命を棄つる。これより大いなる愛はなし」(ヨハネ一五・一三)とキリストは言いたもうた。先生は特に私のために生命を棄てられたわけではないが、先生の生き方がもっていたあるものが、先生の死を通して迫る。それはキリストに在って生きていた師がその弟子に及ぼすあるものである。」はてしも知れぬ遠き彼方より来る「太陽の」光を受けて、地の草に宿る小さな一つの水滴が光るように、神の「光体たるキリストの」愛を何らかの意味において具有する「師の」死を見て、「師弟の關係は、ある決定的なものとなる。」私は藤井先生という存在を、主にあつて永遠に感謝する。私の主はキリストである。また真の意味での師もキリストのほかにない。けれども、人間相對關係における師として、ある特別な意味において恩師とよぶべき師は、私にとっては藤井先生である。「日本人固有の節義感」は、人間相對界における秩序として貴いものがある。」

キリストが地を去りたもうて、聖靈が「その弟子たちに」臨み、真に弟子であり得、各々その使命を全うしたように、肉の眼や耳からは完全に断絶せる神キリストの實在の世界に、我々の魂が「聖靈にあつて」座を据えるときに、「どんなに現実が惨めでも」初めて、「何か」本当の生活を営み得、真理より真理へ、信賴より信賴へ、希望より希望へと進み得る。「という意味においての師は勿論、主イエス・キリストである。このことは昔も今も同じである。使徒たちも私たちも同じことである。」

「測り難きは神の義とその愛の道である。底知れぬは人の罪である。罪を知りし者は、キリストの十字架の外に、人間の道などいうものはないことを知るばかりであろう。キリストの十字架の恩恵と来世の希望を、身を似て指示してくださった恩師の生と死であった。」

最後に一言したいことは、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。」というところが、やはり内村先生のころでもあったし、わが藤井先生の心でもあったということである。弟子を信愛して弟子をもたず。「たとひ法然聖人にすかされまひらせて」も師を敬慕して師をかつがず。ここにわれらの師弟道がある。

（其二）天 職 論

〔一九三三年八月 作〕

私が始めて藤井武先生の名を知ったのは、まだ附属中学〔今の教育大学附属中、高校〕の五年生であったとき、小石川同心町十六番地なる家の二階〔第二次大戦中、焼失〕に、今は地に亡き兄〔政美〕と机を並べていた頃、兄の机に或る日、『旧約と新約』という月刊誌が置かれてあるのを見た時に始まる。それは一九二〇年（大正九年）十一月、第六号〔6の字が今でも印象的に髭髯としてくる〕のであるから、兄の北京立出〔北京日本公使館財務官補として赴任〕の月の始

めのことであった。当時キリスト教を、否凡そ宗教というものをきらっていた至って蒙昧なる私であったから「愛と生命」という〔第六号の内容の〕標題を見て、何だ「愛」なんてと心の中で思った。一方、兄があつき信仰に生きていることだけは明らかに感じていたのであるが、それが自分とは別世界のこと、関わりが自分に及んで来ようなどとは露思っていなかったから兄の生活を畏敬はしながらも、宗教はやはり私に問題とならなかった。

一九二〇年十一月十二日、兄は東京を旅立つ。朝鮮、満洲を経て支那へ。翌年一九二一年の九月にはついに地を去ってしまう〔北京で病死、『曠野の愛』第九、第十号参照〕。主（あるじ）なき書籍が寂しく書斎にのこされてある。雑誌としては『法学協会雑誌』と『聖書之研究』が積んであった。『旧約と新約』の存在は、私に無視されていた。〔旧制高校への〕受験準備中の私にそれらは何の関わりもなかった。〔しかし、この兄の死が私の信仰への第一の導きの星となったことは明白である。〕

時は移って〔水戸〕高校二年（一九二四年）の春のことである。藤井先生が兄の翻譯遺稿をまとめて本にして下さることをうかがった。そんなわけで、先生のお宅をお訪ねしたのが先生を面識したそもその始めである。何でも訳稿中に「天使論」というのがあって、それが行方不明であるのを先生が惜しまれた口吻だけは今もおぼえている。『基督の復活』（ゴードー著、小池政美訳、旧約と新約社発行）はこのように先生の惜しみなき愛のあらわれとして出版された。

その「前々年（一九二二年）の晩秋、まず内村先生の著書を通し、次にその」前年（一九二三年）の春、新学年開期前、「胃腸疾患のため」休学中であつた私は、内村先生の「日曜」講演——「日曜の大集会は」当時は大手町「日本衛生会館」であつた——によつて信仰への道をひらかれたのであるが、兄の遺稿のことが契機となつて高校三年（一九二五年）の春からは「駒沢」新町の藤井先生の書齋における家庭的な集會に出席させていただいた。それはしかし水戸から帰京した日曜のみのことであつた。先生を知るに至つた、また先生に御厄介になるに至つた経路はこんなわけで、自分の方に内的必然性というようなものがあつて、それが動機となつたのではなかつた。むしろ兄の死に対する先生の深き愛惜の一端が、私を先生に近づけたのである。「藤井武全集、第十二巻所載、「美しき印象を私に残した人々」二二六—九頁参照」。……かくて言わば、兄の死が先生の兄に対する師弟關係乃至は愛を私の方へリフレクト（反射）せしめたのである。かく先生を師ともち得るに至つた奇縁を私は摂理として深く感謝するものである。

一九二五年七月のことである。夏休暇になつたので、水戸から帰京していた私は、日曜の朝、お訪ねしてみると、集會は九月まで閉鎖とのことである。「そういう先生のやり方の影響は今もなお私の武蔵野集會に遺つていて、大方の夏は二、三の特別集會のほかは休會である」。

〔註〕一九七九年四月以降、五十年の教職を辞してからは夏も大方集會を開くことにした。

しかし呼ばれるままにお二階に上がった。「あのなつかしい先生の新町の家は第二次大戦の際、

焼失した。」先生は原稿の筆をおいて迎えて下さったのであった。いろいろお話ができるうちに、大学はどのコースを択るかと問われたので、どうも自分は法科にはむきそうもないし文科にしてもどれにしようかと迷っていたので、先生の御意見を問うた。すると先生は、「君の性格を未だよく知らないから、君については言えないけれども、今若し僕が君の位置にいるとして自由に選ぶとなれば、法科ではなく文科の哲学科です」と言われた。

その後、また大学の話が出たとき、大学の大切な時期を逸することなく、まじめに聖書の研究と哲学にしろ、文学にしろ第一流のもの、特にプラトンとカント、ミルトンとダンテをよく読むようにいわれた。そして私が挙げた五つの学科に対して、哲学科か、純文学科か、歴史学科の何れかがよからう、宗教学科や教育学科は勧めたくないように言われた。「私は元来詩的なものが好きであつたので」その後、純文学中の独乙文学科を撰んだことを申し上げたとき、先生はゲーテ的なものに気を付けるべく注意された。「それで私は大学では主としてシラーのものを勉強した。しかし大学での講義中、木村謹治教授のゲーテ論が一番興味をもって聴けた講義であり、ゲーテの偉大さが次第にわかってくるにつけ、はじめからゲーテと取組むべきであつたことが後になつてわかりその点、先生の御気持は充分わかるが、私としてはゲーテを始めから主題としなかつたことを今ではある意味で後悔している。しかし、ルッター——シラー——ゲーテと辿つて来た路に正しさのあつたことも感じてはいる。ルッターを理解せずしてドイツを知ることとは出来ない

からである。」

翌一九二六年の春、三月七日、雪の降った日曜から、先生の地上を去られる日までの集会のあったすべての日曜と新町学廬〔即ち一九二九年の秋の月、水、金曜の晩に開かれた古典購読の夜学〕は新町で暮した。けれども、先生と私一個の内的な触れ合い、人格的共感といったものを「感想的に」少しづつって見よう。

先生はかつて「私は決して秀才の部類ではない」ということを言われたにも拘らず、先生は私の判断が太陽を指して月となす如き誤謬をなさざる限り、秀才である。否、天才の部類にすら、或る意味においては完全に属しておられる。先生の創造力と直観力を誰が天才的ならざるといおう。先生はものを断片的に観察することをしない。知識を個々のにもつようなことをしない。必ず先生の人格における知という中枢において有機的、組織的に配列されてしまう。先生において知は頭腦のことではなく、人格における一種の血である。博く識るよりも、深く知ることを先生はこととしていた。デパートよりも専門の小店の方が先生には価値あるものと見なされていたと思う。知をその本源に究ねてゆくやり方、ものを根本的に考える考え方、要するに哲学的に思索する傾向を、「その詩人的、予言者的な直観力と共に」もっておられたことは『旧約と新約』という月刊誌の性格を見ても」あきらかである。それ故に、先生が若し哲学を専攻されたら、日本有数の否おそらく世界的哲人の一人ともなる天稟を有って居られたように思う。その意味におい

て、先生はアウグスティヌスの思索型の人物である。あの日記や「自伝」にあらわれている高校、大学時代の熱烈な真理探究の跡などを見れば、思い半に過ぎるものがある。直観、分析、綜合が渾然としている。しかし犀利、明晰水晶の如き感じを人に与える態のものではなく、深遠な測秋空の如き知が先生のものであった。先生は自分はおほえが悪いと言われたこと再三でなかったが、集会の聖句の暗誦で、聖句通りに言えたためしがない私などとは忘却のケタがちがう。「キリストもパウロも、旧約引用を文字通りになされなかったから、自らなぐさめてる意識もないではなかった。私の暗誦には、先生は微笑しておられた。」知力の強弱はもとより論外のことであるが、先生とある類似性が正直あるので、先生の言われ、また書かれるところに比較的速き、また相当の、理解を有ち得たと信じている。傾向を同じくするいとも優れた人物を師と仰ぐことの出来たのは大なる幸であった。されば私の中に萌芽しつつも、未だ形をなさざりしものが啓発、助成されたことも少なくなかった。さればまた、先生の語られることを、これは意外であると思ったことはまずなかったといつてよい。それだけ考え方、感じ方、ものの観方が同質的であつたと言ひ得るであらう。

それも、もう一つ根本的に考えてみれば、「神より出づる者は神の言をきく」(ヨハネ八・四七)であつて、神より出づる者は、必ずや先生の言われるところに反響するものを授かっているに相違ない。性格の相違は要するに第二義的のものであつて、「なくてはならぬものは」この場合にも

「唯一つ」、新たに生れることである。「聖霊による靈知（エピグノーシス）にあづかることである。たとえばパウロも、ヨハネも、ペテロもそれぞれ異った性格や知性であるにもかかわらず、言語も表現形態、概念範疇も異なるに拘らず、共通の内実が貫いていることは、聖霊の知でよくわかるが」信仰を授かると、知性にいのちが植えつけられるのである。天来の生命を受けた知は、自らが如何に成長すべきかを、おのずから知っているのである。「第一コリント第二章全文、第一ヨハネ二・二四―二七を特に参照」。ここに信仰が知識の基である所以がある。

教育のことも然りで、信仰、即ち神より出づることなくして、教えるくむこともついに皮相のことたるに過ぎない。真の美（よ）き果を結ぶことができない。思うてここになれば、現代日本教育がいかに根なきものであり、真のたましいの教育がなされていないことを痛感する。不毛礫角の、或は有害の土壤にいかにして美（よ）き樹が生長し得ようぞ。教育の根本問題は「教育者自身の」たましいの問題にある。この大変革なくして、日本の教育は永久に救われ難い。

されば私の大学三年間において、知の方面においても積極的なものは、新町における日曜の午前の聖書の講義と午後及び夜の古典研究（アウグスティヌス、プラトーン、カント、ミルトン、ダンテ）とにおいてさづかったのであって、これが大学の学究的なものの消化の源動力となった。いよいよ知ることは、信仰が知識の本当の消化器官であることである。「神を畏るるは知識の基なり」（箴言一・七）である。迷信は知識を消化せずして吐き出してしまいうに反

し、まことの信仰、福音はおよそ真知を美果の如く求め、且つ之を消化して信仰自身も健全なる展開をする。

「今の私の言で言えば、先生の知的探究も、信仰的、実存的な性格のもので、知情意の先生のはたらきは、つねに渾然一体をなしていた。」先生の実存面はここに述べるまでもない。私の書いたものでは、上掲の「恩寵の跡」と先生の告別式に際して述べた「噫藤井武先生」（旧約と新約）終刊号第一二一号、及、全集別巻「藤井武君の面影」所載）参照。しかし、何よりも藤井武全集または選集を味読されるに如くはない。

以上で大体おわりの如く、藤井先生は、本来、思索型である。もし新たに青年として大学のコースをえらぶとすれば、哲学だと告白されたのを見てもうなづかれ得る。一方、先生の文章をみてもわかるように非常に詩的である。そして先生の最深なる本質の一面は詩人としてあらわれた。畢生の大詩篇『羔の婚姻』がこれを語って余りある。

人の職業は現実には、なかなか自分の天性と合致しがたい。たとえば、生い立ち、環境、不如意な運命、突発的事情等さまざまな条件に限定され、阻害されて、自分の天性天稟に即した天職を撰びがたい場合がなかなか多い。

しかしもともと人間は何びともそれぞれ神に創造された特殊な個性をもった存在で、あたかもばらの根からはばらしか咲かず、桔梗の茎には桔梗の花しかつかぬように、人それぞれ自己本来

の才能をたまわっている。その才能は言の本来の意味で天才神品である。それがどんなに他人の目にみばえなくあろうとも。天賦を自覚し、これを限りなく生かすべく生きよう、そこに真の平安がある。本来の天性、天稟を深く自覚して、できうべくばそれを發揮すべく職業をえらび、万難を排してもそれを成しとげようとするところに天職の貴さがある。たとい現実には諸事情にさまたげられて天職的職業をえらびかねようとも、自己の天職を自覚しつつ現実の職業を負いて進まん。そのような天職を自覚しないことは自己の存在に対する不信である。その人は職業上どんなに成功しても人間として天職を全うした人ではない。天職を全うせんすることはどんなに、それが失敗と未完成であらうとも人生としては貴い価値をもつ。何となれば、自分の天性天稟に即せんとすることは、同時に神の創造の意志を受けて、これを發揮せんということであるべきであり、そこに聖意体现の天的必然があり、天的必然は真の自由であり、このような真の自由こそ生命が宿り、力が与えられ、歡喜と神の栄光への讚美が湧くのである。ひらったく言えば、それが人間として一番無理のない自然なあり方で、「好きこそものの上手なれ」というが、人間は偉いものでも何でもない。学者が著作をするのも、農夫が作物をつくるのも同じことである。伝道者の伝道も、召命により第二の天性たるあるものが、その人の中で動き出すわけのものである。ただ「好き」ということを深くたずねてみれば、天性に通じ、天性は神様が与えた性格（キャラクター）とは「人間の内奥に捺印されたもの」というギリシャ語から来ている）であるから、

この天性天稟に即することこそ天職を全うする所以、神の栄光のそこにあらわれる所以である。ただそれを私心をもって私するからおかしいことになるのである。

〔「曠野の愛」第三四号、一九六〇（昭和三五）年、晩夏〕



1927年晩秋、駒沢新町の丘
藤井武先生の祈りの丘にて（著者撮影）

四、ブルンナーとグラハム

(一九五六年春)

ブルンナー主催のキリスト教連合礼拝

一九五五年一月二三日午後二時銀座教会堂でブルンナー博士主催第一回連合礼拝が開かれた。階上階下満堂の盛況一千名と聞いた。博士の「汝らは世の光なり」の名講演の後で「キリストと私」との題下で、二人の証言が行われた。さきなるは教会側の某女史。あとなるは無教会側の私。私は無原稿。私にとっては電光雷鳴的十数分であった。私の如きがいかなるまわりあわせで世界的神学者によって証言に立たしめられたか。神意の御はたらきを泌み泌みと感じ、ただ主を畏れ奉る。

私の信仰（原始福音）の事態に対する兎角の風評も、私の腸からの証言で雲散したはずである。幾年を私はいろいろな曲解のもとで耐え忍んで来たか。それが雲間からさし貫いた一閃の脚光を浴びて私の真相が銀座教会の壇上で映し出された。私自身などはどうでもいい。私はただ「キリストの福音」（コリント前九・一二、ピリピー・二七）『原始福音に水をわり、観念化している一般基督教界にこの福音を身証せんとするだけである。私は自らこれを把握したなどと揚言しているのではない。私はこの福音につかまれたのでこの福音の中へと限りなくバプテスマされんとて投身しゆくのみである。パリサイ根性者、卑劣な批判者、靈的傲慢者、離反者、等の攻撃も、そして、この「キリストの福音」のためならば、私は聖名のため喜んで受ける。イエスの十字架は、私の信仰の現実には無とし、砕けとし、死として下さったから私は本質的に「無」人であり「砕」魂であり「死」者であるから、敵もないのである。天下無敵とは、私が強いからでなく、私が全く恩寵による「無」人であるからなのである。故に限りなく無とされつつ、限りなく無限とされてゆく。かくてキリストという無限の原始力によって、八方無礙の一道を往く者である。勿論、教会の内外に私と同じ志に生きている基督者が幾人もいるにちがいない。

宿かさぬ人の心をなさけにて おぼろ月夜の花の下臥し

という蓮月尼の短歌の心が今こそ私に泌み泌みと身読されて来た。旅寝せんとて、或る町で叩くほどの門扉で宿を断われやむなく野末の樹下に一夜のやどをとれば、さし昇る朧月にその樹

が桜であったのを知り、花の屋根の下で薄情の町の方を向いて合掌、その情なき人々に感謝の念
仏を捧げしという。無心淨心の蓮月尼は仏の慈悲を真に身に体している。

私を難ずる人々のため、私も蓮月尼の心となっている。私に於ても、真理に即せんとの念願の
ほかに念願はない。その真理とはキリストであり、原始福音である。これは私に同義語である。

ブ博士のこの様な企てが果して合目的であるかは実際問題としても、理論の上からも、諸々の
問題の存するところではある。併しブ博士の悲願そのものと実践力そのものに對しては敬意と賛
意とを私は惜しまなかった。真理を目指して愛を以て実践する人を神は、キリストは、「然り！」
と言われるに相違ない。博士はその意味でキリストの僕としての愛のつとめを果されたと信ず
る。主キリストの御なぐさめ博士の上にあれ。

グラハムの大伝道集会

頂度節分の頃、「キリスト新聞」紙上で、ビリー・グラハム特集「信仰復興の黎明」と題しての
二頁にわたるグラハム博士の紹介をよんだ。かかるみ霊の人の出現をうれしく思った。三月三日
の同紙上でその伝道記事が大々的に報ぜられた。「グラハム日本に聖火を点す」との見出しであ
る。東京集会、大阪集会、併せて聴衆六万に及んだという。正に「超教派」の大伝道であつた。

やはりアメリカ的な大規模である。とにかく全日本基督教団挙げての歓迎であった。私は参加しなかったが祝福を祈っていた。

さて果してグラハムを動かしているキリストのみ霊の事態にこの六万の中幾人が、真に応え得たろうか。グ博士の言葉に曰く「信仰復興という言葉は私にはない。聖霊の満ちあふれているところに信仰はいつも燃え上るべきだ。眠れる教会に新鮮な空気をもたらしものは聖霊力である。

現在の基督者は救いの喜びを持たず、憂鬱な顔をしているではないか。生活が苦しいためか。だ
が喜びは物質からでなく聖霊から来るものだ。……」（記事より）。そして彼は日本の「教職者自身が聖霊を受けよ」と叫んでいる。かく言われざるを得ない日本のキリスト教界の現状よ！
況んや牧師、伝道者という人々が「聖霊を受けよ」と注意されるに至っては。パウロの言う如く、「み霊を宿さざる者は基督者に非ず」だからである。

謙遜に人から学ぼうとすることはよいことである。グ博士に痛いことを言われてさて真にキリストに直結して立ちあがるか。今後の日本キリスト教団、広くは全日本キリスト教界の復活新生如何である。最澄、空海、源信、法然、親鸞、道元、白隠、日蓮の霊統を継いで、これに更に光を投ずるキリストの僕は、今の青年の中から現われないか。否、私はその日の来たるべきを確信を以て待望している。志ある青年よ。原始福音、使徒的信仰に突入せよ！

さきには世界的神学者ブルンナー来たりこの度は世界的伝道者グラハム来たる。共にキリスト

のマラキ（使者）であり、超教派的魂である。両者に於て日本及その基督教界に対する神の御警告を見る。政治、経済、実業、教育、各方面の問題性や危機性の根源は宗教界の枯渇にある。観念信仰に使徒的靈生乏しく、御利益信仰に真理缺けたり。日本人の魂の髓がむしろ失はれてしまつたら、道義が立たない。真理が行なわれない。愛が行ぜられない。この救済力、実践力の源泉は、偉大なるキリストのみ靈にある。力あるキリストの福音のほかに日本の救わるべき道はない。

〔「曠野の愛」第二四号、一九五六（昭和三十一年春季号）〕

五、「主よみ許に」

(一九五一年五月)

一九五〇年五月三日のことであつた。群馬県の或る町に未知の友を訪ねた。樂しかるべき青春の十幾年を肺患のため、仰臥して暮した病者であつた。肉親の者が次々に斃れ、唯一人が残されていたのであつた。その病室は畳の室であつたが、土足でなければ踏み入ることが出来ないほど塵にまみれていた。凡そ考え得る最も慘澹たる病室であつた。併しそこに臥している病者伊都子さんの顔は泥中の紅蓮の如く、荊棘の中の白薔薇の如くであつた。信仰の勝利と平安をそこに見た。聖旨ならば彼女を起してやりたく思つた。私を案内して行つた友愛子さんとの会話は、かつて私が聞いた最も美しきものの一つであつた。私が暫らくその座を外して^{はず}いる間にその友は彼女のために地上最後の衣替えをしてやつた。その友自身が軽からぬ病身であつたのであるが。

我ら三人で集りをした。これが生ける告別式であることを感じつつ。聖書は黙示録第七章九—一七節を読んだ。「彼らは大なる患難より出で来たり」のくだりに来て私の声は途切れた。不覚にも涙を禁じ得なかった。涙を貫いて終りの数節は力強く読むことが出来た。私は地上で患難を負いし女性の神の国に於ける歡喜と榮光について心をこめて語った。病者ははやく天国に行きたい面もちであった。その求めに応じて『主よみ許に近づかん』（讚美歌三〇六）を歌った。彼女は発声する体力を失っていたので、じつと聴き入っていた。私の祈りは腸から迸った。地上で始めて会った友と再び会うまじき訣別をした。彼女はその月の十九日に主のみ許に昇った。今この際に慰むる何人もあらなく、……ただ独りで！

優しさの中に静かなる勝利を有っていた彼女の印象は鮮かである。併しながら彼女の幾年の涙を誰が充分に知り得たであろう。死の枕辺には『我れ独りにて酒槽さかぶねを踏めり』（イザヤ書六十三章）を主題にとりあつかった『旧約と新約』誌（藤井武著）第三十二号が遺されてあつたという。これは私が訪ねたとき、もちあわせていた私の愛読の月刊誌で彼女の存在にふさわしい内容のものと思つたから、置き土産にしたものであつた。

彼女は実にその町の罪をだまて担っていたのである。彼女は酒槽を独りで踏んだのである。自らはそんなことを意識していなかったであろうが。かかる存在の声なき声が終末の日に「羔の怒」に於て執り成されるのであるということとその町を去りつつ私は深く感じていた。現実余

りにも不合理であり、神の子らは余りにも反合理を負わされているからである。重き十字架の下にたはれた乙女に生命の榮冠が与えられている。その微笑は東天紅よりも美しいであろう。

「御座^{みくら}に坐したまう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。御座^{みくら}の前にいます^{こひつじ}羔は彼らを牧して生命の水の泉に導き、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり」(黙七・一五—一七)

「曠野の愛」合併号、一九五一年四月・五月

主のつかいは み空に

かよう梯の うえより

招きぬれば いざのぼりて

主よみもとに 近づかん

六、信頼の勝利

藤井洋君の召天

(一九五一年三月)

一九五一年二月二六日の晩、東北地方への小伝道から帰宅してみると、電報が待っていた。藤井洋君召天の報である。重い気持ちで、併しどこか勝利感を興えられつつ、祖師ヶ谷大蔵なる野村実氏方のお宅を訪ねる。偕子夫人から信頼の勝利の中に天上へ文字通り凱旋された御様子を承つて、日頃の尊敬を更に深うした。無言の洋兄に今生最後の御挨拶をした。

病床の洋君にお目にかかったのは数える位しかかったが、ある時の談話では、空襲のための死屍累々たる悲惨な焼跡を目撃したり、夕暮時、上野で死体の大行列をまざまざと見てからは戦争がどんなに禍なものであるかを骨身に感じている旨を述懐された。洋君は真理探究熱が旺盛であつた。会話は病気を忘れて、社会問題や神学問題等で花が咲いた。その熱意は私に昔の父君を

髣髴せしめた。

洋君はあたたかみのある人格であつた。彼は併し神への信頼に於て強くあつた。三分間の面談をゆるされてお目にかかった時、私が握手を求めたら、ビックリして「手がよごれていますから」といって遠慮されたが、「そんなことはありませんよ」と私が答えたので欣んで握手された。その握力は今もこの手に感ずる思いである。再会の日まで私は洋君の印象を忘れ得ないであらう。私は洋君に何もしなかつたけれども、彼の存在は、父君と共にその実存の素晴らしさの故に、私にとっては、いつも新しき慰めと力となつて下さるであらう。彼の靈は天上の万軍の中でも私にとり慕わしき人格であらう。

矢内原先生が洋君の敢闘を嘉せられたのに対して「僕の生涯なんか問題じゃない」と独白のように答えられた由を告別式で承つた。洋君らしい気もちである。それは「主よ、何時汝の飢えしを見て食わせし……」の氣持と相通ずる無自覺的実存である。主のよろこび、今、天上にて如何ばかりであらう。併し、惜しみて余りある存在よ。主イエスの愛、御遺族の上に永くあらんことを！

藤井洋君の辞世の如き一首、

哀別の涙を拭へよろこびのこえうちあげよわれ天翔ける日

〔「曠野の愛」第三号、一九五一年三月〕

七、川口露野刀自の召天

思い遣り深き婦人

(一九五二年七月)

川口露野刀自を始めて知ったのは、一九四九年の秋であった。その後数回、小諸伝道にゆく度ごとに私は同家より、主にある愛を受けたが、川口露野さんは、本当にあたたかき婦人であられた。その笑顔は美しき魂のみが有つ光と愛の表現の外何ものでもなかった。その童顔の如き天真さとその極めて自然な言動とは、これに接する者に信頼の心をよび起こさざるを得ないのであった。そこに何か虚色とか虚構とかいったものを微塵も感じたことがない。また特に不遇不幸な人々への思い遣りの深い心とそのために犠牲を惜しまぬ行は、神の深く喜び給うたところであろう。その存在は諸々の苦難に耐えている人とも思われぬ優しさを以てつつまれていた。

御遺言により、私が告別式を依頼されていたので、五月三日、急遽小諸に馳せ参じたのである

が、駅からの途上で「告別式には私のことなど宜しいから、福音の伝道をして下さるように！」との故人の遺志を承ったとき、私は露野刀自の勝利に天が豁然として開けるのを覚えた。

天上の露野刀自と共に、魂を傾けて私はキリストの生命たる福音をぶちまけた。来会者数十名は、そこにはたらく給いし聖霊の力と生命にうたれた様であった。心一杯に生きて天上に昇った人の告別式というものは、その人の現に生きて在る霊と共に戦うので、却ってこちらが力づけられるものである。

不思議なことに、この告別式の日の丁度一年前にあたる五月三日は、川口愛子姉に案内されて松井田町に一姉妹を訪ね、その枕頭で生別式をした日であった（『曠野の愛』第四・五号参照）。そのときの露野刀自の深い思い遣りの心を忘れ得ない。

承れば、召天前の幾日間、非常な痛苦を耐え忍んだ後のお顔は天使の如く輝きにみちていたとのこと。死後暫らく体温が去らなかつた由。「キリストの栄光の福音の光」（コリント後四・四）が五体にみなぎっていたためであろう。「主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化する」（同三・一八）とパウロが言つた消息が現じつつ、天上に昇られた川口露野さんの霊は恵福なるかな。栄光を聖名に帰し、遺されたる愛子姉の上に主の御護りを深く祈る。

八、 「愛はすべてに勝つ」

(一九五六年夏)

一九五二年夏、東都の西北、清瀬、緑蔭豊かなところ、病院街の一角、東京療養所に月一回の福音集会をもち初めて間もない頃、ある病棟の大部屋の一ベッドに始めて前島正保君を訪ねた瞬間を今もまざまざと想い起こす。枕頭の壁にキリストの画像が掲げてあった。ここに一人の基督者ありとのレッテルである。

「幸なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。」「柔和」の原意はむしろ従順、謙遜、信頼に通ずる。前島君に接して以来、彼と交ること久しければ久しいほど、彼がイエスのこの言にふさわしい人であることを私は知った。最初の印象は最後まで一貫して易りなきものであった。その信仰の内実は豊かにされつつ。

神への従順、信頼は正にイエスの人格の骨髄であった。彼は数にもあらぬ私に、あるときこう言った「先生にお遭いしたことは、先生を発見しましたことは、私にとって全く恩恵で、何にも替えられません」と、それは、彼が人間小池を評価したのではなく、罪びと小池の悲願の事態に共感してくれた言である。彼は主に在って私に心から信頼してくれた。それは私のつかまされつつある「キリストの福音」使徒たちがいのちがけで伝えた福音に魂の底から共鳴してくれたからこそのものであった。十字架の主、復活の主、み霊のキリスト、三相一貫の主を身を以て受け奉る魂は「聖霊によってわれらの心に注がれる神の愛」(ロマ書五・五)のゆえに、真の信愛の交友となる。

前島君のあの素直な魂に豊かに流れていたものは何か。これは彼に接する何びとも感得する愛であった。生来、彼は愛の人であったにちがいない。それが併し幕屋の集会を重ねるにつれて、愛の質的深化を来たした。使徒的信仰への私の悲願を受けて、これを自らの身につけ始めたので、彼のなかに顕然たる変化が起ったのを私は見た。彼は幕屋に於て愛の泉の如き存在であった。毎日曜の集会を心から喜び迎える一人であった。また私が『曠野の愛』をさっぱり書かないので、「惜しい。惜しいです!」といって督促してくれたが、私は相変らず「私は不立文字さ!」などと冗談まじりに返答していた。

角筈に東京女子大があった頃、校医として当時活躍し、爾来角筈に永く仁術をほどこして来ら

れた善意そのものなる父君を助けて、前島君は医療に従事された。常識的には仕事は不可能に近い肺活量で、よく耐えていたものである。つねに祈り心地で、キリストの生命を魂が呼吸していたればこそ、あれほどに活動出来たのである。キリストの愛は、現実生命であり、力である。

神田のキリスト診療所に勤務して居られた頃から、彼の医療伝道精神は一段と旺盛になり、私も時折加勢に行ったりした。お茶の水への坂道は彼には苦が手なので、神田駅への道を一緒に辿った。魂と肺の呼吸は、いつも一つのことからであった。

やがて彼は陣容を新たに、角筈療養所長として活動を開始した。奥様の美しい内助、畠山路子姉妹（武蔵野幕屋会員）のけなげなはたらきが、前島君の新たな献身的態勢に應じていた。彼自ら「角筈キリスト診療所」と名づけんと欲した。この名称は教団との関係で遠慮することになったが、彼の存在は全くみ霊のキリストの御力によっていた。そうでなければ、彼は一步も踏み出すことが出来なかった。主の愛と力によってこそ彼の日々の診療があった。彼自らが驚きあやしむほどのことが稀ならず行われたことは、彼自らの口から私も聞いて共に感謝した。すべては祈りと愛であった。

彼は同じ武蔵野幕屋の児童への自製紙芝居つきの説話にたけた原功君及び幕屋の北村、海老原、大久保、小田、畠山姉妹たちの助けをかりて、奥様と共同で、「光の子供会」と名のる日曜学校を開設した。数十名の児童が忽ちにして集り、前島君、原君を通して、福音はその児童たち

の家庭にまでも及びつつあった。しかし医療や伝道の実践の力強さに対して前島君の肉体は余りにも限界を有ったものであった。私も診療時間の制限、夜の往診の不可などを忠言した。彼自らそれをよく承知していた。にも拘らず愛は患者のためにおのれを献げてゆく。誰がこれをとどめ得よう。彼自身もどうにもならず、棄身の行動に出たことが幾たびあったのであろう。彼の死の最大原因は、彼自らがどうにもならなかった天来の愛の焰にあったと思われる、医療の技術、医薬、その背後にあってこれを自由に用い且つ医療と医薬のなし能わざるものを患者に与えていた。それは前島君の全存在を通して溢れているキリストの愛のいのちであった。それは患者自らは、その最も深い意味に於ては知るよしもなかったが、前島君の人格にあふれている愛の言と行為から何ものかを受けたに相違ない。彼はそれをみなキリストの愛のゆえに感謝し、いよいよキリストのみ力を祈りつつ、キリストの中にわが身を投じつつ、患者に与えていたことであろう。彼は自らをキリストに投身していたがゆえに、患者のために投身出来たにちがいない。すべてはキリストに因り、キリストに帰せらるべしと自覚していたからこそ、キリスト診療所と宣したかった彼の心である。

二年前の夏、茨城、福島県境の山地、八溝山中に三日間の特別祈禱のため幕屋の数名の有志と、ある寺の離れ屋に籠ったことがあるが、前島君は身体に無理がゆくといけないので、参加しなかったが、上野駅まで一行を見送りに来て、「魂は皆さんと一緒にですよ!」といって、見送っ

てくれた。その姿が今も目につく。事実、彼の魂は三日間一緒だった。彼は角筈で真剣に祈った。「大隠は市に隠るだ。前島君、よかったね。君もたしかに前進した！ 素晴らしいことだよ！」と私は慰め、感謝し、共によるこんだ。それより約二カ月前、晩春の、ペンテコステの日に、私は突然、幕屋の解散を宣した。それは（原始福音の名のゆえに）幕屋を愛するが為にであった。幕屋の在り方に対して天来の霊が降ったのである。全責任は私にある。私も深く祈った。前島、高木、杉本、長坂、荒井といった諸君がそれから真剣に祈り始めた。時満ちて再会したとき、彼らが私の期待にそむかず顯然たる進境を見せているので、私は本当にうれしかった。

とにかく、彼が八溝山に行けなかったのも、その後私が大洗へ伝道に出かけた際に、同道した。彼はその伝道旅行を、非常に恵まれたといつて感謝していた。集会后、私の接手を通して使徒行伝的恩恵が彼の魂身にふりそがれた。共に平伏して聖名を讀えたのであった。

彼が地を去る約一カ月前、昭和医大卒業生で同じ幕屋に連っている野中武君が、北海道から所用で上京中同窓同信の石川昭君、小島真君を招いて（前者は職務上来られなかったが）私を交えて親しく一晚語らった。そのときの前島君は、是らの諸君に真に基督者医師としての将来の義務と抱負を、ものやわらかな語気の中に切々と語っていた。

昨年の暮は諸所の集会のクリスマスに東奔西走していた私であったが、その前夜も清瀬東療で集会をもちいよいよ最後のクリスマスを十二月二十五日に武蔵野幕屋で迎えるその朝まだき、前

島君は主にまねかれて忽焉として天界へ昇った。川口愛子姉妹からの急報によってこれを聞き、私は愕然、天を仰いで嘆息、言もなかった。「キリストよ、聖名に栄光あらせたまえ、アーメン」が彼の地上最後の告白であった由。アーメン、原始福音の信徒にふさわしき先陣者の雄叫び、闘いの声、凱歌、進軍ラッパである。彼は正に我らの迎えんとしていた降誕節に天から参加することになったと直覚した私は、先ず前島君の亡骸に告別赶赴き、予定の如く、降誕節集会を遂行。未だかつてなかった靈戦の特別降誕祭となった。その晩、前島君の柩前で、集会をもった。近親は申すまでもなく、かつて関係のあった美竹教会の方々も来会された。医療事業の関係諸氏も参集して居られた。満堂の方々が私の到着を待つて居られて恐縮であった。短時間であったが、魂をこめて礼拝をした。

その翌、二十六日、我らの愛の戦士、医療伝道者前島君の告別式を同君自宅にてとり行った。その告別式は全く同君の愛の実存の勝利であった。ある意味ではそのすべてを録音しておきたかった。私はそのとき天より与えられた告別の辞を再現するによしない。遺された二人の遺児信君と潔君は必ずや父君前島君の遺志に応える魂となって下さるであろう。奥様の御生活がそこに限りない祈りと希望と力と慰めとを与えられんことを！

武蔵野幕屋はここに大切な一員を、愛の戦士を失った。「人その友のためにおのが生命を棄つ。これより大なる愛はなし。」前島君はかく生き、かく身を献げた。武蔵野幕屋は君の愛を忘れじ。

今や天上会員たる君はつねに我らの間に、聖名にあって、いよいよ熱き愛を以て執成してくれている。まことに有難う！ 我らは必ず、君の愛に応えて進むであろう。我らのキリストの幕屋は立体的構造をなす。人生の一環に於て、この幕屋集会につらなり、夫々の事情により幕屋から出てゆくのを余儀なくされる会員は分離するのではなく、幕屋的展開をしてゆくのであり、次元的に地界を去る会員は、高次元性を幕屋に与えつつあるのである。まことの原始福音の徒に於ては、どのような事態も我らをキリストの愛の生命の有機体を強靱に形成するに役立ちこそすれ、分解、離散せしめるのではない。「死よ、汝の勝利は何処にある。陰府よ、汝の刺は何処にある」である。キリストの聖名に栄光あれ！ と前島君の勝利の叫びに和して私たちも唱える。

日本全土に幕屋を張る原始福音の兄弟姉妹らよ、主にある強靱なる魂を以て、主にある偉大な愛の心を以て、聖名のゆえに、一切を抱摂してゆこう。「愛は凡そこと包み、凡そこと信じ、凡そこと望み、凡そこと耐えうるなり」(コリント前書一三・七) 愛はすべてに勝つ！ Amor omnia vincit！ 愛はすべてを荷いあげ、救いあげてゆく生命力である。

「曠野の愛」第二五号、一九五六(昭和三一)年夏季号

九、予盾の偉大さ

(一九六三年)

一九六一年春から一九六二年春にかけて交換教授としてハンブルグ大学に勤めていたが、夏休暇を利用して西ドイツ周遊旅行を試みた。その途次、八月のある夕、列車はシュトゥットガルトからウルムへと走っていた。私の旅囊^のには数冊のドイツ語の本と雑誌があったが、その中の一つは内村鑑三先生の „Wie ich ein Christ wurde“ (“How I became a Christian.” の独訳) であった。この本の訳者の序文をその車中でよんだ。何十年か前によんだがほとんど全く忘れていたので、「ああそうだったか」とうなづきながら読んだ。もう表紙がまるで古城の壁のようにボロボロな本である。その序文は大体次のような挿話で書きはじめられてあった。この本の著者内村のところ、あるとき未知の農夫がたづねてきた。彼は東京から西方へ隔たること、ケルンからベ

ルリン程の遠隔の地からきた、とあるから大体京都大阪近辺からの客と見える。その客は東京駅から柏木の著者の宅へ直行した。著者と面談することおよそ二時間にして客は立ちあがって簡単にこう言った、「ではもうおいとませねばなりません。」内村はその唐突ないとまごいひきとめて、東京見物はすんだか、宮城や公園や神社仏閣はたずねてみたかと問うた。客は応えて、そんな時間はない、自分には田畠の仕事がある旨を告げた。それで内村は一体この人は何の目的ではるばる東京へ出てきたのか、何と無駄な旅をする人かなといぶかしく思つて更に問いただした。

すると農夫は答えて「いやどういたしまして。私はもう旅の目的は果しました。私はあなたがあなたの本そのままの方でいらつしやることがわかりました。実はそのことをたしかめたいばかりに、参上いたしました。もうこれで私は何もすることはありませんのです。」けれども内村は彼をやっとひきとめてその晩は自宅に泊めてやった。客は翌日挨拶してさっさと西への旅についてしまった。

以上の挿話のあとで訳者はこう言っている。自分は二時間の面談ではなく幾年も文字通りの隣人として著者の生活を知ったが、その感想は右の農夫と同じく、内村はその筆と同じ人間である。彼は心臓で書き、生活で書いている。著者がそういう人物であることを一言することが著者を紹介するのに最善で、著者についてとやかくと説明をするよりも、直接本文から著者を直ちに

知ってもらうことが最ものもぞましい。そう訳者は告白し、そのあとで著者の生涯の活動を簡単に紹介している。

右の序文を読んで冥想いくばくもないうちに、列車はウルム駅に到着した。私は駅頭で一ドイツ人のお出迎えをうけた。このドイツ人はステッキをつかねば歩行がややあやしい八十路を越えた白髪の老人であった。その人は今から三十余年前、私が旧制高校の学生であったとき、ドイツ語を親しく教えていただいた先生であり、且つ正にこの訳者であられるウィルヘルム・グンデルト博士である。

『碧巖録』訳解の大業に没頭しておられる博士といろいろキリスト教や仏教のおはなしを交した。翌日私は再び博士をおたずねしてこの書に記念の署名をおねがいた。博士はこの独訳の書の扉に次のようにしたためてくださった。

In gemeinschaftlicher dankbarer Erinnerung an den grossen und männlichen Zeugen der Wahrheit während der Zeiten Meiji, Taishō und noch Shōwa. Er liebte unter anderem das Wort Walt Whitmans. "I have many contradictions, for I am large." Wilhelm Gundert Neu-Ulm 13. 8. 1961.

「明治、大正、更には昭和年間における、この偉大なる雄々しき真理の証者に対し感謝の念を以て相共に憶えつつ。彼はなかななくワルト・ホイットマンの言、『余には矛盾多し、余は偉大なれ

ばなり』を愛した。ウィルヘルム・グンデルト、ノイ・ウルムにて一九六一年八月十三日」

グ博士は現にドイツにおける日本学専攻の学者中最高の権威者であられる。特に日本仏教および日本古典文学の造詣は深い。博士御夫妻は私を駅のプラットフォームまで見送って下さったが、いつまでも帽子を振っておられた先生のお姿が今も眼前に髪髯としてくる。

“AUF WIEDERSEHEN!”「また会う日まで!’」ドイツ語の「サヨナラ」がこういう瞬間ほど意味深長なことはない。

私は車中で再びこの本をひらき、博士の右の筆跡に見入り、冥想した。さきの序文の挿話の農夫の言や訳者の所感のごとく、内村先生はその人とその文が矛盾しない人であったのだろう。かく記す私は、ただ大手町時代末期、一九二三年前後、あの日曜大集會に幾度か出席して、壇上の内村先生を知ったまでである。「文は人なり」という通りの先生であつたにちがいない。それでは何が矛盾であるのか。

内村先生の矛盾は、言と行に表裏があるという意味のものではない。何となれば瞬間々々の全言行は一如の動きをしているからである。たとえば昨日は「東北は日本の首なり」といえば、今日は「東北は日本の尾なり」という。昨日は「神は義なり」と宣言し、今日は「神は愛なり」と告白する。そしてその間の関係や、構造や、変移の如何について説明や弁解がましい言辞を弄しない。先生の言論や告白は概して断言的な性格、詩的な表現である。聞く耳なき者、読む眼なき

者には躓きであり、矛盾である。しかし、神様こそ実にそういう啓示をなさったのではないか。アモスをつかまえて義を徹底的に宣した神は、そのひびきがまだイスラエルの空を圧している下で、ホセアを抱いてどん底の愛をその胸にささやいた神であった。内村先生のたましいの中には雷のような義と溶岩のような愛とが共存していた。そんなものをやどしている一個の人間、内村である以上、どうしてキリストの十字架なくしていられよう。聖霊の助けとなくさめにやらなくして息がつけよう。先生の無教会主義もそのように論議の沙汰ではない。主義にして主義に非ず、というものであった。ダイヤモンドは多彩の光を放つ、どれが本当の色かわからない。否、どれもその角度において本当の光彩なのである。そしてそれは実は根源的な白光からくる変転なのである。

内村先生の言動も、その時、その折のごまかしなき、いつわりなき全存在的な表現であったにちがいない。それが前後矛盾することがあろうと、それをとやかく顧慮することは、その瞬間の我を偽ることになる。それはとりもなおさず本質を偽ることになる。いのちはその表現面でしばしば矛盾の相をあらわすのが本当である。表現面は矛盾しても、実は本質面で首尾一貫したものが動いている。

内村先生のあの彪大な著作が多面多角多彩であって、表現面で矛盾の相をあらわしておればこそ、超論理の大調和、大首尾の一貫をなして人に迫る所以のものは、正にこのような消息による

ものであろう。それでこそ矛盾の偉大さであり、本ものであるとの感をおぼえる。本質的に詩的な文章を書きながら、先生が他面、研究的、科学的な客観性をもっておられたことも周知である。主観と客観が同時に渾然として存していたたましいである。そういう意味で、先生は大詩人型である。性格的には東と西の如くちがうけれども、あの大詩人ゲーテとも共通した焦点をもったたましいである。

その焦点とは何であらう。童心、というものであるようだ。偉大な人間ほど、瞬間を生き、瞬間にひたむきな童心をもっている。真理に対して私心なき関心をもっている。そして純乎たる童心はイエスがもっていた。

先生も亦一個の罪びとである限り、人間そのもののもつ矛盾にパウロと共に呻きながら、キリストの十字架で根源的解決を賜りつつ、なお現実にはさまざまな矛盾を十字架にあって負いつつ矛盾を貫いて大歓喜の福音を身証したのであった。

〔註〕この一文は『内村鑑三信仰著作全集』（教文館版）第五巻の月報より。一九六三年作

一〇、藤井 武と『旧約と新約』

（「興文」第一三〇号、第一三一号、第一三二号、
一九六八年九月、一〇月、十一月号所載）

（其一）内村鑑三と藤井武

藤井武の大学（東京帝国大学）生活は、明治四四年の夏をもって終った。時に彼は二四歳であった。卒業と共にくる問題は就職であるが、彼は就職を考えなかった。彼は文筆をもっておのが天職と感じていた。内村鑑三先生を訪ねて「できるなら先生のようなことがしたいのですけれど

も……」とご相談をねがった。先生は、しかし、「何をやるにしても、もっと人生を知らなければだめだ」と。一〇年くらい社会を実習してからとのおさとしであった。それで内務省を志願して、八月四日付をもって京都府属に任官した。

まさにその前日八月三日、彼は故郷の金沢市の養家で、婚約中の西永喬子（のぶこ）と普通の日本式の結婚式を挙げた。新郎は二四歳、新婦は一八歳であった。夫人の父、西永公平は石川県第一流の弁護士、県の実業にも政治にも関係し、名望家であった由。夫人は八人兄弟姉妹の長女として明治二七年五月二八日の生まれであった。彼は結婚後、「ほとんど命令的に」聖書を読ませた。その秋、高等文官試験に合格し、晩秋に京都へ赴任した。

大正二年二月末のこと、夫人は腸チフスの重患に罹った。四〇度の高熱が一月もつづいた。

彼は「病室のあるゆうべ」なる一文の中で語る、「みこころに、かなわばいやしたまえと切にねがった。けれどもすでに受けためぐみは、あまりにも思いにすぎるものであった。自分の愛する者が、かくまでにしっかりとキリストにささえられているのである。信仰生活ようやく一年有余、齡は二〇歳に満たず、新婚、日なお浅くして若き婦人のはなやかな望みが胸いっぱいであるべき時に、彼女のたましいはすっかり世から離れて、永遠の光がやく国にはほえんでいるのである。……ついに私は癒える癒えないを考えなくなった。ただ現在の奇しい恩寵に対する驚異と感謝とで満たされた」。

彼は彼女を神に捧げ、み手にゆだねて役所に通勤していた。その毎日毎日がモリア山へのアラハムの歩みであつたろう。ささげられた最愛の者は彼の腕に再びもどされた。彼は語る、「私はおもつた、この新しい生命こそは、いかなる意味においても神からのあずかりものである。われらはすでに一たび死んで、よみがえらされたのである。われらの今後の生涯は、いささかも自分のものであつてはならない。われらは今より彼の聖旨をうかがつて、全く彼の所有らしく生活しよう。私たちが過去の野心をいっさい抛棄し、断然官界を去つてひとえに福音のために尽くすべく決心したのは、実にこの時であつた」。

無教会にはバプテスマの式はないが、人生のできごとにおいて、それがこのようないちじるしい苦難であろうと、内的極限状況であろうと、その人にとって、のつびきならぬところを突破させることがある。それが十字架のキリストのもとにおいて受けとられるとき、それがバプテスマである。藤井武夫妻はこの死線突破の病患をバプテスマとして受けとめ、神への献供の生涯への内的準備はここに固められた。

彼はただちに退官したかったのであるが、内村先生は時機尚早となして彼をおもいとどまらせた。同じ大正二年冬、彼は山形県庁に転勤となり、はじめは警視、次には理事官として地方行政に従事した。彼はデンマルクの国民高等学校の例にかんがみ、県立自治講習所を創案企画した。地方に人材を養い、国家の中央と地方の健全なる有機体的発展に資せんと地の味な計画である。

今や日本の教育機構の現状における苛烈な競争試験が惹起する受験本位的な知能偏重の傾向や、大方は学制的な真の批判精神をもたざる学生運動一般の現象や、たましいの教育を自覚せざる教育者一般の在り方などを、藤井が天上から見ているとするなら、彼はダンテの如く慨嘆しているであらう。官吏として彼はもちろん有能の士であった。しかし、彼の心はいつ伝道への召命を受けるか祈り待っていた。

官界を立ち出でんと彼の志に拍車をかけたものは、じつに官界そのものであった。官界を知れば知るほど、そこに渦まく諸弊風に、彼の如き魂は、とどまるに耐えないのであった。

遂に時は満ちた。大正四年一二月のこと、彼は連統三日間、朝まだ起きて、三通の長文の書翰をしたためた。それは実父母、養母、夫人の両親にあてて、辞職と著述伝道生活への決意を述べたものであった。それらは親たちの心を痛めないように、礼儀と懇情と委曲をつくしたものである。

かくてその歳末、一二月二五日、正にホワイト・クリスマスの夜、汽笛と共に雪白き山形の山野に別れを告げ、翌日当時の東京郊外なる新大久保の駅に降り立った。内村先生の力強いハートが彼らを迎えた。「少しもこわいことはない。心配したもうな」。

彼は内村鑑三の一補助者として、日曜講演の筆記、『聖書之研究』誌の編集、同誌への毎回の寄稿、等の仕事を与えられた。寄稿としては、「ロマ書研究」がその最初のものであった。かく

して福音のための新生涯が始まった。ところが大正五年三月号の寄稿、「ロマ書研究」の第二回「單純なる福音」が問題となった。十字架の贖罪に関わる彼の告白が、内村先生の信仰と相容れがたいがゆえであった。そこには神の義がぼかされ、審判の面がかくれ、ただ愛のゆるしだけが主張されているからであった。そのため、彼の寄稿が禁ぜられるに至った。また彼の処女作『新生』の出版に関する警醒社書店への先生の紹介も取り消しとなった。しかしまたそのため、大正五年六月『新生』は岩波書店から出版されることになり、岩波茂雄氏とは終生の交わりを結ぶにいたった。彼の著作はことごとく岩波版か自家出版かであった。

このようなわけで、上京早々、内村鑑三先生と思わぬ衝突とはなったが、彼がやがて十字架のパウロ的な把握をなして漕ぎ出でる前の坐礁であったことを思えば、幸いであった。

彼はさらに、「十字架と悔改」なる論説を『聖書之研究』誌上に載せられんことを願ったが、先生は未だしとなした。内村先生は線の太い人である。先生は藤井を愛して仕事は従前どおりつづけさせた。その後彼の「壊るる幕屋、着せらるる家」を先生は大正六年二月号にかかげて、次の如く付言した、「君とキリストの再臨のことに關して信仰を全然共にすることを得るを深く神に感謝する」。これより後、彼の寄稿が再開された、これよりさき、大正五年一二月には、リンゼーの名著『ルーテルの生涯及び事業』の訳を彼は岩波から出版した。名訳でこの書はその後版を重ねた。

大正七年（一九一八）一月、内村鑑三は、神田の基督教青年会館で、「聖書の預言的研究演説会」を開き、キリストの再臨運動の狼火をあげた。これは第一次世界大戦とその結末に対する批判に基づくものであった。爾来先生は大手町の私立衛生会館を城として聖書大集会をひらくことになった。この再臨運動講演会は、大阪、岡山、その他諸処に展開されたが、彼は先生のよき補佐者としてその活動を助け、自らも先生と講壇を共にした。藤井のそれらの講演集はその後、大正九年一二月に『永遠の希望』と題して出版された。

この書の「序」の冒頭に曰く、「曾て見ざりし道德的混乱の時代に世界は今や臨んだ。何人もそれを如何にして收拾せらるるかを予言することが出来ない」と。約半世紀以前のこの文字は、もっと深刻な意味で、現代の日本及び世界にあてはまる。諸々の社会現象、諸々の国際事情が終末的な様相を呈し、極限状況に向かいつつある現代において、再臨の悲願を強化せしめられるのを感じるとき、藤井武のこの『永遠の希望』の一卷が新しいひびきをもって迫るのをおぼえる。本来、福音は終末的現実において告知されたものであるから、キリスト者の希望は、再臨による神の国の到来を明日にも待ち望む質的な迫りを内にもっているものであるからである。

ところでこの再臨運動の未だ終わらぬうちに、一信友の結婚問題を契機として、内村と藤井の関係は新しい暗礁に乗り上げてしまった。それは専ら信仰問題とか、結婚問題に関わる見解の相違というよりも、むしろ先生と彼との間に生じた信義如何の問題であった。彼にとっては耐えが

たい痛みであつたので、彼は「帳然として私は歎いた」と語っている。ひとの心理のうごきに関わる事件は、第三者がみだりにさぐるべきことではない。それから二年ほど経た大正十一年（一九二二）一月、先生は大きな碎けた心で彼を迎えんとした。彼もよろこんで先生を訪ねた。ここに師弟は自分の側の言い分、おのが義を十字架の下に投げ棄てて、キリストの十字架によって、真のやわらぎを新たにしたという事実のゆえに、この痛ましき師弟の一时的な決裂的な経験も、神の義、キリストの愛たる十字架が、先生にとつても藤井にとつてもいよいよ深められた。

神は痛ましき事件を通じてでも、信じ抜く者を推進させ給う。時はついに満ちて、藤井武は大正九年六月、内村先生の諒解を得て、独立伝道に踏み切った。その伝道の武器たる彼の個人月刊誌『旧約と新約』がここに創刊された。時に彼は三三歳であつた。この月刊誌の事務一切を彼の妻がいとなんだ。『旧約と新約』社はもちろん彼自身の家に設けられた。ここに彼の外的にも内的にも変転と体験の多彩であつた遍歴時代は一段落を遂げた。

（其二）夫人の死と『羔の婚姻』
こひつじ

大正一一年（一九二二）三月から、藤井武は東京市内に進出して、神田基督教青年会館で、日曜ごとに聖書の公開講演を開くことになった。彼は正に「人生の旅路なかば」（三五歳）、好調な前進をつづけつつあった。

しかし、健闘また健闘の夫君を全愛全力を傾注して内助するかたわら、五人の子女を育てつつあった夫人の荷はじつは過重であった。その重荷を欣然としてほえみつつ、荷なっていた夫人であったが、ついに限界に來たのをいかんせん。四月二一日夫人の胸は破れた。鮮血を吐いたのである。夏がすぎて、ついに彼は神田の集會を閉じた。コスモスの花が天的な微笑に咲きそめる頃、一〇月一日の夕暮、夫人の香魂は天界に昇った。彼は号泣した。天地晦冥である。

告別式は一〇月三日に九段坂上のメソジスト教会堂でいとなまれた。式辞の中で内村先生が「私どもは神様のみわざを義としたてまつるべきであります」と言われたとき、彼の魂は電撃されたごとくになった。「新しい光が私を叩きつけた。アーメンという声が胸の中にひびきわたった」と彼は「一〇月一日感話」の中で語っている（『旧約と新約』一〇〇号）。

夫人の死は、彼にとって舵が折れたようなものである。彼は舵なき舟をどのようにして進ませたか。その後の舟路八年の力漕は、彼女が天上から送った天つ風を帆に受けた助力によった。ここに内村先生の、「藤井喬子を葬るの辞」の一節を引用する。

「しかしながら彼女は死をもつてして、生をもつてしては、とうていなすことのできない援助を

藤井君になさんとしているのであります。はなはだ失礼の申し分ではありますが、私は私の実験より申し上げます。喬子さんを天国に送って藤井君は本当の伝道師になられたのであります。藤井君は今よりは理想を語るにあらず、研究の結果を語るにあらずして、真に見しところのものを語るにいたり、その結果たるじつに前日の比にあらざることを実験せらるることと信じます。今よりのち、ビヤトリスがダンテを助けしように、喬子さんが藤井君を助けらるのであると信じます。喬子さんは決しておのれのために死んだではありません。主のために死んだのであります」。

先生の言のごとく、その後の彼は、見しところを語る人となった。彼ははじめから理想を現実に生きんとしていた魂であったが、今や天が地の如くなってきた。地には夫人と共にひとたび死んだ彼である。

祝福された結婚生活は、彼自身がその自伝で語る如く、「はじめから神聖」であった。

「余りにも神秘的なこと」であった。「地のことではなくして天のこと」であった。「血肉のことではなくして霊のこと」であった。

「彼女は私に何であったのか」。「実際彼女が妻たるの従順を示し、女性たるの貞潔を現わすときに、それにまさりて私を栄光づけるものがどこにあったか」。「彼女は私を満たすものであらう。すなわち私のプレーローマ（満盈）である」。

彼は神の声を聞いた、「武よ！ 汝の足から下駄をぬげ。汝が立つ地は聖き地である。私の園にかたどった園である。私が私の妻なる召団（エクレシヤ）について思うところを、汝は汝の妻について思うのである」。かくして彼は新郎としての羔こひつてを見た。また「神のふところの中心に分け入って、宇宙のいと深きを秘密を見た」。彼は天地創造が「羔の婚姻」の序曲であることを悟った。人類の歴史は、新婦たるエクレシヤの潔めの過程であることを知った。「いっさいの根源に聖なる愛がある」ことを見た。「永遠に変わらざる羔の真実と完うせられたる新婦の貞潔と、この二つのものの相抱くところに新天新地は生まれようとする」聖書の啓示史を洞察した。今やこの祝福されたるおもしろい、夫人を天上にもぎとられ、血の洗礼を受けて、彼の畢生の讃歌、「新しき歌」として、『羔の婚姻』なる題名のもとに、一九二二年の四月から『旧約と新約』誌の巻頭に連載されることとはなった。

第一歌「コスモス」の篇にうたつていう。

讃むべきかな、ひとつの十字架もて

あるいは撃ちあるいは贖い

かくて永遠のみむねを成す者！

福さいわいなるかな、召されてみそばに

聖きよろこびを充たす彼女は！

聖名のゆえに軛負う私！

ねがわくはそこに彼女をして

ここに私をして暫しありて

合唱せしめよ、汝の栄光を。

汝、いと高き愛、とこしえの義、

汝にむかいて我らはうたわう、

新らしき歌を、『羔の婚姻』を。

わたしは素よりダビデではない。

またダンテでもない。しかし如何せむ

黙さは石が叫ぶであらう。

おお父よ、子よ、聖霊の神よ、

わたしを聖めよ、わたしを強めよ、

私の歌を完からしめよ。アーメン。

爾来八星霜、彼が地を去る日まで、『羔の婚姻』に彼の生命と生活とは集注されていた。この詩を中心に、彼の思索も研究も聖書の解説も動いていた。実にこの詩は彼の生命の呼吸であり、祈りであり、告白であった。また戦いであり、いっさいであった。ダンテの『神曲』、ミルトン

の『樂園喪失』、クロップシュトックの『救世主』、藤井の『羔の婚姻』を世界四大宗教叙事詩と称することができよう。純文学的価値において前二者は言わずもがなではあるが、詠われた内実の福音的な価値、雄渾なる聖書史観の点において『羔の婚姻』は独一の地歩を占むべきものである。これは叙情味豊かなる叙事詩というべく、天地創造より新天新地の到来にわたる史詩である。

『羔の婚姻』が書きはじめられた大正一二年といえ、その九月一日に関東は大地震に襲われた。彼はそこに神の日本に対する警告乃至審判の聖手を見た。彼の眼は歴史的乃至自然的事象において神の摂理を洞察せんとしていた。ヘブライの預言者の魂と相通するものであった。

そして日本が神の歴史においていかなる地位にあるか、いかなる使命、課題を負わされているかを考察し、洞見した。キリスト教的見地から見た神の救済史において、「第一文明」たるギリシャは神の本質の問題を、「第二文明」たるローマは、人間とその罪の問題を、「第三文明」たるドイツは救贖の問題を、それぞれ中心課題として歴史的に展開してきたが、「第四文明」として日本は来世問題を課せられていると彼は観た。

その来世問題を取りあつかうにあたって、彼はその裏づけとして日本の精神史を鳥瞰した。『聖書より見たる日本』と題して一九二九年二月に岩波書店から出版した一連の論文集がそれである。しかし彼のそのような著書もすべて彼の『旧約と新約』誌上において発表したものであ

る。彼は日本の精神史の過去を顧みて、そこに福音を受くべきいわば旧約的なものを見た。『羔の婚姻』中篇「新婦」、第三十歌「産痛」がその消息を歌っている。彼が現代批判において明治大正文明を総じて「無宗教無道德文明」ときめつけているのはいささか酷にすぎるくらいはあるとしても、いよいよその傾向をあらわしてきた昭和文明への預言的な宣告としてひびくのである。

「優しき心情は深き仏教に応じ、聖き道念は正しき儒教に従い、聡き知慧は博き科学に答えて、探求また探求、修養、実験また実験」の歴史的苦闘をつづけて今日に至った日本ではあるが、未だほんとうに精神的充満をもたらすものを受けていない。「罪のなやみを癒やすこと浅くして康からざるに康し康しというものは仏教であった。永遠を慕う心のまゑに余りにめでたきは儒教であった。寂しきは信仰なく道德なきの日。感情は我らを溺らしめ、意思は我らを化石せしめ、理性は我らを浮き漂わしめた。平安に真理なく江戸に生命なく、東京に道はない。我らはパンを求めて石を得た。我らは魚を求めて蛇を得た。……感情と意思と理性との上に全人格を限りなく発展せしむべき永遠の霊的生命はないか。我らのために道たり、真理たり、生命たるものが、なお何処にか存在しないか」。かく語って彼は言うまでもなく福音のほか、キリストのほか日本人の求むべき精神的支柱なきを告げ、しかもキリスト教を受けてその歴史的使命は、日本人固有の特質たる神秘的直観の力を福音によって活現せしめられて、いわばヨハネ的福音、ヨハネ的黙示

の世界を開示し、福音的な光をもって東方より全世界を光被せんとするにありと洞察した。そこに日本をもって現わさるべき第四文明の華があると観た。

「ああ東洋よ、東洋の日本よ、源信、法然、親鸞の子孫よ、世界は今や汝を要求しつつある。第四文明は汝の手によって起こらんとしつつある。神の国の真理は汝の開拓によって完うせらんとしつつある。望むらくは神の賦与したまいし汝の古き特性に目ざめて、今より高く来世永遠の光明を点じ、もって万国の民を大いなる希望の生活に導かんことを」。彼はイザヤ書第六〇章に因んで、「栄光の日本」を望見した。「西洋文明の粹が日本に集まり、復興したる東洋文明とともに渾然と融合して、神の聖名のために献げられる日が来るであろう。今は西洋文明もまた神より離れて、甚だしく墮落している。復興を要するものはひとり東洋のみではない。全世界が何処かに新しき信仰的中心を見いだして、そこにむかって帰一せねばならぬ。日本がその過去に於て示したる深遠なる来世観念を以てキリストを迎え、教会史上かつて見ざりし新しき栄光に輝く時、その時こそ西洋もまた東洋と共に復興して、世界の文明が最後の目ざましき光彩をはなつ時ではあるまいか」。

福音の最終段階たる終末論的課題に着眼した彼の魂は、日本の使命を思うてかくまで高揚はしたものの、現実の日本を直視するとき、その不信不義の世相のゆえに、憤怒と慨嘆に痛み、ついに「亡びよ」という逆説的な詩を書いて愛する祖国のため憤りかつ嘆いた。

『羔の婚姻』の中篇「新婦」第三十二歌「幻滅」において、彼が怒りかつ嘆いている詩句は、その後第二次大戦を経て二十三年の今日この頃のわが国の現状にふさわしい文字である。

（其三） 両雄の死、『旧約と新約』の性格

一九三〇年三月二十八日、彼のもとにも悲報が飛んだ。恩師内村鑑三先生の長逝である。ときあたかも彼自身胃潰瘍悪化の病身であつたが、病床を蹴って彼は柏木に馳せ参じた。三月三〇日、柏木聖書講堂での告別式で彼は重任を果たした。彼は告別の辞「私の見たる内村先生」の中で叫んだ、「先生は十字架をかざして現われ、十字架にたよつて戦い、十字架にすがつて去りました。十字架を離れて内村先生なしであります。……かつて明治大帝の死によつて世俗的日本は一紀元を画せられました。同じように今や内村鑑三の死によつて心靈的日本が一紀元を画せられたのであります。……しからば今日のこの式は内村鑑三の告別式であるよりも、むしろ新日本の定礎式であります」。熱火の弁、至誠の言を壇上より吐くこの人の相貌は、「墓より出て来たような顔であつた」。四月七日には新町の自宅での集会において、「キリスト教史上における内村先生の

地位」と題して、パウロ——ルーテル——内村の信仰系譜が語られ、四月二九日の横浜における講演会で、彼は、「預言者としての内村先生」と題して語った。

さらに五月二九日の青山会館における内村先生の記念講演会では、「近代の戦士内村先生」と題して語ったが、この講演において、彼は、現代世界を押し流しつつある享楽主義のアメリカニズムと唯物主義のマルクシズムの二大潮流に、東から北から迫られている日本の精神的危機に警告を発し、これからの日本は「蛙のような穢れた二つの霊」と霊の戦いをなすべきであることを宣し、ヨハネ黙示録一六、一九章を指摘して、「ハルマゲドンの戦いこそは全世界の関ヶ原」であると預言し、「現代のハルマゲドンは何といつてもわが日本の東京である」と断じ、真理の戦いをなぜ、キリストの十字架の義をもって生涯を戦い抜いた近代の戦士内村鑑三の戦いを継いで乗り進め！とキリスト者を激励鼓舞した。そして、「我らの戦いはこれからであります。すなわちここに先生の記念会に当たって、私どもはすべての真理の敵にむかって新たに宣戦を布告します」と絶叫した。

そしてこの預言的な獅子吼は適中し、日本はついにアメリカとソ連の軍門に降り、日本歴史のどん底におちた。しかも今日、わが国の精神状況は大方、享楽主義と唯物主義に因るデーモニックな不法の霊どもの支配下にあつて、これとの霊的な戦いは大方未だ本格的になされてない。現代キリスト教界が新たに使徒的霊的信仰の復興を要する所以である。

一九二九年九月一日から一九三〇年六月二九日の日曜まで、前後二〇回にわたり、黙示録の講義が、駒沢新町なる藤井先生の自宅集會——來會者はつねに一〇数名に過ぎなかった——でなされた（筆者がこれをまとめたものが全集第六卷に収録されてある）。我ら少数の集會員の酒杯は溢れた。聖書の黙示の絶頂に達した先生は、あたかも「わがことおわれり」の如く、七月一日午後三時、突如天界に昇ってしまった。胃の穿孔のため仆れたのである。

しかし、藤井武はいまだ地を去ってはいらない人であった。日本はかくれた預言者の詩人、真理の解明者、福音の証者を失った。内村鑑三は走るべき道程を走り終わった人であった。彼は落日の如く去ったが、藤井は夏の雷霆の如く落下したのである。「わが神、わが神、何ぞ我を見棄てたまいし」である。彼の畢生の詩篇『羔の婚姻』は下篇「饗宴」第一五歌のあとの「断章」が絶筆として机上にのこされてあった。その最後の句は次の如くである。

ああこれ地にて聴くことを得る

最終のラッパ、「時」はかえりて

また永遠に入るべきの合図。

先の二つの禍害に増す

第三の禍害、地に住むものら

かなしうはがみ
哀哭切齒することあろう。

何かしら深い預言のごとく、今もなお聞こえてならない。全世界が、二〇世紀の二つの戦禍につぐものをもし招来とするとすれば、哀哭、切齒も及ばぬことになるからである。日本も世界も、この破れた詩篇の預言者の天上の呻きを知らない。彼の生涯そのものが、エレミヤの如く、ダンテの如く、おごそかな神の義と深い神の愛を語る。キリストという真理に燃やされていた魂の灯を、彼の生涯と文字に見る。彼は今も天上から、彼のごとく真理を愛する戦士のためには、「一歩も退くな」とはげまし、キリストの福音のためには、誤解迫害をおそれず、孤立無援にも耐え、曠野の如き現代に、サフランの楽園を展開せんとする預言者の使徒的キリスト者のために、思いやり深く祈っているに相違ない。

以上をもって月刊誌『旧約と新約』を武器として戦った彼の伝道生涯のあらましとその特質を白描したのであるが、おわりに、世界に誇るべき大作でありながら、現代日本詩壇に知られていない日本における独一の宗教詩『羔の婚姻』の構造を紹介し、かつ『旧約と新約』誌そのものの本質に触れてみたい。

大史詩『羔の婚姻』は、その題名をヨハネ黙示録一九章七節の「羔の婚姻の期いたり、既に新婦みずから準備したればなり」と、九節の「羔の婚姻の宴席に招かれたる者は幸なり」による。上篇「羔」、中篇「新婦」、下篇「饗宴」の三部曲をもって構成されている一大詩篇である。「羔」は神の子キリストを意味し、「新婦」はキリストの救いにあずかる人類を意味し、「饗宴」

は歴史の終末における神の国の祝福された両者結合の歓喜を意味する。この詩の主題は、宇宙と人類の創造と墮落、これを救わんとする神の経綸とその実現による神の国の完成にある。このため著者の題材としたところは、創世記から黙示録に至るまでの全聖書と、神の選びの民からの歴史的展開である。即ち「羔」篇においてはキリストの降誕に関する旧約聖書の預言をくりひろげ、福音書のイエス・キリストに及ぶ。「新婦」篇においては、ペンテコステをもって始まるエクレシアの歴史の展開を歌う。その間、深き洞察をもって日本の世界精神史的地位と使命について歌った切々たる憂国の詩句は、現実の日本に対する一大警鐘というべきである。「饗宴」篇においては主題を専ら黙示録にとり、世界の終末的審判と新天地への大希望を歌わんとして筆を進めたが、詩歩未だ半ばならずして著者は天に召されたのである。

藤井武がこの偉大なる主題の一大叙事詩を書くに至った起因は、さきの叙述で大方明らかであるが、彼がことに神の国完成の経綸を、キリストとエクレシアの「婚姻」として把握したことの背景としては、聖名のため純潔にして最も祝福された十年の結婚生活をいとなんだ後、突如その愛する妻を天に召されたことに発する。生死を越えての永遠的貞潔の貫きにおいて彼は、キリストとエクレシアとの関係を見、『羔の婚姻』をもって表現されるところの聖書史観の秘義を自己の人生の血涙を通して体認させられたのであった。

この詩篇の形態は、ダンテの『神曲』に類似し、三行一連、数連一節、数節一歌、三六歌一

篇、三篇全詩の構成である。各行の字数は一四字か一五字を中心とし、文語調に口語調をまじえた独特の格調である。各歌は七連七節一四行が基準であるが、一定はしていない。詩の範疇から言えば、ホーマー、ダンテ、ミルトン、クロップシュトックの大作の部類の大叙事詩である。一歌一歌がある意味では独立の詩篇をなしつつ、大いなる有機的構造を成している未完成ながら総計実に一二九四行の長編である。ダンテの『神曲』の一四二三行、ミルトン『樂園喪失』の一〇五五八行及び『樂園回復』の二〇七〇行計一二六二八行と比較して何ら遜色がない。天もし藤井に藉するさらに二歳月をもつてせんか、この詩の完成は優に期せられたのであった。惜しみてあまりあるのだが、この未完成がもつ無限の余韻に無量の祈りがひびいている。例えば、この詩の一節を引用すれば、

ああ秋の野の野草にやどる

白露のごとく今この山に

数えつくせぬ顔また顔の

いずれ一つか地にありしころ

腸よりぞ沸きしとおもう

涙の痕をのこさぬがあらう。

その源を封ずるために

人の手はあまりに短きを

験して彼らはつぶさに知った。

おのが心の的に触れえぬ

空しき逸矢を蔑みつつ

地の慰めをかれらは拒んだ。

ただやわらかき「時」のなだめに

暫し思いを遠ざくるとも

何か癒えよう、傷そのものは。

さわれ嘉き日はついに臨んだ、

涙の壺を創造りたまいし

能わぬことなき聖手は今のび、

見よ、あおぎみるすべての眼より

涙ことごとく拭いたまえば

ほがらかに睥みながやく。

（『羔の婚姻』下篇「饗宴」第一〇歌「棕梠」の一節）

最後に一言したいことは、藤井 武の月刊誌『旧約と新約』の性格である。彼はいわゆる伝道

旅行をしなかった。それにはいろいろな理由はあろう。しかし、彼にとって『旧約と新約』を書くことは、いのちがけの仕事であった。否仕事というより、それが生活そのものであった。一言一句もおろそかにせず、どの一文といえども無駄な筆はひとつもない。書くことが生くることであり、戦うことであり、愛することであった。彼の書いたものは、いわゆる聖書の註解ではない。さりとて単なる感想でもない。そこには研究の裏づけがあり、思索の展開がある。そこには深い祈りがあり、時世に対する客観的認識と主体的洞察がある。その文章は詩的であり、その思想のはこびは哲学でもあり、神学的でもある。それはあたまがつくり出した思想ではない、全存在から吐露された告白である。そこに力があり、ひとの肺腑に迫るひびきをもっている。いわゆる学者的厳密ではなく、靈的な權威と詩的弾力性をもっている。いわゆる注解のなし能わざる聖書の本質への洞察と主体的合一が生じている。

『旧約と新約』は、毎号が大方一つを中心テーマをめぐって展開している。そこにおのずからなる有機的な連関が見られる。月々に与えられる課題に対して全存在をもって取っ組み、それを書かざるを得ないといったものである。これはおよそジャーナリズムとは異なった性格のもの、雑誌ではない。言の最も深い意味での告白である。一号一号が非連続の連続である。かくておのずから生じている有機体性である。『羔の婚姻』についても同じことが言える。例えば『旧約と新約』の第七八号を見ると、「パウロ号」と題してあり、「羔の婚姻」のテーマは「新婦」第九

歌「ダマスコ」であり、論説は「使徒パウロ回心の心理」「世界歴史の一紀元として見たるパウロの召命」「異教文化に対するパウロの理解と同情」がその内容であり、これにミルトンの『樂園喪失』の訳と註の連載の第一五回が載っているといったわけである。『藤井武全集』全一二巻の大部分は、要するに『旧約と新約』誌全一二一号の内容である。

藤井先生の和歌より

○おほいなるみあしの跡をわれ見たり六千年の巻物のうへに

○一節ひとよのみことばふくみ繰りかへし野みちをあゆむ夕ひと時

○わが足はすべりぬわれはまろび落ちぬ落ちてし見ればなほ聖手にあり

○まどかなる虹はたちたり武蔵野の森よりおこり森にくだりて

一一、 赤星文子姉

——記念会感話の要旨——

(一九七〇年二月)

一月一九日は母の召天満十三年。母の告別式での私の式辞に感動されて相馬くに子姉が入会。この方に勧められて赤星文子姉が来会。赤星さんがどんなにこの福音、使徒的信仰に感動され、歡喜の魂となられたか。今でも眼前に髣髴。みたまの力で御病氣も知らぬ間に制御。伊香保、小諸、清里、箱根、鹿沢の夏の特別集会にも欠かさず御来会。会員中の最年長者が最遠方の大磯から御来会。嬉々として遠路にうち勝つ。赤星さんはあたくさい人、純情の人、あつい涙の人、バラのようなほえみの人、童心の人、気品高き香りの人、若き日には明治のNo.1、絶世の美人。晩年における藤纈染は鳥が歌うように自然。しかも心をこめての御精進。八十路正に満ちた御誕生当日十二月二三日に御召天！ 円現の全的生涯！ 永遠の女性の象徴。福音のこの円現体のゆ

えに聖名を讀えます。



赤星文子姉（夏の集会の帰途にて）

「ハレルヤ」第五号、一九七〇年二月号

一二、川口愛子姉

(一九七三年三月)

一九七二年の暮、ついに彼女は天に帰った。二十年を超える彼女との交友は、専ら伝道集会を中心とするものであった。原則としては、春、夏、秋、三回小諸のひまわり荘と通称していた彼女の家で伝道集会を開いた。そのほかクリスマスに二・三回は訪ねた。暖房も炬燵だけであったはじめの頃の集会がなつかしく思い出される。

小諸の療養所も、大体ははじめの十年間ぐらひは毎回訪ねた。かなり多くの患者が私の聖書講筵を聴いたことになる。そのうち少なくとも三・四十名は本当に救われたと思っている。

川口さんは本当に愛の人だった。天性そういう人なのだ。それが聖霊を受けてからは、さらに深められた。私を通して聖霊が神癒としてはたらき給うた第一号が川口さんであった。そのとき

のことは今でもまざまざと浮んでくる。

川口さんがもし若いとき健康者であり、結婚をしたら、クリスチャンであったとしても、別な在り方であろう。勿論妻として素晴らしい人であったに相違ないが、信仰の世界が、我々とは異った色彩のものであったであろう。病身で独身で聖霊を受けた川口さんであったからこそ、あのように多くの人々の「ママ」として、あのような証者らしいはたらきがなされたのであった。

それにしても晩年の病床は何としてもお気の毒であった。あのように人のため愛を尽した人が、どうしてあんなことになるか。その生活が心身ともに人のために用いすぎたからであった。要するに荷いの愛の犠牲となったのである。誰かこの愛の実存を思うて首を垂れざる者がある。しかも彼女が負った心の十字架は身体の十字架よりも苦しいものであったろう。でも彼女はそれをほほ笑みの中に溶かしていた。彼女は全く現世の幸、不幸を乗り越えて、聖名のため、感謝し、聖名を讀んでいた。もう何をかいわん。

〔「ハレルヤ」第三〇号、一九七三年三月号〕

一三、「聖霊の愛」の人

(一九七四年二月)

旧臘の始め頃、手島さんが奥様をわざわざ遣わされ、元日に大集会を開催の予定であるのだが、自分はもう壇上で語るのは無理なので、私に講演をねがいたい旨の御依頼を受けましたので、私は聖名のため、畏友手島さんのためなラと思ひ、言下に御承諾いたしました。標題は、「イエスの実存」と題してお話するつもりでおりました。ところが御存じの通り、降誕節十二月二十五日の朝、召天され、二十六日が告別式となり、今日はこの記念大集会となったわけで、表題を変えて「聖霊の愛の人」といたします。

私の五人の恩人

さて私の信仰五十年において、五人の恩人がありますので、そのことを先づお話しなければならぬわけです。

私は一九〇四年生まれですが、私より九歳上の舎兄小池政美が内村鑑三先生の大手町大集会に一高時代から御厄介になっていました。彼は大学卒業後間もなく北京の日本公使館員として赴任し、その翌年一九二一年に腸チフスのため二十七歳を一期として仆たおれました。この兄の死は私にとって「一粒の麦」となり、私はキリスト教の世界に踏み込んだわけです。兄の生涯の終りの信仰生活数年の生きざまは目ざましいもので、今でもまざまざと浮んできます。彼は私の信仰への第一恩人であります。私が最初に開いた本は内村先生の『宗教と現世』という本で、それから兄の書架の内村先生の著書をむさぼるように読みました。そして大手町の大集会にもできるだけ出席しました。これが私の水戸高等学校時代のことです。そのようなわけで内村鑑三先生は第二番目の恩人です。

それから東大時代は、兄が生前土曜集会などでお世話になっていた内村先生の高弟藤井武先生の下で、日曜の家庭的な寺小屋集會に五年間、先生の死に至るまで無欠席で御厄介になりました。

た。藤井先生は無教会における独特な存在、私の信仰生活における土台石であるので、藤井武先生を私は特別に恩師として覚えていたわけですが、先生は即ち第三番目の恩人であります。

一九三〇年の春に内村鑑三が、同じ年の夏に藤井武が、即ち無教会陣営の、そして広く日本の精神界における二大巨星が天界に移ったわけであります。

それから三年、私はひとりで聖書を学び、日曜もひとりでおくっていましたが、ある人を塚本先生の丸の内集會に案内することになり、私もしばらく御厄介になりました。司會を仰せつかったり、無教会はじめてのヘブライ語クラスの担当などをお頼まれしているうちに、しばらくが数年になってしまいました。塚本先生の福音書の学問的な研究と信仰的把握は先生独特の味のものであります。塚本虎二先生は、即ち第四番目の恩人であります。

一九四〇年から私は自宅で藤井先生流に寺小屋集會を開き、途中から幕屋と称して今日に至っておりますが、その間、塚本虎二・植木良佐編集の『旧約知識』誌の同人として、同誌に「詩篇」の訳と解説を連載することになりました。すると、この「詩篇」に注目されたのが未知の手島さんで、熊本から再三のお手紙で、詩篇に非常に共感しているのので、一度熊本に来て集會を共にして欲しい旨の内容でありました。それで私が熊本をお訪ねしたのが、手島さんとの交友の由来でありました。

私はどうも無教会には何か欠けている。聖書の研究も優れているし、説かれている内実はたし

かに真理だと思ひ、内村、藤井、塚本、三先生のどの集會においても、毎回私は心が満たされ、信仰も確さを増して來てゐるのではあるが、何かまだ欠けてゐるのではないか。それはどうも祈りの世界の何ものかではなからうか。そのことに氣がついて、私は詩篇に喰ひつゝいたようです。

そのようなわけで、私は心を祈りにかたむけ、祈りの世界で燐りはじめていたのでした。私が個人的に書いた最初のものが「祈りの哲学」（一九三二年）という文章であつたことを今思い出しますが、やはり不思議な摂理に導かれていたと思われ、手島さんに會うようになったことは。

阿蘇垂玉集會の火

さて、ところで一九五〇年晩秋のことだつたと思ひます。手島さんの御案内で阿蘇の垂玉温泉での集會に参りました。今でもあの断崖の紅葉、天然の綾錦あやにしきの美しさが眼前に髣髴はうふつとしてきます。この集會は手島さんにとつても歴史的なもので、幕屋のペンテコステであつたわけですね。この集會で、参會のみなさんが「お父様！」と言つて、ものすごく叫びかかつてゐる。無教會にああいうのは無かつたですから、私は正直ちよつとびっくりしました。でも私は割合に魂が柔軟

なものですから、すぐ「これだ」と思いました。私も祈っているうちに自然に、否、靈然に、異言になったわけです。

「小池先生、それは本当の異言です」と手島さんが横からささやいて下さる。それから女の方々が靈歌を歌い出したんです。それが自づから天的たてな妙えなるリズムを成しているではありませんか。手島さんがタクトをとりながら、「ちょっと、小池先生見て下さいまし。」あれは本当に録音しておきたかったですネ。私もこれには本当に感嘆いたしました。歌っている方々は、祈りの世界ですから冥目しておられるわけですが、ちゃんとリズムが合うのです。そうかと思うと邪靈の現象があると、「聖名によって命ず、この人を出でよ！」と邪靈の追放をなさる。こういった事態は未だかつて無教会になかった。

確かにこれは次元が違う。私にとってこの阿蘇の集会は聖靈のバプテスマであったわけですから、帰りの汽車の中で聖書を読むと、まるで響きが違うのです。パウロの書翰しよかんの聖靈とか御靈とかいう文字が躍動して迫ってくるのです。そんなわけで、祈りの世界で私の中に燃っていた靈に御靈の火が点されたわけでした。そういう実情で手島郁郎兄は第五番目の恩人であります。

教会、無教会一般に欠けているもの

それで無教会に欠けているものは、御霊のバプテスマであることがハッキリしたのです。それは何も無教会に限ったことではない。キリスト教界一般において、大体このことが言えるわけで、なさけないことです。無教会は学問的前進は大いにしています。世界的水準の学者も幾人かはおります。しかし聖霊の事態に至っては、大体において突破がなされていないと言えるでしょう。

手島さんは顯然とこの突破をして、福音の最も大切な中核を体験されたわけでした。他にも勿論、聖霊体験者は日本キリスト教界にありますが、手島さんの今日までのカリスマ伝道の業績は日本キリスト教界で無比なものです。四半世紀の歳月にして、日本全国に幕屋を展開された事実が、これを実証しています。このキリスト教の滲透しにくい日本国で、個人月刊誌『生命の光』が二万数千部を出している事実は、日本キリスト教界で他に類例を見ぬところです。無数の兄弟姉妹が、手島さんを通して働く聖霊の愛の力で霊肉の救いに与かりました。

私は手島さんのような大きな器ではありませんが、私の中に点っている御霊そのものは同じです。聖霊は同一。これバウロが申している通りです。御霊のたまものはいろいろです。手島さんは御霊のたまものの実に豊かな方です。ともかく御霊のバプテスマを体験したので、手島さんと心と心、魂と魂が楽に通ずるわけです。

イエス御自身はヨルダンにおける聖霊のバプテスマを直接受け、サタンとの一騎打で完勝なさ

ってから、伝道に立ち向かわれたことは何びともまねのできぬことですが、キリスト教の歴史は、キリストの十字架の贖罪の大業のあと、ペンテコステにおける聖霊のバプテスマを以て始まり、使徒たちは十字架を土台としたキリストの復活の事実と、この御霊のバプテスマをもって立ち上がった。いつの時代でも然かあるべきであり、そうでなければ本当でないわけです。

世界のキリスト教が、この原始キリスト教の原始福音の次元から大体においてずれているので、低調なわけです。

私はドイツに一九六一年から二年にかけて一年間、ハンブルグ大学の専任講師として勤めたことがありますが、その際ハンブルグのルッター教会に通っていましたら、副牧師が、私に聖書の時間を数回委嘱しました。（正牧師は私が正式に洗礼を受けていないというので、説教壇に立たせてくれませんでした。私に言わせれば、私は天界のキリストから、まさに正式に聖霊のバプテスマを受けているのですがネ！）その際、その副牧師が「あなたは どうして、そういう心境になりましたか」と聞くんです。それで私は御霊の事態を語りました。それから向こうの教会新聞に「聖霊のバプテスマ」と題して、これが今のキリスト教界の焦眉しやうびの問題であることを述べました。

そういうわけですから、手島郁郎著『聖霊の愛』というこの本！これは実に日本における画期的な本です。教会も無教会も、これを真剣にとりあげて体あたりしようとはしなかった。或は黙殺した向きもある。これより先き、一九四九年の『生命の光』誌上で手島さんは「異言についての弁証」という一文を発表しました。これを読んだときに、私はまだ異言や聖霊以前でしたが、「これは本当だなあ」と思ったのです。それで手島さんにお手紙を差し上げて敬意を表しました。すると手島さんが、「あなたのお手紙は家宝にしておきます。誰も認めてくれなかったのですが、あなただけが認めて下さった」という感謝のお返事でした。本物は人に何と言われようと、必ず勝ってゆくのです。

「異言論」のほかに「神癒論」もあり、それからあとで「按手論」を書かれました。どれも体験による素晴らしいものです。何も霊的現象に重点を置くわけではありませんが、異言や按手や神癒等の体験なしには、聖書の霊的な味はわかりません。手島さんの御霊における信仰の現実が本物であったから、そこに異言の花が咲き、按手の葉が生じ、神癒の果が実り、愛の枝がどんどん伸びて日本全土にゆきわたったというものです。

生命の霊言

一番大切なことは、いつも根底が本物であるということです。本物であるとは、十字架の贖罪を土台とし、聖霊が内住しているという事態です。そして御霊と御言葉は一如です。「わが言は霊なり、生命なり」との御言がある所以です。ヨハネ福音書の冒頭「元始に言ありき」も「元始に言、霊ありき」または「元始に霊言ありき」と私は訳しています。聖書はパウロさんでも驚くような読み方、訳し方ができるのです。聖書の訳なども、御霊による創造的な、もっと大胆なのがあつていいのです。今の口語訳の聖書はどうも気に入らない場合が多いようです。私は文語体の方が好きなのです。というのは口語訳で「何とかであらう」なんて言われると気が抜けるのです。ギリシャ語で未来のテンスで書かれていても、信仰的内容の場合は断定的に表現すべきです。それを日本語で何でもかんでも「……あらう」とやられては、蓋然性^{がいぜんせい}にひびくので、気が抜けてしまうのです。不確実性に聞こえたんでは信仰の事態は台なしです。

パウロは言いました、「儀文は殺し、御霊は活かす」と。皆さん、訳文などにこだわることはないですよ。日本語の聖書の奥の霊言を、御霊の光で読むことです。そういう根源語は、ヘブライ語でもギリシャ語でもありません。音楽の音譜が世界語であるように、根源語は万国語に通ずる霊言です。ヘブライ語、ギリシャ語の旧約、新約をどんなに正確に訳してみたところで、ヘブライ語、ギリシャ語そのものが相対的なものですから、どうにもなりません。絶対的なものは、もはや概念ではありません。限定することのできぬもの、すごい弾力性のある霊言です。

聖書の靈言は呻いています。叫んでいます。歌っています。ペテロもヨハネもパウロも、また旧約の予言者たちも言葉がもどかしくて仕方がなかったでしょう。

ヘブライ語やギリシャ語の出来る人の方が、よりよく聖書がつかめる、という人があるなら、——インテリ・クリスチャンは知らず識らずにそういう判断の仕方をもっているようですが、それは相対的な判断に過ぎません。——私は「否！（ノー）」とハッキリ申します。聖書の絶対次元はそんなものではありません。どんなボロ訳のボロ聖書でもいい。その破れ衣の奥からひびく靈言が、聞えてくる靈の耳が大切なのです。

幕屋の民の使命

御靈にあつて、靈眼、靈耳、靈愛をもっておられた手島先生の後を継がれる素晴らしい群であられる皆さんは、これから本当に、日本全国に、更には世界に向つて展^びげて下さい。

一九七三年降誕節に召天された手島先生を先頭にして、この元日の大きな峠を乗り越えていよいよ前進、勇往邁進して下さい！ 世界的な使命を自覚して一步一步確実に進んで下さい。ノストラダムスの『大予言』によれば、二十世紀をもつて世の終りが来るらしいのですが、これは馬鹿にならない警告と思われれます。人類があまりにも神に背^{そむ}いているからです。「末の世に信を見

んや」とのキリストのみ言や、マルコ伝第十三章の現実が近くなつてゐるようです。まことの精神革命、決定的な宗教改革が各人の心腸の中に起きなければならぬ。世界が悔い改めることは不可能でありましょうが、救いにあづかった者は誰でも、存在そのもので伝道する使命を担わされてゐます。語らざるを得ず、証せざるを得ず、体現せざるを得ず、然らずんば禍なる哉です。御霊の子らは必ずそうなります。私は皆さんに聖名の為に、御霊にあつて、そのことを期待し、且つ信じ、且つ聖名を讃えます。

もう現代キリスト者たちが、聖霊のバプテスマをハッキリ受けなかつたら、のぞみなしです。パウロがロマ書八章で明言している通り、キリスト者とは御霊を宿している者のことです。こんなことを申すのは、もともと馬鹿気たはなしです。

砕けの魂こそ

洗礼のヨハネが、「私のあとから来る力強い人は、御霊と火でバプテスマする人である」とハッキリ予言している通り、キリストに天からの御霊のバプテスマを受けるまでは、本当のキリスト者ではないです。使徒ペテロもヨハネもあんなにイエスの身近かにいたけれども、イエスが十字架の贖罪死を遂げ、復活昇天するまでは、御霊の内住は与えられなかったのです。イエス

世中のペテロは、漁夫の名の如く、たましいが浮きつ沈みつという次第でした。不安定そのものでした。しかし、ひとたび御霊のバプテスマを受けるや、ペテロは別人となりました。「麗わしの門」前の生れつきの跛者たる乞食を、「聖名によって歩め！」の言下に立たしめたあの時、彼はまず「我らを見よ！」と叫びました。この「我らを見よ」は勿論「キリストに在る我ら」「我らが内なるキリスト」という我らでした。この驚くべき奇蹟に（実は奇蹟なんていうものは無いのです。活けるキリストの活ける霊法が働くまでです）、群衆はペテロとヨハネを不思議がっておろがみ見ようと馳せ集いましたら、ペテロは、「イスラエルの人々よ、何でこのことを怪しむか。何で我らが自分の能力と敬虔とによって、この人を歩ませたかの如く我らを見つめるのか。キリストがなさったのだ」といって、ペテロは「我らを見るな」と叱ったのです。さきの言とまるで矛盾しているようです。

しかし、これが御霊にある信仰の大切な呼吸です。御霊の人は、自分というものが無いはずです。だから、キリストの前にぶっつぶれた存在です。だから「我を見るな！」と言います。しかし、御霊の人は、相対的な自分はどうであれ、御霊の權威をいただいています。だから「我を見よ！」と言うのです。キリストのみ前にぶっつぶれていなければ、この權威は無いのです。もし自分を霊的だなどと誇り高ぶったら、それはサタンの角度になります。キリストの十字架による砕けの魂と、復活の生命を御霊にあっていたらいてる權威ある魂とが相即していなければ、本

物でありません。

だから十字架・復活・聖霊の三相の一貫一如からズレてはダメなのです。使徒たちはペテロもヨハネもパウロも皆この消息を身につけていました。だから「使徒的信仰に帰れ」と申すのです。私はひとに「あなたはカトリックですか、プロテスタントですか」と訊ねられると、「カトリックでもプロテスタントでもありません」と答えます。すると問者は戸惑います。「それではどういのですか」と問われると、私はハッキリ申します「キリスト直結です！」と。無教会が聖霊の手前である限り、私は無教会の、教会のと問題にいたしません。況んや無教会主義などと言って、福音をイズム化して、限定することに対してはハッキリ反対です。キリストの福音は宇宙的な無限無量なるもの！キリスト直結のほか言いようがありません。（私はこう冥想しつつものを言っていると、異言が迸^{はとば}しりそうになります。）

人間手島さんの欠点を見てどうのこうのと言う人は躓きます。人間は誰だって欠点があります。手島さんの手島さんたるところは、キリストの御前に本当に平伏していた人、それがゆえに御霊の権威による蔽しさがあり、御霊のどん底の愛があったという人でした。これは皆さんの証言を承つてもよくわかることです。

無者キリスト

さて、私にとりましては、イエスの山上の大告白の冒頭の一言が福音の秘訣となつたのでした。それを簡単に御紹介しておきましょう。「幸なる哉、霊の貧しき者は。天国はその人のものなり」。イエスのいかなる言も彼御自身の体験から迸^{ほとけ}しつてくるものです。イエスこそ「霊の貧しき」人でありました。彼は青年に「善き先生」と呼ばれた時、「なぜ私を善いというか、神様のほかに善いものはない」と申されました。また「私は何もできない、父がさせるのだ」、「私は自分で教えているのではない、父の言を伝えているまでだ」と言いました。

即ちイエスは無善、無能、無教、無言の人でした。これが霊が貧しいということです。即ちイエスは自分の無い方です。だからイエスを私は無者と呼び奉ります。全く私心のない人、神の聖意体現者。だからイエスは無限無量者。だからイエスは「われを見し者は父を見しなり」とか、「我と父とは一つなり」とか言い切れる神人でありました。イエスこそ「幸なる哉、霊の貧しき者」であられたのです。イエスにとって「天国」は神のふところでした。

そこで私としては、イエスのまねをしようもないですから、あるがままキリストの中に飛び込みました。十字架という門を通して！ そうしたら旧き自分が根源的にすつとんで、新しい自分

が御霊の天国にいるのではありませんか！ そうしたら、この山上の大告白の第一言は私にこう響いて来ました。「幸なる哉、汝、わが十字架によって霊が貧しくされた者よ、天国即ち御霊の現実が汝のものとなった」と。

アーメン、ハレルヤ！ 御霊に圧倒されて私はそのとき畳の上に平伏しました。キリストの言が化体したら俄然、霊生に溢れるようになりました。そして、キリストの他の言が無条件に読めて来て、力となり、生命となり、光となり、愛となるではありませんか。聖書というドラマの中に跳りこめば直ちに力です。聖書研究会なんていうもので、聖書がつかめるか！ 研究ではない、身読です。日蓮さんが言っている通りです。

さて聖霊の質は何か。それは愛である。パウロがロマ書五ノ五で言っている通りです。「聖霊の最初の名は愛である」とトーマス・アクイナスが言いました。そして聖霊が愛であることは、さきほどからも語っておりますように、手島さんが体験から血と涙であの『聖霊の愛』という歴史的名著に書かれた通りです。これは日本キリスト教史における画期的な名著です。それから旧約の予言者『エリシヤ伝』の如きは、手島さんでなければ書けない内実です。

最後の対面

キリストの愛を身にかけておられた手島さんは、私がお訪ねしたときも、「キリストが愛のまなざしで私を見ていて下さいます。そして天使がまわりを舞っているのが見えるのです。私にもうありがたくて、嬉しくて……」といった眼をうるませ、合掌しながら、病中の体験談をされました。また最後の晩餐のこと、十字架のこと、御霊のことを語り合って、心も魂も融け合う心地でした。お別れにのぞみ、腸はうたからお祈りをしました。手島さんは玄関さきまで私を見送られ——本当は絶対安静を医者へのぞまれたお身でありますのに——私に向かって合掌しながら、最後の挨拶をして下さったのです。これは私の永遠に忘れることのできぬ霊姿です！ 私のこれからの生涯に対する手島さんの不滅のお祈りとして覚えます。

私は友達がいのない奴でしたが、しかし、無教会の中で唯一人手島さんの本質を信じ抜いて来た友として、「聖霊の愛」の恩人として、手島さんのこの最後の友愛に対して残る生涯をもって応えたく存じております。

先程の峯崎君の御紹介の如く、承れば、私の最後のいくつかの手紙やハガキをふところに入れて、感謝をもってよろこんでおられた由。私の腸は熱くあります。元日の大集会の前、もう一度、十二月二十七日頃、お訪ねして「受肉」と題して語ったこの間の特別のクリスマス集会のお話もして、手島さんと喜びを共にしたいと思っていた矢先、二十五日に御長男寛郎さんからお電話で、手島さんの召天を承ったとき、全く「参った」です。残念至極！「申し訳ない」という言

葉も喉でつまってしまったのです。

しかし、私は元日に手島さんが壇上に立てないお氣持を察して、「手島さん、私はあなたの代りにイエスを告白しますよ。キリストの世界は無条件ですから、私は気が楽です。御安心下さい。もう絶言絶慮です。ハレルヤ」といったおハガキをさしあげておいたのが、せめてもの慰めです。

神の愛、キリストの愛、聖霊の愛、これはパウロが手紙の中でしばしば絶叫しているもの！特にロマ書八章は何たる文字か！「聖霊の愛」という言葉を以て、私は終生手島さんを思うにちがいありません。

彼は私の「曠野の愛」第二六号で「言ひ逆らいの徴」（著作集第一卷『無者キリスト』第一章「受肉」がそれ）を読んで、私にたよりして「悲壮な氣持で拝見いたしました、内村先生を超え、藤井先生をつきぬけて、もう全くの小池調。今までの貴誌中の白眉です、どうぞいよいよ御前進を祈ります。教会から無教会から言ひ逆らいの徴！感謝はつきませぬ、何と大なる観ものよ！エホバエレ！ハレルヤ！エベネゼル！」と言って下さいました。このハガキは昭和三十二年八月二十六日、彼の誕生日に書かれたものです。

天上の五つの星

内村鑑三先生は、予言者のな人物であります。先生の精神界への影響力は、これからも不滅であります。あれだけ力ある文章を書かれた先生は勿論霊的な人物であります。ただ聖霊の事態が使徒的次元からはずれていたことは、十字架だけに重点がかかっていたのを見ても分かります。また藤井先生は詩人的な人物で、奥様の早世の体験を通して『羔の婚姻』なる日本で唯一の長篇の宗教詩を書かれました。氣宇壮大雄偉なるものです。未完成に終わったのがまことに残念でしたが。それから塚本先生は学者的で、先生の聖書の研究の成果は、緻密な深さと生き生きとした信仰との織りまざった第一級品です。あの『イエス伝研究』は素晴らしいものです。

これらの素晴らしい無教会の三つの巨星にも拘らず、なお一つ欠けているものがあつた。それが手島さんにおいて現われた聖霊の事態であつた。手島さんこそ、言の深い意味での霊的人物、聖霊の人であります。しかも手島さんには、以上三人の予言者のなもの、詩人的なもの、また学者的なもの、これらの三要素が、手島さんらしさにおいて含まれていました。手島さんの聖書の解説と伝道の実践の中には、これらの要素が渾然と含まれているのを感じます。讚美歌もいくつか作っておられることは、御承知の如くであります。顧るに、小池政美（藤井先生が私に「小池

君の兄さんは、一万人に一人いるかという人でしたよ！」と言われたのを憶えています。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎という五人の非常に特色のある神の器に、私の信仰三十年の歴史において出会わしめていただいた神の摂理を、何と感謝してよいか分かりません。

私にとっては、五つの星が天上に光っています。それは北十字星、あの白鳥座の如くです。何と不思議なことか！

また、ここに日まわり草があるとします。私にとって兄と内村先生は根、藤井先生は幹、塚本先生は緑葉、手島さんはあの日輪のような花というわけです。それは手島さんが聖霊の事態を証詞して下さったからです。もし龍を五人で描いたとするなら、手島さんは正に画龍点睛の点睛をして下さった人です。

ともあれ、キリストの福音は宇宙的なものです。手島さんが世界に向って、——その他の三人の先生もみな世界的な氣宇をもった人物でした——胸を張って進んでおられたように、大きく展開して下さい。勿論、実存としては、小さく、隣人愛をもってお進み下さい。芥種一粒の信に御霊という原始靈核が宿っていますから、靈的な核爆発も核融合も自由自在です。極小の世界が極大の世界に通ずること、物理界も霊界も同じような構造でしょう。手島先生を天界にして、天地一如で御前進下さい！

天地一如

天地一如を現わしているのは、あの富士山です。不二山、二つなき山は無比の山という心の外に、二つではない一つにするのだという心を私は読みたいです。天地を結びつけるぞというのです。雲海にそびえて天に接している山頂の崇高さ、大地に大きく根を張っているような裾野の雄大さ。山部赤人が「天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布土の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば……」と詠いましたが、私はこう詠いましょう。

天地を一つに結ぶ不二の峯^ねに

瑞雲たなびき 霊風の湧く

ですから、霊峰^{ふじ}不尽は、みこころの天に成る如く地にも成らせ給え、と祈っている姿ではないですか。

パウロがモーセの霊岩を大胆にも「この岩はキリストなり」と喝破したように、聖意体现、天地一如の霊たる不二を見て、キリストを連想冥想したいものです。

この元日は火曜日です。天空にかかる太陽は正に火そのものです。日本の国旗は太陽。太陽は光と生命と真理と義と愛の象徴といつていいでしょう。私は太陽が大好きです。御霊の恩寵にあ

づかってから、太陽が一段と好きになりました。星と共に冥想し、月と共に情感も結構ですが、太陽と共に「生命の光」を体験することは、正に聖霊の事象の象徴であります。大詩人ゲーテも太陽を愛し、太陽の前には無条件に頭を下げると言いました。そしてゲーテは、同じくキリストの前に無条件に頭を下げると言いました。あの大詩篇『ファウスト』の起句が「太陽」で始まっているのを見ても分かります。結句が太陽で終わっていませんでしたので、私は二行ほどつけ加えて「太陽」で終わるようにしてやりました。ゲーテさんは天界で、極東に不思議な男がいると苦笑着ているかも知れません。

それはともかく、太陽をキリストの象徴とすれば、我々は日の丸と富士山において驚くべき霊界の唯一人者、救主キリストを冥想しつつ歩いて往けます。そして自らが、御霊の内住を以て、太陽となり、富士山となることです。

真理は単純なものです。四大、地水火風がまた御霊の事象を象徴して余りあります。聖書でも火も水も風も聖霊を象徴するものとして語られ、示されていることは御存知の通りです。大地はまた一切のものを担いあげ、清濁一切を受け容れているでしょう。これはまさにキリストの担いの愛、御霊の愛であります。

担いの愛

水といえ、阿蘇の集会で、ある時、手島さんが祈り会の時、「今、天界から、天の湖から聖霊の水が溢れて来ます。これを受けなさい」と言つて、言下に祈つた途端に集会全体に、強烈な御霊のしびれが臨みました。合掌している両手が離れません。全身に伝わると坐つていられます。あの時も素晴らしいことでした。

それから手島さんは、集会のあとで、ある重症の女性を山から担いで降りて来られました。熊本駅のプラットホームをそのようにして歩いておられた彼の姿は、今でも私の眼底に焼きつけてあります。これが後の千代子夫人です。この奥様との、たったお二人だけの結婚式を、私は東京で遠隔司会祈禱でいたしました。これは空前絶後のことです。ただ聖名を賛えます。これは聖霊の愛なくしてはあり得ぬ結婚であつたのです！ 本当に手島さんは終始一貫、キリストの義と愛に圧倒されながら、キリストを愛し、人を愛して生き動き在った人でした。その愛は大きな深い、しかも厳しい愛でした。キリストのため、福音のために戦い抜き、丁度牛若丸の弁慶みたいに、手島さんは弁慶の立往生の如くにして地を去られたわけです。肉体的極限状況をも突破した生きざまでした。平伏して聖名を讃えます。ハレルヤ！

彼は昭和四〇年（一九六五年）五月に、「御端書うれしく拝見、聖名のために生きておられる御姿をしのび祈りました。どうぞ無教会のパリサイを尻目に御躍進のほど祈ります。小池先生こそ無教会の直流です。やがて歴史が証明するでしょう。」と書いて下さいました。私の本質を知ってくれる者は手島さんの他になかったのです。

神の幕屋

この間の『生命の光』（一月号）はまるで手島先生の皆さん幕屋の方々への遺言状ですね。特
きあの「ラオス」の一文の如きは感銘深いものです。

これからの日本の魂の教育において、幕屋人のなすべき任務は重大であります。学校というものが小学校から大学に至るまで、教育者でもし真剣に宗教の事態に目を開かないなら、もう教育にのぞみはないでしょう。私は全国高等学校長会議において、宗教心の重要性を三たび叫びましたが、虚空に消えてしまったかの如くです。吉田松陰先生が塾的教育をされたように、全国の幕屋の方々が神の民の養成に御尽力願います。御霊の力と愛は皆さんを通して必ずやこの事を成し給う、と祈っております。

手島郁郎兄を偲んで、私はダビデの「弓の歌」の一節を叫びたい。

嗚呼、勇士は戦のうちに仆れたる哉……

汝の我をいつくしめる愛は世の尋常ならず、

女の愛に勝さるたり。

嗚呼、勇士は仆れたる哉……

戦のうつわは失せたる哉！

天界から手島先生の応援があります。予言者たち、使徒たちの味方があります。万軍の主が先き立って、黙示録の白馬の騎士の如く進み往き給う。神の国を目指しての地上の旅。多くの人々をこの旅の道伴れにすべく、幕屋を張りつつ前進して下さい。「神の幕屋、人と偕に在り」という黙示録の最後のところが、現実となる日が待たれます。

「彼らは大いなる患難より出で来たり、羔の血にて己が衣を洗いて白くしたる者なり。この故に神の御座の前にありて、昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐し給う者は、彼らの上に幕屋を張り給うべし。彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。御座の前にいます羔は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり」（黙示録七・一四—一七）。

台掌、アーメン、ハレルヤ！

〔一九七四年元旦・東京新年聖会の講演〕原始福音信仰証誌「生命の光」、一九七四年二月号 第二八一号

慧 星

★コホーテク慧星が一九七三年暮から七四年正月にかけて最も近づいた由。時正に日本キリスト教界の靈的慧星手島郁郎氏が七三年降誕節の晨、召天された。享年六十四歳。彼は無教会の流れであったが、超教派、原始福音を提唱し、全国に幕屋を展開し、伝道四半世紀、「生命の光」誌二万数千部。聖靈の体験深く、カリスマ伝道はユニークなもの。霊肉の極限状況の者で彼を通して救にあずかった者数知れず。

一九七四年元日、全国的大集會を社会文化会館で開催を予定しておられたが、病重きを自覚され、私に講筵を依頼された。然るに降誕節に早くも召天。よって元日の大集會は「手島郁郎先生記念大集會」に変わった。私は特別講師として立たしめられたが、「聖靈の愛の人」と題して、聖名のゆえに彼の業績をたたえた。その内容は「生命の光」誌二月号に載ることになっている。

★一九七四年二月七日でいわゆる古稀になるけれども、男の平均年令は古稀を超えているから、昔のように珍らしくはない。元来蒲柳の質である私がやや長命的になって来、私よりずっと丈夫であった妹愛子、長兄政美、姉富士子がはやくも他界。次兄龍二と私だけが遺っている。



手島郁郎氏と千代子夫人

★私の信仰五十年の歴史に五人の恩人がいる。小池政美、内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎の五つ星である。北十字星、白鳥座のように、霊的天界から私を見守っておられる。私は責任の重大性を感じている。残る生涯を白熱的に聖霊の火となって邁進するだろう。

一四、訪問と講演

(一九七四年十二月)

一九五四年七月二十四日、変調の夏としては暑い日であった。リルケ研究家で詩人なる星野慎一氏と共にブルンナー博士をICUキャンパス内のお宅に訪ねた。

イリス嬢が快くわれらを迎える。間もなく博士が輝かしい温顔で現われた。世界的大神学者の大らかな偉容にどこか野趣がある。それは、ルターと同じように農家の出であるためだろう。それがまことに好い。偽善なる学者・パリサイ人とは全く趣を異にする臭味のない人格である。

初めは主として星野氏が博士といろいろな文学的な方面の語らいをした。そのうち話題が宗教のことに向かい、私が語る番となったので、私は席を博士の脇にとらせて頂いた。話が「無教会」のことになったので、既にいろいろご存じとは思ったが、話の順序として歴史的に開拓者内村先

生から、第二期、第三期ないし第四期へと展開の様相を語り、私、ならびに手島郁郎氏が今どのような位置にあるかを客観的に語り、次に、私の個人的な信仰の経歴を語りつつ、信仰告白の段階にはいった。この辺から俄然私は、相手が世界的神学者であることも忘れ、釈迦に説法であつたろうが、とにかく天来の力に迫られて、使徒的信仰への立ち還りの必要、ルター、カルヴィンの宗教改革はすばらしいには相違ないが、質的には使徒たちの次元からはずれを来たしていること、現代キリスト教会は、観念の色眼鏡をはずして、聖書を媒介として、その背後から溢れてくる無限定の神の根源語に聖霊によって耳を傾け、聖言は「霊なり、生命なり」という事態を真に体得し、キリストのつらなりを使徒的な質において体得体現せんとするのでなければ、福音を真に自体に反することであり、従来の観念信仰的な把握から一切の立場をはずして、福音の根源相に突入しなければならぬこと、私が自分の集会をなぜ「幕屋」と言い始めたか、十字架の事態を「砕け」をもって言い表わしていること、十字架・復活・聖霊の三相一貫などを語ったが、博士は瞠目して聴いておられた。

またわれらにおける聖霊の賜物のことにも言及、手島氏の豊かなカリスマ伝道について語ったところ、博士はこれには驚きを新たにされた。時折言葉を挿んで質問しておられたが、私の語るに任せて聴き入って下さった。博士は私に「あなたは信仰の世界でのヒマラヤ登山者だ！」と言われた。神学者であると同時に熱意の深い伝道者でもある博士は、私の小さな幕屋的・寺小屋的

な伝道を非常に喜んで下さった。そして今のキリスト教会が一般的に言って聖霊の事態からずれているという私の見解に同意され、小池を理解した、とまで言われた。『聖霊の業』や『教会の誤解』を書いておられるのを見ても、博士の信仰の質が使徒の次元に迫っているのを感じるわけだが、博士の共感を得て会話は楽しくはずむのであった。

「今の日本に果たして真の説教者が何人いるだろうか。真の説教と聖書講義とはちがう。真の説教は聖霊の導きによって聖書を自由に語るものである」ということをある人に言われたと聞いている。私との会話の中でも、そのことは十分察知できた。博士はむしろ日本に伝道の助けに來られた由であるから、なおさら博士の気魄はよめる。この博士のあたたかい好意、主にある愛の心を端的にうけることをあまりしなかったと思われる教団的キリスト教界を情なく思った。博士がこの若輩の告白を謙虚な気もちで聴いて下さって、私は感謝に堪えない思いであった。

時間が許せば、具体的に聖書に当たって問答をさせて頂きたかった。突然の来客もあってちょっと話が中断もした。それから話はゲーテのことにも及んだ。陽がそろそろ西に傾きかけた。三時間の会話のうち二時間は宗教問題に費やされた。しかもその大部分はむしろこちらの告白であった。星野氏も興味をもって私の告白を聴いていた。彼は詩人的直観と感入をもって私の気魄に触れておったにちがいない。

私は教会・無教会の非難をしたのでは決してない。ただ私がどのようにイズムやテオリーやセ

クト的なものからはずれて「無」(ニヒツ)——「虚無」(ニヒリズム)に非ず——こそ「一切」(アレス)であり、「無限無量」(ウンエンドリツヒェス)であることを申し、「福音」という月影は、説明しても描いても、本当にはつかめない。ただこちらが聖霊の宿っている水となつて、月影を宿すときのみ、本当につかめるのだ、パウロやヨハネのミステリオンはこの角度でなければ体得できない、といった事態を語ったら、博士は大いに共鳴しておられた。

博士も別れを惜しんで、一度立ち上がろうとした私たちをひきとめられた。博士夫人が病床にあられたので、あまり長座をしては悪いと思い、幾何もなくしてお暇をした。非常に多忙なところをわれわれのために三時間もたっぷり割いて下さった。アウフ・ヴィーダ・ゼーエン！(サヨナラ)の挨拶のもと、あつい握手を交わして辞去した。

帰途で星野氏が、「小池さんは、世界の大神学者を相手に大したもんだね。全く驚きましたよ！確かに日本人には新しい日本的な把握があると思いますね」などと述懐した。「いや、盲蛇におじず、というものですよ。ただ正直のところ、今日は私は言いたい骨子は大体述べて嬉しかったです。ブルンナー博士はよく聴いて下さいました。さすがに偉い人です。謙虚なかたですわね！」と答えた。二人はこの午後を限りなく嬉しく思った。

ご令息の不慮の死以来、挺身よく博士夫妻を助けておられるイリス・ブルン嬢に天の幸あれかし。スイスの山や湖の背景にふさわしい、清らかな愛の女性である。「永遠に女性的なるもの」

の化身のような。

その後、同じ年の晩秋、私は単独で博士をお訪ねした。それはむしろ博士に電話で呼ばれたかたちであった。その時、自分は教会と無教会の橋わたしをしたい、そういった連合礼拝を開こうと思うのだが、無教会側から証言者として君が立ってくれないか、という主旨のご依頼であった。福音のためとあらばと思い、言下に「ハイ、いたしましょう」とお応えした。あとから、時間は五分間というのであった。五分間の証言、至難のわざと思ったが、ヤーヴォール！と応諾した以上引き受けざるを得ないのであった。博士がなぜ私を選びなされたかは知らない。多分この前の訪問で信用して下さったのであろう。

明けて一九五五年一月二三日午後二時、銀座教会堂でブルンナー博士主催の第一回連合礼拝が開かれた。階上階下満堂の盛況、一千名と聞いた。教会・無教会の知名人が多勢見えた。渡辺善太氏も壇上におられたと記憶する。博士の「汝らは世の光なり」の名講演の後で、「キリストと私」との演題で二人の証言が行なわれた。先なるは教会側の某女史、後なるは無教会側の私。私は無原稿。私にとっては電光雷鳴的な十数分であった（必ずしも五分でなくてよかった）。私にとってはキリストを告白するにまさる楽しさはないから、み霊の迫りの著しきを身に覚えていた。その翌日、鎌倉に仮寓しておられた塚本虎二先生からお便りが飛んで来た。変わらぬ達筆で次のように書かれてあった。

今日は考え得る最も難しい役を美事に果たして下さいまして、無教会のためと言わず、日本キリスト教界のために最善をなさったことを感謝します。失礼ですが貴君から今日まで承わった最も鮮かなお話でありました。小生の名を出されたことは少なからず迷惑しましたが、それを何とも思わぬほど感じ入りました。一・二三夜、虎二

私はあの壇上で何を語ったか、今憶えていない。先生のお言葉に値しない私であるが、先生の率直な感激的なお言葉が、私のあの壇上での棄身の気魄と告白とを裏づけて下さっておるので、心から感謝する次第である。私は今も平伏して聖名を讀えるばかりである。私が証言の中で塚本先生のお名をあげたのは、おそらく、先生のあのすばらしい『イエス伝』に言及する一節があったためだと思う。証言の内容は憶えていないにせよ、私がブルンナー博士をお訪ねした時に告白した内容と同質の主旨であったことは確かで、これを当時の無教会の第一人者である塚本虎二先生が全面的に受けとめて下さったことは、私にとっては歴史的な事件であったと言わざるをえない。それは私が無教会一般からは聖霊体験の故に多少アウトサイダー的に見られていたからである。

ともあれ、ブルンナー博士がキリストの体としての大エクレシアの一環を成す出来事としての連合礼拝を幾回か敢行されたことは、結果的には目に見えるような実りがなかったかも知れぬが、博士の悲願には、結果以上の深さという意味がある。それはパウロのエクレシア観に通ずるもの

があるからである。

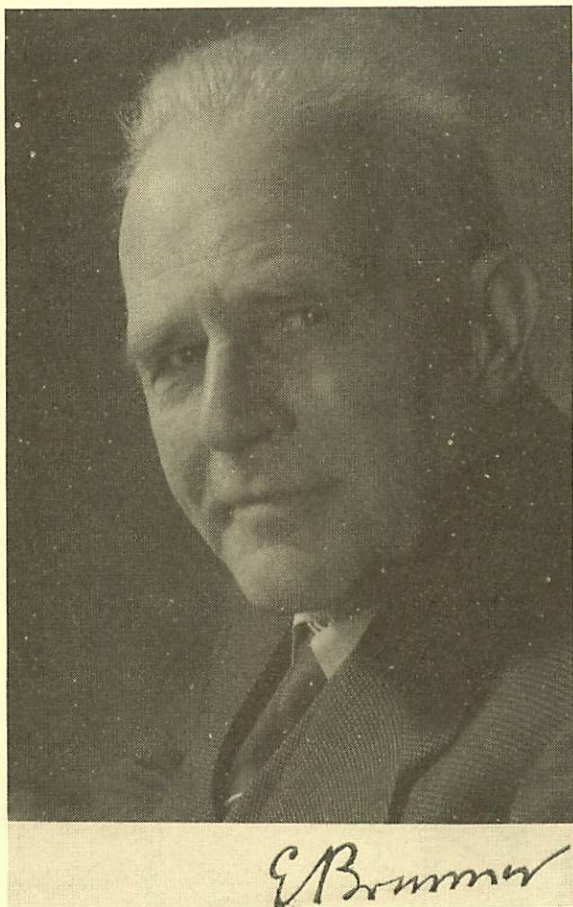
この礼拝からの帰途であったと思う。ブルンナー博士自らハンドルを握ってベンツを運転された。それに私も便乗させていただいた。雑談をした。当時は今のよう交通が繁くはなかったから、比較的スムーズに東京の西の郊外に出た。しかしブルンナー博士が、「運転して直感できるのは、東京の道路の浅薄さ（文字通り）、舗装道路の厚みが足りないことです」と、言っておられた。「日本の現今の文明、文化の厚みともアナログヤですよ」と私はこれに応じて答えた。本当は日本の精神文化には凄い厚味があるのに、それを見損っている今の若い人たちに注意を促したい。

一九六一年の夏、私は当時ハンブルク大学で日本学の専任講師をしていた関係上、夏休暇を利用して西ドイツとスイスへの周遊旅行をした際に、チューリッヒ市ヒルスランダー街の博士のお宅をお訪ねしたが、博士は入院中で面会できなかった。いかにも残念であった。奥様が大分心配しておられた。階上の博士の書斎に案内され、蔵書も拝見した。さすがは世界的神学者の書斎である。特に庄巻であったのは、豪華な革表紙のワイマール版ルター全集であった。

ともあれ、ブルンナーの最終的著作の『ドグマティーク』第三巻において、今までの神学が聖霊を継子扱いにして来たことは大きな欠陥である主旨のことを書き、聖霊論に力を注いでいるのは注目に値する。十字架と復活と聖霊降臨は切っても切れぬ関係にあることを確信してこの筆を

掲ぐことにする。

〔中沢治樹・川田殖編『日本に於けるブルンナー』新教出版社（一九七四年十二月三十一日出版）所載〕



スイスの大神学者、エミール・ブルンナー

一五、至道無難

——天野貞祐先生の召天に想う——

(一九八〇年三月六日)

先生が九十歳の峠を越えられた頃から、前後三回、はなしの中でこう言われた、「小池君、僕の葬式は君にしてみよう、うちの密葬だけで可い」。先生は大袈裟なことは好まない人であった。勿論、天下の天野先生の葬式はそれですむわけにはゆかなかった。

先生は昨年三月六日から床に親しむ生活に入られた。御病氣というのではない。御高齢による老衰という自然現象のためであった。秋には炬燵を囲んでおはなしを承ることもあった。晩秋の頃から特に食欲が減退してきた。明けて本年、一九八〇年（昭和五十五年）を迎えてからは、私のところから自転車で数分であるから、週二回くらいお訪ねしていた。あるとき、「小池君もうダメだよ」、あるときは「小池君、僕は死んだよ」などと口走られた。一種の哲人的諦念という

か、それは悲しい口調ではなかった。御住宅の近所のドイツ菓子屋でエクレアを買っていったことがあった。これがたまたま先生の大好物の洋菓子であったので、先生と半分づつ食べた。これが先生とものを食べた最後となった。私はエクレアを見たら先生を想い出さざるを得ないことであらう。

二月十一日、建国記念日から、酸素吸入と点滴の生活に入られた。侍医の湖山聖道先生、御近所の木村祐三先生、看護婦さんたちが最善を尽しておられた。一年間のおくさまの愛の御看護、これを助けての二女光子さま、三女清子さまの御孝養が、先生の最大の慰めであったことは申すまでもない。

若き日、一高時代に、内村鑑三先生の日曜集会に列席すべく、本郷の寮から柏木の講堂まで徒歩で通いつづけた先生に、讃美歌は魂のなつかしい慰めとして甦ってきたのであらう。年の始め頃から讃美歌を歌ったり、祈ったりしてあげた。讃美歌第四六一番「主われを愛す」が先生の最愛のうたであることを知った。これは讃美歌のアルファであり、オメガであると私も思っていた。単純でありながら福音の本質がこの四節から成る歌詞に詠われている。先生の「平凡の非凡」は、こういう讃美歌を特愛する先生の童心にもあらわれている。自由学園長の羽仁恵子先生とはこういう場合でお知り合いになった。

三月六日の早朝、電話が鳴った。ハッと思った。先生危篤のお報せである。急遽参上。独協関

係では私だけが御臨終に侍り得た。黙禱しつつじつと看護っていた。午前七時五十分息が絶えた、心臓がしばらく動いていた。心臓が止った。体温がなかなか退かなかった。かくて先生の地上の御生涯は終った。文字通りの大往生であった。昨年の春床に親しむ身となられて満一周年の日に御召天とは！

先生の御遺志により、夕刻納棺式を司式させていただいた。関湊理事長も臨席しておられた。晩の七時から近親の方々とお通夜の霊前集会をした。これも私が司会を承り感想を述べさせていただいた。森戸辰男博士も臨席しておられた。自由学園長羽仁恵子先生、独大の白旗信学長、出射義夫法学部長、篠原寛中学高校長その他若干名が列席しておられた。

そのときの感話の主題を「至道無難」とした。御霊前で語らせていただいた内容概略をここに書き記して先生に捧げる。

われらの学園長天野貞祐先生は九十五年五ヶ月の天寿を全うして神のみ許に召されました。人生マラソンの優勝者でありました。先生ほど心身の健全な方はめったにありません。先生の御生活が、外的にカント的な規則正しいものであり、内的には道理を堅持した良心的なものであり、信仰的には、「神を信じ人に仕える高尚な勇ましい」ものであったからだと思います。日本の教育界の大黒柱はここに倒れましたが、やがて天界の一巨星として光を放つことになりましょう。

先生にはカントの哲学精神の如く、生きることが哲学することでした。自由を貴ばれました。この度、先生の三人の御令息様方を知りましたが、御長男誠一さま、御次男勇二郎さま、御三男信三郎さまは、夫々個性ゆたかな方々で、先生の自由の精神がおのずから実証されているのを感じました。

ところで禅宗の古典『碧巖録』の第二則の主題は「至道無難」でありますが、その「頌^{ジュ}」の句をここに引用して死生の関頭にあられた先生を想いたいと思います。

至道無難、言端^{ニシテ}語端^{ナリ}。一^{ナレド}有多種^{ニシテ}。二^{ナレド}無^ニ兩般^{バン}。天際^ニ日上^{レバ}月下^ル、檻前^ノ山深^{クシテ}水寒^シ。
ドクロノハクルモ
トクロノハクルモ
喜何立^{ソタン} 枯木竜吟^{モス}銷^{シテ}未^ダ乾^カ 難々^ニ 揀^{ケン}択^{ジャク}トメイ^トバクトハ 明白^{メイバク} 君自^ラ看^ヨ

至道無難！ 天野先生の「道理の感覚」という論説は先生の一生を貫いていた烈々たる道義的精神の極みを告白しているもので、正に至道であります。それは別な言でいうと判断以前の先験的な道です。万人の本来有っている道なるが故にあたりまえなのです。何も難かしく無い道理なのです。ところでこのあたりまえの「道理」に確かと即することが出来れば、無難なのですが、道理の感覚を有ちながら、これに即することがなかなかできないので、至道無難が「難々」となるのです。ところが先生は、特に京大教授時代、つづく甲南高校校長時代に一部の軍部や官僚の勢力に対して「道理」を以て戦われました。

「私は大学教授の職は勿論、命もいらなと思った。どうかしてこういう奴輩を勝手に威張らし

ておく同胞に対して、こんなことをして居れば、日本は滅んでしまうことを警告しなかったのである。国家は生きものだ。盛衰もあれば生死もある、どんなことをしても国は亡びないなどと考えるのは迷信だ」

と書いておられます。この言は今や別な預言として響いてくるではありませんか。このような道義的戦を貫いて来られた先生は正に至道無難の心境の人格であられました。

老年の先生は特に「言端にして語端なり」でありました。先生はよく「一即多、多即一」といったことを言われましたが、「一なれど多種有り、二なれど両般無し」という言は、先生の著作における多様性とその一貫性の内的な相即にあてはまることであります。

東に日が昇るかと思えば西に月がかくれてゆく。欄干の前の山は深く流水は寒い。相對界の諸現象は千変万化でありながら帰一する。先生のなかなか劇的な面をもった御生涯には摂理が、「天野貞祐全集」には道理が貫いて帰一しております。

髑髏は意識が尽きていると見えるが、喜怒哀楽が立ち止まっていることがあろうか。枯骨も復活の相を有っている。枯木は寂莫として死んでいるようだが、天来の風が吹くと竜が吟ずるような音を奏でる。銷してしまったようだが、本当に乾いているのではない。陽春の光に誘われて新芽がふきだす。無常の奥に永遠がかくれている。平凡の相に非凡がかくれている。至道は無難であつて難々である。「揀^{ケン}扱^{ジャク}」たる相對の相に「明白^{メイバク}」たる絶對がかくされてある。これがわかる

か、見えるか、と第二則「至道無難」の「頌」で語っているわけではありますが、正にこの「至道無難」の実存を身証された天野先生を想うと、先生は相対的現象としての肉体の「死」を突破して、永遠の生に突入しておられることを感ぜざるを得ません。

それでイギリスの大詩人ブラウニングの「エピローグ」の中の句を想い出します。

“One who never turned his back

but marched breast forward,

Never doubted clouds would break,

Never dreamed, though right were worsted,

wrong would triumph,

Held we fall to rise, are baffled to fight better,

Sleep to wake.”

「背を向けたこと決してなく

胸を張って前進した人

雲が破れることを疑ったこと絶えてなく

義が敗けても不義が勝つと

夢みたことの断じてなかった人、

倒れるは起きあがるため、挫折は

より善く戦わんため

眠るは目覚めんためと信じていた人

(私訳)

これはブラウニング自身の告白でありましたが、これはまた天野先生の終生不変の闘魂の相（すがた）でありました。

此岸に眠られた先生は、もう彼岸に目覚め、英霊は復活の霊体を衣せられて前進を始めんとしておられました。「歓呼の声を以て、見送ってくれ」と同じ跋詩の中で叫んでいるブラウニングの如く、先生も微笑を湛えてそうわれらに言っておられるではありませんか。

先生は「独協百年」の年、一九八三年の秋を迎えようとして、天界において我らの先頭を切つて進んで行かれる。天上の先生に応えて「高尚な勇しい」前進をしたいものであります。

(独協学園中学高校第十四代校長、独協大学名誉教授)

一六、 天野貞祐先生を想う

(一九八〇年四月三日)

独協学園長天野貞祐先生は一九八〇年(昭和五十五年)三月六日、九十五年五ヵ月の天寿を全うして地上を去られた。先生の生誕は独逸学協会学校創立の翌年、即ち一八八四年(明治十七年)九月三十日であったが、中学時代を独協で過ごし、一高、京大の学生時代を経て、七高教授時代、学習院教授時代、京大教授時代、甲南高校校長時代、一高校長時代という経歴を以て教育界の大道を歩いたあと、文部大臣という教育界の大本締めを果たされた。

その後母校独協中学高校の第十三代校長となられ、独協の復興をはかり、更には独協大学の創設、独協医科大学の創立等を関湊理事長と共にやり遂げ、最近独協埼玉高校の新設となり、独協学園の大黒柱であられた。また一方自由学園の理事長として晩年は羽仁恵子学園長を助けてお

られた。

それゆえ、先生は旧制一高時代に抱いた素志の如く、教育に生涯を捧げ尽された。独協学園としては、あと三年有余で創立百周年を迎えるのであるから、先生の長逝を惜しんであまりある。

天野先生はカントの名著『純粹理性批判』の前人未踏の歴史的翻訳を果たした。先生は哲学の学究もさることながら、先生の本質と目的は人間教育にあった。

中学時代に野球で身体を鍛えようとして、滑り込みの失敗から結果は逆なことになり、郷里で保養中疫病に罹り、退学のやむなきに至り、あまつさえ同病の母君を失い、人生のどん底に落ちた。その時内村鑑三（本年は内村先生召天五十周年）の諸著書を繙き、特に『後世への最大遺物』という小冊子に打たれ、「神の支配し給う世界を信じ、神と人に仕える高尚にして勇氣ある生涯を生きる」決意に立ちあがった。そこで猛然と勉強にとりかかり、四年もおくれて独協中学へ再入学。しかしこの四年のマイナスは、確固不動の人生観を与えられたことを思えば、無量のプラスと化した。この一事は世の青少年に伝えたい極めて注目すべきことである。

それゆえ先生は一高時代、本郷なる一高の寮から、新宿西方の柏木なる内村鑑三先生の聖書講義に、毎日曜、雨にも風にもめげず、聖書と讚美歌集とにぎりめしの弁当を携えて、徒歩で通って聴講をしたのである。

一高時代に先生の間人形成に益したもう一人のひとがある。それはヒルティである。かの有名



天野貞祐先生
獨協中学・高等学校
名誉校長室に於て

な岩元禎先生からドイツ語の授業でヒルティを学び、更に進んでこれに親しんだ。
京都大学生時代にうちこんだのがカントであった。内村とヒルティから人生道の土台を、カントから哲学的思索を身につけた先生は、「道理の感覚」を以て生涯、諸々の環境と時代の状況に對して、人間教育の道を身証されたのであった。先生の著作こそ教育界が今や新たに読み直すべきであると思うや切である。

〔「全私学新聞」所載〕

一七、勇ましい高尚な生涯

(一九八〇年四月)

ドイツ学協会中学校の野球部員であった天野先生は、捻挫のため長期欠席となり、静養中疫病に罹り、同病の母が他界され、先生は治ったものの予後おもわしくなく、やむなく「修学を断念し、学校をやめてしまった」のである。

そのとき先生を「絶望から救い出してくれた」ものがある。それは「内村鑑三先生の諸著作、わけても『後世への最大遺物』であった」。

この本の結論は、神を信じ、天来の歓喜と希望の中に、勇敢にして高尚なる生涯をおくること、が後世への最大遺物である、というのである。これが少年天野の魂に霊的新生をもたらし、彼は「勇ましい高尚な生涯」を以て「神と人とに仕えること」が自分の人生道であると確然と悟り、

そのように生きようと決意した。

このようにして魂に力を得た彼は猛然と勉強にとりかかった。魂の力と共に身体も力を得た。健全なる精神は健全なる肉体を創造してゆくと言うべきである。彼は全科目の編入試験に唯一人及第して独協中学五年に再入学した。しかしこのマイナス四年がもたらした質的内容は無量のプラスであった。受験々々に苦しむ青少年に語り伝えたいのは、少年天野のこの体験の事実であり、つらだましいである。

先生はこの決意の如く、生涯を生き貫いた身証者である。卒寿を越えた先生のお宅を私は月一回はお訪ねすることを習慣のようにしていたが、先生は内村先生を第一の恩人として憶え、よく話題にのせられた。一高時代、向陵の寮生活中、日曜ごとに聖書と讚美歌集とにぎりめしの弁当を携えて、徒歩で本郷から新宿さきの柏木の講堂まで、風雨にも、寒暑にもめげず通った昔をなつかしく語っておられた。

一高時代で、もうひとつ特記すべきことは、哲人岩元禎先生のドイツ語の授業でヒルティの『幸福論』を学んだことである。内村先生で謂わば魂の脊椎骨ができた先生は、「愛は一切に勝つ」といったヒルティで肉づけができたといつて可いだろう。ヒルティは宗教的な法律家であり、天野先生は哲学的な教育者である。

先生の数々の業績をここに讃えてもあまり意味がない。先生はそんなことより、書物を通して

天界から語りかけておられるのだ。先生の書を天界からの手紙と思って「トレ・レゲ！」（「とりて読め！」）である。先生は死んでいない。「勇ましい高尚な」生涯をもって裏づけられた先生の著作こそ活ける文字であり、活かす文字である。預言者は時勢に容れられなかった。しかし先生の「道理」は力強く義のため戦わしめるであろう。先生の地味な深い人間性は文字の中から読者に愛の力を与えるであろう。

「人間たる以上如何に微力であっても道理を道理とし、不道理を不道理として感得することができ。この感得は既に実在の一成員たる自己における道理の実現であり、実在の大海へ永遠の一石を投ずることでもあります。……人類を絶滅せざる限り道理はその触発の場所を喪失しないのであります」とは『道理の感覚』の中の叫びである。先生は当時の軍部の一部の横暴に対して戦った。「私は大学教授の職は勿論、命もいらなと思つた。どうかしてこういう奴輩を勝手に威張らしておく同胞に対して、こんなことをして居れば日本は滅んでしまうことを警告したかったのである。国家は生きものだ、盛衰もあれば生死もある。どんなことをしても国は亡びないなどと考えるのは迷信だ」と喝破した。この一言は今の「昭和元祿」に対する別な角度からの警告として響く。

京大教授時代や甲南高校校長時代は波瀾多き時代であった。「どんなに辛いことでも良心の苦痛を伴わぬ場合には比較的堪え易い、というヒルティの教えを私は甲南においてつぶさに体験し

た」と書いておられる。先生には哲人カントの哲学精神が京大の学生時代から身につき、『道徳の感覺』もカントの實踐哲学が土台になっている。「善意志」が先生の人格の中に焦点となつて燃えていた。

また他面、弱者の味方となり、思い遣りの深い人格であつた。先生はそれゆえ『論語』の「恕^{じよ}」という言葉を好まれた。しかしキリストの福音の「愛」が先生のアルファにしてオメガなる隠れた本質であつた。魂は義に生き、心は愛に生きたというべきであらう。

最後の二ヶ月、しばしば御病床をお訪ねしたが、先生の愛誦の讚美歌「主我れを愛す」を何回も歌ったり、祈ったりした。先生の握手のぬくもりが今なお私の右手にのこっている。人生マラソン九十五年の天寿を全うした勝利者は、天界でもなお前進しておられよう。

〔独協大学教授出射義夫編集「提言」第八四号所載、一九八〇（昭和五五）年四月二〇日〕

一八、わが恩師

(一九八一年九月九日)

恩師という言葉を広い意味で解すれば数名の先生の名が浮んでくる。お茶の水幼稚園時代の雨の森先生、この女の先生のお顔が今でも髣髴としてくる。七十余年も前の先生の笑顔が浮んでくるとは、人間の脳の中の記憶を司る細胞組織への焼きつけとは何とふしぎなもの哉。

次に浮んでくる恩師は高師附属小学校時代の五・六学年の担任であられた蘆田先生である。国語と作文の方面で抜群の先生であった。夏休みこ出来ごとについて書かされたとき、私は水泳自得の体験を書いたら最高点をいただいたことを妙に覚えている。先生は勉強に限らず、何でも見聞きすることを自分でよく消化するように心がけよ、といっておられた。文章は必ず自分との関わりにおいて書け、一般的な書き方をするな、といっておられた。腹のすわったそして温情あふ

るる人格であつた。今思うと禅的な心境をもつた先生であつたと申したい。

同じく高師附属中学校時代の恩師といへば石黒魯平先生である。英語の堪能な先生であつたが、その授業の熱意と、教材の精神的な内容に対する情熱を傾けた解説は今も感謝を以て思いだす。特に英語から私は心の糧を深く受けとつた。テニソン、ワーズワース、ロングフェロー等の名詩がその頃の教材にはよく載つていた。今の英語のテキストには殆どないようで、今の少年たちに夢がとぼしいのも、何も英語に限らず、精神的内容の乏しさと先生方のその方面の関心の乏しさにあるのではないかと残念に思う。漢文漢詩なども、もっと学ばせるべきである。漢字は世界最高の文字である。漢字文化を復興すべきである。

旧制水戸高校時代、私は病身勝ちで休学などをして一年余計にかかったが、たましいの世界で特別な人物に出会つたことは終生忘れ得ぬところである。即ち内村鑑三と藤井武の両先生である。どちらも夫々の意味内容において恩師である。

ある書きものに私はこう書いた。「一九二二年の晩秋、私は兄の書架から一冊の本をとり出した。ヘトレ・レゲンへとりて読め」という声を聞いて聖書をひらいたアウグスティヌスのように、私のとり出したのは内村鑑三の『宗教と現世』という書物であつた。この兄が一高時代から大手町の内村先生の集會に列席し始めてから、著しく變つてきたことに気づいていた。……私はこの書に深くうたれた。」

それで私は水高時代、土、日帰京したときは内村先生の大集会へ聴講に行った。また先生の諸著書と『聖書之研究』誌を愛読した。

東大文学部ドイツ文学科の学生となつてからは、内村先生の高弟藤井武先生の家庭的な小集会に一九二六年三月七日から会員として列席し、先生の召天の二週間前の一九三〇年六月三十日まで一回も休まずに参会した。先生はいつも六月一杯で集会を解散し、秋から新らしく申込むといったやり方をされた。集会がいわゆるマンネリズムとなることを嫌つたからである。足かけ五年間、駒沢新町なる先生の自宅での集会は忘れられぬ印象深いもので、私の信仰の土台はこのとき築かれたといつて過言でない。

兄、政美の北京公使館員在勤中の客死が私にとって一粒の麦となつて、私のたましいの中に種が蒔かれた。これに水を注いで下さったのが、内村鑑三先生であり、根を張るように助けて下さったのが藤井先生であつたといつたらよいだろう。言葉の狭い意味での恩師といへば、人格的触れあひの深かつた、そして親しく聖書のみならず、ミルトン、ダンテ、カントの読書会プラトーン、アウグスティヌスの講読会、ギリシヤ語の勉強会（ヘブライ語は東大で石橋智信先生から殆ど一対一で学んだ）等をして下さつた藤井武先生である。

ここで一言しておきたいのは、東大ドイツ文学科で木村謹治先生の『若きゲーテ』の講義を聴いて、ゲーテに対する認識の開かれたことである。一般にゲーテの偉大さをキリスト者たちは認

識していない。年が経つにつれて彼の偉大さが読めて来たが、その端緒を開いて下さった木村先生の恩は忘れられない。私は今はキリストの光でゲーテが見えるのでまことに楽しい。

「先の二つの禍害わざわいに増す

かなしみはがみ
哀切歯することあらう。」

一年間の聖書講義も黙示録で、丁度第二十二章を講じ終えて、あたかも「わが事畢れり」と言わんばかりの聖書講義であった。先生は旧約の預言者特にエレミヤを愛した。詩人ではダントに心酔しておられた。先生は私にとって特別な意味での恩師である。

先生亡きあと、先生の親友塚本虎二先生の集会で学んだし、『旧約知識』誌の同人として「詩篇」を書いたりした。塚本先生は聖書学者で、そのイエス伝講義はすばらしかった。これは世界的な価値があると思う。学的探究に於て先生は私の恩師である。

内村先生は預言者、藤井先生は哲人的詩人、塚本先生は聖書学者、いづれも本当の日本人で本当の信仰者、無教会陣営の三人の代表的人物。

ところで最後に絶対的な恩師、「ラボニー」といつて祈り入ることのできる「わが師」がある。それはナザレのイエスである。キリストは大変な人である。全くけたちがいの絶対次元の人である。キリストは十字架の土台の上に天界から一九五〇年の晩秋、大阿蘇のふところで、聖霊を私に遣わしてくださった。聖霊を賜って私はもう何にも要らない、キリストの無者とされた。私にとり、永遠の恩師はキリストである。

一九、二神萬里子さん

(一九八二年七月七日)

昭和医学専門学校の第一回生から第十九回生まで全期に亘って私は専任的な講師としてドイツ語を講じた。その後、昭和医科大学に昇格して、同大学は医科大学進学課程、或は教養部といった前段階と本科という構成をもつことになった。その時期に女子学生が幾人かつ各クラスにいた。

そのとき一人の女性が、ドイツ語の授業を通して福音に心を惹かれ、私の日曜集会に参加を申し出て来た。二神萬里子さんがその人であった。前にも後にもこの人のほか女性で福音を求める学生はいなかった。

彼女はひたむきの魂であった。知性も優れており、感情も豊かな女性であった。私がハン

ブルク大学へ交換教授として日本学を講ずべく東大から派遣されたのは、一九六一年の春であつたが、赴任して間もなく、書籍小包のようなものがといた。何かと思つて開くと、部厚なノートである。その内容は英文タイプで打った日本の年中行事を中心とした日本人の生活、風習といったもので、次の諸項目から成っている。

新年、かるたとり、丑の年、はごいた、お年玉、餅、節分、ひな祭、柔道、相撲、春の歌、風呂敷、端午の節句、田植、てるてる坊主、山開き、お盆、七夕祭、日本の夏、雷さま、日本の秋、お月見、秋の虫、こけし、食物と飲物、すきやき、てんぷら、果物、飲物、東京、履物、箸、和歌、一握の砂。そして各項目に夫々ふさわしい挿画や写真が、きり抜いて貼りつけてあつて、たいへん楽しい教材を構成している。

彼女は、私がドイツの学生に日本のことを語る一資料として、既に私が出発する前から準備して整えつつあつたのであつた。そのあたたかい心づかいに感服した。英文であるから、これをドイツ文に直して自由に活用した。私の授業に一つの興味ある内容を作つてくれた。このノートは今ではついに彼女の貴い形見となつてしまった。

彼女がドイツの私にくれたたよりの一端をここに記して、その友情を偲びたいと思う。

「先生が、ドイツで福音のためにも御活躍なさっていることを私は少しも怪しみません。幕屋の信仰は全く真理を貫いているのですから、どうしてドイツの人達の心に深い感動を覚え

させずにおられましょう！ 心ある人なら、どこの国に属していようが、真理の前には涙するものと思います。謙虚の限りに於て現われる真の力の偉大さをしみじみと感じます。日本の教会に捨てられ、無教会に捨てられた先生が、悲憤のあまり拳でテーブルを叩いた御姿が目に見えます。すぐ何でも新しいものを、珍らしいものを迎合する日本人ですが、今は成長期、きつと何年かしたら精神的にも大人になり、自己の持つ伝統を生かしたすぐれた一流の国民になるのではないでしょうか。そんな時が来たら、武蔵野の道は日本の誇り、否世界の勝利となるでしょう。」

もう二十年も前の手紙だけれども、何か第三卷『無の神学』に天界から声援してくれている気がしてならない。二神萬里子さん！ どうか天界の「神の幕屋」で楽しく暮らして下さい。貴女を知る武蔵野幕屋の兄弟姉妹たちは貴女を決して忘れません。

今晩は北十字星座、白鳥が夜空の彼方に織女星を迎えに飛んで往くのだろう。

美しき短かき地上の生涯を終えた貴女のため、召団讃歌第二二番第二節を口吟しよう。

神の幕屋の張られたる

その天然の霊泉に

渴きを知らぬ永遠の

いのち
生命たのしむパラダイス



昭和医科大学生二神萬里子さん

〔作詞、天韻〕

〔「空に囀る鳥の声」の歌調〕

第三部 母の生涯

一、母の生涯

(一) 告別の辞

(一九五七年一月二二日)

活動の前半生

母はついに地を去りました。兄龍二と私でこの告別式を司らせていただくことを、母は最もよろこんでくれると信じます。

母は明治二年一八六九年十一月九日信州松代に生まれました。生家は太田といつて八人姉妹の第五女でありました。幼時から寺小屋式の教育を受け、漢籍を学ばせられたときのはなしなど、私が中学時代に漢文を習い始めた頃、聞かせられたものでした。母の十七歳の頃だったと思われる、母は江戸へ出て勉強せんとの志を立て、両親におねがいをしたのですが、どういう前後の事情であつたかは知りませんが、おゆるしがなかったので、ついに一夜意を決して家を出ました。信州小諸の宿まで辿りついたとき、二人曳きの人力車で追跡して来た追手に追いつかれまし

た。押問答の末、母は「どうしても帰れと仰っしゃるのなら、私の首をお持ち帰り下さい！」と言いました。追手はこの一言に胸を打たれ、やむなくそのまま戻って行ったということです。『曠愛文庫』第三号「人生五十年」の項参照）今日は母の思い出ばなしをくだくと申し述べるわけではありませんが、右の一挿話は母の八十八年の生涯とこれを貫く魂のすがたを象徴していると存じます。

さてお茶の水女子高等師範学校第二回桜蔭会卒業生として学窓を出で、和歌山高女、長野高女で奉職、やがて母校の附属お茶の水高女に転勤、爾来二十年間教鞭をとり、明治三十二年、三十五年、三十八年、四十三年、大正四年、前後五回の作楽会卒業生に対しては担任でありました。その後日本橋高女、聖心女学院等で教鞭をとって居りました。

これよりさき、明治二十八年、三井鉾山技手、小池政吉と結婚、六人の子女を与えられました。即ち我々、政美、龍二、富士子、三郎、辰雄、愛子の六人兄弟姉妹であります。三郎は生後三ヶ月にして乳母の乳の不良のため死去。父政吉は母と五人の子女を遺して五十三歳で—今の私の年齢の頃—病歿。妹愛子は高師附属小学校二年生のとき猩紅熱にて病死。その頃私は妹と本郷西片町から通学しており、私は同じ時に腎臓炎をわづらい、母はしばらく妹の死を私に語りませんでした。その後間もなく学校に近い小石川同心町に転居したのも、私の虚弱を慮っての母の愛によることでした。長兄政美は大正十年（一九二一年）北京で腸チフスのため客死。姉富士子

は、山本保と結婚、三男二女の母となりましたが、第二次世界大戦後、過労のため病歿。今遺っているのは次兄龍二と私だけであります。

我々兄弟姉妹五人は事実上――末子愛子が二歳のとき父が他界しましたから、その大部分を母親の養育薫陶によったのであります。私の如きは最も永く母の恩愛を受けた者であります。父亡きあと、私が未だ学童にも達していなかった頃から、夕方あの袴姿の母を門前で待っていた自分の幼少年時代のいじらしい姿を自ら今でも想い浮べるのであります。母の姿を見ると私の胸の中は急にあたたくあかるくなるのでした。それは千駄ヶ谷や小石川同心町時代のことでした。母は併し決してただ甘い母ではなく厳格な母でもありました。それでも手をくだして叩くような叱りかたはしませんでしたから、私にとって母はたのもしき慈母でありました。五人の子女は次々と高師附属に通学を始めましたが、女親一人で我々を養育するのはなかなかのことで、母は傍ら家庭教師もやらねばなりませんでした。長兄も一高及び東大生のとき、今でいうアルバイトをして（英語や数学を教えて）、母をたすけていました。五人の子女をかかえての母の永年の奮闘はさしも頑健であった母の肉体を次第に痛めました。過労のため胃腸に障害を来し、私の中学時代の母は、お粥だのパンだのを食べることが多くなりました。太っていた母も段々細って来ました。南胃腸病院長の親切な治療及び医薬に、母は屢々支えられているようでありました。

私が高師附属中学の上級生になった頃、長兄は東大政治科を卒業後、いくばくもなくして北京

へ赴任、日本公使館附、財務書記官として大蔵省から外地勤務に就き、次兄はこれよりやや先きに、シベリヤ派遣軍の一將校として戦地にあり。母と私は次兄の身の上をむしろ案じ、所謂「武運長久」を祈るものでありました。幸にして次兄は戦地から帰還。その後いくばくもなくして北京の兄から腸チフスのため入院したとの報に接し、母と私は宇都宮第六十六聯隊附の次兄を夜晩くその下宿にたづね、時をうつさず母と次兄は朝鮮經由で、北京へ急行しました。当時青島に在勤中の義兄山本保も北京に馳せ参じました。

母の篤き看護にも拘らず、病状は悪化し、一九二一年（大正十年）九月二十二日、政美は召天いたしました（『曠野の愛』誌第九、第十号参照）。父亡きあと、堅忍奮斗、今こそその第一の美樹たりし長子を杖とも柱ともたのみ始めたあかつきに、ときならぬあらしに仆された母の眼前、天地冥暝！ その悲嘆、言語に絶するものであったに相違ありません。「二二ヒマサミスハハ」との訃電を受けた私は、その夜息づまるおもいでねむりもやらず、ただ従兄青木実氏（當時東大生）の来泊がやや私の心を鎮めてくれましたが。

北京から次兄と共に遺骨を抱いての帰路、黄海渡航中、船上で、多年の過労とこの度の心痛の余り、母は突如失明（緑内障）いたしました。東京に着いて直ちに井上眼科病院で治療を受けましたが、時既におそでした。名医の手術により一時は薄明状態になりましたが、次第に暗くなり、ついに日も月もその光を映し得ぬ闇黒の世界に母は投げ入れられたのでした。光の閉ざされ

た牢獄同然。噫、無情！

母の失明！ 兄の死に加えて二重の悲嘆。私はひとりあの小石川同心町の机に寄り泣きぬれました。暗黒の夜がくると母をしのび、どんなに辛いことだろうと断腸の想いでした。その頃以來、私は盲人がいかにも不具者の中でも気の毒な人々であるか身に泌みて感ずるに至りました。

お茶の水高女奉職時代を人生の真昼時として奮斗して来た母の前半の生涯はここに文字通り幕を閉じたのであります。

静寂の後半生

母の後半生は実にその時から今日までの失明三十五年であります。さてここに一卷の大型旧新約聖書があります。この聖書開巻の扉には昨日記された文字の如く生き生きとした筆跡で、「母上様、一九一九年九月二十八日 政美」と、記してあります。即ち長兄はその召天二年前に母にこの聖書を献じたのでした。兄が母を大手町の内村鑑三先生の集會に案内したことも数回あったことを記憶して居ります。私は中学生であつたので、兄は尚早と思ひ、私には信仰のことを勧めませんでした。併し兄の死後、私は兄の言動の意味とあじとが次第にわかつて来たのでした。

同じくこの聖書に、一九一九年十一月十九日の日附を以て「お祈り」が記されてあります。そ

れは次の如きもので、読ませていただきます。

「聖霊来り給へ。天より御光の輝きをはなち給へ。貧者の父恩恵の施与者、心の明にまします者来り給へ。いと優れたる慰主。霊魂に甘露なる珍客。精神を爽にする清涼薬、疲れたる時の憩、暑き時の涼み。憂うる時の慰。至って幸なる光よ！主を信ずる者の心に来り充ち給へ。主の助けあるに非ざれば、人には全体罪ならざる所なけん。希くは汚れたるを清め、乾けるをうるおし、傷けるを癒し給へ。硬きをなびかせ、冷えたるをあたため、曲れるを直くし給へ。主をたのむ信者に神聖なる御恩恵を施し給へ。救霊の域に至り、永遠によるこぶを得しめ給へ。亜孟」

暗黒の淵におとされた母は、ある時は自殺の念におそわれたこともあったが、私たちのことを想いそれは思い止まったと大分後になって述べました。併しこの三十五年間、母は自分の失明をつぶやいたり、運命を呪ったりなどは一度もいたしませんでした。併しそれは母にとって何でもなかったのではなく、私の知らない苦杯を飲みながら、それを甘きものに変えていたのでしょう。母の失明の頃からラジオが次第に発達し始め、これを聴くことは母にとって日ごとのオアシスで、たしかに大きな慰めとなりました。

兄龍二は陸軍のコースを幼年学校から本格的に辿っていましたので家で暮すこと少なく、私が事実上、最も母と接触が多かったわけです。同心町の家をたたみ、家財を出来るだけ処分し、武田の叔父叔母の許に母と私は厄介になりました。私は水戸高校に入学。胃腸をこわして休学。私

が内村鑑三先生の大手町集會に單身出かけたのはこの時。最初から私は内村先生の聖書講義に捕えられ、母にも聖書と先生の本を読んできかせました。併し私よりも平口繁子さんという母の旧友が定期的に訪ねて来られ、母に読み聞かせ下さった分量の方がはるかに多く、これは母にとって何よりのたのしみで、母の心は次第に信仰の世界に開かれました。平口さんに伴られて母は本郷駒込基督會という富永徳磨牧師の獨立教會の會員となりました。私は水戸高校から帰京する毎に、日曜には内村先生の大手町集會へ行きましたが、やがて、兄政美の翻訳した遺稿ゴーデー著『基督の復活』を藤井武先生が出版して下さるに際して、先生をはからずも知るに至り、東大時代から私は藤井武先生の自宅集會に毎回列席させていただくようになり、先生が新町学廬（夜の講座）を開かれたとき、私は毎週四回駒沢新町に通いましたが、その一つの講義、アウグステイヌスの『告白』の講読には母を伴れて聴講しました。藤井先生が一九三〇年に地を去られてから約三年、私はひとりで聖書を読んでいましたが、藤井先生の親友であられる塚本虎二先生の丸ノ内の集會に列席させていただくことになり、数年間毎回列席、司會をさせられたり、ヘブライ語のクラスを担当させられたり、『旧約知識』誌のメンバーになったりでありました。

一方母の方は、富永先生の召天後、中川景輝先生が牧會され、この先生御夫妻が荻窪に居られたので、よく先生御夫妻に手をひいていただいて駒込教會の礼拝に列席して居りました。中川先生も召天されたので、母は私と順子（妻）と共に丸ノ内の集會に列席することになりました。

私は自宅集会を一九四〇年九月二十二日（日曜）、即ち政美兄上の召天記念日を期して開きました。その第一の理由は、母の歩行があまり自由でなくなってきましたので、自宅に於て母と福音を共に学ばんとした念願にありました。爾来十六年間、戦争中、休会のときもありましたが、旧新約聖書の大半を学んで今日に至りました。

ここ二年間は母が外出不能となりましたので、集会に母が参会できなかったことは私の最も残念に思うところでしたが、時折母を訪ねて語り、また祈りました。

私の信仰はここ数年、使徒的信仰の角度を与えられて来たようですが、若き母の失明当初から今のようであったとするなら、母の失明は助けられたかもしれないかと思つたと、私はおのが不信をまことに申訳なく思うのです。

「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦えらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。およそ我に蹟かぬ者は幸なり」（マタイ一一・五、六）と言われたイエスは、今もなお天界から、み霊を以て臨み給う。母の開眼が魂の救済と共にみ旨であったとするなら、その聖旨を不信のため受けそこなつたのであるなら、まことに私は申訳なかつたわけでありまゝす。パウロの「肉の刺」の如く、たとい開眼がみ旨でなかつたとするも、求めの不足はそれ自体不信で、どの道、私の不信の罪は言いがれが出来ないのであります。

キリストの十字架のあがないは「すべての不義とすべての病」のあがないで、全存在の救済に

関わって居ります。この罪の世に於ては、あがなわれてもなお罪と病と悲惨と死とはつづきますが、キリストの御本願は靈肉の全き救にあることは聖書の証言するところであります。

八十八年の生涯！ この前半は苦闘の連日、その後半は闇黒の連夜。これが私の母であつたのです。母の愛誦の讚美歌（旧八二番）を今日ふと思ひ出し、さきほど、この壁に掲げた「告別式次第」を書きながら、これを長女の清子に唱つてもらおうと靈感がひらめき、プログラムになつたのですがこれを投入したのです。そしてその歌詞をよんでみて、私は実に、まことに母に申訳ないのですが、今日はじめて母の愛誦の意をしみじみと知つたのでした。

一 めぐみの光は わがゆきなやむ

やみ路を照らせり 神は愛なり

（おりがえし）
我らも愛せん 愛なる神を

二 うき雲おほへど み神の笑みは

さやかに照りいづ 神は愛なり

三 うれひのときにも のぞみを与へ

慰めたまへり 神は愛なり

四 ものみなうつれど めぐみの光

とはにぞ輝く 神は愛なり

「わがゆきなやむやみ路を照らせり、神は愛なり」

この一句を受けとつてこの三十五年をつぶやかず、うらまず貫いた母の真意は神のみぞ知るで、やはり私の想像を絶しています。

あの偉大な『バラダイス・ロスト』を書いた失明の詩人ミルトンはその第三卷四〇—五五行で次の如く告白しています。「……年ごとに

季節は帰れど、私には帰らない

日も、夕、朝のうましき接近も

または春の花、夏の薔薇の眺めも

羊牛の群も、人のたふとき顔も。

むしろただ雲と消えやらぬ暗黒とに

囲まれ、美しき知識の書に代へて

私には掻き消されし自然の業の

涯もなき白紙を供へられ、かくて

智恵は一つの門に閉めいだされて。

さればいよいよ寧ろ汝、天の光よ、

内に輝け、心の能力すべてを

照らせ。そこに眼を植え、あらゆる霧を

そこより掃ひきよめよ、そは人の目に

見えぬものを私は見また告ぐべく。」

(藤井武訳)

“celestial light”「天の光」、キリストの靈光こそ根源、現実を見させる「めぐみの光」であります。おもうだにあやしきまでの母の平安！母が失明していることをしばしば失念せしむるまでに、母に接する人々をやわらげていたあの温顔。母はつねに人のことを憂い、心にとめていました。母がしかめつらをするのは皆、人のことを心配しての表情で、我々は時折冗談まじりに、「おばあさんは、まるで心配することがないと気がすまないようですね」など言ったりしました。

ミルトンがその名詩『サムソン・アゴニステイス』の中で失明を嘆じている深刻な詩句（六六——一四行）はここには掲げませんが、母も一時は、サムソンやミルトンの苦悩を深刻に体感したのでありますが、よくそれに耐え、それに勝ってくれました。

また同じくミルトンのソネット「失明の歌」（“on his Blindness”）の後半に曰く、

……しかし忍耐ただちに

眩きを抑へて、「神は人の業も

おのが賜物をも要めない、その柔和の
軛をよく負ふ者ぞよく仕へる。

神は王者らし、千万の者かしこみて

陸超え海超え休みもなく奔る。

ただ立ちて待つ者もひとしく仕へる。」

（藤井武訳）

極めて活動的であつたミルトンも、その四十三、四歳の頃、相繼いで一眼また一眼と明を失つてしまいました。神のなし給うところに従順に信頼することこそ信仰であるとの告白がここに表われています。最後の一句、

“They also serve who only stand and wait”

母もただ立つて待つていました。勿論家の中で出来るだけの仕事はしていました。そうです、かなり長い間、編物などはやっていました。

永い年月を坐つて待つていました。晩年には坐つてゐることも次第に困難になり、臥して待つていました。「立ち待ち」、「居待ち」、「寝待ち」、の月という言葉もありますが、活動的な母も、後半生に於ては静穩な生活に移されたわけであります。

この母につかえて三十年間、母の地上の生涯の終りまで、よく面倒を見てくれたのは義理の姉

じゅん子であります。これも母と同じく、嘆かず、眩かず、優しい心根でよく母をなぐさめてくれました。私たち弟夫妻たる者、兄夫妻に対して深甚の感謝の意を表しないでは居られず、且つそれは言ではあらわし得ぬものであります。

またこの永い歳月に、終始変らず、母をなぐさめて下さった主な方々は、お茶の水高女を明治三十二年、三十五年、三十八年、四十三年及び大正四年に卒業された、母の担任であった学年の作楽会々員の方々や、日本橋高女卒業のある方々で、現にここに御参列して下さい居られる多くの皆様でありまして、生前のあつき御好意に対して衷心より我ら一同感謝申し上げる次第でございます。私はここに日本婦人の美しい師弟関係を拝見するのであります。クラス会などもよく母のもとで開いて下さったのでした。

さて母はそうにして活動の世界から静寂の世界に移されました。それはどういうことなのでしょう。福音書ルカ伝の十章三八―四二節に次の如き記事があります。

「斬くて彼ら進みゆくほどに、イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。その姉妹にマリヤという者あって、イエスの足下に坐し、御言を聴きをりしが、マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う、

『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ』主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い煩いて心労

す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

ここにイエスはマルタの活動そのものを非難されたのではなく、マルタの活動がひたぶるの活動であつて、マリヤが手助けをしないことに対して眩かかないことがのぞましくありました。マルタの心の分裂、「思いわずらい」がマルタに於て非難さるべき点でありました。マリヤのひたぶるなイエスへの傾聴、これはマリヤの魂が先づ「神の国とその義を求める」すがたであつたら、イエスが「無くてならぬものは唯一」(Unum est necessarium.) といつてこれを強く肯定されたのでありました。

問題はひたぶるなる心、傾聴するにも奉仕するにも、分裂なき在り方、委心托身的な、投身体受的な、全人的な実存にあります。そうであるなら、実はマルタとマリヤは一つのことになるのです。動いてはマルタとなり静まつてはマリヤとなるのが、本当の実存であります。キリストは神の言を「聞きて行う者」が天国に入り、「聞きて行わぬ者」は失格である旨を論じて居られるからであります。(マタイ伝七章参照)。そして真理は聞くことと、行うことを二段に分けて考えるところではなく、聞即行、行即聞、といった一如的把握が極めて大切なのであります。信仰と行為の關係もこれと同じであります。魂と体との關係もその極致に於ては渾然たる一如であります。併し人間の在り方が何ごととにせよ、ひたぶるならんがためには、たましいのすがたが

ひたぶるなことが第一でなければなりません。

母は、精神一到何ごとか成らざらん、を信念として貫いて来た実践型の女性でありました。活動の前半生はその権化の如くありました。若しあのままの活動をつづけ通していたら、母はもっと早く仆れたことでしょう。

併し神様は、ここに全く痛ましき事態——兄の死と母の失明——を通して、母を静穏な生活に導き入れられたのでありました。これ、神が本来マルタ的な母にマリヤ的な世界を知らしめんがための愛のしもとであつたのでありましょう。昼の世界から、夜の世界へ、動的生活より静的生活へ。行的世界から信的 세계へ。見る世界より聞く世界へ。体的な世界より靈的な世界へ。我々の判断や常識ではわからぬ方法を以て、神は母の全実存を救わんとされたのでありましょう。

儒教的実践の魂、努力精進型の人である母が、十字架による罪のあがないを信受することはなかなか容易なことではなかったようです。復活のキリストの生命を受けるとはどのようなことであるかも永い間不可解であつたようです。併し、深刻な多難な人生経験は、母をして一切に拘らず、神は愛であること、否実、に、神の愛はそのような多くの矛盾不可解の相の奥に白熱しているものであることを信受せしめました。数え年八十九歳、所謂米寿の祝を昨秋迎えました母は、天国へ旅立つ存在的な準備は成り、枯木の如き体軀を脱ぎすてて魂が靈体を以て天翔ける時は満ちつつあつたのでした。

大晦日に一時重態に陥り、元日には親しい人々が半ば離別の意味で訪ねて来ましたが、しばらく持ち直し、一月十五日は特に回復への徴候が見えたようでしたが、それは風前の灯火の一閃。

翌日から危篤状態におちいりました。十七日（木）の夕は、我らの幕屋の祈禱会の夕。私は母を聖手にゆだねて、祈禱会場たるS君宅へ行き、詩篇六十三篇を講じて祈りました。

「ああわが神よ、汝はわが神なり。われ切に汝をたずねもとむ。水なき燥きおとろえたる地にある如く、わが靈魂はかわきて汝をのぞみ、わが肉体は汝を恋い慕う」（詩六三・一）。母はもう十六日から何も喉を通らなくなりました。ただ呼吸をしているだけです。唇のかわきを鎮めるために、綿に番茶を浸してうるおしてあげるだけです。母は即ち「水なき燥きおとろえたる地」の如くでありました。時折唇を固く閉じる顔。それは何かを言わんとして言い得ざる反動の如く、また一切を沈黙の中に包摂して勝利した表情の如くでありました。一滴の水も喉を通らないで、ただ呼吸をしている母は、全存在を以てただ神を呼び求めているようでした。詩篇六十三篇第一節はそのまま母の声であり叫びであるように読めましたので、私は祈禱会でこれを証言しました。十七日の晩も母の傍をはなれ得ず夜を明かしました。幾時間も呼吸そのものが祈りの如き母の枕べで、私も祈りつづけました。母のたましいが平安に主のみ許に召されんことを！

どういう意味か、一度母の眼から涙がふり落ちました。それは母の意識の奥からあふれて来た祈りの涙であったのでしょう。八十八年の生涯の意味と深刻な悲願の結晶であるかの如く。「み

靈言、い、難き呻きを以て執成し給う」(ロマ書八・二六)を感じました。淳子チャンという曾孫女が母の枕べに来て手を合わせ、エス様におばあちゃんの為祈りを捧げたり、歌をうたったりくれました。それは真心こめた愛すべきもので、私は天使が来たように思われました。「淳子チャン。有難う。おばあちゃんが、よろこんで下さったよ!」といってあたまと撫でてやりました。

一月十九日のなごやかな日ざしの午後、姉(じゅん子)と私が近藤医師を玄関に見送っている瞬間、母を見守っていた妻(順子)が「様子がおかしい」といって飛んで来たので、医師も急ぎ家へ戻って来てみれば、もはや呼吸微弱。いくばくもなく心臓は八十八年の鼓動を休止しました。時に一九四七年一月十九日午後一時三十五分! 永い間、人々のことを思い念じていた母、その母の再び眼ざめぬ顔は奇しくも天使のような童顔となりました。

暗黒の後半生はここに終わりを告げ、永遠の晨を迎えました。併し誰かうたがい得よう、三十五年の失明の世界に、実は我々肉眼の開いている者たちのうかがい知り得ぬ靈光をうちに蔵していたればこそ耐え且つ勝った消息を!

イザヤ書第三十五章はかかる十字架を負った人々のため約束しています。

「その時しも、盲者の目はひらけ

聾者の耳はあくべし。

その時しも、跛者は鹿の如くに跳び走り、

啞者^{おとし}の舌は飲^のび歌わん。

然^{しか}り曠野^{くわうぎよ}には泉水^{いづみ}たばしり

沙漠^{さつぼく}には川流^{がう}るべし。

.....

実存主^{エホバ}に贖^{あがな}い救われし者、歸り来らん、

彼らは飲^のび謳^{うた}いてシオンに到り、

その首には永遠^{えいゑん}の歡喜^{くわんぎ}あらん。

歡樂^{くわんらく}と歡喜^{くわんぎ}とを彼らは勝ち得、

悲哀^{かなしみ}と悲歎^{かなげき}とは逃げ去るべし。」（私訳）

この詩の預言している靈的な現実を一度び體現したのがナザレのイエスでありました。そして今もみ靈にあつてこれを証し給わんとして居られるキリストであります。地に在りし間、この証を受けなかつた母は肉眼は盲していましたが、魂の眼は開かれて救の世界に入り、今や肉体を脱いで靈体を衣せられ靈眼を以て、天界に歡喜の晨を迎えているに相違ありません。

今日は大寒にも拘らず春の日の如くなごやかなあたたかさを漂せて居ります。おそらく神はこの様にして母を祝福して下さったのでしょう。その名は「光子」、義の太陽キリストの光の子とせられて勝利しました。凱旋しました母のゆえに聖名を高らかに讃えます。どうぞ皆様！ この

勝利の死を欣んで下さい。聖名を高らかに讃美して下さい。再び暗くなることのない世界に母は開眼したのですから！ さきほど読んでもらった黙示録の聖言の如く、母も「大いなる患難より出でたり、羊の血（キリストの贖罪の血のことです）に己が衣を洗いて白く」しました。「聖座の前で、昼も夜もこの聖所にて神につかえる恵みにあづかる」ことでしょう。「神の幕屋が張られ、かさねて飢えず、かさねて渴かず」「キリストは母たちを牧して生命の水の泉にみちびき、母のような人々の目より凡ての涙を拭って下さる」であります。

「一粒の麦地に落ちて死なば多くの果を結ぶべし」、どうか、母の死が何らかのお役に立ちますように！ 私は、兄政美仆れて芽をふき出しました。信仰の世界に三十五年前に新生しました。今母去って新らしく第二の芽をふき始めています。生命の世界の神秘の原則であります。その源泉はキリストの靈血にあるのです、「われは永遠の生命を与えんとて世に來れり」とはヨハネ伝に於けるキリストの約束でありました。生命であり、光であり、愛であるこのキリストを日本人が新たに真に受けとることによって、日本は敗戦の真義をつかむでしょう。何でもない母の生涯です。名もないかくれたる一人の人が死んだに過ぎません。併し「汝何を見るや？」との神の問いかけに対して、「私は三十五年間失明なりし母の屍を見る。私は靈的失明の日本を見る。」と答えしました。私に課せられる幾人かの日本人の魂の新生のために、靈的開眼のために残る生涯を燃やし尽すべく、この母から、無言の失明の母を通して神の黙示を聴きました。母の失明

の全存在を以て語りかけ給う神の啓示の言を！ 母の失明が開眼しなかったことは私の不信によるとも、なお母の失明に於て更に深き神の聖旨を受けとり、黙示を受けとり、私はただ平れ伏すのみであります。

お母さん相済みませんでした。私の不信と多くの不孝をおゆるし下さい。どんなに辛い三十五年だったでしょう。孫どもの顔をただ手でさわるだけでありましたね。春の花はお母さんに微笑んでもお母さんは、そよ吹く風でそれを察するのみでしたね。併しお母さん、有難うございました。失明三十五年間を通して日本人の霊的失明に対する悲願を祈りつづけて来たのですよ。この実存的なお祈りは決して空しくはなかったのです。天界からいよいよ私たちの魂のために祈って下さい。

詩人ブライアントが「勝利者の墓」(“The conquerors Grave”)という詩で人生を戦い抜いた無名の一女性の死を詠っていますが、その第五節で、

“Her Glory is not of this shadowy state,

Glory that with the fleeting season dies;

But when she entered at the sapphire gate

What joy was radiant in celestial eyes!

How heaven's bright depths with sounding welcomes rung

And flowers of heaven by shining hands were flung !

And He who, long before,

Pain, scorn, and sorrow bore,

The Mighty sufferer, with aspect sweet,

Smiled on the timid stranger from his seat ;

He who returning, glorious, glorious, from the grave,

Dragged Death, disarmed, in chains, a crouching slave."

「彼女の栄光は此の国土のものではない、

時限の流れにつれて亡び去る栄光ではない。

彼女、碧玉の門に突入したとき、

どんな喜悦がその天つ瞳に輝いたろう！

天の淵は歓びに輝きどんなにどよもし迎えたか、

天の花は手もあでやかにどんなに舞い躍ったか！

而も彼、その昔

痛苦と侮蔑と悲哀とを荷なった彼

あの強い受難の人は、甘美な聖顔で

御座からこのかよい旅人に微笑んだ。

彼こそは栄光の中、墓から還り、

「死」の剣を奪って鎖につなぎ、これを奴隷とした人である。」（私訳）

と詠っています。キリストに歓び迎えられたこの無名の女性のように、私の母も *celestial ones* 「天眼」を賜って歓呼していることでしょう。

人生の真の歴史は地上の文字にありません。天上に逆投影している「天の巻物」に記されてあります。詩篇百三十九篇にある如く、一切を知り給う主の巻物に。地上の実存の真記録が神に嘉せらるる人は幸であります。人をごまかしおのれをごまかしても、ごまかすことの出来ない天眼天耳によるこばれる人になりたいものであります。私たち自身がこの天眼、天耳、天心、天体と化せられつつ、この地上に天国を体現せんとの悲願靈願に生くるのはかに道なしであります。皆さん、道は唯一つ！ 生けるキリストをこのたましいに迎えまつることのみ。母の貧しい生涯がただこの一つの勧め、この呼びかけ、この指標であったことを合点して下さるなら、母は一番よろこび感激することと信じます。栄光ただ聖名にあらんことを！ アーメン、ハレルヤ。

「曠野の愛」第二七号、一九五七（昭和三十三年春、「ナルドの香油」所載）

〔註〕この「告別の辞」から、私は録音を開始した。日曜の聖書講筵やさまざまな講演の録音は山積している。もしそれらを文字にしたら著作集は三十巻を越えるであろう。

(二) 母の告別式

母は一九五七年一月十九日、土曜日（一八六九年十一月九日生）に召天した（別項「母の生涯」参照）。夜、なきがらの前で小集会をした。翌、日曜日は吉祥寺十六なる武蔵野幕屋でいつもの通り日曜集会を開き、会員に母の召天を告げ、詩篇^{*}第一〇二篇を私自身の告白として語った。午後、杉並区上荻窪一丁目一九五の兄の宅で大阪から急遽上京した兄と納棺式を行った。翌月曜日の晩は近親教え子の方々が参集された。十九日午後以来の諸般の準備ようやく成り、二十二日の告別の日を迎えた。告別の辞は二十一日の夜、祈り心地で草し夜半に及んだ。

告別式は二十二日（火）午後一時から開いた。この日は大寒に拘らず、非常にあたたかい日ざしで、典型的早春と言いたいほどであった。会葬者に寒い思いをさせないですむことは我々にとって有難いことであった。多くの会葬者から供えられた生花で室は満ち、芳香が室外に溢れていた。失明の母も今はこの芳しき花を霊視して微笑んでいると思つて、ひとり胸があつくあった。

司会は私が承った。会葬者は室内と庭のベンチにあふれた。前奏としてショパンの葬送行進曲

をLPで奏した。讃美歌第一として「ややに移りきし夕日影の」(五〇二)を会葬者一同で歌った。聖書朗読は会員A君にロマ書八章一八―三九節と黙示録七章九―一七節を読んでもらった。朗々また切々とよんでくれた。次に祈禱を会員にして洋画家S君にしてもらった。簡明に且つ力強く心をこめて祈ってくれた。

次に讃美歌第二として「主よみ許に近づかん」(三〇六)を会衆一同でうたう。故人略歴は私の告別の辞の中に織り込んであるので略した。弔電の紹介をする。讃美歌第三として「しろがねのひもの絶ゆる日はありなん」(五三三)をうたう。

次に、式次第を模造紙に書いているうちに靈感的に思いついたことがあるが、「故人愛唱歌」として「めぐみの光はわがゆきなやむやみ路を照らせり神は愛なり、我らも愛せん、愛なる神を」(八二)の全歌を長女清子(国立音楽大学三年生―当時)に独唱してもらう。準備もなかったが、心をこめてよくうたってくれた。誰よりおばあちゃんがよろこんで下さったにちがいない。次に、「告別の辞」として別項「母の生涯」を語った。時間の関係で細かい点は語れなかったが、母への切々たる想をこめて語った。時に言葉が言葉になりかねた。併し、私の根源意識は母と共に福音の証言をするにあつたから、上からの力にせまられて語っていた。聖名に栄光を帰し奉ることが目的である。会葬者の中には、こんなのがキリスト教の告別式かと思われたむきもあるが、一般のキリスト教の告別式ともちがう型破りなものなのである。

式辞が終つて祈禱に入る。若き友人東京神学大学学生大塩清之助君にまず祈ってもらふ。大塩君らしい心のこもったあつい祈りであつた。次に会員にしてこれも将来の伝道者高木光徳君に祈ってもらふ。いつもながら靈的な感動にあふれた祈りである。最後に私が祈る。祈りはいつしか母のことから、会衆者一同のための祈りとなり、三転して日本の救への祈りと白熱していった。私の祈りに於て、特に日本の青年の中からルッター、ウェスレー、リヴィングストーン、サンダリング、シュヴァイツェルの如き魂の出現せんこと、あの偉大な仏僧の一群にも勝る靈的人物の出現せんこと、そしてまた何より、無名の基督者が、男にもあれ女にもあれ、一人一人が、どんなにみばえなき存在であらうと、その信仰の本質が、徒的信仰と同質であるところの基督者であれかしと祈つた。そこにこそ日本の不拔の力が基礎づけられるからである。パウロがよくも道破してくれたところの「無き者たち」(コリント前一・二八)無者の無的実存にこそキリストの無限の愛と生命がみなぎりあふれるからである。厳冬のさなか、太陽は母の召天を祝福する如く惜しげなく和光をみなぎらせていた。光子! 光の子にふさわしき告別の日であつた。

最後に「遙かに仰ぎみる輝の聖の国に、父の備えましましたのしき住家あり、我らついに輝く聖国にて聖き民と偕に聖前に会はん」の全歌を会葬者一同で高らかに歌つて告別の式は終わった。それは所謂式ではなかつた。心魂の饗宴であつた。霊の献祭であつた。

おわりに喪主龍二の挨拶あり、ひきつづき一般の告別の儀に入り、後奏としてバッハの「キリ

ストの受難及復活」曲をLP盤で三時まで一時間奏した。その間、すべての会葬者に供花をしていただいた。

柩への最後のわかれとなる、なががらは生花に埋められてしまった。『曠野の愛』第二十四号、天鐘号を胸に抱いて、吉原知子叔母が妹として最後のわかれを惜しみ「姉さん！ あちらでお待ちになって下さい！」と合掌するすがたよ。八十余年の深い親しい交りであった。武田まつ子叔母が病弱のため来られなかったのは残念であった。

式の一切が終わって霊柩車上の母は心からの野べの別れを受けつつ、住みなれた上荻窪の兄の家を去った。この車に同乗していた私は、道すがら柩に手をかけて、いくたびか胸の中で「お母さん！」と叫んだ。「戦います」とお約束した。「天から見えて下さい」と言った。堀の内についた。いくたびか友人たちの葬式の際に來たことのある火葬場である。かまどの前で同道した十数名と讚美歌「きよき岸辺に」（五六五）をうたった。詩篇第二十三篇を大声でよんだ。「たい我れ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれ汝われと共に在せばなり」の句は特に力強く、アーメンであった。私の腸の底から一つの叫びが爆発した「お母さん万歳！」かまどの火よりも白熱した叫びであった。孤影よく苦難を負い抜きし母よ。

白骨を抱いて兄と私は火葬場から一同と共に帰った。生花馥郁たる室に米寿の近影と共に遺骨を安置し、残留の近親及武蔵野幕屋集会員としばらく霊前にてくつろぎ、母のみ霊をなぐさめ

た。いつくしみ深き主よ、母の霊をなぐさめ、主の樂園に歓呼せしめたまえ！

〔註〕＊このとき語った詩篇第一〇二篇は本著作集第四卷『詩篇珠玉集』に載せてあります。

天^{あめ}なる母よ 汗と涙の

幾^{いくとせ}十年をば 勤^{つと}勞め給へり

天なる母よ 北支の古都に

子を失ひて 帰途に失明！

天なる母よ 闇^{よそじ}の四十路を

かこつことなく 忍^{しの}び給へり

辰雄

二、藤井武先生と小池政美

(一九五一年九月)

藤井先生と私の兄との関係がいつ如何ようにして始まったかは、先生の「美しき印象を私に残した人々」の一文で始めて知ったに過ぎない。私は藤井先生には『基督の復活』の校正のお手伝いで始めてお目にかかり、やがて私自身が弟子となり、先生の死に至るまで完全に信仰上の御恩を蒙ったのである(『藤井武君の面影』中の拙文「恩寵の跡」及び「憶藤井武先生」参照)。

先生は時折、兄について感慨深い言葉を私に洩らされた。「小池君、君がこんなに速く信仰に入って兄さんはどんなに喜んで居られるでしょう。……君の兄さん、政美君はね、一人に一人居るか居ないかの人でしたよ。……小池君の兄さんにしかないものがあつたのです。……それは言葉には言えないビューア(純)な、深いものでした……」。先生のこの言葉の下で私の胸は

熱くなり、私の眼はうるおうた。此の語られたある秋の午後のひと時を私はいつまでも忘れることが出来ない。

兄の召天の翌月、先生は『旧約と新約』誌第十七号「慕う所は天にあり」に於てヘブル書第十章の解説をなし「信仰の本領」と「旧約時代信仰史大観」を展開した後に「信仰に由て彼も亦」と題して、兄を「信仰の證者」の群に数え、天の萬軍の一員と見て下さった。先生の文に曰く、

「信仰に由て彼も亦」

「ホウソウノウタガヒ、一七ヒツケオヤキクダサイ、ゴヨウハマダマダ」。今年春彼が突然天然痘類の重き病に罹りし時、任地北京より余に寄せたる第一信は之であった。彼は病毒の伝播を氣遣うて、其数日前余宛に発送したる書翰の焼却を要求したのである。而して自己に就ては、主の御用の尚甚だ多きを指摘して、以て信仰的平安を伝えたのである。……。

程なく彼は癒された。我等は深く感謝した。相変らざる激務に当りながら純平たる信と愛と望との生活を続けつつある彼を思ふ事は、我等の大なる福ひであった。然るに八月末再び重き病が彼を犯した。今度は悪性チブスである。彼が北京の病院よりその親しき友に宛てし電報には「ケイカヨシ、クルシミトウタガヒニハクロス（十字架）アフギテ」とあった。母君は東京より馳せつけて看護に力められた。我等はただ心より祈った。併し病は篤かった。母君に向つて彼は曰う

た「母様、僕は早く主に御目にかかりたう御座います。母様どうぞ御許し下さい」と。九月二日、彼は遂に召されて主のもとに往いた。

噫、わが友小池政美。大学を出でて三年に充たざる彼の地上の生涯は余りに短くあった。併し彼も亦古の人の如く信仰に由て神と共に歩んだ。誠に美しき生と死であった。感謝!!（一九二一年十月）

兄は主としてデリッチやゴードーの聖書註解書類（英訳）を手引きに聖書の勉強をしていたが、ゴードーの名著の翻譯に、北京赴任の直前から着手していた。彼が地を去ったあとで、藤井先生は、それを惜しまれて、自費出版を企てて下さった。深い熱い友情である。その『基督の復活』と題する訳書の「序」に次の如く、先生は書かれた。

「基督教は譬えば花である。貴き輪廓と色彩とのほかに、なほ独特の芳香がある。然るに現在ひろく我国に伝はれる米国風の基督教にはその原始の花香が殆ど失せて居る事を私は悼む。近代の聖書学者中私の知れる限りに於て最も基督教らしき香を備えたるものの一人はゴードー先生であった。先生の信仰は單純にして而も深く、火の如く燃えて而も冷静に、預言者の如く大觀的にして而も学者の如く研究的であつた。その多くの著書のうち殊に二、三のものは実に不朽の名著であると信ずる。

小池政美君は稀に見る純なる人格であつた。私が君と識つたのは僅かに君の地上に於ける生涯

の最後の二年間に過ぎない。しかし私に取ってその記憶は永久的である。

君の人格には或る意味に於てイエスの香いがあつた。ガリラヤ湖又は橄欖山の如き背景に適はしきものであつた。君は東京帝国大学法科を卒へし後、大蔵省事務官として北京に駐屯し、此世との悪闘、信仰のための善戦を続けつつ、若くして召されて世を去つた。今より三年前の事である。

本書はその悪闘の中にありて成就せられし君が祈りの結晶である。……」(一九二四年四月)

なおまた、先生の月刊誌『旧約と新約』第四七号の新刊紹介文の中には「訳者小池政美君の如き純なる心の持主を私は多く知りません。君の信仰はゴーデー型でありました。研究を重んじながら、主に対する思慕の情を以て燃えていました。米国風ならぬ日本的基督者の典型として私は君を紹介したくあります。本書は君が劇務の間に此世と闘ひながら成就した貴き信仰生活の産物であります。」と記して下さつた。

*

兄は多読強記の人であつた。兄は日本文を綴るより英文を書く方が達者であつたから、外交官になるかと人々は思つていたと言う。筆はまめで、すらすらと毛筆でよく手紙を書いた。藤井先生のお二階で、ある日先生が私に、「政美君からの手紙がこんなにあるんですよ。」といつて見せてくださった。勿論その時、手紙を読ませてはいただかなかつたが、そのうちに先生御自身が

天国に旅だたれてしまった。同じく今は天上に在る洋君にいつかその手紙をそっくり戴きたいと思っているうちに、空襲のため先生のあの懐かしい家が全焼してしまい、兄の手紙もすっかり天上に煙とたちのぼり、ここに移記すべき一句もない。先生から兄にお書き下さったお手紙が相当あったに相違ないのであるが、兄の病が伝染病であったために、北京の地でその他一切の手紙と共に焼かれましたことは何とも惜しき限りなのである。

*

『旧約と新約』第五十八号、一九二五年四月号に先生は「美しき印象を私に残した人々」と題して四人の友人のことを書かれた。その一が小出義彦兄、その二が舎兄、その三が望月すみ子女士、その四が高島鴻子夫人である。左に兄のくだりの大半を転記することをゆるして戴こう。

「大手町衛生会講堂に内村先生のお手伝ひをしてゐた時分、或る秋の日の集会はてて、講堂前の広小路にまだ散りやらぬ会衆の群に交つて、私も二三の友人と語っていた。その時ひとりの青年紳士が私に近づいて挨拶し、一つの事を私に求めた。それは今後私の自宅集会の出席を承認せん事であつた。初対面ではあつたが、私はその端厳なまなざしに強い印象を受けた。次の土曜の晩から、この君は欠かさず我らの集りに出席した。其年の春に東京帝国大学を卒業して、当時大蔵省に勤務していた小池政美君がその人であつた。

不思議に君は最初から我ら夫妻の信頼を喚び起した……。

翌年の冬になり、君は支那駐在財務官附としてかの地に転任した。私は始めに気付かなかったが、君をかやうな土地のかやうな社会に遣る事は、たとえば羊を狼の中へ入れるやうなものであった。そこには肉の慾眼の慾、所有の誇にみちた、而も内地には見られぬ程荒んだ心の人たちが、恥づる事を知らぬ浅ましい日々を送ってゐた。「僕の想像し得る悪という悪が、又罪という罪が、此所には最も簡単に手軽に、又個人的利害関係から来る非難を除いては、社会的には無非難に行はれて居ります」「……選びに選んでどうしてこんな所に神様は僕を投げ込んで下さったのかと思いますと……僕だけは何卒とお祈り致して居ります。」勿論君ひとりを陥れようとする誘惑の網も多く張られた。

さういう中であつて、君は雄々しくもイエスと共に歩んだ。小児のような信頼深さを以て君はイエスに縋つた。君の祈こそは祈りらしき祈りであつた。「お父様」と呼んで神にせまる時の、虔ましくして親しげなるさまはまことに神の子にふさはしいものであつた。君が我らのために祈ると言ひ送つてくれる時には、我らは真実にその力を感じた。どんなに忙しくとも聖書を読まずに過ごす日は君には一日もなかった。「盧山滞在の日は、昨年東京を立ちます日に第二十三を読みました詩が丁度第二百二十一になりました。」「一昨日からゴーデーに就いて羅馬書に入りました。」その外になほ君は「夜昼の区別もなく殺倒して来る世の仕事」の間に、苦心してゴーデーの名著の翻譯をつづけた。その原稿には各篇の稿が終るごとに、簡単な併し意味ふかい感謝の言

葉が添へられてあつた。学者が書齋に筆を執るとはちがつて、多くの犠牲の払はれた貴い労作の果であつた。かくて異境の穢れた日本人社会に少くとも一人の靈魂のみは潔く保たれた。

君がかの地で重い熱病にかかった時、私の見舞にこたへて寄せた電報は次のやうにあつた。

カホトムネコホリズムナレドカレノアイハサラニアツシ それは最初の二人の医者がともに天然痘と誤診した *Dukes disease* とかいふ病氣であつた。顔から胸まで水づめにするほど熱は高くあつた。しかしさういう苦痛の中にあつても「彼の愛は更に熱し」と君はいふ。この言葉を病床から看護婦または友人に口授して居る福いなる君を想像して、我らは喜びに溢れ心から感謝した。

君は或る意味に於て悲哀の人であつた。君の信仰はただ感謝々々と叫んでよろこび躍るやうなたちのものではなかつた。君にはいつも深みがあつた。しかし又深みの中に言いたい豊かさがあつた。君の病氣がまだ十分に癒えず、時々高い熱に苦しんでゐた頃のたよりに、次のやうな一節があつた。

「この間花屋へ行きましたら、いい薔薇がありました、少し僕には贅沢と考えながら、ほしさに取つて参りましたものが、十ほど花を開いて二間程かなたから床しい香を送ってくれます、まだ五十ほどの薔が、病氣が長びいても平氣だとばかり申します。」

君の人格を背景にして之を読んだ時に、私は何となくナルドの香油をイエスの足にぬつてその

香りを家に満たしたマリヤを聯想した。勿論此の場合に於ける君の薔薇に特別の意味があるからではない。両者の人格そのものに似かよふふしがあるからである。

君も亦聖国にあこがる人であった。しかし若し先の小出君の信仰が特に希望の信仰であったとするならば、君のは特に貞潔のそれであったと言ひたい。小出君が今の滔々たる現世主義を踏まへてレバノンの香柏の如く天を指したやうに、君は近代の腐敗しきつた情性を遙かに見下して、曙の明星のごとく輝いた。

君の召された後に、母堂と令弟とは遂にイエスをあふぐ生活に入られた。一粒の麦まづ地に落ちて実をむすびつつある事を私は深く感謝する。

〔「曠野の愛」第九、第一〇合併号より〕

三、信仰三十年

(一九五二年十二月)

明くれば一九五三年。この罪びとが入信の恩恵に浴したのが一九二三年、数え年二十歳の青年であったから、はやくもワン・ジェネレーションが経つことになる。貧しき信仰生活三十年であった。心臓の弱い瘦せっぱちな貧弱そのものの私が、よくもこのマラソン競走に耐えて来た。

「永遠の腕」(申三三・二七)が私をひっぱって走らせてくださったからだ。この神に信頼していいよ「新たなる力」を得、「鷲の如く翼を張って」宙を馳せ、「走れども疲れず、歩めども倦まない」者でありたい(イザヤ四〇・三一)。マラソンといっても「憩の水ぎわ」に腰をおろし「緑の牧場」に身を横える。豁川の音に心うるほひ峯の松籟に魂は飛ぶ。人生行路のこの峠かの野辺に路標も立てて来た。「祈りの哲学」(一九三二年)、——「別の路」(一九三七年)、——「荒野の

「愛」(一九三九年)、——「終末の実存者」(一九四九)、——「無教会神学論」(一九五〇年始)、——「預言者の歴史観、終末観」(一九五〇年末)、——「三位一体の神」(一九五一年始)、——「悲願靈願」(一九五一年末)、——「主の祈り」(一九五二年末)という様なものが、信仰告白乃至神学論説の路標であった。私も一個の自覚的存在として私らしき路を歩んで来た。顧みてもっともつとそうであるべきであつたと思う。併し自覚とは私にとってむしろ他覚、とても申したき消息に進みつつある。即ち他者たるキリストが私の自覚に於ける主体としていよいよ実存的、実質的に内実となつて下さるからである。その方向は既に最初の「祈りの哲学」という拙論から定つていたのであるが。私は無教会が総じて嫌う「神学」的探究とその自覚への顧慮をはらつて来たことに於て、たしかに拙論「別の路」の如く、無教会に於て「別の路」を辿つて来た。併し私は何も異を立てたのではなく、どこまでも福音の真理探究という目的のためにつねに自己を乗り越え、真の批判精神に生きんとし、実存せんと心がけて来たまでである。教会・無教会の問題では幕屋の形態及内実を展開せんと志し、「砕け」に於て福音の逆転的生命の根源的把握の鍵を見出して、これを基礎概念として神学的展開を唱道し、また無教会に於て聖霊の神学的把握の不備と実存的体験の希薄を感じていた頃、偶々その方面の先覚手島郁郎氏に遇つたことは私の原始基督教把握に光明を投じた。然るに基督教界は同氏に蹟くか、同氏を無視して同氏に於ける福音の原始基督教的スペルマタを、カリスマタを、見そこなっているのは情なきことであ

る。神は二十世紀の半にあたり、無教会史上に新しき血路を、聖霊の恩寵の新しき開示を以て拓き給いつつあると私は信ずる。キリストの現霊がかくも瞭かに示し給う血路を通して私も亦、憚なく進まんとおもう。それは私も聖霊を受けた限り、その根源的現実を歩まざるを得ないのである。私は自ら開示せしめられた幕屋の展開の途上、幕屋の祈りに於て聖霊の灯が斯くて点ぜしめらるるに至った摂理を深く感謝している。私はこの不滅の霊燈を掲げつつ、幕屋の旅を地路果つるまで続けるのはかはない。かくて私は所謂教会・無教会の接線上に軌道を描きつつ進むであらう。それは私の特殊性、独自性であると共にキリストの幕屋（エクレシヤ）に具体的に参ずる私らしき路である。私は動的な在り方に於て無教会の流れにあることは言うまでもないが、単なる相対的な教会、無教会は、私にとって本質的意義を有たず、むしろあらゆる集会的存在は（教会無教会を問わず）、おのが欠陥を深く知り、その欠陥の那邊にあるかを自覚して、（教会に於てはその職制を霊的に支配してゆくこと、無教会に於いてはその観念化を破ってみ霊の具体性に転じてゆくこと）その特殊性の底に聖霊の泉を掘りあて、この地下水を以って偉大なる全エクレシヤにつらなることこそ最も緊要なことがらである。我らの幕屋的自覚は正にそこにある。独自でありながら、その独自性の底では偉大なる普遍に、観念的にはなく、具体的につらなっているのである。その意味で私はおのが立場も主義もない。ただ福音という大地下水を生命の源流としているだけで、しかもこの源流を吸いあげる動力体が聖霊であるわけで、これは他の何ものを以

ても代用のきかぬ、ごまかしのきかぬ動力である。此のような自覚と在り方がどうして福音的でないであろうか。パリサイ的な方面から何と申されようともやむを得ざるなりである。預言者や使徒らの霊統を継ぐものであり、そして誰より主イエスが「然り」と言つて下さるならば、私は人の評言を意に介しない。「真理のよろこぶところを喜び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐えて」、ゆく聖霊に由る愛はエクレシヤのどん底を荷うであろう。私は斯の路を往くの何の不安もない。パウロと共にキリストの生命の歓喜の中にある。

「御霊によりて神の御住」とされる他覚（エペソニ・一九―二二）、「キリストと共に神の中に隠れ在る」いのちのみが意識の根源界であるような他覚（コロサイ三・一―四）、幕屋という実存共同体がキリストの体たることを実感するような他覚（コリ前一二・一二―三一、ローマ一二・四―一五）、「われ最早生くるに非ず、キリストわが衷にありて生き給うなり」という生の他覚（ガラ二・二〇）。われはつねに碎かれ、乗り越えらるべき瓦礫にすぎずとの自覚である。

〔「曠野の愛」第十八号、一九五二年十二月号〕

四、人生五十年

(一九五四年二月)

この筆を執っていると小学校四年生の末っ子、照雄（イザヤ六〇・二）が書斎に飛び込んで来て、横から見出しを読んで、「人生五十年だってよ！ 夢幻ゆめまろしの如し！」といって私の顔を見て破顔一笑した。父もこれに应じて何々大笑する。「どこでそんな文句をおぼえたかい」。「……へへへえ！」。時代小説を読んでのことにちがいない。続いて上の男の児が入って来たので、こんどはこちらから問うてみた。するとこの中学二年生信雄（ロマ書一・一七）、吉川英治の愛読者は、言下に自分の小室から『新書太閤記』第二卷藤吉郎篇下を取り出して来て、その二九〇頁を開いて見せた。

「人間五十年

化転のうちを較ぶれば

夢まほろしの如くなり

ひと度、生をうけて

滅せぬもののあるべきか」

信長自身、五十年を一期として本能寺の火災と化した。戦国時代の華と散った。丁度信雄の年輩の頃、自分も『血戦記』という戦国時代の戦争物語を血を湧かせ肉を躍らして読んだ昔を想い起こす。この謡の文句を今、読んで、昔がほのぼのと甦ってくる。と同時に、過去は現実となる。『ファウスト』の句を思い出した。

„Und was verschwand, wird mir zu Wirklichkeiten.“

「消えにしもの、我に現実とぞなる。」

大雪の降ったあとの一月末の寒い晩である。がらくたを斬って作った薪をストーブにくべる。何でも自分で作ったものには味がある。一家が暖炉のまわりに集る。結婚二十年、人生五十年とは。仰げばただ感謝、伏せばただ悔懺！

明治三十七年二月七日、日露開戦その前夜の子である。辰年であつたので簡単に辰雄と名づけたい。父は殆んど憶えない。母は女高師の出身で、二十年お茶の水女学校に職を奉じていた。母は十七歳のとき江戸に出て勉強せんと志を立てた。併し両親のお許しが出なかった。そ

こで一夜ついに意を決して家を出た。信州は上田の在、松代の故里から小諸の宿まで辿りついたとき、二人曳きの人力車で追跡して来た追手に追いつかれた。押問答がはじまる。「どうしても帰れと仰っしゃるなら、私の首をお持ち帰り下さい！」と言い放った。この一言で追手は胸を打たれ、そのままもどって行つた。これは明治十九年頃の出来ごとで、母の想い出ばなしの一端だけである。

今私はここに過去の想い出をつづろうとは思わない。五人の子女を独力で養ひ育て、人生五十三年の頃、長男政美（二十七歳）を北支北京に失い、次男龍二（当時二十三歳）と共に遺骨を抱いて帰る黄海の波路で失明し、爾来三十余年の暗黒の日夜を暮して来た苦難の母に対して、いかにも不幸な我であることを懺悔するのみである。

おのれを顧みて人生マイナス五十年、何のプラスもないこの私、若しキリストを発見しなかつたなら、マイナスがマイナスのまま、夢幻が夢幻のまままで消えるのだが、マイナスがプラスに転ぜられ、夢幻のほかなさがむなしからざる現実に甦らしめられる恩寵のゆえに、私はただ前進しようと思う。

パウロの口調を藉りて申すことをゆるされるならば、「然り、私はわが主キリスト・イエスを知ることの、今までの自分より次元的に質的に優れたるために、キリストのために、凡ての基督教界に誤解されるとも、何ら憚るところはない。これ生けるキリストを得、キリストとその復活の

力とを知り、彼の苦難にあづかり、如何にもして死人の中より甦ることを得んがためである。私は原始基督教を恥としない。いよいよこれを捉えんとして追求する。キリストは私を捉え給うた。私は唯この一事を務める。即ち従来の観念的信仰を乗り越え、靈的成層圏に向って飛翔し、神のキリスト・イエスに在る栄光体を賜らんとて之を追求する。わが国籍も亦天にある。私は主イエス・キリストの救主として其処より来たり給うを鶴首して待つ。彼は万物を己に服わせ得る能力によって、我が卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給うにちがいない。」（ピリピ書第三章参照）。

併しこの追求は、断じておのがためではない。ただキリストを身証せんがためである。「生くるにも死ぬるにもわが身によって、キリストの聖名の崇められ給わんことを切に願う。私にとつて、これより、生くるはキリストである。死ぬるも亦キリストである」（同二二〇、二一参照）。人生五十年、今や前篇の幕となつて、この様な心境と抱負のもとに後篇に突入せんとする。即ち、胸中は空無。ただ無色透明、絶学絶信、靈光透徹を祈るのみである。抱負はキリストの僕。曠野に愛の幕屋を張つて、キリストへ人々を案内し、世の塵芥となるとも神の宝玉と化せられんことに在る（黙示録第二十一章）。栄光聖名に在れ。主よ、この罪びとを聖名のゆえ終りまで棄て給うなかれ。汝の聖意を成し給え！いと小さき僕、汝の聖前に伏して願ひ奉る。

五、五十路の峠

(一九五四年二月)

峠の溪流を、レーテの流れとし、ゴルゴタの血の河として、これに身を浸し、過去の罪禍の一切を洗いおとし、忘れ流してしまった。のみならず、現在及未来の一切の過去の、旧人的なものも贖われて、キリストの白光を浴び、無色透明となり、白熱の燈火となり、生命の真清水となり、金剛不壊の玉と化り、光風となり露月と化した二月七日であつた。

「われ最早生くるに非ず、キリストわが衷に生き給うなり」。信は即ち現である。「わが」信ではない、「汝の」現である。恵みの現である。わが意志でも、実存でもない。汝の聖意と汝の実存の現成である。私はただ世の塵芥となりたい、土の器で終始する。塵芥を、土の器をキリストの栄光の体として下さる御恩寵の霊現を祈りつつ、聖名讃えつつ、栄光をどこまでも聖名に帰し

つつ後篇を進むであらう。

原始福音は私のアルバでありオメガである。今ここで多弁をいたしたくない。それはダンテが天国篇第十曲で申している「原始絶語の力」なる聖霊による福音であるからである。

満五十年の日は生れた日と同じく奇しくも丁度日曜にめぐりあわせたので、特別集会を開いた。この罪びとを主にある兄弟としてゆるし、快く集ってくれた兄弟姉妹と、午前は、イエス伝の終幕に入り、人の子イエスのエルサレム入城のくだりを学んだ。キリストは真向から時のパリサイ宗教、教権宗教、御利益信仰、観念信仰と戦い、「祈の家」を宣揚された。文字通り無花果的な、葉のみの信仰、偽善なる信仰に対するキリストの憤りは無花果の枯死として現われた。現代のキリスト教一般をイエスは何と見られるであらうか。午後は「コロサイ書 of 精神」と題して、コロサイ書の土台となつてゐる雄渾なるキリスト観の中に浸った。無色透明の境地に入り、キリストの白光を浴びた。夕を迎えて幕屋は「祈の幕屋」と化した。聖名が高らかに讃美された。手島郁郎兄を始め多くの兄弟姉妹からの祝電や手紙が舞いこんで来た。マイナス五十年をすごしたこの罪びとに祝電は勿体ない。詠ってくれた幾つかの和歌も勿体ない。それを未来完了に現成すべく祈りを以てお受けした。私の心境は左の如くである。

○うちもとも見る影もなきわれは今五十の峠に伏して祈れり。

○ゴルゴダの血流ながれに浸りて潔きよまれば五十路ぢの峯の風の薫るも。

○キリストの白光ひかりを浴びてわが軀むくろ無色透明光風霽月。

○わが慕う原始の深山みやまを極むべく五十路の峠たけ今ぞ越えゆく。

○使徒たちの原始福音に殉しほずべく心定めたり峠の祈。

六、私の信仰史と現在

(一九六〇年を迎えて)

一九六〇年を迎えるにあたり、私はここに私の信仰史と現在を端的に告白し且つ宣言する。

第一期(大手町時代)。一九二二年の晩秋、内村鑑三先生の著書を亡兄政美(一九二一年秋、北京にて召天)の書架から「とりて読み」始めたのが私の入信の端緒であった。旧制水戸高等学校であった私は、週末上京の折には、丸の内大手町なる私立大日本衛生会講堂の大集会で、内村先生の迫力ある聖書講義を聴くのが何よりの楽しみであった。

第二期(新町時代)。つづく東大ドイツ文学科学生時代と卒業後一年半は、駒沢新町なる藤井武先生の自宅での十数名の寺小屋式集会で親しく聖書を学んだ。先生の召天までのこの五年間は私の信仰に決定的な要素が植えつけられた特別な恩寵の期であった(藤井武全集及選集別巻『藤

井武の面影』所載「恩寵の跡」参照）。

第三期（丸の内時代）。藤井先生去って三年間、私はひとりで日曜をまもったが、その間、塚本・矢内原両先生編集の『藤井武全集』のお手伝をし、特に藤井先生の最終講義たる「黙示録講義」を恩師に対する敬慕と祈りをもってまとめたことは忘れたくない思い出である。その後、丸の内海上ビルにおける塚本虎二先生の聖書講演会に数年列席し、或は司会、或はヘブライ語のクラス担当を承り、塚本・植木編集の『旧約知識』誌同人に加わり、「詩篇」や「ヘブライ語文法」などの執筆をした。塚本先生の弾力性ある信仰とドイツ系学問の織りなす独特の味を学んだことも私のその後の生長に大切な恩恵であった。

第四期（武蔵野独立伝道第一期）。一九四〇年秋、亡兄政美召天記念日（九月二十二日）を期して、私は恩師藤井武先生の場合にならって、武蔵野の自宅で独立の聖書集会を開いた。聖書を大体啓示史的に跡づけつつ研究し、ほぼ十年間で大半を学んだ。神学的な思索も第三期から始めていたが、『別の路』、『終末の実存者』、『無教会神学論』（内村鑑三先生二十周年記念論集の一環）のいわば三部曲となってあらわれた。

第五期（武蔵野独立伝道第二期）。一九五一年一月には本誌『曠野の愛』を創刊した。大体その頃から熊本の手島郁郎氏との交友が始まった。彼は阿蘇山にこもって祈り、独自の路を開示された人である。私はこれより先き自分の無教会的集会を「幕屋」と名づけた。それはキリストの

体としての有機体的、福音的実存共同体たることを表わすにふさわしいことを示されたからである（『無教会神学論』参照）。手島氏もこれに応じて彼の集会を自ら「神の幕屋」と名づけた。手島氏とはしばらく共同の伝道も折にふれてなし、彼から私もほかでは得難いものを感じ、私なりに消化した。しかし数年前から事実上彼との共同はやめた。彼の伝道がいよいよ彼独自の「カリスマ伝道」的であることは、その主筆『生命の光』誌においてあきらかに証言されている通りである。一方私が私らしくキリストの恩寵による「無的実存」（拙著『聖意体现』参照）を基調として展開していることも本誌に明かである。

第六期（武蔵野独立伝道第三期）。今や私は一九六〇年、『曠野の愛』誌第十年を迎えるに際して、手島氏の「神の幕屋」と小池の「キリストの幕屋」とは、同じ「幕屋」の名称を用いてはいても、それぞれの在り方であることを世に明言しておく。（『基督教年鑑』（一九六〇年度）一九五頁の「神の幕屋グループ」中に私の集会が加えられてあるのは事実にあわない）。これはキリスト教界の秩序と平和のために（本誌第三十一号「天賦神品参照」、また主自らが織り成し給う大調和、大共同のために正しいことと示されたからである（本誌第三十一号「福音的完全性」参照）。私は私の使命に即した聖書解説と集会の在り方とをもって伝道にたづさわっている。私はもとより日本キリスト教界のいとも小さき者である。しかしこの芥子種一粒の存在の自由と独立をいよいよ明かに自覚し、且つ宣言する者である。

十字架のイエスの「門は狭く」、復活のキリストの「路は細い」。その昔、藤井先生が「僕
の路はいよいよ細くなってきたが、君たちついて来れるかね」とダンテの『神曲』天国篇第二曲の
一句に似たようなことを言われたのを思い出す。今を去る三十年、一九三〇年に日本は福音と真
理のために戦った二人の世界的人物を相継いで失った。すなわち内村と藤井であった。今年はこの
両雄の三十周年である。私の独立伝道二十周年にもあたり、私個人としては意義深い。私は恩
師の跡を更につき進み路なき路をわけて往く（第二十六号「逆徴の福音」参照）。私もイザヤの
如く「これは路なり、これを歩むべし」との主の聖言がうしろべにささやき給うを聞くからであ
る（イザヤ三〇・二一）。主キリストは現に私の「道そのもの、真理そのもの、生命そのもの」で
ある（ヨハネ一四・六）。主の聖霊に在って前進するところ、無門に天門が開かれ、細き路が大
道であり、絶路に天路が開かれてゆく（本号「終末的帰一」参照）。このようなキリストの恩寵に
よる無的実存、聖意体現を念じつつ、福音を身証すべく私は生涯を貫かんと願う者である。

〔「曠野の愛」第三二号、一九六〇（昭和三五）年早春号〕

七、塵芥伝道二十年

——コリント前書 四・九——一三

(一九六〇年晩秋)

「人生の旅路なかば」を過ぎた翌年、この武蔵野の一角に小さな福音集会を開いた。丁度二十年前の今日、一九四〇年九月二十二日、長兄政美召天記念日を期してのことであつた。その最も個人的な意味は、失明の母をなぐさめるためであつた。(拙誌第二十七号参照)

相変らず公務のかたわらの家庭集会的ハウス・グループなものである。伝道などというほどのものではない。四十七士ではないが、この頃は大方それくらいの同志が来会している。会員といっても自由なものであるが、皆責任は自覚してもらっている。この頃は未だかつてない和氣が漲っている。エペソ書四・二―六の精神が貫いているからであらう。

私は無教会出身であるが、十余年前に「幕屋」という名称を集会につけた。その後、特に「キ

リストの幕屋」と称している。この日曜集会を何百回かさねてきたか、数えてはいない。一回一回が非連続の連続である。一回といえどもおざなりな集会をしたことはない。会員が私の悲願にそわず、人間的なことを問題にしてゴタゴタしたりしたときに、集会解散を宣言したことは三回ほどある。そういう断層は却て会のためによき前進となった。

講筵内容は、聖書を主題としていること勿論である。前半の十年は主として旧約聖書を啓示的に学び、後半の十年は主として新約聖書を学んだ。(第三二号「私の信仰史と現在」参照)。

伝道旅行としては、主として後半の十年間に、熊本、小川、阿蘇高原、飯塚、福岡、八幡、別府、土佐加茂、高知、神戸、岸和田、京都、大井、中津川、木曾福島、岡谷、蓼の湖、清里、小海、海瀬、中込、臼田、春日、望月、長野、須坂、篠ノ井、屋代、小諸、浅間高原、菱野、御代田、沓掛、松井田、高崎、水戸、大洗、瓜連、近津、須賀川、那珂湊、仙台、塩釜、佐沼、瀬峯、与野、静岡、大磯、平塚、横浜、千葉、市川、伊香保、東京近在では青梅、清瀬、飯能、上石原等の地点を訪ねて集会をもった。一つ一つの地名に無量の想い出がある。それぞれの集会に付随した人々に、主のめぐみ深くあれ！ 今後はおそらくあまり出歩かないことになるう。

二十年間を貫いてこの武蔵野福音集会に列席している人は一人もいない。「われ独りにて酒槽を踏めり」(イザヤ六三・三)との聖句になぐさめられる。会員が幕屋的展開をして、私ひとりが残るなら、それも結構なことである。そうなったら柱にかかっている達磨に私の腸を断つほどの

福音を語ろうか。達磨がなおも黙っているなら。

この集会に出入りした顔ぶれは変転また変転した。私自身が使^レ徒^ク的^ニ信仰へと劇的な展開をしたために生じた波紋のためでもあろう。生きた信仰には定形はない。ただ限りなく深められてゆくことを念じている。しかも信仰は「幼児の如く」素朴単純であることにおいて不変である。現象面は大自然の如く自由でありたい。聖霊に在る生ける信仰にはそういう自由がある。誰よりも主イエスがその体现者であられた。

この集会から去っていった人々の大方の者は、或は他集会の学問的聖書研究に、或は宗教的音楽礼拝に、或は教會的雰囲気^ニに、或は靈驗あらたかな賜^{カリスマ}に、或はこの世のさまざまなものに、心ひかれて去っていった。どうみてもみじめな私だから、去りゆく人々をつゆうらまない。ねたみもしない。夫々ごもつともである。稀に立ち帰ってくる人がある。碎けた魂でもどってくるとルカ伝十五章の如く、私はよろこんで迎える。そして共に十字架のキリストを仰いで感謝する。

ロゴス、受肉、十字架、復活、聖霊、再臨の全キリスト！彼でなければ生きていられないたましいは、この無門の集会に来て失望しないと私は信じている。無門は大門であり狭門である。

キリストのほか、この塵芥の如き私そのものに何も期待しない兄弟姉妹なら、必ず私と万難を共にして、「キリストの幕屋」を張ってはたたみ、たたんでは荷い、荷っては張って、この現世の曠野に、愛の天国を体现しつつ聖国への旅路を楽しくつづけてくれるであろう。そしてこんな塵

芥的、縷縷的存在の中に、罪びとの腸の中に、この世の何ものも比較を絶する天来のあるもの、十字架のすがたの聖霊が宿っているのを知って（ロマ書八・九）、共に聖名を讃えてくれよう。しかも同じ恩寵を身証せんと志を兄弟姉妹が起してくれることこそ私の歓喜である。

私自身は死に至るまで唯だ一介の贖われたる罪びとである。「世」として世よりもひどくキリスト教界が私を「塵芥」としても何ら悔いはない。全世界といえども一步も退かない。身はこれ賜わりたる磁鉄、同じく賜わりたる信仰の磁針が指し示すは天の磁極キリスト、「世の罪を負う神の羔」。これが私の二十年の惨憺たる伝道の悲願のすがた、旦つキリストの御本願に応えんとする私の生涯の霊願である。コリント前書四章九—一三節の心をもって聖名の身証をしたいものである。

八、曠野四十年

(一九六一年晩秋)

九月二十二日、これは私が生涯忘れることのできない日である。長兄政美が召された日であった、満四十年前。彼の死を通して私に信仰の活路が開かれたからである。彼は私にとり、まことの生命の恩人なのである。彼なくして今日の私を考えることはできない。どんなに現実の私はとるに足らぬ、そしてみじめな者であろうとも、私の中に燃えている天来の火、私の中に湧きでる天来の泉を私は地上の何ものとも替えることができない。

あのなつかしい小石川同心時代(一九一六―二一年、大正五年―十年)の彼の生活ぶり、彼の日記と彼の遺してくれた内村鑑三先生の著書、それらのものが路しるべとなって、私をホレブの山へ伴れていって天来の火を見せてくれた(出エジプト第三章)。私をエリムの野にともなつて

不尽の泉をのませてくれた（出エジプト第十五章）。

聖書の語るところによれば、モーセは四十年間その群をねんごろに導いて彼の性根を尽し、ついにピスガの山頂で天界にうつされた。約束の地カナンを望見して彼もさぞかしヨルダンを渡りたかつたろうが、彼は民の罪過を一身に荷って訣別しなければならなかった。実存の神はモーセへの約束を果すべく、ヨシュアを立てて聖力を与えなされた（ヨシュア一・五一六）。

四十年！ 私の生涯にとつても波瀾少なからざるものであった。母は長兄の死後間もなく失明、次兄竜二は長兄のバトンを継いで一身に一家の重荷を負ってくれた。私はエリシヤの如く分霊にあづかつて曠野の旅を辿りはじめた。その旅路については既に多少書きもしたからここには語らない（特に『曠野の愛』第三十二号—第三十五号参照）。兄の召天の日を記念して一九四〇年に開始された日曜集会は今秋第二十一周年を迎え、武蔵野幕屋は歓ばしくその日を特別集会をもって迎えてくれている。私はひとりドイツでこれを今憶えている。

焦点はベルリン問題にむすばれ、地球の上空にはあやしげな爆雲が妖影を投げている昨今である。二十世紀後半の運命は、人類が真の人間愛に立ち帰り得るか否かにかかっている。問題は政治ではない。人間そのものである！ 我らは烈々たる聖霊を胸に宿し、終末的な愛に燃やされて、サマリヤ人の如く敵を荷いたいものである。



著者，1961年晩夏ハンブルグのアウセン・アルスター湖畔にて
(ハンブルクの大学日本学交換教授)



第8回夏期福音特別集会(1961.8.11-13)
箱根芦ノ湖畔にて，武蔵野幕屋集会員

九、還暦を迎えて

(一九六四年二月七日)

還暦といってもこの頃の男の平均年齢より若いから、昔の人が還暦をもって隠居の年と考えたのは趣きが違う。

今を去る六十年といえは甲辰明治三十七年、日露戦争の年で、宣戦布告の前夜、本郷弥生ヶ丘に私は生まれた。その内村鑑三先生の誕生の地でもあった。不思議な縁であるとも思われる。幼年時代は千駄ヶ谷で暮したが、その頃は全く田園情緒豊かなものであった。小学時代は小石川林町で暮したが暮正月のタコあげやカルタの楽しい賑わいは今でもほのぼのとしたあたたかみをもって想い出される。もり、かけ二銭、電車片道三銭、往復五銭といった時代である。あかりはランプ、なつかしい風情であった。それがガス灯に変わった時は、あかるい便利なものができたもの

だと驚きよろこんだ。ガス灯時代は一、二年だったと思われる。それが電灯に変わったら、これこそ新時代の到来! と思った。祝祭日に花電車、特に電灯のイルミネーションに輝く「夜の花電車」はきれいだ! といって大人も子供も騒いだものであった。

中学時代は小石川同心町で暮らした大正六年の初秋、大暴風が襲って多くの立木が根こそぎにされた。電柱も傾いたり折れたりした。あんな大暴風雨はその後東京には一、二回だったろう。

それから幾年、かくて私の人生に嵐が来た。殆ど父を知らない私にとって、父とも頼っていた長兄Mが北京で悪性チフスに倒れた。その遺骨をたずさえて帰路に着いた母が黄海海上で緑内障で失明した二重の悲嘆の中で受験勉強をしなければならなかった。旧制水戸高校に入学はしたが、初夏に腸カタルで入院騒ぎとなった。一ヶ月余りで退院したものの体力は消耗していたので休学となった。

この休学中に、長兄Mの書架からふと取りあげて読んだのが内村鑑三著「宗教と現世」。こうして、食わず嫌いであつたキリスト教へ脚を踏み入れた。以来四十年、私は人生の苦境の中で見つけたこの路が間違っていなかったことを告白する。白線高校と大学時代にキリスト教の古典的著作に親しんだ。東大独文科を卒業すると直ちに、昭和医大の前身昭和医専の独乙語の教授陣に加わった。第一回卒業生から今日までほとんど連続的に昭和医専、医大学生と独乙語の授業を通して親しんで来た。おもえばもう三十五年にもなる。

一外国語を学ぶということは、当該外国語と関係のある自分の学的研究に役立てるためであることはもちろんであらうが、その他に、その国民文化の心臓に触れようとするものでなかったら味気なきことである。学校の授業は序の口である。

どうか諸君がその国民のハートの鼓動を聴くにはその言語に親しむに如かず、ということを含めとして生涯読書をされるように。特に一流の文学書に親しむがよい。また音楽と関係のある詩歌に親しむがよい。さて、芸術作品を樹花に譬えれば、その樹の根は宗教である西欧文化を理解するためには、旧新約聖書を読むことを絶対必要とする。聖書は史劇ともいうべき劇的な書である。人間界の光闇の一切が文書の中に展開して、光が闇を貫き且つ光の世界に化せんとするドラマである。それゆえ、生命的な歓喜と力の書である。

私は還暦を迎えて、人生の前篇を終わったから、後篇はいよいよ以てキリストの福音の伝道を第一として生き貫きたいと思っている。もしこの歓喜と力の偉大な宗教を、医道を志す諸君が身に体するならば医道及び医学への創造的な何ものかを体得するであらう。偉大な宗教は一切の文化活動の源泉であると私は信ずる。

一〇、二升八升

(一九六四年五月)

昔は還暦を迎えれば隠居ということであつたらしい。今は男の平均年令が七十歳であるから還暦といつても何もめずらしいわけではない。ただ私にとってはこれは意味浅からぬ一転期なのである。私の誕生は明治三十七年二月七日、日露開戦その前夜というのであるから、日本国中の人々が非常な緊張に包まれていた期であつたにちがいない。それで私は正に戦の子である。「生くるは戦うことである」という言葉があるが、そのように運命づけられたのであろうか。ところがこの私は元来一向戦斗的な人間ではない。兄弟姉妹五人の中で私は一番の弱虫であつた。九歳で天界へ往ってしまった愛子という妹がいたが、彼女は夜、真闇な二階の室に何かものをとりに行くことが出来たのに、私は臆病でそれが出来なかつた。それで、兄や姉に笑われたことを今でもお

ばえている。今でも私のたましいの一角に臆病虫が残存しているようだ。ただ昔とちがうのは臆病虫がいてもそれを問題としない驚くべき大胆虫が新しく生きていくというのである。

何年前であつたか、大晦日のことであつた。新宿の裏通りを通つたら易者が手相人相の判別をやっていた。面白半分に立ちどまつて一寸聞いていたら、今日は大晦日だから最前列の人たちはただで見てあげると言つた。あいにく最前列にいたものだから、つかまつた。その易者の言うには、「あなたの中には非常に線の細いものと非常に線の太いものとが共存しています。そしてあなたは今大変な職業ちがいをしています。だからあなたは一斗樽の器とすれば、現在はその中の二升しか用いておらず、八升はむだになっています。はやく一斗を十全に用いるようになることとです。（易者はやや声を低めて）失礼ですが、この辺に居られる人たちとはケタちがいな人物です。これが終つたら二階の室に来ていただき、ゆっくりおはなしをしたいと思ひます」と言つた。どうもくすぐったいことになつたと思つたが、招ぜられるまま二階へ行つていろいろはなしをした。私が福音のはなしをしだしたら、後日または非承りたいと言つたが、あとでは訪ねなかつた。

易者の二升八升がどれだけ當っているか知らぬ、がたしかにうなづかれる面がある。今や人生の前篇を終つたから、伝道第一の態勢で後篇に発足する。私は孤軍だが天の万軍が味方である。

一一、靈的な一大突破！

信仰の旅路に於て

（読売新聞の日曜版宗教欄に三回連載一九六六年七月一〇、一七、二四日）

（一）内村鑑三と私

『宗教と現世』　　どういうめぐりあわせか、私は内村先生と同じく本郷弥生ヶ丘に生まれた。幼少のとき父は他界したので、長兄政美を、私は父のように慕った。その兄が一九二一年の秋、北京で日本公使館に在勤中客死した。その遺骨を抱いての帰途、黄海渡航中、船上で母は長年の過労と心痛のため失明した。その翌春、私は旧制水戸高校生となったが、胃腸疾患のため休学のやむなきに至った。あらしにあった難破者のようで私はあった。

一九二二年の晩秋、私は兄の書架から一冊の本をとり出した。「トレ・レゲ」(「とりて読め」)

という声を聞いて聖書をひらいたアウグスティヌスのように、私のとり出したのは内村鑑三の「宗教と現世」という書物であった。この兄が、一高時代から大手町の内村先生の集会に列席し始めてから、著しく変わってきたことに気がついてた。そのことと、現実の自分のよるべなさが発火点となったのであろう。私はこの書に深くうたれ、兄が引いた青鉛筆の傍線に共感をおぼえつつよむことがふしぎにもできた。冒頭のページに“Religion is man's chiefest concern”「宗教は人間の最大の関心事なり」とあったことは、いまだに忘れられない。休学中をさいわい、私は兄ののこしておいてくれた内村鑑三の書物に親しんだ。「基督信徒のなぐさめ」「求安録」「宗教座談」そして、「聖書之研究」誌等。

「山上の垂訓」 体力がやや回復したので、一九二三年二月二十五日、丸ノ内大手町なる大日本私立衛生会講堂で開かれている内村先生の聖書講義をききにいった。その日の印象が妙に焼きつけられてある。私は中央に近いあたりの席についたが、会場には続々と来会者が集まってくる。やがて階上まで満堂となるには驚いた。壇上には大きなはり紙が二枚たれさがっていて、それには山上の垂訓のはじめの二句が墨書してあった。

「福なり、心の貧しき者は、天国は其人の有なれば也」「福なり、哀しむ者は、其人は安慰を得べければ也」とあった。

講演内容がどのようなか、今思い起こすことはできないが、すでに先生の書に親んでい
たから、先生の生きた言々句々を全身をもって受けとめることが出来たようである。そのときう
たわれた讃美歌の一つに、あのチャールス・ウェスレーの有名な「Jesus, lover of my soul」わ
が魂を愛するイエスよ」があったが、私の心をそのまま歌ってくれているこの歌は、涙にかす
んで、しばしば声が出なかった。この歌は今も愛誦歌の一つである。

内村鑑三全集（岩波版）第十七巻の、この日の先生の日記をひもといてみたら「今日は馬太伝
五章三節四節を講じ、自分ながらに有難た涙に咽んだ。イエスの御言葉の意味の深きに今更なが
らに驚いた」としるされてある。内村先生と私のつらなりはこの日にあり、この句にあるといっ
て過言でない。

藤井武 私はその後も幾回となく先生の大集会に列席はしたが、高校時代は病弱であったので
中断されることが多くあった。しかしやがて信仰的な一進展があり、東大にはいつてからは健康
となり、先生の高弟藤井武先生（「羔（こひつじ）の婚姻」という大宗教詩を書いた人）の門下
となって、先生の死に至るまで無欠席でその家庭的な集会に列席した。内村先生によってまかれ
た種子は、この藤井先生によって根をはり、芽をふき出し幹となりつつあった。

塚本虎二 一九三〇年の春、内村先生が召天、夏にはそのあとを追うがごとく藤井先生も召
天。日本は二大人物を失った。その後、内村先生の同じく高弟塚本虎二先生（イエス伝研究の最

高權威者）の丸ノ内における集会に数年列席した。この先生によって、枝がのび、葉がしげり始めた。私は内村、藤井、塚本の三先生に相前後して十数年間師事したことを、生涯感謝しきれないことと思っている。その特質から言えば、予言者と詩人と学者。しかし真骨頂はいずれもまことの日本人、まことの人間、まことのキリストの僕（しもべ）。そのほかに言いようがない。

孤軍万軍 はじめて内村先生の集会につらなつたころの私は十九歳、当時の先生は正に今の私の年輩六十二歳であられた。かの日の先生の日記にさらに次のような漢詩がものされてある。

孤軍健闘三十年 回顧難禁感謝淚

反对何恐惡魔軍 勇進高揚十字旗

一九四〇年九月二十二日、長兄の命日を期して、私もささやかながら独立の集会を開いて、知らぬ間に二十五年が過ぎた。とにかく一回一回を真剣にやってきた。一九五〇年晩秋に、手島郁郎氏と大阿蘇の山腹で深い祈りの集会を開いた。聖書の聖霊の事態に新しい目覚めがこのときになされた。主の御導きをまざまざと感じた。この信仰の途上で、私というみじめな木にも、あるとき不思議な花が咲いた。その花はあの山上の垂訓の起句「幸である、霊の貧しい者。天国はその人のものである」が天来の霊言として私に吹きかかって来たとき、忽然（こつぜん）として咲いたのである。内村先生からはじめてきいたキリストの言が、二十数年後に私に真に化体したとは。信仰の旅路でここに更に次元的飛躍が起こった。それ以来、私も孤軍奮闘を余儀なくされて

いる。しかし天の万軍が味方であることを如実に感じている。けれども私はどのような教派の人々とも、人間としてわけへだてなどを感じていない。贖われたる一介の罪びとに過ぎないからである。

(一九六六・七・一〇)

(二) 霊的人格の欠乏

私の信仰 信仰と申しても、わたしは自分の信仰などというものをもちあわせていない。信仰を何ものかと思うことから突き抜けてしまったのである。信仰がどうである、行為がどうでござるといった反省を百年やってみたところでもうにもならぬ、あてにならぬ自分を知っている。こちら側の何ものもあてにならぬから、ただひたすらキリストだけをあてにするまでである。このキリストが神の現象体として絶大の力であるから、これに圧倒され、彼を信ぜざるを得ない、信受しないではどうにもならぬ、というものがもし私の信仰といってよいなら、それだけが私の信仰である。

キリスト道 私は聖書を教訓の書、修養の書などと思っていない。キリスト教などという言い方がどうも好きになれない。キリストは「私は道である」と言いなされた。だから私はキリスト道と申したい。日本人は本来、道の民である。茶道、華道、書道、画道、剣道、柔道という伝統

があるではないか。芸術にしたところで本当は芸道というべきである。道とは身につける真理をいう。

無門関の序文の頌（じゅ）にいわく、「大道無門、千差道路、透得此関、乾坤独歩」と。大道は無門でありながら実はいたるところ有門であり、路は「各」人が自分の「足」であるところ、に文字が示すように、実存的なのびきならぬ各人各様のものでありながら、天的大道に即する消息を体得すれば、知らぬ間に関門を透得し、宇宙を自由に潤歩（かつぽ）するようなたましいとなる。

聖霊のバプテスマ 「私は門である」といったキリストという門は十字架であつた。これはノックなどで開かれない。体あたりしてぶつたおれたら、実は開かれた門であることに気がつく。そこからは霊光がさしてくる。霊生をもつたこの光は人を生かす愛の生命、聖霊であつた。この光に浴した人は聖霊のバプテスマを受けたわけである。そのとき古き我が砕かれ、突破されて、新生によみがえるのである。自我からの解放がこのようにして来ると、そこに本当の自由がある。乾坤（けんこん）を自在に歩くような境地である。その歓喜をひとにわかたねばいられない気持ち。ちが泉のごとくわいてくる。

不断の自己突破！ 一般にキリスト教界は、このような救いの事態を、ただキリストの十字架の贖罪、復活の生命、聖霊の交わり、信仰義認、聖化といったお題目にしてしまつて観念的理解

に切りかえている場合が多くはないか。「主の祈り」のごときもすっかりお題目化しているではないか。イエスのような天衣無縫の自由人がお題目をとえろなど言うはずがない。内村鑑三の無教会精神はルターの宗教改革をさらに前進し突破せんとするところにある。プロテスタントとは、歴史的にはなるほどカトリックにプロテスタントしたのである。しかし、ルターはカトリックの子であったから、実に自己にプロテスタントしたのである。それゆえ真のプロテスタント精神はつねに新たに自己自身にプロテスタントする精神である。不断に自己を突破してこそ完成へと向かうのである。そのことがその人にとって単なる努力ではなく、何ものかの力による推進であり、歓喜であるとき、その動きは本ものとなる。

聖書が示す大ドラマ　聖書が開示しているものは、神がこの闇の世に光を投じて、この闇の世を光の世界に変質変貌せんとして切りかかっている大ドラマなのである。この活劇の中に身を投げ入れて劇中の人物となって、神に、キリストに呼びかけられ、つかみかけられる態勢で聖書にぶつかる読み方が私にとってはのびきならぬ事態となった。日蓮が「身読」といったのはそんな消息であろう。

からだで折る　聖書には形容詞などはない。文法上の形容詞のことを言っているのではない。聖書が語っている現実、聖書の言もどかしいようなものすごい次元の現実である。キリストがいった言葉も、した行為も、生命であり霊である。これに圧倒され降参するまでは、その現実

におどり込むことはできない。このおどり込みが本当のいのりである。からだで祈る祈りなのである。あたまや口先で祈る祈りは霊界にひびきはしない。何と一般にキリスト教界に祈りが稀薄（きはく）化したことであろう。信仰と祈りは不可離な一如のものであるのに、霊的な信仰、霊的な人格の飢饉である。

聖霊の人 内村先生が日記にこんなことを書いている。「淀橋ホーリネス教会に於て神戸在住ソーントン教師の説教を聞いた。沢山に教えられる所があった。普通の宣教師とは全く異った宣教師である。氏の如き宣教師ならば幾人来てもらっても可い。誠に聖霊の人であつて力ある福音の証明者である」（一九二一・一一・八）。

「一昨日聞きしソーントン教師の説教が心の底に響いて居た。かかる聖霊の人が日本に居る事に神に感謝する。聖霊が降らざれば聖書はいくら教えても駄目である。聖霊の伴はざる聖書知識は聖書道楽と成つてしまふだけである。ひたすら祈る、天より聖霊の火が降り、神が余を以て伝へ給ひし聖言が熱火となりて燃え上らんことを」（同一・一〇）。

万人が無条件に聖霊のバプテスマを 内村先生すらも、「聖霊の人」にぶつかつて大いに感動した。実は日本のキリスト教界に現在もなお聖霊の人物はあかつきの星のごとく少ないようである。このことは何も日本に限らない。ドイツでもそうであることを私は見て来た。多面多角な偉大な内村鑑三の中心は霊的なものであつた。

私たちが慕うべきは、旧約の予言者や新約の使徒たちの次元である、年来、私が使徒的信仰への復帰！を唱道してやまないのは、無教会を不断に突破すべきであることを念願しているからである。ことに福音に関する限り、万人が無条件に最高最深の信仰の現実にはいれるのである。それは聖霊を宿すことによって！

(一九六六・七・一七)

(三) 福音の日本的展開

万人は本来宗教人である この間、数人の者と奥日光湯元へ散策を試みた。陽光にかがよう中禅寺湖畔を過ぎ、男体山をまのあたり仰ぎみる戦場ヶ原に出た。戦場ヶ原といえば、すぐ思い出されるのは、内村先生の「戦場ヶ原に友人と語る」の一文である。これも青年時代に読んだのであるが、先生が万人救済を念願している深いハートの文章である。「世に救はれない人が一人でもあるとするならば、其人は余自身である。余は罪人の首（かしら）である。……万人救済は余一人の救済のために必要である」と。

現代は平板な横の意識ばかり伸びて、縦の意識が浅薄になっている。この間他界した世界的な宗教哲学者パウル・ティリヒが「失われた次元」という本を書いて、現代がいかに「深みの次元」を失っているかを痛嘆している。宗教（レリギオ）はもと「再結合」を意味する。これは言うま

でもなく縦の結合、絶対者とのたましいの結びつきが切れているのを再び結合しなおすことである。たましいがある限り、万人は本来宗教人なのである。

「凡てのものの上に超在し、凡てのものを貫き、凡てのものに内在する」とパウロが言ったこの神、あるいは絶対者に対してわれわれ一人一人はたましいの結びつきをもたねばどうにもならぬではないか。日本人は日本人らしく、この縦の絶対次元への突入をしたらいい。

無の実存 私にとっては、あるときから「無」がのびきならぬものとなって来た。それはキリストこそ無であることに気がついたからである。「私は何もできない」無為、無能者であると彼は明言した（ヨハネ福音書五・三〇）。また「私は自分では教えることができない」（ヨハネ七・一六）、「私は自分では何も言えない」（ヨハネ一四・二四）、無教、無言者であると言った、などという例が聖書には多い。

この無者とは、虚無者ではなく、無私の者の意である。それゆえ、イエスのような霊的実存を、私は無の実存と申している。無という漢字が、実は天蓋（てんがい）の下に廿と廿の林を意味する構成の文字で、無数の木があることを意味していることを、あるとき知って私は驚いた。すなわち無の字が実は無数、無量を意味していたからである。

宗教的大革命を もうこの辺で、キリスト教界も、鈴木大拙先生の言われるように「日本的靈性」を自覚して、西洋流の分析総合といった思惟方式ではなく、現代風潮の雑音のなかに消え去

つてしまった大和の言霊を呼びおこして、靈的に体認体得する道を行くべきではないか。キリストの福音は元來そのような把握を待っている。そのことについても内村鑑三はその「晩春の黙考」なる感想の中で預言的洞察をもって語っている。

「余輩はひそかに思ふ、最後に召されつつあるところの日本国が、つひに人類の最も要求するところの、純粹に最も近きキリスト教を世界に供する位置に立つものではあるまいかと。……親鸞、日蓮、蓮如のやうな高僧となつて開きし大和魂は、ルーテル、ウェスレー、ビーチャーにまさるの大宗教家を出すに適するの精神ではあるまいか。神と人類とは日本人より宗教的大革命を待ちつつあるのではあるまいか」。

単なる主義や信条や教派を言い張つて争うときはもう過ぎた。キリストの福音は頑固な戒律的ユダヤ教を突破した宇宙的な靈の宗教である。大和魂は大和（たいわ）と書くが、いま全世界に大和をもたらそうとするなら、日本人はどうしてもここに靈的な一大突破をしなければならぬ。聖徳太子から始まる仏教界の偉大な祖師たちの靈的次元をいたずらに雲のかなたのことにしたのでは申しわけない。

道は近きにある 万人がそのような次元を呼吸しうる道は実は近きにある。私のごとき者も、それをかの「幸である、靈の貧者」の一句において身につけた。イエスは実は「垂訓」よりむしろこの言を告白として言われたわけである。彼は靈の貧しい無者であつたから、「天国」すなわ

ち彼にとっては「神」が彼と一つになった（ヨハネ一〇・三〇）。イエスは父のふところにすわっているような人である。私は仕方がないから、贖罪の力ある十字架という門を通してキリストの中におどり込んだ。そこは聖霊のキリストのふところ、あの句はこう響いて来た、「幸だ、おまえ、私の十字架で霊の無者とされた者よ！ 聖霊の私がおまえの内に宿ったぞ」と。この一句が化体したら、聖書の文字がもう単なる意味の文字でなくなった。「わが言は霊である、生命である」とキリストの言われる通りとなって来たのである。

（一九六六・七・二四）

一一、キリスト道

(一九六七年一月七日)

凧と追羽子 この頃の都会の正月は何か味気がなくなってきた。やはり私は明治大正のころのあの正月気分というものの郷愁的なものをもっているらしい。「唸り」を發し、細い麻繩の尾を風になびかせて勇ましく都の空に游戈していた「赤竜」の凧の緒はすでに絶えて、今は見るよしもない。豪華な飾物としての羽子板はあっても、手輕に突いてうち興ずる追羽子の風情はほとんど見られそうにもない。ときには火花が散るほどに打ちあった独楽遊びも今の少年は知らないようである。

百人一首 夜ともなれば、昔はそこそこで「かるた会」の賑わいが垣根越しに聞こえてきたものであった。

世の中よ道こそなけれ思ひ入る

山の奥にも鹿ぞ鳴くなる。

大江山いくのの道の遠ければ

まだふみもみず天の橋立。

天津風雲の通ひ路吹きとぢよ

乙女の姿しばしとどめむ。

由良の渡をわたる舟人かちを絶え

ゆくへも知らぬ恋のみちかな。

住の江の岸による浪よるさへや

夢の通ひ路人めよくらむ。

これらは私の「おとくい」の歌というわけではない。百首の中で「みち」に因んだ歌をひろって見たら、この五首がみつかったというわけである。

「世の中よ」は百人一首の編者定家の父俊成の歌であるが、平安の末期、世の中に道らしい道がないので、深山へ遁避してみたが、山の中では鹿が牝鹿をよんでいるのか子をさがしているのか、鳴いている。自分も妻子を思わざるを得なくなる、といった心境であろう。「大江山」は母（和泉式部）の居られる丹波への道は遠くて往きがたいですが、まだ踏んでもみない天の橋立を

見たい、母からの文（ふみ）が待たれる、といった小式部内侍の歌。「天津風」は五節の舞姫のすがたに魅せられて詠んだ僧正遍昭の有名な歌。「由良の渡を」は曾弥好忠がうたった果てしも知らぬ恋の路。「住の江の」は、三十六歌仙の一人でもあり、書道の達人でもあった敏行朝臣の歌で、やる瀬ない恋を夢路に托したものである。

奇しき路 旧約の箴言に、面白い「みち」の言がある。

「わが奇しとするもの三つあり、否四つあり、共にわが識らざるものなり。即ち空に飛ぶ鷲の路、磐の上に這う蛇の路、海に走る舟の路、男の女にあうの路これなり」（箴言三〇・一八・一九）。

ここで注目したいのは、「世の中よ道こそなけれ」の「みち」は道と書かれ、人の在るべき「道」を示す、「大江山いくのの道」も人々がそこを通過してゆく公の道である。その他の場合は各個人、個体によって夫々である路をいう。路は「各」人の「足」であるく細みちが本来の意味であらう。道は、天道、公道、人道といわれる如く、万人共通の「みち」である。

老子 老子の「大道廃れて仁義あり」は、驚くべき大乘的な言である。天下に大道が行われれば、特に仁とか義とかいう美德が云々される必要がないのに、大道がすたれているので、仁や義がことあげされる、という意味である。道徳という言葉も、道あつての徳であつて、道が根本であることを意味すると見てよい。道の人は「無為にして為さざるなし」で、これが老子の真骨頂である。

論語 論語も、一言でいうなら、道を説いている書物であるといったら、最も適切であると思

う。「君子は道を憂えて貧を憂えず、道をはかりて食をはからず」、人の踏み行うべき道が第一義で、生活問題は二の次である、という心の態度は、「まづ神の国と神の義を求めよ、さらばな

くてはならぬものはあたえられる」と言ったイエスの心に通ずるものである。

中庸 また面白いのは中庸の言、「君子の道は闇然として日に章らかに、小人の道は的然として日に亡ぶ」である。即ち、道を体得し、実践している（君子）の道というものは、正体がはっきりしていないが、日に経つにつれて明かになってくるが、誠律的な、小乗的な、イズム（主義、主張）にこだわっている（小人）の道は、なるほどハッキリしているが、本質的なものにふれていないから、日が経つにつれて亡びてしまふ、というのである。

日本人は道の民 とにかく東洋人は、身につける実践的真理を道といった。そういう道を実践的に教えることを「みちびく」（導く）という。「教える」という表現は観念的な面の強い言である。そこで、仏教とかキリスト教とかいう表現は、もともと身につけなければダメな宗教の事態を表現するにはどうもふさわしくないことを、私はかねがね感じていた。だから私は「キリスト教」という表現を好まない。「キリスト道」と申したい。実に今日の日本に最も欠けている重大な事態は道的な自覚の欠如であるからである。日本人は元来、茶道、華道、書道、画道、剣道、弓道、柔道、といった道的に、その道その道を修得伝授して来た民である。社会には社会道

徳があり、学校には師道がある。この「道」を労資何れも、教師も学生も、まず自ら身につけようとしなくて、ただ権利を主張したり、義務をおしつけたり、経済問題を第一として、この「道」をそっちのけにして、互に不当よばわりとなるようなことでは、人間性そのものの破滅に向うばかりである。

我は道なり キリスト・イエスは周知の如く、「われは道なり、真理なり、生命なり」(ヨハネ一四・六)といった。これはイエスという霊的人格が自らを「道」と告白しておられる以上、この道が非常に内容の深い豊かなものであること自明である。イエスのこの言は、彼がいよいよ地を去ろうとする直前に、トマスが「主よ、何処にゆき給うかを知らず」といったのに対して応えた言である。「道」とは、「父なる神からの、また神への」「道」をイエスは意味したのである。そもそもレリギオ(宗教)という言葉は、「再結合」を意味するのであるが、神との再結合の「道」となったのがイエスであった。本来人間は「神の似すがた」を以て、神の子として創造されたのに、その結びを人間の「不従順」によって自ら切ってしまったのが、離説という罪であった。これは創世記の神話的表現を以て表わされた人間の現実を語っている真相である。であるからイエスが「われは(再結合の)道なり」と言ったとき、それは同時に「われは(離説の罪からの)救なり」というのと同じである。キリストの福音は、神との再結合を無条件に可能ならしめる元来の道なのであって、教ではない。教などで人間は救われはしない。教育の根底には宗教がなければ

ばならない。「ボーイズ・ビー・アンビシアス！」を遺言の如く叫んで日本を去ったクラーク先生の魂は福音の火にもえていた。そこに彼の教育の秘訣があった。内村鑑三にその火がともされたのであった。教えは道しるべだが、道そのものではない。神に至る道が与えられなければ、どうにもならない。

われは門なり 天と地をつなぐ道、たとえばヤコブが旅の路傍に眠ったとき、そこに見た夢路にあらわれた天の梯子のようなもので、これこそ「天の橋立」であった。ヤコブはそこを「天の門」と呼んだ（創世記第二十八章）。イエスは正にそのような「梯子」であり、「門」である。だから「われは門なり。凡そ我によって入る者は救わる」（ヨハネ一〇・九）ともいつている。その意味で我らはキリストの門弟である、というとき更に内実がハッキリする。

父子一体 神への「道」であり、天国への「門」であるイエスは更に「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ一四・九）と明言した。これほど端的な言はない。神は人間にとり不可解、不可知、不可測の実在である。しかしその神の現象体がイエスであることを彼自身告白している。それはあたかも日まわり草が、「私を見た人は太陽を見たのです」というようなものだ。事実日まわりは太陽の光熱を浴びてあのように輝かしい黄金色の光線を象徴するような花弁をもっている。ひまわり草をみて、太陽を見る、という人は、事実太陽によって現象しているひまわりを本当に見ている人である。そのように、イエスという驚くべき人物に福音書を通して出会って、こ

れはいわゆる聖人でも君子でも学者でも天才でもない、これはいかなる範疇にも入らぬ人だ。正に神の自現体であると見る人は、本当にイエスを見、神を見ている人である。我らはこのイエスに驚嘆し、驚倒し、圧倒され、降参し、平伏し、この人によらねば自分はどうにもならぬ、この人によってどんな自分であっても、無条件に救われると、端的にイエスを体受（これを信仰という）する人は救われる。

聖霊のバプテスマ 八方ふさがりの私にとってイエスは天来の道であった。主の「われは道なり」とは全く真理だ。だから主はまた「われは道なり」であり、また救われてみるとそれは不滅の生命のみなざる事態であった。だから主はまた「われは生命なり」である。彼の全言動がそのような霊的な力をもっている。彼の十字架は完全にこの「我」という罪のかたまりを贖いとしてしまった。彼の復活体は霊的な永遠の生命の実証であり、彼の聖霊は、罪の贖われた私の中に無条件に入って下さる。罪の贖われた私は相変らずの自分であっても、そんなことはもはや問題でない。罪の身このまま贖われているという絶対恩恵を信受しておればこそ、このがらくたの私の中にみ霊が入って来て生命の大変革が内から起りはじめているのである。これを聖霊のバプテスマという。このことが起きなくて何の福音であるか。現代キリスト教界がどれほど聖書の研究においていたれりつくせりの進歩をとげようと、みたまのバプテスマなきところに本ものはない。使徒的信仰に立ち帰れよと私が叫んでやまないのはその故である。

キリスト道 キリストという生きた真理を聖霊を以て身につけることを道という。であるから、

キリスト道と申したい。キリスト教ではない。教会ではない。集ってキリスト道を身につける道場である。これが日本的であると共に、本質的に福音的表現なのである。私はすでに十数年前から「教会」の代りに「幕屋」という表現を聖書の根拠から用いている。その幕屋という集会の場はキリストに即していうならば「道」の場、すなわち道場といってまことに適切であると思う。

伝道 そして私たち自身がこんどはキリストへの道とならねばならない。それが伝道というものである。ヨハネ福音書の「元始に言あり」も昔は「元始に道あり」と訳してあった。一体「キリスト教伝道」という言が実は浮いている。キリスト道伝道が本質的なわけである。伝道者とは、召命を受けた特定の人が伝道者という狭義もあるが、どのキリスト者も本質的に伝道者なのである。

即身即道 即身、即道の人となること、本当の身証である。「汝らはわが証人とならん」(行伝一・八)とはこのことで、それは同節に明言されているように、「聖霊汝らの上にのぞむとき、汝ら能力を受けん」という大前提による。聖霊がうちに宿ることによって、即身即道は実現してゆく。これが伝道の土台である。

聖意体现 「我と父とは一つなり」(ヨハネ一〇・三〇)とイエスは喝破なさった。そのように、この破れ衣の我ながら、みたまに在っては、「主と私とは一つである」ということが本質的に言え

るのである。それは絶対恩恵の下において感謝を以て、み名を讃美する心をもって言えるのである。何か自分の霊的な自信ではない。みたまの事態こそ決して私されてはならない。霊的傲慢におちたら、それはサタンのとなる。イエスはどこまでも神に対して平伏しのたましいであられた。であるからいつも「私の心ではありません。ただあなたの聖意です」といつて自分を提身しておられた。聖意体现とは、そのような平伏しの提身において実現された事態であった。それゆえ我らにおいては、贖罪の十字架の主と復活の主とみ霊の主は三相一貫切っても切れない事態となつて、われらに化体受肉していなければならぬ。このような主にあつてキリストの本願に生きる！そこに我らのキリスト道がある。空間的には天地を貫く道であり、時間的には過去、現在をひっさげて歴史の終末に神の新天地を待望する道である。道そのものは永遠の質をもった現実である。そして各人はのつびきならぬおのれの路を信仰的実存を以て踏ましめられながら、その路がこの道に即する道なのである。

「無礙の一道」とはこのことである。親鸞もはほえんでいるであらう。

(一九六七・一・七)

〔「贖愛新書」第六号、『キリスト道』所載〕

一三、伝道以前

(一九七〇年十月)

第一期(大手町時代) 一九二一年の九月二十二日、父のように私が信頼していた長兄政美が悪性腸チブスに罹って北京で仆れた。母は兄の遺骨。涙ながらに抱いての帰途、黄海々上で多年の過労と悲歎の余り失明してしまった。失明の母と遺骨の兄を迎えた私は、悲痛のどん底につきおとされた。天地晦冥、前途暗澹! しかし受験準備中の私は涙をのんで勉強した。

叔父のもとに母と共に厄介になっていたので、翌春一高を断念して水戸高校に入学した。「極めて優秀な成績で入学」と聞かされ、一高を遠慮したことを残念に思った。そのためか、入学後少々慢心が生じたと見え、食生活にゆるみがでて来て、初夏の頃病気に罹った。急性腸カタルで入院。あやふく死線を越えるところを東京から看病に来てくれたY叔母のおかげで助かったが退

院後、秋から休学。何とも面目なき次第。再び叔父の厄介となる。骨皮筋衛門的になった私ははじめのうちは読書もおぼつかなかったが、次第に回復して読書の気力もでて来たので、なつかしい亡兄の本箱から書籍をとり出して読んだ。その最初の本が内村鑑三先生の『宗教と現世』であった。

「自序」に次の如き文字がある。「宗教は此世の事ではない。彼世の事である。肉の事ではない、霊の事である。人の事ではない、神の事である。……然し此世は宗教に依らずしては立つことのできるものではない。……此世に宗教が絶えて其生命は失するのである。……非戦は宗教の真偽を試めするための唯一の試金石である。……」

本文の中の「青年に告ぐ」の一文は特に私をとらえた。私をキリスト教の世界に導入した第一の恩人はわが長兄政美であり、道標となった文字はこの「青年に告ぐ」であった。

このようにして一九二三年の早春から、内村先生の聖書講義を聴くべく、丸の内大手町なる私立大日本衛生会講堂の大集会に参会し始めた。水高時代は、胃腸の調子が一進一退であったが、ゆるされる限り、大手町の大集会に参加した。これは水高時代の健康状態からくるマイナスを償ってあまりあるプラスであった。亡兄政美の遺稿出版のことで、内村先生の高弟藤井武先生を知ることになったのも奇しき摂理であった。土・日を利用して上京、大手町集會に列席した際、東京水戸間の汽車の中で宗教書を耽読したあの頃の感激がなつかしくも甦ってくる。このようにして

私の大手町時代は、私の水高時代と並行して存続した。

第二期（新町時代） 忘れもしない、一九二六年（大正十五年）三月七日、めづらしく雪の降る

朝、駒沢新町なる藤井武先生の家庭的なまた寺小屋式の小集会に列席した。そして最初の日に先生から『聖書の結婚観』なる真白な装幀の書を署名入りで賜った。その頃司会の任にあった諸先輩の中に佐藤得二氏がある。後に『仏教の日本的展開』や『女のいくさ』等の名著を書いた異色の人である。集会に遅刻は禁物であったが、集会が二階で行われていた頃、同氏はあるとき、おくれて参会。何とかして聴講せんものとザアカイの如く庭前の樹によち登って聴いたという逸話がある。

間もなく我々が司会をうけたまわる時代となった。日曜は朝から夕暮まで新町で暮した。即ち午前には聖書の講義を専らうけたまわった。講義の前に聖句の暗誦があったが私の如きは、聖句をまちがいに暗誦したことはなく、短縮したり、追加したりであった。それがみたまのはたらきであったならよかったけれども。先生の講義は正に「学者の如くならず、權威ある者の如く」であった。それは心に魂に沁み入る深いもので、どの一回といえども満たされないで帰ったことはなかった。その頃録音機があったらと惜しまれてならない。午後はミルトンの『バラダイス・ロスト』（原文）ダンテの『神曲』（ロングフェローの英訳）、そして最後にはカントの『道徳哲学原論』（原文）を一年間、つつ相ついでセミ形式で学んだ。その他にギリシャ語（ハディルストン）

やヘブライ語（グリーン）の手ほどきもしていただいた。これらの午後の勉強会のメンバーは必ずしも固定していなかったが、いつも四、五名を越えることはなかった。

こんなありさまで先生が一九三〇年七月地上を忽然として去られるまで五年間、私はどの会も一回も休むことなく師事した。詳しいことは『藤井武の面影』所載の「恩寵の跡」を参照されたい。（これは本著作集第十巻『随筆集』に載せる予定。）

第三期（丸の内時代） 藤井先生が地を去られたその同じ一九三〇年の春三月、内村鑑三先生が召天された。日本は二大巨星を失ったのである。この二者は真に日本的にして世界的な人物であった。一九三〇年（昭和五年）といえば、私は直ちにこの二大巨星を想う。

その後三年、ひとりで日曜をまもっていたが、その間、塚本虎二、矢内原忠雄両先生の編集による『藤井全集』のお手伝をした。そのために藤井先生の最終講義であった「黙示録講義」三十講を毎晩一講ずつ書いた。三十日で全集の百頁分を書きあげたあのときの感激も忘れがたい。そのとき伊藤順子の比較的簡単ではあるが確かなノートを土台にした。それによってよみがえってくる講義の内容と、毎晩与えられる天来の不思議な霊感的なしめしによって筆が躍進した。敢て言わせていただくなら、あれは先生との合作の如き内実なのである。

藤井先生の『羔の婚姻』の下編「饗宴」の主題が黙示録であるだけに、この講義は歴史的重要性をもっている。然るに『羔の婚姻』が未完に終ったことは極めて残念なことである。

さてその後藤井先生の親友塚本先生の聖書講義を聴講すべく丸の内海上ビルに通うこととなった。数年列席したが、司会もうけたまわり、ヘブライ語のクラス担当も仰せつかり、塚本・植木良佐編集の『旧約知識』誌同人として「詩編」の私訳と解説、「ヘブライ語文典」の執筆等をした。その後塚本・斎藤茂編集の『キリスト教常識』誌には「ルター評伝」を寄稿した。

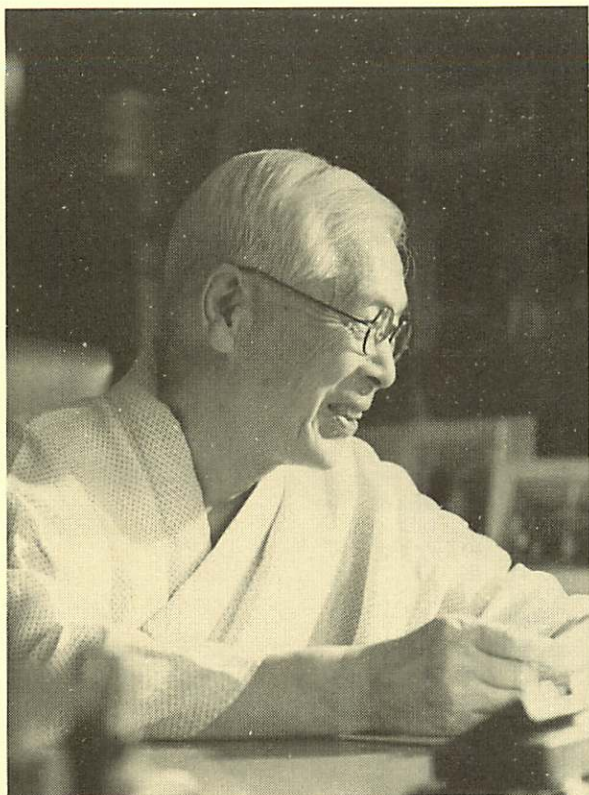
塚本先生の聖書講義は、学者として第一級のものの。特に「イエス伝研究」の緻密さ、信仰的洞察と把握の素晴らしさは天下一品のものではあった。先生の『イエス伝研究』と塚本虎二訳『新約聖書』が世に出づることの早からんことを祈り待つ者である。

無教会の第二期たる畔上賢造・塚本虎二・藤井武・黒崎幸吉・金沢常雄・矢内原忠雄・三谷隆正・江原満里の諸先生の中、今存命しておられるのは塚本先生のみとなった。塚本先生の『聖書知識』誌は藤井先生の『旧約と新約』誌と、その内容その性格において相異すること西と東の如くであるところに興味と重要性がある。塚本先生の随想的文章や思想の味にまた独特なものがある。陳腐なものの一つとしてない。

私はおそらく無教会において、内村鑑三、藤井武、塚本虎二の三先生に相繼いで師事した唯一の者である。内村先生は最も予言者的な魂である。しかもあの三十年間に亘る『聖書の研究』誌が実証する如く予言者的権威と学者的研究心と詩人的行文とを兼備しておられる。藤井先生は日本の詩壇の知らざる宗教詩人である。そして神学的哲学的頭脳を兼有し、体系的、歴史的なもの

の観方、論説的な解明の仕方がその特色である。塚本先生は一流の聖書学者である。しかもその言説は斬新である。

〔「ハレルヤ」第十三号、一九七〇年一〇月〕



櫻新町の書斎に於ける塚本虎二先生

一四、伝道三十年

(一九七〇年一二月)

資料を整えて筆を執ればいいのだが、例の如くどこに何が入っているのかで、見当がつかないから、今のところ到底ドキュメン的な文は書けない。それでざっと顧みるにとどめる。

伝道などと言っても教職に在りながら寺小屋式の集会を日曜ごとに開いたまでのことである。

夏には学校のように休会するのが大方である。厳密には伝道ではない。勝義の伝道とは、一身を伝道に捧げた伝道者のひたむきの宣教のいとなみである。ともあれ、南は九州から北は北海道まで、あちらこちらと伝道した。その他、学校や公会堂や教会等で講演をしたこともかなりの回数にのぼる。清瀬の東療Ⅱ(東京療養所)では十余年も毎月一回、集会をもったが、いつまでもなつかしい。その他、ある神学校で夜学的な講義を担当したこともある。

私の魂の恩人、長兄政美の召天十九周年の日、一九四〇年九月二十二日（日曜）を卜して、寺小屋集会のスタートを切ったのであった。矢内原先生が第一回集會に臨席なされた。無教会の教友たちが幾人か來會してくれた。その中には大川幸平君もいた。彼は第二次大戦中に仆れて本當に惜しいことであつた。今もし彼が在世していたら國際人として、福音の戰士として、平和問題のため貢獻していただであらう。第一回集會だけは四十名ほどであつた。私は羽織・袴の和服すがたであつた。会場はわが家の二室をぶつ通した和室であるにすぎなかつた。

創世記第一章から聖書講話を開始したのであつた。矢内原先生が祝辞の中で「いろいろな点で私より優れている小池君が、独立の集會を開かれたことを心からよろこびます」といわれたが、穴にでも入りたく恐縮千万であつた。

はじめの頃は十数名の參會者であつた。十年間、専ら旧約聖書を、大体啓示史を辿りながら学んだ。

従來の無教会に神学的な要素が欠けていたが、わが恩師藤井武先生が、その晩年「歴史的に跡づけたる聖書神学」なる講義を新町学廬の一環としてなさつたことは正に無教会にとって歴史的なことであつたが、歴史的には実は先生よりも先に、私は高校時代に既に神学研究へのスタートを切つていた。その導火線となつたのは、水戸高校の寮の広間における佐藤繁彦先生のルッター講演である。その頃丸善でホルの名著『ルッター』（独文）を見つけ、當時としては一ヶ月の小

使十円を傾けてこれを購入した。とにかくこれに喰いついたあの当時の感激は忘れられない。その頃また大型のルッター聖書を、これまた偶然にも十一月十日、ルッターの誕生日に買った不思議な冥合も忘れられない。佐藤先生の博士論文『ルッターの根本思想』が私の神学への情熱を更に燃やし、後日、ルッターの『キリスト者の自由』の独文テキストに詳細な註解をつけて南江堂から出版したり、『キリスト教常識』誌上に「ルッター評伝」を寄稿したりしたのも、これが生んだ小さな花である。

藤井先生の七周年記念講演会では、「別の路」と題し、同じく十八周年記念講演会「終末的実存者」と題して語ったのも、信仰の神学的燃焼をもってする表現であった。

さて集会では預言書を歴史的に辿って預言者エレミヤに来て、バビロン捕囚を語っていた頃、私自身、内外多忙のため健康を害し、病気の捕われの身となった。それから解放されて、一九四九年の晩秋、大阿蘇のふところ、垂玉温泉で手島郁郎氏と集会を共にした際、私も従来への祈りの次元から突破した。それは使徒行伝に記されてある如き異言を体験せしめられたからである。この現象を通して天来の聖霊のバプテスマにあづかった。この集会からの帰途、車中で聖書を開いてみると、パウロがこんなにも聖霊のことを語っていたかと驚き、聖書の文字が躍動して胸にひびくではないか。勿論私はそれから幾段階を経て聖霊の事態を次第に深く把握せしめられつゝある。これは地上の生涯の終るまで深められゆくことである。

そのようなわけで、従来のキリスト教界が一般に使徒たちの信仰の次元からずれていることを思うに至り、「福音の原始の相に立ち還れ！」と悲願靈願することとなり、はじめは「原始福音」という表現をもって唱道した。

溯れば一九四二年四月のことである。病床において私は「詩篇」を愛読した。あの曠野の民の幕屋の旅すがたに心を惹かれ、幕屋という名称は、神の民の実存共同体の在り方の象徴として、聖書的に極めてふさわしいことを感じた。そこで自分の集会を「幕屋」と称することした。〔曠愛新書〕第三号『無教会神学論』参照。これに共鳴して手島氏も彼の伝道の全国的展開の諸集会を「幕屋」と呼んでおられる。

聖霊のバプテスマにあづかってから、私の聖書講話はたしかに質がちがって来た。霊的饗宴の如くであるから「講筵」という表現をむしろ用いている。むづかしい講義ではなく、楽しい饗宴である。イエスは「福音」、正に「よろこびのおとづれ」といわれた。また彼自身が「道であり、真理であり、生命」であったから、私は「キリスト道」と呼んでいる。

一九五一年正月から『曠野の愛』というプリント誌（不定期）を出して二十五号で一段落となり、二十六号から活字印刷に替え、三十七号で終刊とした。

東大停年退職に際して、「宗教と文化」と題する最終講義をしたが、私は教職にある限り、文化の根底には高次な宗教がなければならぬことを叫びつけ、学生を覚醒する所存である。現に

独協中・高校の毎週の講話も福音の次元から語っている。

一九六四年の秋から『曠愛新書』という新書版を出版し始めた。大体年刊でゆきたい。第六号『キリスト道』まで来た。

一九五一年頃から、十余年間は、福音書を主題として、これに沈潜し、キリストの生命に深くあづかった。

一九五七年一月十九日、失明生活三十数年を耐えて来た私の母が八十八歳で召天した。その告別式を私は自分でやったが、そのときから録音を始め、私の集会のはなしはすべて録音して来た。十余年の録音であるが、黙示録をのぞいて、新約聖書は全部一応講筵済みである。ここ二年間はイザヤ書を学んだ。詩篇はこの三十年間、折にふれて講じ、これも大体はすんでいる。三十年間を通して、聖書を大方学んだというものである。

使徒的信仰の群があちこちにあるので、それに「キリスト召団」なる共通の名称を冠することにした。「召団」とは藤井武先生が教会論で用いられた「エクレシヤ」の訳語である。それを五童女会という群に冠してまず用いたのは久住進一郎兄である。我々は使徒的信仰への悲願のゆえに、歴史的使命の一環を荷う象徴としてこれを冠することにした。未来に対しては、キリストの新婦としての終末論的「エクレシヤ」の奥義をもっている。

夏ごとに浅間高原を中心として、夏期福音特別集会を開催し、この夏で第十七回を迎えた。場

所は小諸が最も多く、箱根、伊香保、御殿場、清里、鹿沢等で、それぞれ一、二回開いた。

その他、過去二十二年間は、信州方面の教友たちと、過去十年間は、京阪方面の教友たちと、原則として春秋二回、伝道集会をもった。

この夏の鹿沢温泉紅葉館での大集会において、キリストの福音を砕けの場から大乗的に告白し、むさしの集会では旧約の絶頂第二イザヤ書が終り、私はこゝに三十年の伝道に対して一つのブランク（終止符）を打つことにした。

伝道三十年、主の御期待にいかにそい得ない者であったかを顧み、み前に平伏した。主の深き御ゆるしと御あわれみにあづかった。そこで最終的に賜った聖言が「汝ら父の慈悲なるが如く慈悲なれ！」のイエス最深最大の聖言であった。何たる逆徴の恩寵であったか。私はキリストの大慈である。

この三十年間、いろいろな時期に、いろいろな意味で、いろいろな人が集会に来ては去っていった。しかし彼らが、この破れ器、罪びとを通してすら開示したまいし主の福音そのものに打たれ、天来の光を浴びたことも事実であらう。こんな土器は棄てられてよい。この福音をうけた教友たちが、それぞれの分野において福音の花を咲かせ、果をみのらせ、聖名を讀えておられよう。私は平伏して感謝するのみである。

大学を卒業してから四十年、元来言の厳密な意味で私は伝道者ではない。専ら教職経歴を辿っ

て今日に及んでいるからである。しかも私は純然たる学者でもなく、生粋の教育者でもない。何と取柄のない塵芥にひとしい人間なのだろう。たゞこの塵芥の中にかくれている天賦があるとすれば、それが志向している道は詩道なのである。おそまきながら、永年待望の詩道精進に踏み切った。

私の志を助けて今や幕屋の諸会員は、或は聖書講筵の分担に、或は司会の分掌に、或は集会の雑務雑用に、欣然として立ち向ってくれている。武蔵野福音集会は、新体制と若々しい陣容とをもつて新秋と共にスタートを切ったのである。

弦月は神の歴史の大ドラマを直視し冥想しつゝ、黙示録の象徴する新天新地を靈視している。天鐘はこの一つのことのために一切を忍び、身命をうち込む。そのために木石のような人間になるかも知れない。しかしこの木には涙がある。この石には叫びがある。臥薪嘗胆、いつの日か一篇の詩が世界に投ぜられたなら、そのとき山は轟き、海はどよめき、星雲は舞い、銀河は躍るであらう。

世の終末は近い。聖名を畏れ、聖名を讃美する。

ハレルヤ！

「ハレルヤ」第十四号、一九七〇年十二月」

一五、 小池政美召天五十周年

(一九七一年十月)

一九七一年九月二十二日、私は学校を休ませてもらい、家内と孫女智子、朝子の二人を伴れて野尻大学村の山小屋へ行った。この日は長兄政美の正に五十周年の日であったからである。

これよりさき、九月の始めにとりかかった山小屋の書斎が、丁度出来あがって、その室にこの記念日に入れた。

何よりもまず机に向い、端坐し、冥目、言い難き祈りに入った。ロマ書八・二六、
我らいかに祈るべきかを

知らねども

聖霊言い難き呻きをもて

執り成し給う。

この句は兄が北京で一九二一年の復活祭にあたり、真白な上質の布地に英語で書き記し、それを聖書の間にさしはさんでおいたのであったが、それは額に入れられて、以前から集会所に掲げられてある。この句が自然に私の胸にひびいてきた。

窓からは妙高山が大うつしに眺められる。唐松の林の間に、白樺がちらほら点在している。壁に「パトモスのヨハネ」の額を懸けた。天啓にあづかつて、黙示録を書いているヨハネである。時が来たら、ワルトブルグをパトモスと呼んで籠城、聖書翻訳に専念したルターのように、私もこゝをパトモスとして詩作に没頭したいものである。

その小さな新書齋に、私の魂の第一恩人である長兄政美の五十周年記念日に入れたことを神様の深い憐みとして平伏して感謝したのである。

『無者キリスト』の原稿はこの夏の鹿沢集会以来、集会ごとに書き加えている。この日も、武蔵野集会で九月二十六日の記念集会で語らるべき原稿「福音的饗宴」を書いた。

五十年前のこの日「二二ヒマサミシス、ハハ」という北京からの電報を小石川同心町十六番地の住みなれた貸家なる自宅で受けとったときの私——当時中学卒、旧制高校受験準備中——の胸は氣息づまるおもいであった、涙がとめどもなくにじみ出るのであった。兄の遺骨を抱いての帰途、母は年来の過労と悲歎のあまり黄海の船上で失明した。次兄竜二が母の手を引き、兄の遺骨

をかゝえて帰つて来た。それはわが家の悲しみのどん底のすがたであつた。

九月二十六日の記念集会は、午前の部で、大槻太助君が司会。別項「福音的饗宴」を語つた。天界で母も兄もこの終末の饗宴にあつたであらう。大槻君が私の心境を察して切々と語ってくれた。集会所には記念集会の写真が歴史的にたくさん懸っているが「遣れる民」は少ない。この破れ器からあふれる福音の故に、主にある信義信愛を貫いて今日まで飲びも涙も共にしているのが今のガリラヤ会の面々。

午後の部は野中武君が司会。次兄龍二がハミリをたづさえて来てくれ、長兄政美の想い出の写真を歴史的に編集して映写してくれたのはありがたかつた。半世紀以上の昔が昨日のようであつた。

京都から特にこの集会のため来会された奥田昌道兄が舎兄政美について書いた私の文などを引用しつゝ、心をこめて語つてくださった。ありがたい友情である、また最近円現塾を開いた若き友梅村康太郎君も大阪から来会、卒直な告白してくれた。更に片井義二君の真情のこもった感話があつた。私は私の生涯が舎兄政美の弔合戦であることを述べた。

夜の部は高森寛君のあたゝかい司会で祈禱会。ロマ書の後半を私が語りつゝ祈りに入つた。聖歌「いつかは知らねど」を歌つて、終日の記念集会を閉じた。

一六、 弔合戦

(一九七八年四月)

今を去る半世紀以上も昔、一九二一年九月二十二日に長兄政美は、ところは北京の一病院で、悪性腸チフスのため、あたら二十七歳を一期として地上を去った。

彼は、臨終の病床に、キリストが白衣をまとうて現われ給うたのを見て、はるばる朝鮮半島、満州を経て北京へ次兄龍二と看護に赴いた母に、「お母さん、キリストが迎えに来られたので、お先きに失礼いたします。おゆるし下さい。」と告げた由を、あとで母から聞き及んだ。

北京で日本公使館公森財務官によって葬儀が行われたのち、母と次兄は遺骨を抱いて帰途に就いた。その黄海渡航中、多年の過労と長兄急死の心痛のため母は突如失明してしまった。次兄に手をひかれ、遺骨と共に小石川区同心町の家に帰って来た母と兄の遺骨を見て、私は倒れんばかり

りであった。家財道具の大部分の始末をつけて、母と私は叔父の厄介になることになった。私は運命の谷底に突き落とされた。この兄と中学五年間を二階の一室に机を並べて暮したなつかしい同心町の家に別れを告げなければならなかった。

私は正に旧制高校の受験準備中であつた。兄が一高・東大のコースであつたので、私も白線二条に柏葉徽章の一高にあこがれていたから、勉強をした。当時有名な日土講習会という豫備校にも通つた。一浪生活で自信が大いに出来たので、一高を受けたく願書も出した。しかし、若し落ちたら叔父の厄介になっている身として申訳ないのと、もう一つある理由を失明の母に言われて、やむなく水戸高校を受験した。「極めて優秀な成績で御入学なさいました」と水高の然るべきすじから聞き、一高にも入れる成績であつたことを知り、残念で仕方がなかつた。兄の墓前に一高に入りましたと告げたかつたのに、それが出来なくていかにも当時の私には残念で仕方がなかつた。

水高は文乙を志望したのでドイツ語が第一外国語。ドイツ語の教授には、W・グンデルト、小牧、吹田、実吉、相良の諸先生がずらりと揃つていて、一高にも劣らぬ著名な顔ぶれであつたら、その点は幸であつた。

さて長兄政美は小学校三年生の頃から英語を学び、英語の実力は抜群であつたので、本当はロンドンの大使館に赴任するはずであつたのが、急に北京に変更された。それが兄の運の尽きとな

った。人生は何たる不合理にしばしば遭遇することか。兄のロンドン赴任に対して押された運命の横車は、兄を死の谷に落とし、母を暗黒の世界に入れた。将来大いに成すあるべかりし兄は仆れ、母はなお三十八年間の失明生活を送り、米寿を迎えて他界した。

兄弟姉妹六人中、最も蒲柳の質で、弱虫で泣虫の私が次兄と共に却て残され、今年七十四歳を迎えたとは。私の生涯は、この長兄の弔合戦であるのだ。そのことは、水高時代に、内村鑑三先生の東京大手町の日本衛生会館における日曜の聖書講義に出来るだけ通い始めた頃から、自覚してきたところである。

兄の二十代数年の信仰的実存のめざましさが、私の眼と耳に不滅の印象を刻みつつあったが、そういう彼の実存そのものが、彼の死を以て私の魂の中に一粒の麦となって落ちた。それが私の中で根を張り、芽を吹き出したのであった。ここは詳しい想い出を書く場でないから、一切を省略するが、私にとってこの兄は「去る者日に疎し」どころではない。一九二二年の私を以て始まった私の信仰生活は、蹉蛇たるものであったとしても、一点の疑いもなく貫かれてきた。

一九四〇年九月二十二日、兄の命日を期して、独立の聖書集会を開催した。武蔵野の自宅の一室を小会堂に仕立てて、今日まで三十八年間、とにかく原則として日曜日ごとに、聖書講筵を貫いてきた。その他、清瀬の東京療養所に月一回、十年間、信州小諸に年二回くらい二十年間、伝道をした。京都も既に十数年、春秋二回伝道をして今も続けている。特に夏の山間における特別

集会（二泊三日）は強力なものであるが、既に二十四回実行してきた。清瀬、小諸、京都、及び夏の特別集会を通して回心を起した人々は続出している。その他とにかく、九州、四国、中国地方、近畿、中部地方、関東、東北、北海道。それらの伝道の旅の想い出はたくさんある。延べて万余の人々に福音を語ったであらう。

一粒の麦が数百の麦粒となった。その媒介者と私はされたわけである。ただ平伏して聖名を讃え、キリストの聖霊と聖言の力に感謝するのみである。私の如き破れ器を通してでも、神様は不思議なわざをなさる。聖霊は私を通して、使徒行伝におけるペテロ、パウロと同質のわざをなし給う。勿体ないはなしである。私自身は、いよいよキリストの無者になりたい。一切は主であるから、主の中に投身して一如の絶対恩寵の現実を生きて、告白また身証したいばかりである。伝道などといっても、そんな意識も要らない。キリストの本願の中に投身するばかりである。キリストの本願が一切をなし給う。南無キリスト！キリストに帰入、祈入してゆくのみである。以上のようなわけであるから、兄の死は既に決して無駄でなかった。この破れ器の中にキリストの聖霊、聖言が宿って下さって、多くの人々の身心を助け給うたからである。

赤穂義士は主君のために終にあの不滅の弔合戦を果した。私は悲運の兄とその余波を喰って失明した母のために、死に至るまで弔合戦をせざるを得ない。その内容の第一は、具体的伝道によって、或は苦しみ、或は悲しみ、或は病みなどして、助けを求める人の身心を助けてあげたいこ

とである。第二は、著作『小池辰雄著作集』を通して、あまねく未知の人々に、この福音、キリストの使徒たちが身証した霊・言一如のキリストの福音を知らせたいことである。世にはパリサイ的キリスト教、観念的キリスト教が少なからずあるが、キリスト直結の福音を証したのである。第三は、或る詩篇を世界に投じたいことである。私は鈍器であるから晩成を要する。とにかく第一期は一九四〇年の独立聖書集会開始から始まり、第二期は一九五〇年秋の聖霊のバプテスマから始まり、第三期は一九七五年刊行の第一巻『無者キリスト』から始まっている。第四期は、或る詩篇に没頭沈潜の詩作時代となろう。そして第五期はキリストに赦されて、十字架の門をくぐり、聖霊の翼に乗せられて永遠の天界に飛翔させられる期に始まろう。

木喰の袈裟や衣は破れても

まだ本願は破れざりけり

〔今橋淳「活けるキリスト」誌、第一四六号所載〕

一七、たましいの旅路

(一九八二年五月二〇日)

憧憬の旧制一高を受験すべく猛勉強中の秋、当時北京の日本公使館員であつた舎兄政美が疫病に罹つた。急を聞いて母は次男龍二と共に、陸路朝鮮半島、南満を経て北支に入り、北京病院を訪ねたが、程なく臨終となる。政美は白衣のキリストが彼を迎える霊姿に接し、「キリストが迎えに来られたので、お母さん、お先に失礼致します。お赦し下さい！」と言って天界へ旅立ってしまった。一九二一年、二十七歳の秋であつた。

帰路、黄海の船上で母は急に失明した。永年独りで五人の我らを育ててくれた過労と長男の時ならぬ急死による悲歎のためであつた。遺骨を抱いて帰って来た失明の母のすがたは生涯忘れられない。正に「眠られぬ幾夜」であつた。ヒルティの『眠られぬ夜のために』(ドイツ語)を

後年翻訳するに至った悲劇的な因縁を思わざるを得ない。

家財道具を二束三文で売り払い、母と私は叔父の家に寄寓となった。叔父の厄介になって、一高を受けそこなつてはというわけで、一高の受験票までもちながら、水戸高校を受けた。水高は「三番」で入学したから、長兄の如く一高にも入れたはずで、何とも残念千万であった。

水高一年の初夏、腸カタルに罹り、入院。死生の間をさまよう。遂に休学。何たる運命の皮肉ぞ。晩秋やっと治つて最初に亡兄の書架からとり出して読んだのが、内村鑑三著『宗教と現世』。私のたましいはこの本に感動した。開巻第一頁に

《Religion is man's chiefest concern.》

「宗教は人の最も重要な関心事である」（私訳）という言葉が掲げられてあった。この本に感激した私は、翌春内村先生の大手町なる日本衛生会館における日曜聖書大集会に出席した。「山上の垂訓」の起句、「^{さいわい}福なり心の貧しき者は、天国は其人の^も有也」が壇上に墨書で掲げられてあった。先生がこの句をどう解説されたかは憶えていない。しかしこの一句が、それから三十年ほど経って、私に決定的な信仰と神学の土台となろうとは夢想もせぬことであった。

水高時代はその後胃腸の弱さで惨めなありさまであったが、たましいに点ぜられた燈火は消えず。内村鑑三の著作、ヒルティの著作（原語）を丹念に読んだ。天野貞祐先生にとつても一高時代、内村とヒルティが人生道の土台となつたと承り、ふしぎな冥合と感じた。

東大の独文学科に入学すると同時に、内村先生の高弟藤井武先生の駒沢新町の自宅における塾的な小集会に列席して五年間無欠席で学び貫いた。

一九三〇年の春と夏に、内村及び藤井の二巨星が天界に移った。この五年間で信仰の根は抜くべからざるものとなった。大学時代、心の世界に別な大ものが現われた。それは木村謹治教授の講義を通して知ったゲーテである。藤井集会の午後の読書会で学んだダンテと共に、この二大詩人は私の詩の世界における二巨星となった。

その後、同じく内村門下の塚本虎二先生の大手町に於ける集会に数年通った。内容は主として「イエス伝」であった。これは日本でユニークなものである。同氏が編集主任たる『旧約知識』誌の同人ともなり、「詩篇」の翻訳と解説を担当した（小池辰雄著作集第四巻『詩篇珠玉集』参照）。東大時代、石橋智信教授に殆ど一対一でヘブライ語を学んだことが役立ったのである。

一九四〇年九月二十二日、舎兄政美召天の日を期して自宅の一角を伝道場となし、独自の日曜聖書講筵を開始した。爾来四十年余りとなった。開始の最も内的な理由は、失明の母のためであった。

一九五〇年晩秋、大阿蘇の垂玉温泉瀧見荘で手島郁郎氏と特別集会をした。その際我らはペンテコステ的な聖霊の降臨にあずかり、ここに信仰の新次元に突入せしめられた。

私にとり、キリストの山上の大告白の第一言「福なり……」はこう響いて来た、「恵福なるか

な、汝、わが十字架によって全存在の贖われたる者よ、たましいが貧しく無私の次元に入れらたる者よ、聖霊の我れ、天国の靈核汝の中に在り」と。このように靈聴したとき、豁然として聖書の扉が聞かれた。自分の信仰も実存も最早問題でない。親鸞の如く賜りたる信である。絶信の信、無信の信である。それ以来、十字架と復活と聖霊は私にとり三相一貫渾然一体の事態となった。それで私は原始キリスト道、使徒的次元の信仰現実に回帰せんと唱道しているのである。私自身は罪びとに過ぎない。ただこの三相一貫のキリストに圧倒されながら、たましいの旅路を、峠また峠を踏み越えていつか永遠の晨を迎えたら、聖霊の翼を賜って天界に飛翔したく念願するものである。

一八、萬卷の一書

聖靈の白光で読む聖書

(一九七六年元日)

神田の古本街から

本郷の大学に通学していた頃学校の帰途お茶の水の橋を渡って神田の古本街を歩くのが何よりの楽しみであった。一カ月十円の小遣錢の大半は古本を買うことに用いた。独逸文学科の学生であったから、大方ドイツ語の本を漁ったわけである。その頃は神田の古本屋には洋書がたくさんあった。ヒルティ、キェルケゴール、ドイツの古典文学書、ダンテ（原書、独訳、英訳）、英米の詩書等は大方神田で買い集めた。大学時代にコーヒー店に入っただけで多分三回位であった。それほど本が好きで、本のほかに私の興味をそそるものはなかったといつてよからう。

卒業してから今日まで、かれこれ半世紀、教職にあるわけだが、小遣錢の大半を本に費やすことにおいて変りはない。家中本だらけといつていいかも知れない。

本に囲まれて本を読んでいるときが私の天国なのであらう。本の世界には国境もなければ、人種のへだたりもない。どんな過去も現在化することができるし、また過去のどんな国の人も交わることが出来る。

ゲーテが「あらゆる本の中の本」といった聖書は、私にとつても、身邊の万卷の書中の書である。いろいろな種類の聖書があるが、ルター訳初版（一五三四年）の旧新約聖書の限定写真版聖書は、私の書中の宝といつてよいであらう。これを読むとルターのなまの声に接するおもいである。

文語体を深く味読

日本語の聖書は文語体のものが好きだ。聖書の言は、特に預言者や詩人のものになると、文体が詩であるから、今の口語体だと迫力に乏しく感ぜられる。文語体の聖書は古典的な名訳だと思ふが、その印刷法において詩文らしく行を改めて組んでいないのが残念である。これは是非とも改版していただきたい。

また充分余白をもった刷り方であつてほしい。書き入れをして用いたいからである。聖書に限

らず、愛読書というものは自分の生命のつながりであるからそこに自分の文字を書き入れたたり、傍線をひいたりできないのでは親しみが疎外される。

二十歳で信仰生活に入ってから、もう五十年余りも経つ。半世紀の信仰生活で、日本語の聖書はボロボロになって、今用いているのが四冊目である。やはり聖書ほど反復して読んだ本はない。私にとってこれは本ですらない。これは活きたドラマそのものである。聖書を読んでいると、ドラマの中の人物に私は化する。

絶対次元のドラマ

このドラマの主人公はキリストで、このキリストの前に降参する。平れ伏す。十字架のキリストは無条件にゆるして迎え入れて下さる。そこは聖霊の風が吹き渡っている現実である。キリストは太陽以上の霊光と霊熱の実存者である。彼からじかに聖霊を浴びた私は、洗礼のヨハネがいった通り、キリストは今も聖霊のバプテスマをなさる方（かた）であることを知った。聖書はそういう現実においてつかみかかり、語りかけている書である。だから万巻の書とは次元がちがうのである。それ故、私は聖書を絶対次元下のドラマを開示している書であるという。

全欧を席捲したナポレオンもセント・ヘレナの孤島で福音書を読んでこう告白したという。「福音書には不思議な力がある。言うにいわれぬ作用力がある。……福音書は書物ではない。行動能

力をそなえた生きものである。……キリストは愛の炎を燃え立たせる。これによって何よりも強力な利自愛は打ち滅される。……人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊のきずなを創造することのできたのは、ひとり彼のみである。……全世界で愛され、崇まれ、説教されるこのキリストの永遠に生ける国と、この私のひどいみじめさとは、本当になんというちがいであろうか」

武力の大英雄ナポレオンも、キリストの霊的な愛の力の前に屈服した。しかしさすがはナポレオンである。彼は率直に福音書を読んだ。そして正直に兜を抜きすてた。

バプテスマの体験

ともあれ、聖霊のバプテスマにあずかって以来、私は聖書の読み方が一変した。というよりも、聖書は聖霊のバプテスマを体験するまでは本当は読めない書であることがハッキリした。キリストの「わが言は霊なり生命なり」という言葉が化体して来た。聖書の本当の言葉はヘブライ語でもギリシャ語でもない。両原語の奥に根源語がある。この根源語のひびきが感ぜられるとき、はじめて本当に神の言を喰っているわけである。キリストの聖霊がこの根源語を体感身読させて下さる。

そういうキリストの絶対次元の靈光を燈火として万巻の書を読む。それが親鸞、道元、日蓮。

老子、孔子、孟子。萬葉、芭蕉、漱石。ルター、バルト、ブルンナー。ダンテ、シェイクスピア、ゲーテ。プラトン、カント、ヤスベルス。何であらうと、それらの書を読むに必要な条件さえ一応備われば、それぞれの書物の本質は、これを正しくつかみとることが出来る。聖霊の白光のありがたきである。二十五年前、聖霊を体験してからは、一切を包摂し把握する秘訣を次第に修得しつつある。パウロが「我れ一切の秘訣を得たり」といった消息がこれであらう。

私の読書の秘訣は、正に聖霊の光で読むということに帰着する。これは断じて「私の信仰」の眼で読む、といったようなことではない。それでは一種の色眼鏡で読むことになる。そういう色眼鏡的信仰は私にはない。

太陽の白光で地上のあらゆるものが正しく見られ得るように聖霊の白光で書を読めば、その内容を正しくオリエンティレン（方位づけ）することができるばかりでなく、その本を活かして読むことができる。萬巻の書はそのときそれぞれの固有のひびきを発し、おのずから大交響曲となって宇宙に木霊するであらう。

〔「キリスト新聞」一九七六（昭和五十一年一月一日「私と読書」欄）〕

●著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大、早大、東園大等の講師。一九六一・六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功勞十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講義を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖靈の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成し、その代表者となる。

著作活動、嘗て『旧約知識』誌、『キリスト教常識』誌の同人。後に『曠野の愛』誌、今は『曠愛新書』及び『エン・クリスト』誌の主筆。そしてこの『小池辰雄著作集』の著者。訳書は、白水社版の『眠られぬ夜のために』（ヒルティ著作集第四巻）、『神と人間の実存的弁証法』（ヘルジャーエフ著作集第六巻）等。

◎一九八二
小池辰雄著作集 第六卷

随想集

初版印刷 一九八二年十二月一日
初版発行 一九八二年十二月十二日

著者 小池 辰雄

発行 小池辰雄著作刊行会

東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九（〒一八〇）
TEL ○四二二〇三三四三三
（振替） 東京五一六一三二八

（責任者） 奥田昌道

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

装幀 前野洋一

頒価 三五〇〇円（送料不要）

●小池辰雄著作集(全十二巻)

改正頒価、各巻三五〇〇円(送料不要)、分買自由。

- 第一巻 無者キリスト(一九七五)
 第二巻 芸術のたましい(一九七六)
 第三巻 無の神学(一九八二春)
 第四巻 詩篇珠玉集(一九八〇)
 第五巻 百世の師ヒルティ―(一九七七)
 第六巻 随想集(一九八二暮)
 第七巻 聖書の人ルター(一九八三)
 第八巻 旧約聖書抜粹(一九八四)
 第九巻 新約聖書抜粹(一九八五)
 第十巻 随筆集(一九八六)
 第十一巻 詩歌集(一九八七)
 第十二巻 一日千年(一九八八)

(三版) (再版) (初版) (再版) (初版) (新刊)

口座番号	東京 5—6 1 3 1 8
加入者名	小池辰雄著作刊行会

●申込みは郵便振替にて